
MUV—LUV SEED Destiny

ペンペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M U V - L U V S E E D D e s t i n y

【Nコード】

N 4 2 5 3 0

【作者名】

ペンペン

【あらすじ】

メサイアの戦いを終え、メサイアから出ようとした時、キラとその愛機、ストライクフリーダムは爆発に巻き込まれる。

キラが目を覚ました時、世界は一変していたのだった……

果たしてキラはこの地獄の世界で生き残る事が出来るのか？

また、彼のメサイアでの決意はこの世界でも抱き続ける事が出来るのだろうか？

MU—LUV SEED Destiny プロローグ

崩れゆくメサイアの中でキラ・ヤマトはタリア・グラデイスに抱かれたギルバート・デュランダルを見やる。

「グラデイス艦長……」

キラは崩壊の音を聞きながらグラデイスに歩み寄ろうとした。

しかし、グラデイスは銃を突きつけキラの接近を拒んだ。

「……彼方は行きなさい……この人の魂は私が持つて行くわ……」

そう静かに言うグラデイスの目には優しさと慈悲と決意と拒否が入り混じった美しい目をしていた。

キラは無言のままグラデイスに背を向け、エレベーターに向かい歩き出す。

（……よい旅を……デュランダル議長……グラデイス艦長……）

キラは心の中で哀悼の言葉を呟き、エレベーターに乗り込んだ。

エレベーターから降りたキラは無重力の要塞廊下を急いで飛び跳ね

ながら彼の愛機たるストライクフリーダムの足元まで辿り着く。

足に力を入れ、高く飛び上がり胸元のコックピットまで到着するとキラはシートに座り、パネルを操作する。

シートが下り、コックピットハッチが閉まる。

キラは大急ぎでパネルを操作し、機体に火を灯す。

準備が全て整い機体を発進させようとした時だった……

横合いから強烈な爆発がストライクフリーダムを襲う。

「な!?!」

キラの叫びと同時にキラの視界は白く遮られた……

メサイア攻防戦はラクス・クライン率いる、オーブ・旧クライン派の勝利で幕を閉じた。

この戦いでキラ・ヤマトはMIAとしてその愛機と共に行方不明となった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y プ ロ ロ グ (後 書 き)

地獄の戦場に舞い降りたキラ……

果たしてキラは生き残る事が出来るのか？

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 話

『地獄に降り立つ蒼い剣』

新たな戦場、駆け抜けろ！ ガンダム！！

キラは不意に目を覚ました。

「……こ、ここは……」

キラがコックピットの中で目を覚ます。

「！！　そうだ！　僕はあの時、メサイアの中で爆発に巻き込まれて……」

キラは慌ててフリーダムのコソールを操作する。

「原子炉正常稼動、各種ディスプレイ異常なし、VPS装甲正常稼動、オールウェポンズグリーン、各種センサーオールグリーン……よかった……フリーダム自体には異常は無いようだ……」

キラは安堵の溜息を零す。

「モニターが落ちてる……機動しないと……」

キラはパネルを操作しながらモニターの電源をONにした。

モニターが外部画像を映し出した瞬間、キラは啞然とした。

荒涼とした世界がキラの目に飛び込んできたからだ。

「こゝここは一体……僕は宇宙にいた筈だ！　ソレが何でこんな所に!?!」

キラの混乱に拍車をかける事は更に続いた。

「ッ!?!　レーダーに反応!?!　でもコレは……金属の反応じゃない!?!　生物反応!?!　しかもこんなに沢山!?!」

キラはコンソールを操作し、望遠機能で目視確認しようとして後悔した。

「!?!　何だこの化け物は!?!」

キラは余りの気持ち悪さに吐きそうになる。

いや、“アレ”は本能が拒んでるとキラは考えた。

キラは急いでVPS装甲を起動し、上空へと飛び上がる。

その瞬間、レーダーが化け物の中から高熱源を感知する。

「!?!　何!?!　一体何が!?!」

そうキラが叫んだ瞬間、キラは何か危険なモノを感じた。

「ッ!?!」

慌てて操縦桿を操作し、フリーダムをその場から移動させる。

その瞬間、眩い無数の光がフリーダムがいた場所を通り過ぎる。

「ビーム!? いや、粒子の軌跡が無かった……レーザーか!？」

ブリッツと同じ、地上でも威力が減衰しない程のレーザーに危機感を感じながらもキラは何とか頭を働かせる。

（クソ!! 優先的にレーザーを撃つ化け物を叩いていくしかない!）

脅威の優先順位をレーザーを撃つ目玉の化け物に絞り、2丁のビームライフルで排除していく。

緑色のビームが亜光速で目玉の化け物とその周囲にいた化け物を纏めて焼き払う。

しかし、キラは焦っていた。

当然と言えば当然だ。

気が付いたら自分とストライクフリーダムは訳の解らない所において、行き成り化け物が現れ、襲ってきたのだ。混乱すると言う方が無理な相談だ。

キラは宇宙空間と同じ感覚で戦っていた。

キラが何時も通り冷静なら犯さない間違いだ。

ドラグーンを射出するなど……

「しまった!! ココは重力があるんだ!! このままじゃあドラ

グリーンが!!」

しかし、キラの予想とは反して、ドラグリーンは1Gにも係わらず飛んでいたのだ。

「ドラグリーンが失速しない!? コレなら!!」

キラはどうして、ドラグリーンが失速しないのかは後で考える事にした。

今は戦闘中なのだ余計な考えは死ぬだけだ。

キラはマルチロックオンシステムを展開した。

丸いセンサーの光点が次々とロックオンされる。

「いっけ~~~~~!!」

キラの叫びと共にストライクフリーダム全砲門が一斉に敵を排除しにかかる。

13門の砲口から吐き出されたビームとレール砲は全ての敵に対し、死を平等に与えた。

キラが全ての敵を排除し終わると溜息をつきながらセンサーを見る。

「一体何なんだ！？ この世界は！？ それにあの化け物は一体！？」

そう、叫びながらもセンサーがあるモノを捕らえる。

「！？ センサーに反応！？ MSと化け物が戦ってる！？」

キラはある意味この反応を見てホッとする。

（よかった……この世界に人がいたんだ……でもおかしい……ライブラリー照合してもアンノンウンだ……大抵の機体の熱紋ライブラリーはある筈なのに……解らない……兎に角、行ってみるか……）

キラは意を決して戦場に向かった。

キラが戦場に到着し、下を見回した時、キラは啞然とした。

赤い化け物に集られ喰われるMS、硬い甲羅の様なモノに体当たりをされ爆発したMS、

レーザーに焼かれ動なくなるMSと地獄絵図だった。

傍受した通信からは怒号や悲鳴しか聞こえてこない。

『α1よりHQ支援砲撃はまだか!! 部隊の半数以上がやられた
部隊は壊滅状態だぞ!!!』

『チクシヨ~~~~~!! 来るな!! 来るな
!!!』

拙い!! あの高いMS、後ろに敵がいる事に気付いていない!!

キラは慌てて、戦場に飛び込んだ。

「止めろ~~~~~!!」

叫びと共に2丁のビームライフルから緑の光弾が無数に吐き出される。

ビームは化け物共に当たり熱と爆風で焼かれた。

月詠 真耶サイド

閣下からの御下知が全軍に下され、我等、殿を務める斯衛軍はこの千年の都にその雄姿を刻む為、彼奴等ベータを迎え撃った。

しかし、ベータの物量とその進行速度を前に徐々に押されていた。

米軍の日本完全撤退も少なからず指揮に影響を与えた。

私が要らぬ考えに浸っていた時だった。

センサーが要撃級を捕らえた時には手遅れだった。

(やられる!!)

私が覚悟をした時だった……オープンチャンネルから若い男の声が響き渡る。

『止めろ~~~~~~~~!!』

センサーに反応!? ようやく確認できたその光点は小さくセンサーで捕らえる事がようやくできた。

「な!? 上!?!」

私が上を見た時、其処にいる“モノ”に私は目を奪われる。

白い装甲、2丁の見知らぬ突撃砲、細身のボディー、金色の輝きを

放つ間接部、黄色い二つ目のセンサーと左右対称の4本のアンテナ、何より目を引いたのが蒼い8枚の翼。

正に御伽噺に出てくる天使を機械的にしたらこうなると言わんばかりの佇まいをした機体だった。

『此方、フリーダムのパイロット、キラ・ヤマトです!! 大丈夫ですか!? 怪我はありませんか!?』

音声だけの通信でその機体の衛士が語りかけてきた。

「怪我はない……ソレよりもお前は一体!？」

私の疑問を遮り、ヤツは言い放つ。

『その話は後です。目の前の敵を片付けましょう』

そう言い、フリーダムとか言う機体は上空高く舞い上がった。

私はその行為に唾然とする。

レーザー級の影響下にある戦場で空を飛ぶなど自殺行為以外の何者でもない。

しかし、ヤツは舞い上がった。

それだけじゃない、迫り来るレーザーを簡単によけているのだ。

「凄……」

私の言葉は戦場の衛士達の思いを体現した言葉だった。

ヤツは両手に持った突撃砲を乱射しながらベータの群を滅ぼしていく。

そしてヤツは腰の砲身と両手の突撃砲を正面に構えたかと思えば背中
中の蒼い8枚の翼を放出した。

翼は目にも止まらぬ速さで飛び交い、緑色の弾丸を吐き出す。

そして、ヤツから緑、赤、黄色の光が一斉に放たれる。

その眩い光はベータを焼き滅ぼしていく。

僅か30分でアレだけいた旅団規模のベータが壊滅した。

キラは如何したものかと考えていた。

（取り合えず、あの赤いMSを助けたけど……

何かあのMS何だか古めかしい感じを受ける。ズングリとした装甲、
腰部のスラスター、背には実態剣と今時珍しい実態弾装備……本当にMSなのだろうか？）

キラが思考していると赤い瑞鶴から通信が入る。

『フリーダムと言う機体の衛士！ 我が軍を助けて貰った事に感謝する。しかし！ 貴公が何者か解らぬ以上、我々の指示にしたがってもらおう！』

キラは考える。

（日本語……東アジア共和国の日本かオーブしか使わない言葉！？ 如何する……ここで逃げても問題は無いだろうけど……逃げて先は無……なら飛び込むか……）

「解りました。其方の支持に従います」

キラの言葉に真耶は困惑する。

（話に乗ってくれた！？ しかし……米国の手の者か？ いや米国は既に撤退したはず……それに彼の国があのような高性能機を開発したなら高らかに宣言するはず……兎に角……助けてくれた恩義がある……）

『作戦本部まで案内する。ついて参られよ』

キラは赤い瑞鶴の案内で仮本部まで案内される。

キラのフリーダムと真耶の瑞鶴が仮本部に到着した時、続々と人が集まってきた。

キラはある意味デジャブーを感じた。

（ヘリオポリスみたいだな……状況はコッチがかなり最悪だけど……）

キラは何時までもコックピットの中にいても仕方ないと思い、コックピットハッチを開いた。

キラがフリーダムから出てきた瞬間、MPらしき数名からアサルトライフルの銃口を向けられる。

キラはワイヤーラダーで地上に降り立つ。

一斉に向けられる銃口、キラはどこか懐かしさと諦めに似た感覚で辺りを見回す。

（困惑と少しの敵意……そして疑念……どうなることやら……）

キラは考えながらもこれからの事を考えるのであった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 話 地獄に降り立つ蒼い剣

地獄に舞い降りた剣……

世界はキラに何を与え、求め、そして奪うのか……

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 2 話、

『交渉』

新たなる世界、何を見るのか？ ガンダム！！

MUV－LUV SEED Destiny 2話 交渉

前を歩く眼鏡を掛けた二つのお団子頭を見つめながらキラは思う。

（本当にココは何処なんだろう？ 回りは荒れ果てた荒野、そして、あの気持ちの悪い化け物……そして、化け物と戦っている人達……軍隊なのは理解できるけど東アジア共和国軍でもましてやオーブですらない……

それに、機体にしても地上での機動性はあるけど総合的に見たら物足りない機動性……しかも、機動性を重視しているのにあの重そうな装甲……それに、あの化け物と戦うのには口径が小さすぎる実態弾……音や口径から見て40ミリ位かな……弾数を稼ぐだろうけど……威力が低すぎる……実態剣にしても高周波振動してない……何なんだろう……一体……）

キラが考えながらもチラリと左右を見る。

其処にはアサルトライフルを持ったMPが両脇と後方を固めていた。

キラは静かに溜息を吐きながらも案内の真耶が立ち止まり、敬礼をした。

「閣下、紅蓮大将、お連れしました」

キラが考え事から立ち戻り、視線を男達に向ける。

中央にいる男は一見、優男に見えるが鍛えられた兵士の印象を受け

る。

もう一人は、2メートルはあろうかという身長とそれに似つかわしい筋肉と巖の様な面構えの男が敬礼を返した。

キラは彼等を見つめながら考える。

（閣下に大将……明らかに軍では高い地位にいる人間だ……この人はこの二人の指揮下にいる人かな？）

キラが思考に入ろうとした時、豪快な声で遮られる。

「真耶、こ奴か？ お主の部隊と我が軍の崩壊を救った謎の戦術機の衛士は？」

中央にいた青い軍服らしき物を着たが男が真耶に質問する。

真耶は完結的にかつ実務的に答える。

「ハ！ 左様で御座います。閣下」

斑鳩はキラを見据えながら答える。

キラはオーブの軍人として敬礼をして答える。

「ぼ、いえ、自分はオーブ首長国、国防軍所属！ キラ・ヤマト准将であります！」

そのキラの名乗りにも、斑鳩、紅蓮、真耶は驚きと疑念の視線を向ける。

斑鳩はキラに疑問に思ったことを素直にぶつける事にした。

「オーブとはどの様な国だ？ 少なくとも私は聞いたことが無い。
紅蓮、そなたは？」

斑鳩の問いかけに紅蓮も答える。

「私もか様な国の名は聞いた事が御座いませんぞ。閣下？」

コレを聞いた瞬間、キラは愕然としながらも自分が今まであり得ないと考えたモノが現実味を帯びてきた。

（オーブを知らない……！？ ……オーブが無い……やはりココは僕がいたC Eとは全く違う世界なのか？）

キラのいた世界ではオーブはブラント、地球連合と並ぶ三大勢力の一つなのだ。

その名を知らないのは明らかに可笑しい。

キラは彼らが嘘をついている事も考えたが、一瞬であり得ないと考えた。

子供でもわかる嘘についても意味が無い。

そして、キラはある決意を固める。

自分の世界の話をすることにしたのだ。

「……どうやら僕は見知らぬ世界に来たのかも知れません……」

キラの言葉に紅蓮が問いかけた。

「……どう言う事だ？」

その言葉を合図にキラは話し出す。

キラのCEの世界の事を……

キラが話し終わった時、キラ以外の全員が神妙な顔をした。

幸いココにいるのは、斑鳩、紅蓮、真耶、キラしかいなかった。

キラの存在を重く見た紅蓮が人払いをしたのだ。

最初に口を開いたのは斑鳩だった。

「西暦が過去の暦……ナチュラルとコーディネーターと言う種族間の争い……そして、軍産複合体ロゴスとプラントとの戦争……そして、プラントの勝利とディスティニープラン……ソレを止める為の戦い……そなたの世界は殺伐としておるな……」

俄かに信じがたいが……そなたは証拠の品がある故、一概に嘘とも言えぬ……斯様な機動兵器……私は見た事も聞いたこともない……」

紅蓮も口を開く。

「戦術機に収まる核融合路、小型の熱質量兵器、電磁投射砲、脅威の兵器じゃな……」

ココで、キラは斑鳩に疑問を投げかける。

「教えて頂けませんか？ この世界を……」

斑鳩も語る。この世界を、この世界が置かれている現状を……

斑鳩の話聞き終わったキラは考え込む。

（何てことだ……僕のいた世界とは大分違う……それに西暦1998年……僕の世界では近代史の世界だ……それに、ベータ……あの化け物が異性人？ この世界は下手をすれば僕の世界より混沌としている……）

キラが思考していると斑鳩が質問してきた。

「ヤマトよ、そなたはこれから如何するのだ？ 悪いがそなたをそなたの世界へ帰す手立てが無い以上、そなたはこの世界で生きなけ

ればならぬ……この世界にそなたの居場所はないも同然。更に極めつけはそなたの力だ……世界はそなたを頼っては置くまい……世界から狙われる事、請け合いだ。そなたは如何する？」

斑鳩の問いにキラは静かに答える。

「正直、解りません……できれば元いた世界に戻りたいです……しかし、現状ではその手立てが無い以上、この世界で生きていくしか道はありません……確かに彼方の言うとおり、この世界に、僕の居場所は何処にも無いのかも知れません……守るべき国も、人もいない僕は、この世界では異常な存在なのでしょう……そして、僕の力も……でも、僕はこう思います……自分は戦える力があり、守る力があるのにソレを使わず死に瀕している人達を見捨てて生きれるほど非道な人間にもなれない……僕の力は自分唯一人の為に振るうものじゃないと思います。だからこそ守りたいんです、この世界を、この人達を、僕の力で……」

キラの言葉を聞き、今度は紅蓮が問うた。

「決意は解った。だが、お主、一人では何も出来ない。確かにお主は強いのもしれぬ……だが、どんなに強くとも所詮は個人、如何するつもりじゃ？」

キラは紅蓮を見据え答える。

「例え一人でも僕は戦います……この世界の人達の“明日”を守るために……」

キラの言葉に斑鳩が言い放つ。

「ならばヤマトよ……我が国に来ぬか？ 我が国は今彼奴等、ベータの侵攻で滅びに直面しておる。お主の力、帝国で活かしてみぬか？」

キラは斑鳩の言葉に裏があると考え問うた。

「その条件は？」

斑鳩はニヤリと人の悪い笑みを浮かべ、言う。

「話の解る男で助かる。条件は日本帝国の為に戦ってもらう事、そして、そなたのMS開発の経験を活かし、技術廠の戦術機開発に手を貸す事、以上だ」

キラは即座に自分の条件を述べる。

「その条件に従う代わりに2つお願いがあります。一つ目は僕の専用の小隊をください。理由は、その戦術機開発に必要なテストを行う為の人員です。二つ目は僕に独立行動権をください」

キラの要求に驚く一同。

一つ目の要求は兎も角、二つ目の要求は度台吞めない要求だからだ。

軍隊は厳しい法と秩序に縛られた組織だ。

たった一人とは言え独断専行を許す様な軍隊はあり得ない。

この男は准将だから其処は解っている筈だ。

ソレをあえて独立行動権をくれなど言うキラに疑念を抱きたくなる。

「二つ目の理由を聞こう」

斑鳩は二つ目の要求の真意を問いただした。

「本当にこの国が正しい方向に向かうのか見極める為です」

斑鳩はこの言葉からコレはキラなりの抵抗なのだろう事は解っていたし、キラの命綱になることは解っていた。

戸籍も無い、国も無い、戦う理由も無い男が戦う為に求めた覚悟なのだろう。

「よいだろう」

その言葉に、紅蓮と真耶は驚きを露にする。

「しかし」

斑鳩は付け足した。

「個人に独立行動権を与える事は出来ない。そんな事をすれば軍の規範に関わる。故に、そなたの部隊に独立行動権を与える物とする。その為にもそなたには斯衛軍に入隊、紅蓮の指揮下に入ってもらおう。よいな？」

これ以上の譲歩は無いと言わんばかりに斑鳩は言う。

ココが落とし所だろう事はキラも解っていたし、破格の条件と言っ

でもいい。

「解りました。お受けいたします」

キラは頭を下げて契約を認めた。

話が落ち着き、紅蓮はキラの顔を覗き込んだ。

その暑苦しい顔を近づけられ、つい一步下がるキラ。

紅蓮の瞳はキラの瞳を覗き込む。

キラはその探るような視線を正面から見つめ返す。

「フム……良い眼をしておる……多くの危難を潜り抜け、絶望や現実の残酷さを知りながらも自分の信念の為に戦う戦士の眼じゃ……貴様の様な若造でその瞳の輝き……貴様、齡は？」

キラは何事かと思いつつも答える。

「……18です……」

ソレを聴いた瞬間、紅蓮は驚きを露にする。

「何と！？ 18！？ 貴様、真耶と同一年か！？ 18の小僧がこの様な瞳を……その瞳は古強者が持つ覚悟の瞳ぞ！ ソレを18

で再現できるとは……貴様、さぞ辛い戦を駆け抜けて、生き残ってきたのだな……」

紅蓮の言葉にキラは目を伏せながら言う。

「ええ……沢山の友達や知り合いが死にました……そして……多くの人を殺しました……」

キラの独白に似た呟きは室内に消えていった。

アレから2ヶ月が過ぎた……

“大和 綺羅”は技術廠のオフィスの自分のディスクで新しい戦術機のOSを作っていた。

キラは斯衛軍の“赤”を着て、自分のディスクでPCのキーボードをタイプしていた。

何故キラが、斯衛の赤を着る事を許されたかといえば、紅蓮と斑鳩、1ヶ月前に謁見で会った煌武院 悠陽将軍が嬉々としてカバーストリーをでっち上げたからだ。

そのカバーストリーは、

『大和家は本家の血筋が途絶え、御家断絶となったが、遠い分家に綺羅がいた事と、綺羅の活躍により京都防衛線の死傷者を減らす事が出来た功績を悠陽と斑鳩が認め、御家再興の後見人として紅蓮醍三郎の名の下に御家を再興した』

と言うのがキラの赤を着るカバーストーリーらしい。

実際、大和家は本当にあったらしく、しかも、赤を着る事が許された家系だとか、ベータ大戦勃発時やベータの日本本土侵攻などで全員が死に絶えたらしい。

死人の名を騙るようで余り気乗りはしないキラだったが、生きていく為と割り切る事にした。

キラはこれから如何したものかと窓の外を眺めた。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 2 話 交渉（後書き）

新たな世界で、“大和 綺羅”としてききる事を選んだキラ。

果たしてキラを待ち受ける運命とは……

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 3 話

『戦術機開発』

新たな系譜、解き放て！！ ガンダム！！

キラは技術廠、第壱開発局に来ていた。

キラが局舎に入るとすれ違う人達から敬礼が帰ってくる。

「大和中尉、お疲れ様です！」

顔見知りの軍人が敬礼した。

「お疲れ様です」

キラも敬礼を返礼した。

「巖谷中佐は？」

キラは今回の訪問目的の巖谷中佐の居場所を質問した。

「副部長でしたら、部屋にあります」

軍人はそう答えた。

「有難う」

「いえ」

そうお互い分かれた。

キラが巖谷のオフィスに到着し、ノックをした。

「はい」

室内から男の声が聞こえてきた。

「キラです巖谷さん」

「おう、入ってきてくれ」

キラがそう答えると、室内から巖谷の声がまた響く。

「失礼します」

キラが扉を開けると中央のデスクにいたのは左側の眉間近くから頬まで達する傷を持つ男がにこやかにキラを手招きした。

（相変わらずだな、巖谷さん）

キラは内心で微笑みながら室内に入る。

「巖谷さんこんにちは」

「やあ、よく来た。綺羅君、座ってくれ。今、茶を出そう」

「お構いなく」

キラと巖谷はお互いソファーに向かい合うように座り、キラは今回の訪問の内容を述べた。

「今回の不知火に搭載するOSは完成しました。後は僕の試験小隊が試験を行い、良好なら富士教導隊の不知火に搭載し、中隊、大隊規模での部隊間での連携を視野に入れた運用を目指したいと考えています」

キラの今後の指針に巖谷は頷きながら答えた。

「通常部隊での運用は最低でも半年か……早いな……しかし、君や君のいた世界には毎度、毎度驚かされる。我々が不知火の開発を進めたが君はその不知火だけでなく全ての戦術機の性能をOSで底上げすると言う案は正に我々の想像を超えている。君の機体、ストライクフリーダムの中に入っていた各陣営のMSやビーム兵器の設計図、マザーマシンの設計図には感謝してもしきれない」

そう、フリーダムのデータバンクの中にはそんなモノが入っていた。

しかもこの世界でも再現可能な設計図だった。

勿論、キラは見覚えが無いし、エターナルの整備兵もこんなデータ入れるはずが無いのだ。

なにせ、戦闘に不必要なデータなだけで、要領が重くなるだけのデータチューンだ。

キラは色々考えたが、結局、答えは出ないままだったが、使えるものは使うことにした。

この世界に来てキラは意外と自分が精神的にタフになった気がしていた。

キラはこの世界に来てから機械化学も学ぶようになり今では専門職より遥かに専門家である。

皮肉にもスーパーコーディネーターの才能がここでも発揮された。

或いは、生きる為に仕方なく身に付けた本能的なものなのかもしれないとキラは自己分析した。

「ビーム兵器の完成は？」

巖谷の言葉にキラは考えながら答える。

「マザーマシンは完成しました。後は試験稼動し、問題が無ければ通常生産を行います。その後、完成した兵器を僕の部隊でテストしますから……遅くても後、一年は必要でしょう。ソレと平行して“ウインダム”の開発も行っています」

キラは巖谷と話し合った結果、MSの中で日本帝国軍の戦術ドクトリンに合致する機体を探した。

その結果、ウインダムが残った。

何故、ウインダムかと言えば、三大勢力の量産機でザクはOSを変えない限り、コーディネーターしか乗れない代物だからだ。OSを

変えて作ればいいのだが対応OSを作るのに時間がかかる事も見送られる要因となった。何せ、機体事態がナチュラルが乗る事を想定していないづくりでもある。

ムラサメは可変MS故の整備作業効率の低下と飛行形態MAがこの世界の戦闘に不向きと判断された。

最終的に残ったのがウインダムであった。

元々、ナチュラルが乗る事を想定している為、OSも余り弄らなくて済むし、設計図そのままに作成する事が出来たからだ。

ストライカーパックの運用でも正に1機でより多くの戦場に柔軟に対応できるとし、帝国軍が求めた汎用性の高い機体だった。

其処にキラは改良を加える設計を施した。

ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾をアーマーシュナイダーを追加装備した。

これにより戦車級に集られた時、戦車級を排除するにはビームサーベルでは味方まで傷付けてしまう恐れがあるからだ。

エールストライカーパックはビームサーベルの部分を105mm単装砲に変更した。

これにより、エールの弱点たる火力の低さを機動性を損なう事無く補う事が出来た。

ランチャーストライカーのアグニを左から右にしたのと、装備する時の肩部オプションをストライクEの様にバグパックに装備する

方向で決まった。

コレは、巖谷の要望で基本的に右利きが多い事から巖谷がキラに改良を求めた。

ジェットストライカーは飛行能力があってもレーザー級のレーザーがあるため飛ぶ事が出来ないからだ。

シールドで防ぐ事は出来るが、飛行戦闘の概念が無い事から巖谷とキラは見送った。

機体名をウィンドムから“大鳳”と説明される。

この理由は日本製故に日本の名前と言う帝国の決まりが改名の大きな理由である。

兎に角、キラ率いる試験小隊、正式名称、日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃小隊、通称、スレイヤー小隊または、遊撃小隊とも言われている。はこれらの試験を行う事が部隊目的となった。

なぜ、遊撃隊の言葉がつくかと言えば、コレはキラの戦い方が遊撃戦が多い事からそう呼ばれた。

と、言うよりもキラの戦闘について来られる衛士が帝国では帝国最強の紅蓮位しかいなかったのも大きな要因だろう。

余りに強過ぎた為、キラとエレメントを組める人間がいないのが現状だった。

真耶にしてもキラの戦闘機動に辛うじて付いていく事が出来たくらいだ。

おのずと遊撃専門になってしまった。

キラと巖谷は今後の予定について話し合った。

キラが第壱開発局のオフィスから出て、自分の基地に戻る頃には既に昼となっていた。

帝国斯衛軍第一師団の基地のゲートを通り、車を駐車場に止めると紅蓮の執務室まで歩く。

その途中、廊下で真耶に出会う。

「あ、真耶、久しぶり、元気にしてた？」

「ああ、変わり無い、綺羅も息災そうで何よりだ」

キラと真耶は敬礼した後、そう言いながら紅蓮の執務室まで並んで歩いた。

真耶は歩きながらキラに騙りかける。

「そなたは相変わらずの活躍だな。16大隊でもそなたの名は良く聞く」

キラは寂しそうに皮肉を言う。

「『才能と技量で出世した成り上がり者』でしょ？」

真耶は鼻白らみながら言う。

「そなたは卑屈が過ぎる。そなたの力と研究と開発は帝国の将兵とを救うのだぞ？ もう少し誇りを持て。少なからず私は、そなたの生き方は真似出来ぬ」

キラは微笑みながら真耶にお礼を言う。

「有難う……真耶……」

真耶は頬を赤く染めながらソッポを向く。

「別に礼には及ばん、私は事実を言っただけだ」

「それでも有難う……」

真耶は照れ隠しで話題を強引に変えた。

「ほら！ 紅蓮大将の所まで行くぞ！」

そう言いながらキラの腕を引っ張る真耶だった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 3 話 戦術機開発 改変（後書き

仙台へと迫るベータ、

ついにキラと遊撃小隊の真価が問われる。

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 3 話

『遊撃隊の真価』

迫り来る敵、打ち倒せ！ ガンダム！！

MUV－LUV SEED Destiny 4話 遊撃隊の真価

キラは將軍家の居城たる帝都城に来ていた。

その理由は、征夷大將軍たる煌武院 悠陽とキラの影の上司たる斑鳩 義正に開発状況の定期報告を行う為だった。

キラは侍従長の案内で謁見の間に通された。

キラは畳に正座をしながら目を閉じ静かに待った。

約2分後、斑鳩が入室し、悠陽が静かに一段高くなった所に静かに鎮座した。

キラは静かに土下座しながら悠陽が口を開くのを待つ。

正直、キラはこんな独特の礼儀作法など知らないが、真耶の教育により学んでいた。

自然には出来ないが、意識すれば出来るようになった。

しかし、斯衛ともなれば自然に出来る動作だけにキラの礼儀作法は違和感があると侍従長から指摘された。

「大和よ、面を上げよ」

キラは静かに頭を上げ、口上を述べる。

「ハ、將軍殿下に置かれましては……」

「よい、大和、今、ここにいるのは私と斑鳩殿のみ、案ずる事は無い。何時も通りにせよ」

キラが口上を述べる前に悠陽が遮る。

「……解った……悠陽、コレでいい？」

キラが明らかにフランクに話しかける。

「ええ、その方がそなたらしいし、私も望ましく思います。綺羅よ」

悠陽も砕けた感じでキラに語り掛ける。

侍従が粗茶を悠陽と斑鳩、綺羅の元に置き、退出すると、本題に入った。

キラは、巖谷に行った説明を悠陽と斑鳩に行っていく。

キラの説明が終わり、キラが退室しようとした時、斑鳩に呼び止められた。

「綺羅、しばし待て、お主に話したき事がある」

キラはいぶかしみながらも斑鳩の話を聞く。

「何ですか？ 斑鳩さん？」

「そなたのフリーダムの事だ……」

その斑鳩の言葉にキラが反応する。

「……何ですか？」

「ウム、実はな……フリーダムを暫く封印して欲しいのだ……」

その言葉にキラは眉根を顰め、質問した。

「……何故です？ フリーダムがあれば戦闘は早期に終結すると思
いますか……？」

キラの言葉に斑鳩が理由を述べる。

「……それは解っておる……が、我が国を取り巻く現状がソレを許
さないのだ……」

「帝国を取り巻く現状？」

その言葉にキラは質問する。

その顔は、『納得できる回答でなければ断る』と言わんばかりだっ
た。

「ウム、フリーダムの存在は各国に余り悟られたく無いのだ。その
理由は各国の利権が絡んでおる……国連がフリーダムを押収する可
能性もある……現在の国連は米国の傀儡……米国にフリーダムやそ
のデータが渡るの何としても避けなければならない……何故なら
彼の国は第五計画の長、故に我が国が推し進めている第四計画とは
真っ向から対立しておる……我が国も彼の国も足の引っ張り合いを

しているのが現状。その様な所にフリーダムを持ち出したくはない」

キラは考え込んだ。

正直、第四計画だろうが第五計画だろうがベータを撃滅するなら手段は選ばない方がいいのだが、キラは第五計画は余りに杜撰が過ぎると思えている。

故に日本案の第四計画よりである。

キラは正直、嫌だったが奪われるよりマシと判断した。

それに、機体開発を行うなら自分も乗らないで他人に任せる事など出来ないという思いもキラがフリーダムを封印するきっかけとなった。

最近、キラは開発者や軍人としての気質が芽生えているなど内心苦笑しながらも退出した。

キラが自分の部隊に戻り、フリーダムを封印した後、自分の部隊の訓練に入った。

正式名称、日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃小隊、通称、スレイヤー小隊は訓練に勤しんでいた。

今回の訓練内容は模擬戦、内容はキラ対新人斯衛の白3人だった。

何故、試験小隊に新人が宛がわれたかといえば、帝国軍の深刻な人員不足に他ならない。

優秀なベテランは他の部隊に当てられた。

しかも、キラの部隊は今の所、実戦では成果を出していない新参者の部隊で実戦経験者はキラしかない、そんな所に、宝石より貴重なベテランを宛がう訳にも行かない。

しかし、殿下や斑鳩元帥、紅蓮大将と層々たる顔ぶれが肝いりで作った部隊、斯衛軍人事部も人員を出すしかない。そこで斯衛軍人事部は苦肉の策として斯衛の白の新人を宛がった。

白といっても有力武家では格上の大義と格下の小義があり彼等は格下の小義である。

因みにキラは赤の小礼であり、真耶や紅蓮は大礼である。

將軍家に近い武家とは言え真耶達みたいに先祖代々ではなく。

キラの大和家は新参者であり最近まで御家断絶していたのだ。

キラはこの事を理解していたし、納得もしていた。

今回の部隊はMSを戦闘に参加させる目的がある。

自分流に染まったベテランよりは真っ白な新人の方が都合が良かった。

3人共、やる気も気力も充実していた事からキラは光善寺 正樹、

冬月 総司、高守 佑の3人を1から鍛える事にした。

機体は、4人とも不知火・改だった。

この不知火・改の特徴はキラの開発したOSにより3割増しの運動性を得る事が出来た。ブースターもキラの世界のスラスター技術を応用して作った代物で3分の1の燃料で旧来機の物と同質の性能が

出せるようになった。

キラ曰く、『僕の世界の推進技術はこの世界と比べると相当すすんでいるな』
との事。

如何見ても新人3人が圧倒的に不利だが、新人の勝利条件はキラ機に攻撃判定を与えると言うものだし、キラはこの間、攻撃は一切しないと言うものだった。

それでもキラの高速機動に追従できる衛士がない以上、自ずとその極悪な難易度が伺える。

全機にキラが開発したOSは積んでいるがそれでも不利なことに変わりはない。

「それじゃあ、始めようか？」

キラの言葉に3人が緊張する。

『スレイヤー2、準備完了です』

『スレイヤー3、準備完了』

『スレイヤー4、行けます！』

無線から頼もしい声が響き渡る。

『演習開始、5秒前、4、3、2、1、演習開始！』

オペレーターから演習開始の合図がヘッドセットから聞こえてきた。
キラは操縦桿を操作し機体を動かした。

『クソ！！ 全然、当たらない！！ 総司！！ 佑！！ 突っ込む
！！ 援護してくれ！！』

『解ってる！！ でも援護射撃も牽制射撃にも引っかからない！！』

『正樹！ 突っ込みすぎだ！ 援護も支持も出来ないだろうが！！』

キラは無線越しに聞こえる3人を見ながら思う。

（正樹は二人の事を考えて突撃すべきかな……総司はもう少し二人の手綱をしっかりと握らないと……佑は味方と敵の双方を見ながら援護を行うべきだな……まだまだ課題は多そうだ……）

長刀で切りかかってきた正樹機を左横に飛びのきながらブースターを使い、総司機と佑機の射撃をかわしていく。

（3人共、筋はいいんだけど、経験が少なすぎる。まあ、仕方ないか……斯衛の白、小義の位の武家とは言え斯衛士官学校を出たばかりの新人だ……紅蓮さんや真耶と同じものを要求する方が無理な相

談か……まして、手を抜いているとは言え、ココまで着いて来れるのは流石、斯衛と言った所か……)

キラはそんな事思いながら操縦桿を動かし続けた。

訓練が終了し、ブリーフィングルームにて反省会を行っていた。

キラが感じた注意点や疑問点を3人に夫々指摘していく。

その時だった、突如、警報が鳴り響く。

「!?!? コレは!?! 第一種戦闘配備!?!」

総司は慌てたように言う。

「一体何が!?!」

佑も何事かと言う。

キラは3人に即座に命じる。

「各自、強化装備に着替えて自機で待機!?!」

「「了解」」

夫々敬礼して答える。

キラ達は慌てて強化装備に着替え、不知火・改に乗り込んだ。

その時H Qから各部隊に通信が入る。

『H Qより各部隊指揮官に伝達！！ 現在、旅団規模のベータ郡が東進を開始、仙台に向かい進行中、現在、帝国本土防衛軍が接敵、交戦を開始した。我が斯衛部隊は本土防衛軍の援護を行う……』

キラはH Qの状況説明と作戦説明を聞きながら考える。

（ベータが仙台を強襲した……全く……人にしろベータにしろ此方の都合はお構い無しか……いよいよ新人も対ベータ戦か……死なせはしない！！）

そう決意を固め、キラ達スレイヤー隊の発進準備が整う。

『スレイヤー隊！ 発進どうぞ！！』

「スレイヤー1了解！ 大和 綺羅！ 不知火・改！ 行きます！」

キラ達スレイヤー小隊は陣形を組みながら戦場へと向かった。

キラ達が戦場に到着した時には既に本土防衛軍とベータとの戦闘が激化していた。

「スレイヤー1からスレイヤーズ！　コレが僕達の初陣だ！　死ぬな！」

『『了解！！』』

キラの呼びかけに答える3人。

「行くぞ！！」

キラはベータ郡の横合いから強襲を仕掛けた。

両マニユピレーターに握られた、87式突撃砲をベータに乱射しながら突き進んでいく。

ベータ郡は蜂の巣になりながら絶命していく。

（駄目だ……火力が足りなさ過ぎる……仕方ない……）

キラは突撃砲をサブアームにしまうと背中の中刀を2本一気に引き抜く。

「はぁ~~~~~！！」

気合と共に刃が袈裟懸けと逆袈裟のクロスで振るう。

要撃級は顔に見える尾節を斬られ絶命した。

それに満足する事無く、高速機動で動き回るキラ。

明らかに尋常でない速さに戦場にいる衛士達は驚きを隠せなかった。

「何だ！？ ああ赤い不知火は！？ 速いぞ！！」

「僅か1機でベータを翻弄している！？」

「斯衛の部隊！？ ああ赤い不知火は斯衛の衛士か！？」

「ええい！！ 斯衛の衛士は化け物か！？」

正に戦場はキラの独壇場だった。

しかし、キラはコレに納得していない。

（機体の速度が遅すぎる……もっと速く動きたいけどこれ以上はブーストに負担をかける……間接部にも気を付けないと……すぐ駄目になってしまう……本気の30%がいい所だ……戦いにくい……フリーダムがどれほど優れた機体かをこんな形で再認識するなんて……皮肉にも程がある……開発者になってからは機体の限界領域と自分の操縦技術を考えて戦術を考え戦闘する事が出来るようになった。今までは自分の操縦技術と機体の高性能さに物を言わせて戦闘していたからね……）

キラは自分の部隊に支持を出しながら戦闘をする様にもなった。

「スレイヤー2、出過ぎだ！ 体制を立て直して！！ スレイヤー3は2と4の位置と機動を考えて支援を！！ スレイヤー4、移動

速度が落ちてる!! 落とさないでそのままの制度を維持して!!」

『了解!!』

『クッ! 了解です!!』

『了解しました!!』

その時だった……ベータが帝都直前で転進したのだ。

「ベータが引いていく……」

キラは疑問に思いながらもスレイヤー隊を集結させた。

こうして、キラ達スレイヤー小隊の初任務が終了した。

キラ達スレイヤー小隊の名はその戦歴と共に帝国中に知れ渡る事になる。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 4 話 遊撃隊の真価（後書き）

ウインダムは大鳳として世界に体现された。

今、新たな戦場へとキラ達スレイヤー隊を誘う。

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 4 話

『横浜に舞う大鳳』

新たなステージへ、飛べ！ ガンダム！！

MUV-LUV SEED Destiny 5話 横浜に舞う大鳳

キラは巖谷と共に河崎重工、富嶽重工、光菱重工の3社の共同開発工場に来ていた。

「綺羅君、いよいよ君の開発した物が完成したよ」

巖谷の言葉に綺羅が頷きながら答える。

「ええ、XFJ-TYPE98 試作型大鳳が……」

「しかし、こうして見ると壮観だな……」

巖谷の呟きながら疾風を見下ろした。

形式番号や作った工場は違えど、大鳳は正にウィンドムそのものだった。

巖谷と綺羅が見下ろした先には大鳳が4機並んでいた。

そこに工場長の鷹匠が解説を挟む。

「現在、試作型大鳳はご覧の通り、4機が完成いたしました。先行型ストライカーパック、和名攻撃型追加兵装も4機分のバリエーションをそろえました。機体開発は光菱重工が、ストライカーパック及びOSは富嶽重工が、ビーム兵器は河崎重工がそれぞれ開発いたしました、しかし、我々も大変勉強になりました。巖谷さん、そして綺羅殿、まことに有難う御座います」

その言葉に巖谷が首を横に振る。

「いいや、私の成果では無いよ。綺羅君がココまで設計、開発したんだ。俺は3社に頼んだだけに過ぎんよ」

巖谷の言葉に綺羅も首を横に振った。

「コレは皆さんの成果です。誰が欠けても形にはなりませんでした。有難う御座います」

綺羅は二人に頭を下げた。

何はともあれ試作型大鳳が完成した。

キラはこの4機を受領すると4機を87式自走整備支援担架に載せるとソレを帝国斯衛軍第一師団の基地に運ぶよう命じた。

キラが基地に帰ると搬入作業が完了していた。

機体の周りには斯衛の衛士や整備兵が物珍しそうに眺めていた。

「隊長？ コレは？」

キラが帰ってきた事に気が付いた総司が質問する。

「君達が新しく乗る機体、大鳳」

「コレがですか！？　　すげ〜〜〜！　　カッコイイ！！」

正樹は子供の様にはしゃぎながら目をキラキラさせて言った。

「明日の演習はコレのテストですね？」

佑は確認の為にキラに質問した。しかし、落ち着きのある佑ですら何処かソワソワしていた。

「今日、乗ってみる？」

キラの言葉に3人は反応した。

「本当ですか！？」

「やったあ〜〜〜〜〜〜！！」

「有難う御座います！！　大和隊長！！」

3人は夫々嬉しそうにしながら答える。

「それじゃあ、1400時から演習を開始するからその心算で。デ
ータを渡すから良く読んでおいて」

「「了解！！」」

訓練が終わり、キラはウィンダムのコックピットでキーボードをタイピングしながら考える。

今の新人の課題は夫々の得意分野でストライカーパックを選択している……総司はエールを、正樹はソードを、佑はランチャーを使っている。一般の部隊ならそれでいいけど、僕達は試験小隊、本来なら万能にどのストライカーパックでも使いこなせなければなら………今後の課題と悠長な事も言ってもらえない……ん………)

綺羅が考えていると真耶の声がした。

「綺羅、いるのであろう？」

綺羅が作業を中断し、キーボードを定位置に戻し、コックピットから顔を出す。

「真耶？ 何？」

キラの質問に真耶が答える。

「夕食がまだであろう？ 一緒にどうだ？」

キラはその誘いを申し訳無さそうに断った。

「ゴメン、真耶、今、機体のバランスと間接部の調整してるから手が離せないんだ」

真耶は呆れながらも笑いながら言う。

「そう言うと思って握飯と茶を持ってきた。根を詰め過ぎると体に毒だ。休憩しないか？」

そう言われてはキラも断る事が出来ず、

「解った」

と、答え、リフトに乗り込み、地上に降りる。

場所を移し、休憩室で二人は並んで椅子に座りながらおにぎりを食べた。

「どうだ？ 大鳳の調子は？」

不意に真耶からの質問にキラは答える。

「うーん、今の所は4人で実機訓練やヴォールクデータを行いながら機体の問題点の洗い出しかな……確かに機体は完成したけどソレが戦場に合わない物じゃあ意味無いから……」

「そうか……我々が使えるのは当分先だな……しかし、演習を見させてもらったが正直、凄い機動性だ。一番重いはずの砲撃兵装ですら不知火・改の5割増だからな。正直、我が目を疑った程だ」

真耶の言葉にキラは苦笑しながら答える。

「でも、3人は使い慣れてないから速度に振り回されてる感じはあるね。問題は一般の衛士が何処まで速度に慣れてくれるのと固定概念を捨て去れるかだよ。高速機動が売りの機体で高速機動が出来ません。ストライカーパックが飾りです。では話にならないからね」

真耶は笑みを浮かべながら言う。

「期待しているぞ？ 大和中尉？」

「御任せを、月詠中尉」

仕事の話はこれでお仕舞いと真耶は日常の話題に変えてキラと話した。

キラも真耶の話を聞きながら楽しそうに笑った。

お互い18歳。例えば軍務にある身とは言え、年相応の話題も尽きない。

年も明けた1月、紅蓮が隊長陣を呼び集めた。

新年会も終わったし、行事は無かった筈と隊長陣も何事かといぶかしんだ。

キラ達隊長陣が集合すると紅蓮が室内に入る。

キラ達は一斉に立ち上がり敬礼をした。

紅蓮も敬礼をし、隊長陣に直る様、指示し着席させる。

紅蓮は静かに口を開く。

「本日、1000時、大本営、御前会議により勅令が下された。今年の8月5日1200時をもって国連軍及び、我が帝国軍及び大東亜連合軍の共同作戦による横浜ハイヴ攻略戦、作戦名明星作戦が行われる事が決定した」

それを聞いた隊長陣はどよめいた。

キラは来るべきモノが来たと感じていた。

「静まれい!!」

紅蓮の一括により静まる室内。

「話を続ける。今作戦の最大目的は横浜ハイヴの殲滅と本州島奪還である。作戦内容は先ず太平洋側と日本海側からの艦砲交差射撃による後続の寸断より始まる。次に国連軍主力の戦術機部隊と日本海側から我が軍の本土防衛軍が戦術機部隊が横浜を包囲、ベータを殲滅する。この間、各艦からの支援砲撃は継続する。我々、帝国斯衛軍第一師団及び、斑鳩大将指揮下の帝国斯衛軍第16大隊、及び、帝国陸軍が国連軍上陸部隊と共同で太平洋側から敵陣に侵攻する」

キラは紅蓮の説明を聞きながら考える。

今回の作戦はお決まりといえはお決まりの対ハイヴ大規模作戦に当
てはまるモノだ。

ベータが相手では人間同士の駆け引きや戦術、戦略は余り意味が無
い。

逆にキラは考えてしまう。

（ベータとの戦いは量対量の戦いになってる……ハッキリ言っ
て量では人類は圧倒的に不利だ……コレは量よりも質、技術や兵器運用
をもう少し見直すべきではないだろうか？ コレは……検討の余地
ありだね……）

キラはそんな事、考えながらも紅蓮の詳細説明を聞いていた。

1999年、8月4日、9時、キラ達スレイヤー小隊は大鳳のコッ
クピットに待機していた。

キラの大鳳には高機動型攻撃兵装と対レーザーシールドとビームラ
イフルが装備されていた。

スラスター出力リミッターを解除された代物で、通常の大鳳の3倍
速くなっている。

正樹は対要塞級長刀兵装を装備していた。

総司は高機動型攻撃兵装と対レーザーシールドとビームライフルを装備していた。此方の高機動型攻撃兵装はリミッターつきである。

佑はランチャーストライカー長距離砲撃兵装を装備していた。

キラは目を瞑りながらその時を待った。

『H Qより各部隊に通達！！ 作戦開始！！ 繰り返す！！ 作戦開始！！』

その通信と共に一斉に砲撃音が響き渡る。

砲撃はレーザーにより撃ち落され、重金属雲が発生した。

キラ達のビーム兵器は重金属雲では多少威力が減衰するものの突撃級の装甲は簡単に撃ち抜ける程の威力だった。

そこら辺はキラと巖谷達は何度もシミュレーションを重ねている。

ラザフォード場も力場のエネルギー量にもよるが、ビームの出力を上げれば貫通する事ができた。

砲撃が続く中、H Qが発進準備を告げる。

『H Qより通達！！ 全戦術機部隊発進せよ！！ 繰り返す！！ 全戦術機部隊発進せよ！！』

キラは目を見開き、通信を繋げる。

「聞いたね?!? スレイヤーズ!! 全機発進!! 行くぞ!!」

『『了解!!』』』

キラの命令に3人は勢い良く答えた。

「大和 綺羅! 大鳳! 行きます!!」

キラ達スレイヤー小隊の成果がいよいよ全世界に知れ渡る事になる。

キラ達が陣形をたてながら戦場に舞い降りる。

「佑!! アグニを連続発射!! 10秒左右に!!」

『了解!!』

キラは佑にアグニを撃つよう命じる。

『撃つぜ!!』

佑は咆哮と共にトリガーを引いた。

アグニの砲口から赤いビームが吐き出される。

ビームは左右に振られ、正面にいたベータ群を焼き払い吹き飛ばした。

『……フュ〜♪ すぐ〜……』

正樹は口笛を吹いて呟いた。

『出鱈目な威力だ……』

総司も少し、啞然としながら呟いた。

「ボツさつとしない!! フォーメーションA!!」

キラの檄に3人は我に返り答える。

『『了解!!』』』

キラはスラストスターを全開にし、戦場を縦横無尽に動き回る。

「行っけ〜〜〜〜〜!!」

ビームライフルを乱射しながら飛んでくるレーザーをかわし、また、ビームを撃ち込む。

キラの大鳳に大挙してきた要撃級が押し寄せるがキラはそれでも冷静に対処する。

ビームライフルを後腰に仕舞うと右マニピレーターを左腰にやり、ビームサーベルを引き抜く。

そして、超高速で要撃級に近づき要撃級と要撃級の合間をすり抜けると同時に機体をバレルロールしながら要撃級2体の前腕と尾節を切り裂く。

ビームサーベルを仕舞い、キラは操縦桿を操作しながら後方のベータに止まる事無く振り返りながらビームを撃ち込み、目の前の突撃級にビームを撃ち込むと、先ほど撃ち抜いた突撃級の死骸を踏み台にしてより高く飛び上がる。レーザー級がレーザーでキラを狙うが、キラはソレを全て避け、或いはシールドで防ぎながらレーザー級に照準を合わせ、ビームと105mm単装砲を撃ち込んでいく。

この間、僅か10秒。

余りの凄さに3人は啞然とした。

『す、凄い……如何したらあんな事出来るのか理解できない……』

正樹は啞然としながら呟いた。

『隊長……凄い……』

総司は最初に我に返り、二人に言い放つ。

『ッ!! 正樹! 佑! ボーとするな!! ここは戦場だぞ!! 隊長に遅れるな!!』

その言葉に二人も我に返り、返事をした。

『ッ!? と、そうだった!!』

『悪い! 総司!!』

『行くぜ!!』

総司は二人にそう言いながらベータに襲い掛かった。

正樹は先に先行し、対要塞級長刀を引き抜き、刃を機動させると突っ込んできた突撃級の左脇に飛び、長刀を横薙ぎに切り払う。

突撃級はスライスされて絶命する。

『総司!!』

『解った!!』

正樹が左横に飛びのきながら叫ぶと、ビームを要撃級に撃ち込む。

『カバー!!』

『オウ!』

総司の声と共にアグニの赤いビームが右横からベータに襲い掛かる。

キラは戦いながら3人を見やり思う。

（連携はいい感じなんだけどもう少し、思考の早さが欲しいかな…
：戦場でダラダラ考える暇はないから…）

キラの辛口の評価と違い、帝国軍や国連軍は4機の大鳳の動きに啞然としていた。

『何だ、あのデタラメは!?!』

『ジャパンの新型か!?! あんなの見た事ないぞ!?!』

『……あの新型、レーザー撃ってなかったか……?』

『オイオイオイオイオイ!! マジかよ!? 僅か5分で前線が押しあがってる!?!?』

『先行した新型……レーザーを空中で避けてる……? 俺の目はイカレたのか?』

『安心しろ、お前の目は正常だ……俺にもそう見える……』

『アレが……帝国ス衛軍最強の小隊……スレイヤー小隊……』

その頃、最上では……

小沢提督はこの状況に咂然としていた。

「コレが……ス衛軍最強の小隊の実力……」

余りにも凄すぎる。小沢はそう思いながらもCICのモニターを見ながら思った。

「彼等、スレイヤー小隊が介入して30分……戦場が押し上がっている……」

モニターのベータを表す光点が可笑しい速度で減っていく。

「もし、あの時、これらの機体があったなら我等は……佐渡島の戦いで涙を吞まずにすんだモノを……いや、詮無き事だな……今は戦

いに集中しなければ……斯衛軍の大和中尉があの戦場で戦っている。我等海軍も負けてはいられない」

小沢は各艦に支援砲撃の準備をさせた。

その頃、アイオワでは……

「何だ！？ あの日本の新型は！？ あんなのは報告に無いぞ！？ クソ！！ 情報部は昼寝でもしていたのか！？ クソ！！ これでは我々の予定も狂う！！」

アイオワの艦長はC I Cで毒づきながら状況を見ていた。

「艦長！ このままではG弾使用の意味が無くなります！ 予定を切り上げてG弾を撃つべきです！」

副長が艦長に進言する。

「それしか無いか……全く……此方のシナリオを悉く狂わせてくれる……」

苦々しそうに呟きながら艦長はG弾発射を命じた。

キラが部隊を集結させ、母艦に戻り、補給と整備を行っていると突如、強烈な黒い閃光が横浜ハイヴを包み込んだ。

「何だ!？」

キラがモニター越しにその光景を見て咂然とした。

黒い半球体の光が横浜ハイヴを包み込んだからだ。

正樹達もこの異常事態に騒ぎ立てる。

『何だ!？ ああ黒い光!？』

『横浜ハイヴが……黒い球体に包まれた……』

『アレは……一体なんだ!？』

キラは慌ててH Qに通信する。

「スレイヤー1からH Q! 横浜ハイヴで何が起こった!？」

キラの質問に日本側のH Qも困惑気味に答える。

『H Qからスレイヤー1、現在調査中だ。暫く待て』

こうして、キラ達、スレイヤー隊の初のハイヴ攻略戦と実戦でのデータ収集が終わりを告げた。

この戦いで、キラの名はスレイヤー隊と大鳳の名と共に世界中に知れ渡る事になった。

そしてアメリカのG弾強行使用は日本帝国国民だけでなく世界中にアメリカの不信感を煽る結果となった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 5 話 横浜に舞う大鳳（後書き）

横浜ハイヴ攻略戦は世界の注目を集める。

果たして、世界はどう動くのか？

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 6 話

『それぞれの思惑』

黒き闇、照らし出せ！ ガンダム！！

MU-V-LUV SEED Destiny 6話 それぞれの思惑

横浜ハイヴ攻略戦、明星作戦は世界中に波紋が広がった。

アメリカのG弾の強行使用もそうだが、ソレより大きな関心事は日本帝国の新たに開発した戦術機であった。

たった4機でフェイズ2とは言えハイヴの前線を僅か30分で押し上げたのだ。

注目しない訳が無い。

日本帝国では正式なコメントは差し控えていた。

キラは今、帝都城の謁見の間に悠陽と斑鳩と紅蓮に今回の任務報告と大鳳の問題点を報告する為である。

「以上の観点から、ビームライフルのエネルギードライブ方式をマガジン型バッテリー方式に切り替える必要があります。やはり、ハイヴ戦は長丁場の戦いが多く、バッテリー回復の為に母艦に何度か戻りました。次に、コスト面ですが、我が帝国に余裕が無い以上、大鳳のコストは開発を中止した武御雷とのコスト比が1対2とコストがかかります。また、攻撃型追加兵装を合わせれば価格は更に武御雷の3倍になります。コレは西日本壊滅と北九州工業地帯の壊滅も大きな要因となっております。

更に問題点としては、スラスターにリミッターを付けないと一般の衛士が機体に振り回されるのも問題です」

キラは成功と問題をそれぞれ言いながら今回の大鳳の評価を述べていく。

ソレを聞きながら3人は唸る。

「やはり北九州工業地帯を失った事が大きく響くか……」

紅蓮の言葉はココにいる全員を唸らせた。

「ええ、もう少し、コストと機体性能を抑えた機体を考えませんか……」

キラの言葉に斑鳩が言う。

「あい解った。大鳳は斯衛軍の主力機として置く。綺羅よ次の任務は大鳳よりも低価格で操縦しやすい第4世代型戦術機の開発を行って欲しい」

キラは内心、無茶を言うと思いますが国も兵器をタダで生産できない事を理解しているのでキラはその命令を受け取った。

キラが退出しようとした時、悠陽が呼び止める。

「綺羅よ、そなたに言い渡す事項がある暫し待て」

キラは座りなおし、事例を待った。

紅蓮がキラに辞令を言い渡した。

「大和 綺羅、此度の活躍を認め貴様に大尉の昇進と小隊から中隊を貴様に預ける事をココに申し渡す！ 中隊長を大和 綺羅、副隊長を月詠 真耶中尉とする。正式な書類は後日受け渡す。ソレと貴公に殿下から贈り物がある……」

「贈り物でありますか？」

キラは紅蓮の贈り物と言う言葉に引かかった。

「ウム、今回の世界情勢を鑑み、大鳳の開発経緯を説明する可能性が大きくなった。つまり、貴様のカバーストーリーの他に大鳳のカバーストーリーも作らなくてはならなかったのだ。つまり、ある日、突然、高性能戦術機が完成しましたでは話が合わぬ。ソレを考えるに基となった機体を作らなければならなかった。そこで貴公の昔の乗機たるストライクの再生機に乗ってもらう」

この言葉にキラは驚いた。

何せ、自分と大鳳の開発経緯を隠す為に、金の掛かる事をしているのだ。

確かにPS装甲を地上で生産する事は可能だが宇宙空間を擬似的に再現する装置と加工にコストが嵩み過ぎてとても量産できない代物なのだ。

ソレをカバーストーリーの為に設備と機体丸々1機生産するとはスケールのデカイ嘘をつくものだ。

鶏が先か、卵が先かの嘘を国家スケールでやっている事にキラは啞然とした。

紅蓮の言葉に斑鳩が付けくわれる。

「そなたにはガンダムが似合っておるからな……それに、横浜の開放と本土奪還の立役者へ贈り物をして罰は当たるまい？」

これまたとんでもない事をサラリと言うものだときらは内心思いながらも御礼を言う。

「有難う御座います」

キラが帝国ス衛軍第一師団の基地に戻った時、ハンガーが何やら慌しかった。

キラは正樹達を捕まえて事情を聞いた。

「何があつたの？」

キラの質問に困った様に答える正樹達。

「実は……ハンガーに新しい機体が来たのですが……」

「コレは一体と整備兵も戸惑っております……」

「隊長……アレは何ですか？」

其処にはメタリックグレーのストライクが鎮座していた。

皆、コレで戸惑っていたのかと理解した。

「アレはGAT-X105ストライクって言って僕の機体なんだよ」

ソレを聞いた3人は驚く。

「隊長の機体なんですか!？」

正樹の驚きはこの場にいる全員の驚きでもあった。

「うん、大鳳の元となった機体なんだ」

キラはカバーストーリーを3人に説明する羽目になった。

帝都大学研究室では……

香月 夕呼が資料を見ながらウィンダムの評価をしていた。

「……ビームライフルにビームサーベル、なるほどね、あのレーザーみたいなのは特殊な粒子の磁場形成理論の応用技術……ね……ビームライフルは高エネルギーに励起された荷電粒子やプラズマなん

かを臨界まで圧縮して亜光速で撃ち出す兵器か……この特殊な粒子が何なのか機密で解らないわね……斯衛が開発した技術だから手を出そうとすると外交問題になるわね……オルタネイティヴ権限を使いたいけど国連の心象が悪すぎるからこれ以上国民感情は逆撫でできないわね……アメリカの馬鹿のせいでコッチまで被害が出るじゃない!!」

夕呼は愚痴りながらもキラの写真が載ったプロフィールを見ながら思う。

（この男……大和 綺羅が全ての鍵ね……優秀な人材は欲しいわね……衛士としての技量は帝国、いいえ、多分世界最強だろうし、開発者としても私達の何歩も先を爆進している……何とかして此方側に引き込みたいけど……如何するべきかしら……）

夕呼はコーヒーを飲みながら考えを纏めようとその類稀なる知能をフル回転させていた。

アメリカ合衆国、バージニア州、アーリントン郡、ペンタゴンでは……

合衆国の陸、海、宇、海兵の制服組トップ達と国防長長官、総合作戦本部長などアメリカの力たる彼らが一同に会していた。

G弾運用の成功の報告の後の彼等の表情は重かった。

合衆国の推し進めるG弾によるハイヴ攻略と言う大戦略に世界が疑問を抱いてしまったからに他ならない。

疑問ならまだしもソレが不信感を孕んでいとなればなおさらだった。

更に、戦術機開発に遅れを取っている日本帝国が高性能な第4世代型戦術機を開発したとなればもう只事ではなかった。

東洋の島国が自分達を超える技術を持っていてソレがG弾の必要性を霞ませた事は彼等にとっては屈辱だった。

「日本帝国の正式な発表は無いがCIAが調査した情報では、横浜で見た、あの機体、帝国の斯衛軍が独自開発した戦術機だそうだ。カテゴリーは第4世代型、名を大鳳と言うそうだ。近く斯衛軍が正式採用するそうだ」

海軍長官が渋い顔をして調査資料を読み上げた。

「フン、所詮、ジャンプの便所の糞以下の機体だろうが？ ビビる事は無い。我等のラプターこそ世界最強だ」

陸軍長官が鼻を鳴らしながら息巻く。

しかし、海軍が撮影した記録映像を見たとき、陸軍長官はその口を閉じざるおえなかった。

余りの機動性とレーザーを空中で避け、ビームを吐き出す銃口、その姿は彼等を沈黙させるに充分過ぎた。

「ジャップの野郎、トンでもないもん開発しやがったな……それともあの機体の衛士が化け物か？」

陸軍長官は咄然としながらも呟く。

海軍長官は顎に手をやりながら深刻な顔をしながら言う。

「どちらにしろ合衆国の脅威に変わりはない。あんな物が量産された暁には日本は戦術機開発で我々を大きくリードする」

国防省長官は溜息を吐きながら述べる。

「外交で圧力は掛けているが、日本のロイヤルガードの代物である以上、外交問題になりかねない。政府としては技術が欲しいのだ。ソレを閉ざされてはどうしようもない」

総合作戦本部長も考えながら言う。

「ユーコン基地や欧州連合から間接的に日本の技術を吐き出させる方向で検討してみよう」

会議はユーコン基地や欧州連合から間接的に日本の技術を吐き出させる方向で決まった。

欧州連合では……

今回の横浜ハイヴ攻略戦の映像を見ながら検討していた。

イギリス代表が口を開く。

「日本の第4世代型戦術機、大鳳は正に最強の戦術機だ。コレを我が欧州連合軍にも導入できないだろうか？」

フランス代表はイギリスの問いかけに答える形で言う。

「今の所、日本政府からの公式発表が無い以上、タイフーンの様に技術提供を得る事は難しいだろう」

西ドイツ代表も意見する。

「それにだ、アレは、あくまで試作機の域を出ない機体だ。正式採用が決まってからでも技術提供してもらう方が効率がいい」

ベルギー代表は考えながら言う。

「現状で我々が欲しいのは機体よりもビーム兵器なる兵装だ。アレを搭載する事が出来ればベータとの戦闘は大きく優位に立つことが出来る」

欧州連合は日本政府が第4世代型を正式採用する事を見越して技術提供してもらえる様、政治的パイプを太める様、努めた。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 6 話 それぞれの思惑（後書き）

キラ達の新たなる任務、

ソレは日本帝国の新たなる刃となるのか？

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 7 話

『日本帝国の剣』

新たなる力、手に入れろ！ ガンダム！！

MUV－LUV SEED Destiny 7話 日本帝国の剣

キラのスレイヤー試験小隊が中隊規模になってからキラの執務室が与えられる様になった。

その執務室である二人を待つキラ。

約束の時間10分前、ドアをノックする音が室内に響き渡る。

「どうぞ……」

キラの言葉と共に二人の女性が入ってきた。

一人は緑がかった髪をストレートに下し、眼鏡を掛けた美女。

もう一人は黒髪のロングヘアーに左の鬢の所を和紙で纏めている美女だった。

「本日付けで着任いたしました、月詠 真耶であります！」

「同じく、本日付けで着任いたしました、篁 唯依であります！」

二人がいい終わり敬礼するとキラも敬礼しながら言う。

「ようこそ、我が日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊へ、スレイヤーズは貴官等を歓迎する」

「「有難う御座います！」」

キラの言葉に真耶と唯依は敬礼しながら答えた。

「では早速、君達二人が乗る機体を紹介しよう。着いて来て」

「了解！」

キラ達がハンガーに到着し、キラが二人を見ながら言う。

「これが我が斯衛軍が正式採用しようとしている機体、“大鳳先行量産機”だよ」

キラの言葉に二人は2機の大鳳を見上げる。

一つは赤色に塗装された大鳳、二つは黄色に塗装された大鳳が置かれていた。

「ほう、ようやく形になったか綺羅」

「うん、ようやく、本当にようやく先行量産機が生産されたね」

キラと真耶のやり取りを聞いた唯依が不思議に思った。

（大和殿と月詠殿は親しい間柄なのだろうか？ お互い下の名前で呼び合っているから親しいのだろうが大札と小札では身分的な差は

あるだろうに……しかし、大札が小札の下に就くとは……帝国斯衛軍では異例中の異例……この二人の間には身分的な垣根が無いのだろうか？)

唯依はキラを見ながら考える。

(大和 綺羅……現在、帝国最強の衛士にして最高の開発者……おじ様が言うには『綺羅の奴とマトモに戦える衛士はいない。戦術や戦略を練って十分な機体と選りすぐり衛士を集めて、初めて戦える相手だ』と言っているけど……とてもそんな感じには見えない……)

そう思いながらもキラの説明を聞く唯依。

(しかし、とんでもない戦術機だな……ビーム兵器もそうだが、この大鳳最大の特徴は正に攻撃型追加兵装の装備による戦局や個人の戦闘に応じた兵装の選択。これに尽きる……その気になれば一人何役もこなせる万能さだ。高機動型攻撃兵装、対要塞級長刀兵装、長距離砲撃兵装、さらに新しく支援砲撃兵装が加わる……正に1機4役の働きが出来る訳だ……万能にも程がある)

そう思いながらも唯依は大鳳を眺めた。

真耶はキラの話聞きながら思う。

(キラの作り上げたOSは各部隊に配備が完了している……ソレにより帝国軍全体の質の向上は目覚ましい。全く……そなたと言う男は……驚きを隠せないな……最初は何処か頼りない男と思っていたが付き合えば付き合うほど芯の強さを垣間見る事が出来る……私が初めて男の下の名を呼ばせた者……私の初めての友……私の周りはいくまで競争相手か上下関係の付き合いしかない。今更ながら思う……)

…友とはいいいものだ……)

キラの顔を見ながら真耶は思った。

(斑鳩閣下直々の勅命で大鳳以外の第4世代型戦術機の開発……フム……楽しみだ……)

それぞれ思うところはある様だがキラは知ってか知らずか説明を続けた。

キラは帝国軍の一般の衛士用の機体開発の打ち合わせの為、巖谷を訪ねた。

「……以上の事から帝国軍の機体をダガーⅠにして見ました。ビームライフルもエネルギーマガジンを採用、装弾数はフル、セミオートで1500発射可能です。集束モードでは30発分ですね……大鳳も同じモノを採用しました。そして、第4世代型の訓練機、或いは、海外向けの技術提供機として、ストライクダガーを3・5世代型戦術機と位置づけ開発すべきかと……」

キラの説明に巖谷は考え込んだ。

「フム……大鳳自体が高性能であるが故にこの様な回りくどい事をしなければならんとは……まあ、兎に角、その方向で検討してみよう」

指針が決まった所で巖谷は茶を飲みながらキラに質問する。

「所で綺羅君、ウチの唯依ちゃんの調子はどうかね？」

キラは苦笑しながら答える。

「ええ、彼女は良くやっていますよ。流石、斯衛軍の実戦部隊の衛士と言う所でしょうか。ココに来る前に彼女達、ヴォールクデータをやらせてみましたけど、小隊で中階層まで行けるのは流石ですね。それに僕の部隊に来なかったら彼女は中隊を指揮していたでしょうから、何だか悪い事をした気分ですよ」

巖谷はヤレヤレと言いたそうに肩を竦める。

「帝国最強の衛士は謙遜がすぎるね。君は一人でヴォールクデータを攻略したじゃないか。君と比べるのも可笑しな話だけど、まだまだ甘いよ。ソレは兎も角、綺羅君、どうだい？ 唯依ちゃんとお見合いでも……」

「結構です」

巖谷の申し出に綺羅が即答で切り捨てた。

「もう少し考えてから答えてもいいだろうに……それに唯依ちゃん程の美女はそうはいないぞ。綺羅君」

「い・わ・や・さん！」

巖谷がしつこく進めるモノだからキラも大声になって巖谷を制する。

「……悪かった、そう怒鳴るなよ、綺羅君……」

「……此方こそすみません……大声を出してしまつて……」

こうして、キラと巖谷の会議は閉幕した。

キラは早速、共同開発工場に赴き、ダガーLの開発を依頼するとすぐに基地に帰る。

キラが基地に帰る頃にはもう日が暮れていた。

1ヶ月後、キラは完成した、ダガーLのテストと自分の小隊と真耶の小隊と唯依の小隊の実力差を明確に量る為の訓練を実施した。

A小隊はキラの小隊で、正樹、総司、佑の少尉トリオでA小隊でのコールサインはスレイヤー、

B小隊は真耶の部隊で秋月 香奈少尉、西園寺 優美少尉、白鳥 舞少尉のコールサインはエンジェル、

C小隊は唯依の部隊で今先 功少尉、鶴見 慎二少尉、加藤 玲人少尉のホワイトファング、

と小隊分けされた。

部隊名は変わらず、スレイヤーズ。大和　綺羅のスレイヤー中隊と言った所だ。

キラは小隊長と中隊長を兼任、真耶は小隊長と副隊長を兼任と言う感じだ。

戦域管制は高野　光中尉でコールサインはスレイヤーズママとなる。

キラはこの顔ぶれを見ながらようやく部隊らしくなったと実感した。

キラ達、小隊長陣は指揮管制室で演習の様子を観察すべく移動した。

「それじゃあ、最初の演習はAとB小隊から始めようか」

キラがそうインカム越しに言う。

『『『『『了解』『』『』『』』』』』』

6人はそう答える。

「高原、管制開始しろ」

真耶は光に命令する。

「了解しました。それでは、A、B小隊の実機演習を開始します。ジャイブス機動確認、演習、開始！」

女性特有の透き通る様ないかにオペレーターという声で光が演習開始を告げる。

演習場では6機のダガーLが演習場にいた。

演習場は市街地の廃墟を利用した演習場だった。

『正樹、障害物が多い！ ポイントマンを頼む』

総司の支持に正樹が答える。

『了解、しかし……これじゃあ長刀より短刀の方が取り回しがい
いぜ……』

正樹の言葉に佑も頷きながら答える。

『全くだ……これじゃあアグニの長距離が全然活かせない』

その言葉に総司は言う。

『ソレは向うも同じだ。様はかくれんぼと鬼ごっこ。相手を早く把握する事が重要だ。佑、後ろは任せるぜ』

その言葉に佑がニヤリとしながら答える。

『任せろ』

『正樹、前は頼んだぞ?』

『オウ、任されてゝ!』

正樹もおどけながら答える。

正樹達は静粛機動で移動を開始した。

正直、人間と戦う事が少ないこの世界で不要な技術ではあるが、將軍家を守る斯衛としては対人戦も想定した機体チューニングが施される。

一般部隊に配備されるダガーLでも斯衛使用ともなれば付けられる装備であった。

これもキラと巖谷が追加した機能だ。

総司はリーダーを広範囲モードに切り替え、索敵を開始した。

『見つけた……二時の方向……距離300……至近だ……強襲で行く、佑、ブーストジャンプ、後にアグニを正射、俺と正樹で散開した敵の戦鬪を強襲、撃破後、佑は移動しビルの合間から狙撃で援護、俺と正樹はビルに隠れながら強襲する』

『了解』

『タイミング合わせ……3、2、1、佑! 今!!』

『!!!』

佑のダガーは飛び上がり、アグニを2発叩き込む。

エンジェル小隊は予想通り散開した。

『正樹！ 行くぞ！！ アチラにやられるな！！』

『お前もな！ 総司！！』

総司は飛び上がりながら近くのダガーLに狙いをつけてビームライフルを正射。

敵ダガーはかわすが待ち構えていた正樹が短刀でコックビットにその刃先を突き立てた。

『きゃあ~~~~~~~~!!?』

「秋月機、致命的損傷、大破」

光が撃墜判定を下すが、正樹と総司はそれに構わず移動する。

その頃、佑のダガーLは移動し、狙撃ポジションを取っていた。

『狙い撃つぜ！！』

そう叫びながらトリガーを引く佑。

アグニの赤い閃光は敵ダガーLを貫いた。

『へ！？ 嘘！？』

「白鳥機、致命的損傷、大破」

『一度に二人も！？ クッ！！』

西園寺は悔しそうに呟きながらアグニの砲撃を避けるがソレは佑の罠だった。

『……可らしい……狙いが甘い？ ……！？ まさか！！』

しかし、気付いた時には遅かった。

正樹と総司のダガーLが襲い掛かってきた。

西園寺のダガーは後方へブーストジャンプするが総司に足を撃ち抜かれる。

バランスを崩す西園寺のダガーL。

其処に追い討ちを掛ける様に正樹が短刀を突き入れるが、無理やりブーストで体制を立て直す西園寺のダガーL。

しかし、彼女は失念していた。佑のダガーLがいることを……

『佑……撃て』

総司の呟きが終わると同時に赤い閃光が西園寺のダガーLのコックピットを貫いた。

『グゥレイト！！』

佑はそう言いながら親指を立てた。

「西園寺機、致命的損傷、大破。エンジェルス全機の撃墜によりスレイヤーズの勝利。演習を終了します」

光が西園寺の大破と演習終了を告げる。

「それじゃ次は10分後、AとCで演習を始めようか」

キラの言葉にC小隊が準備を開始する。

演習はA小隊が2勝、B、C小隊は1敗1引き分けという結果になった。

キラはこの結果を受けて、考える。

（ダガーLは第4世代型としては及第点といった所だね……問題は衛士の質……機体にどれだけ早く慣れるかが問題か……正樹達が全勝できたのは大鳳に乗りなれていると言う経験値の蓄積でしかない……他の小隊が経験を積んで第4世代型の戦い方を学べばこの差無くなる……圧倒的な機動性と広範囲で正確な索敵が可能なレーダーやセンサー系統、ビーム兵器の運用……全ての面で今までの戦術機を越えてるからな……ま、慣れかな……）

キラはそう思いながらダガーL改め“鳳翔”とストライクダガー改

め“敏捷”の運用データを巖谷の所に持っていった。

1ヶ月後、“鳳翔”は帝国軍戦術機として採用が決定した。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 7 話 日本帝国の剣（後書き）

キラ達、スレイヤー中隊に政治的介入が入る。

果たしてキラ達は切り抜けることが出来るのか？

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 8 話、

『プロミネンス計画』

闇の向こう側に、何を見るのか？ ガンダム！！

キラ達、スレイヤーズが機体開発に勤しんでいる頃、国連から帝国にある書類が届いた。

その書類の中身とは、キラの先進戦術機技術開発計画への参加要請だった。

正直、帝国としてはキラを出したく無いが、政治的な圧力がある。跳ね除ける力を失っている日本にソレを求めるのは酷かもしれない。

何せ、資源が無い、食料も無い、経済もベータ襲撃で西日本はズタズタ、マンパワーも不足と挙げればキリが無い。

勿論、斯衛とその上の組織たる城内省は猛反発が予想されるし、日本帝国国民の世論も反発が予想される。

だからこそ、国連も命令ではなく要請、お願いと言う形で文章を出したのだ。

ある意味、資源や食料を盾に取られる形でのお願いだから、脅迫と命令である。

政府もソレが解っているだけに今回の文章に頭を悩ませた。

城内省の今回の事は解っているが將軍家の守りを預かる斯衛軍の衛士、しかも、帝国最高の戦術機開発者にして、帝国最強と誉れ高い

紅蓮をして最強と言わしめる大和 綺羅をアメリカの隠れ蓑たる国連に預ける事など考えられない。

この板ばさみは長く続くかに見えたが、悠陽の一言で全てが決まった。

「この件は大和に一任する」

と言う一言でこの場の結論に達した。

訓練が終わり、キラは紅蓮に呼び出しを受けそのまま帝都城に赴く。
キラが正座をしながら悠陽を待つ傍ら紅蓮の言葉を思い出す。

『お主の思うままにせよ』

と言う言葉を……

（一体、何の事だろうか……？ 解らない。多分、悠陽がこれから話す事と関係があるとは思っただけど……）

キラが暫く待つと、悠陽と斑鳩が謁見の間に入ってくる。

キラが面を上げると悠陽も斑鳩も緊張した面持ちで此方を見ていた。

先ず始めに斑鳩が口を開く。

「綺羅よ、今回、お主を呼んだのは他でもない……実はお主に国連のとある計画に参加して欲しいのだ……」

「国連の計画……ですか？」

キラの質問に重々しく首を縦に振る斑鳩。

「ウム、計画名を先進戦術機技術開発計画、通称、“プロミネンス計画”にだ……」

キラはその言葉に対し、考える。

（計画名を先進戦術機技術開発計画……？ 名前からしてマンマなんだろうけど……そもそも国連主導の計画で何で日本帝国の斯衛軍が参加する意味が……ソレだったら巖谷さんの所に話が来るのが筋だろうに……）

キラは解らない事を質問する。

「先進戦術機技術開発計画とは一体なんですか？」

「アラスカのユーコン基地を拠点に、国連主導で世界各国が情報交換や技術協力を行い、より強力な戦術機を開発する計画だ。我が国はこの計画には手を引いていたが国連からの参加要請が来たのだ」

ソレを聞いてキラは巖谷の話进行出す。

（確か、日本が手を引いた計画があると話していたのはこの計画か……納得した……僕が来てから今の帝国は戦術機開発では世界の最

先端だからね……)

キラは次の質問に移った。

「何故、斯衛軍の僕がその計画に参加しなければならないのです？
ソレならば巖谷さんの技術廠の開発局の人が行くのが筋では？」

キラの質問に斑鳩が渋い顔をして答える。

「名指しでそなたを指名してきたのだ」

(名指し……ねえ……これはお願いじゃない、命令だ……)

キラは心でその参加要請という名の命令書を作成した国連上層部に
心で皮肉を言うキラ。

キラはある事を質問した。

「その命令書には僕を何時までに寄越して欲しいとかの趣旨は？」

「無かった、出来るだけ早く来いとだけ」

キラは考える。

(これは助かった。期限が決められていたなら交渉で何とか引き伸ばして貰う積もりだったけど、これなら……)

「それなら、佐渡島ハイヴ陥落が完了し次第、其方に行くとお伝えください」

キラの言葉に皆、驚く。

「綺羅……お主……」

紅蓮が啞然と呟く。

「そうでも言わないと向うも納得しないでしょう？ それに僕は仮にも斯衛軍、將軍殿下を御守りするのが責務です。日本帝国にハイヴと言う名の明確な脅威がある限り、安心して国を出る事は出来ない。国を思う気持ちを踏みにじり、それでも来いというなら、それは内政干渉、斯衛と城内省の慣習に他国が口を挟むことは出来ないのです」

謁見の後、キラは正式に声明を発表した。

この予想外の行為に国連も対応できず、内政干渉をしているのも事実なので納得せざる終えなかった。

こうして、キラのユーコン基地への即時移動は回避された。

MU-V-LUV SEED Destiny 8話 プロミネンス計画 次話題

佐渡島ハイヴ攻略に向けて動き出した日本帝国、

しかし、ベータは再び、日本を襲うのだった……

次回、MU-V-LUV SEED Destiny 9話、

『第一次ベータ新潟上陸』

迫り来る敵、打ち倒せ！ ガンダム！！

キラ達、スレイヤー中隊にとって一つの結果がココに示される事となった。

帝国議会は鳳翔の配備と生産を承認されたのだ。

キラ達は祝賀ムードに包まれた。

それでもやはり、鳳翔は富士導隊や帝国本土防衛軍、その他、隊長やエースクラスの衛士に配備されていた。

敏捷の方も訓練校に徐々に配備されていた。

キラ達にすれば早く配備が進めばいいのだがこればかりは帝国の予算の兼ね合いや訓練から無理な相談なのでキラも追々配備されればと考えていた。

キラ達スレイヤー中隊は富士導隊の訓練場に来ていた。

彼等、富士導隊に第4世代型戦術機の技能訓練を行う為である。

キラと真耶はスライドで機体概念や兵装、実戦での操作応用と言ったことまで彼等に教義する。

「……この様に第4世代型戦術機は、高性能スラスタによる高速機動とビーム兵器による火力向上、攻撃型追加兵装による衛士に合った戦闘スタイルの確立や戦場や戦局に応じた兵装選択による部隊単位の戦術、戦略の柔軟性を計る事が第4世代型戦術機の特徴です」

キラの説明に一人の衛士が挙手をした。

「どうぞ」

キラは挙手をした衛士を指名する。

「ハイ、有難う御座います。今の説明で戦術、戦略の柔軟性を計る事が第4世代型戦術機の特徴と仰いましたが、どの様な攻撃型追加兵装があるのでしょうか？ 説明お願いします」

キラはこの説明に答えていく。

「先ず、1つ目が高機動型攻撃兵装、2つ目が対要塞級長刀兵装、3つ目が長距離砲撃兵装、4つ目が支援砲撃兵装ですね。1つ目の高機動型攻撃兵装は高速機動による戦術機の中、近距離戦を想定した兵装です。兵装内容は105mm単装砲と少ないですがその機動力は全兵装中最速を誇ります。2つ目の対要塞級長刀兵装はその名の通り、兵装は対要塞級長刀が1本、小型盾型アンカーで完全な接近戦を想定した兵装となっています。ビームライフルも携帯可能ですので、中距離戦も十分戦えます。次に長距離砲撃兵装ですが、これは文字通り、中、長距離対応型兵装です。武装は320mm超高インパルス砲、120mmバルカン砲、350mmガンランチャーが兵装内容になっています。最後の支援砲撃兵装ですが、連装無反動砲2門が装備されています。これは最初は砲身を長くしていました。が、砲身が邪魔になる、機体重量が嵩むことから砲身やバグパック

の軽量化を図り、距離よりも部隊内での支援砲撃に特化した兵装にしました。ソレと次の装備が低反動砲です。これは支援砲撃やハイヴ内の反応路破壊の為の兵装で、連射可能な兵装です」

キラの説明に富士導隊の衛士達は熱心にメモを取りながら話を聞いていた。

キラの機体説明が終わり、次はいよいよ実機訓練になった。

実機訓練ではキラと真耶が鳳翔に乗って、アグレッサー役として訓練を開始した。

「真耶、準備は？」

『此方は、何時でもいい』

キラ達は機動プロセスを終了し、戦場に向かう。

キラの兵装は高機動型兵装、真耶の兵装は対要塞級長刀兵装をそれぞれ装備していた。

基本的にキラは高速機動による遊撃戦、真耶は刀の扱いの旨さによる接近戦が多い事から良くこの兵装を選択していた。

『もう少し、この兵装で機動性があればな……』

真耶はキラにそうボヤいた。

「うん……ソレは開発の余地有りだね……基本的に斯衛軍は接近戦を好む衛士が多いからね……」

キラはある機体を思い出す。

「レッドフレイム……あの兵装は使える……でもあの装備は使用劣化が気になる……そうだ……ザクのビームトマホークみたいに……」

キラがブツブツ考え事を纏めていると真耶の声がキラを現実に取り戻す。

『考え事は御仕舞いだ！ キラ、相手が来たぞ！』

キラは微笑みながら真耶に呼びかける。

「解った。さあ、行くよ！ 真耶！ 着いて来てね？」

『フン！ 無礼なよキラ！ 私を何時までも今までの私と思わぬことだ！』

真耶もニヒルに笑いながらそう答えた。

キラと真耶、帝国斯衛軍最強エレメントとして語り継がれる逸話した瞬間だった。

『演習開始！』

オペレーターの合図と共にキラと真耶は即座に動いた。

「真耶！ 突っ込んで！ 援護する！」

『解った！』

真耶はビームが飛び交う中を華麗な機体捌きで小太刀を相手小太刀に接近させる。

相手は慌てて、シールドで防護をするが真耶は振りぬく直前で長刀を止め、右脇にすり抜け、左マニピレーターでビームサーベルを抜刀し後ろから相手を突き刺す。

『次！』

一方のキラは真耶に照準を合わせる敵機を正確無比な射撃で沈めていく。

『つ、強い……！？ これが……斯衛軍の衛士の實力……！』

『怯むな……！ 数では此方が上だ……！ 各個撃破……！』

キラと真耶を分断し、各個撃破を計ろうと衛士達は動く。

しかし、キラも真耶もそんな事、百も承知している。

「真耶！ フォーメーションB！」

『了解！』

そう言うときらはビームサーベルを左マニピレーターで引き抜くと同時に、真耶の後方に付き、真耶は移動しながら左マニピレーターにビームライフルを握らせると先頭の1機に撃ち込む。当然、敵は避けるが、真耶が追撃し長刀を振るう。

敵機はシールドで防ぐが吹き飛ばされ、宙を舞う。何とか体制を立て直そうとするが、其処にキラの放ったビームが手足を撃ち抜く。

敵は何とか着地したが、既に接近していたキラがビームサーベルで敵の両足を切断する。

最早、演習はキラと真耶のエLEMENTによる独壇場となった。

キラ達が検討会を終え、基地に帰った時だった。

突如、警報が鳴り響く。

「!?!? これは!?!? 第1種戦闘配備!?!?」

真耶の言葉にキラも頷く。

「うん、コンディションレッドだね!! 行くよ、真耶!!」

「ああ!!」

キラ達は走り出した。

キラ達は強化装備に着替え、キラはストライクに真耶は大鳳に乗り込んだ。

『HQより各部隊指揮官に伝達！！ 現在、師団規模のベータ郡が東進を開始、仙台に向かい進行中、現在、帝国本土防衛軍が接敵、交戦を開始した。我が斯衛部隊は本土防衛軍の援護を行う。我が軍はこれより本土防衛軍を援護する……』

丁度キラ達が機体に取り込んだ時にはHQからの作戦説明が行われていた。

（今度は師団規模……今の本土防衛軍には荷が重いかな……）

キラはそう思いながら、機動シーケンスを行っていく。

起動画面には、

General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

—— Synthesis System

の文字が浮かび上がる。

『隊長、隊長の兵装は何にしますか？』

整備班長の質問にキラは少し考えてから、答える。

「大鷲ストライカーを頼む」

ソレを聞いた、整備班長がニヤリとしながら答える。

『大鷲ですね？ 了解！ オイ！ 野郎共！！ 聞いたな！！ 換装しろ！！』

班長の大声がインカム越しに聞こえてくるのを聞きながらキラは頼もしく感じる。

この大鷲ストライカーとは、アカツキのオオワシをベースにヤタノカガミを装甲に使わず通常装甲で作られているのが最大の特徴である。しかもこの大鷲、通常のストライカーパックよりも蓄電量が遙かに多い。最新バッテリーを搭載している事が解った。

キラも余り、アカツキに触っていなかった為、解らなかったが、これなら膨大な電力を消費するドラグリーンも使うことが出来るというものだ。

キラはこのバッテリーをストライクにも搭載した。

これによりPS装甲での実戦使用の目処が立った。

しかし、やはり、コストが掛かる為、専用機のための採用となった。

因みにビームサーベルはウィンドムと同じ様に両腰の部分にマウントしてある。

装備が換装し終わり、光がキラに通信する。

『隊長、発進準備が完了！ ストライク！ 発進、どうぞ！！』

キラは目を瞑りながら一息吸い込み、目を見開く。

「大和 綺羅、“ガンダム”！！ 行きます！！」

ストライクは舞い上がると同時にPS装甲を展開、メタリックグレイから白を基調とした青と赤のトリコロールに変わった。

ココに、ストライク“ガンダム”は異世界に新たな技術により復活した。

沙霧 尚哉サイド

クソ！！ 数が多い！！ ベータの攻撃が日増しに強くなっている
……

私はあの時、彩峰中将の言葉を思い出していた。

『人は国のために成すべきことを成すべきである。そして国は人のために成すべきことを成すべきである』

と言う言葉を……

その時だった、センサーが高速で近づく物体を捕らえた。

「な！？ 識別コードが友軍！？ しかし、何て速さだ！！ 不知火・改の3倍の速さだと！？」

あり得ない……何だ？ このデタラメな速度は？

計器の故障か？

その瞬間、その機体は突如として緑色の光と二つの赤い光をベータの群に撃ち込んだ。

光に飲み込まれたベータは消滅し、その周囲にいたベータは爆風に焼かれながら吹き飛ばされる。

『此方、斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊です。援護します』

その言葉と共に11機の大鳳が攻撃を開始した。

な！？ 斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊と言えば斯衛軍最強の部隊ではないか！？

斯衛軍が我々の援護に！？

上空にいる白い戦術機はレーザーを華麗な操縦技術でかわしながら攻撃をしていく。

馬鹿な！？ レーザーを避けてる！？

私はすぐさま白い上空にいる戦術機に通信を送る。

「此方、帝国本土防衛軍帝都守備第1戦術機甲連隊、沙霧 尚哉大尉であります！ 斯衛の方、援護感謝いたします」

私がそう言うのと若い男の顔が映る。

な！？ 若い！？

『此方、スレイヤー中隊、大和 綺羅です。貴官の部隊は一度後退を、立て直して再度出撃してください。その間、我が部隊が抑えます！』

な！？ 大和 綺羅！？ アレが！？

「……委細、了解した。後方をお任せします……」

『了解しました。安心して下がってください』

何だ？ この男……この様な優男が歴戦の勇士の様な気を放っているだ！？

この私が気後れした！？

これが、帝国最強の衛士……

私はそう思いながら撤退した。

キラは飛び交うレーザーを回避しながら本土防衛軍が撤退したのをチラリと見やり、自分の部隊に支持を出す。

「スレイヤー1からスレイヤーズ！ 聞いている通りです！ 一匹たりとも通すな！！」

『了解！！』

全員がそう答え、戦いは本格化する。

キラはビームライフルと高エネルギー砲を同時に構え、連射する。

緑と赤の無数の光はベータ群を性格無比に貫き焼き払う。

粗方のベータを片付けるとキラは高速機動でビームサーベルを引き抜くとベータ群に突撃する。

しかし、レーザー級の無数のレーザーがキラのストライクを襲う。

キラは回避しながらもその速度を緩める事無く、要撃級を瞬時に3体、切り殺す。

その時、突撃級数体がストライクに殺到する。

キラは突っ込んできた1体の突撃級を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた突撃級は外部装甲が粉々に碎け散り、横転しながら横にいる突撃級を巻き込みながら土煙をたて、地上を滑る。

それにビームサーベルを突き入れ、横に群がる戦車級にイーグルシユテルンを撃ち込む。

戦車級の群は75mmの劣化ウラン弾を喰らい、ミンチになっていく。

残った突撃級にビームライフルを撃ちこみ絶命させると、また空へと舞い上がる。

『相変わらずすげ〜な……ウチの隊長……ガンダムに乗ると凄さが際立つな〜』

正樹は長刀で要撃級を切り殺しながら呆れる。

『隊長が凄いのは今更だろ？　もう隊長がガンダムに乗って何をしても驚かないよ俺は』

総司はビームライフルを撃ちながらそうぼやいた。

『ま、ガンダムとウチの隊長だし……』

佑もアグニを撃ちながら呟いた。

『アハハ……その言葉だけで納得できるのがガンダムと大和大尉なんだけど……』

香奈は空笑いしながらビームサーベルで突撃級を切り裂いた。

『納得できるから私達の常識が変になりそうよ……』

優美は高速機動でビームライフルを撃ちながらぼやいた。

『あの人とガンダムが相手だと常識が陳腐になっちゃうわね』

舞はそう言いながら連装無反動砲と低反動砲を撃ちこみ部隊援護を行う。

『何か、帝国最強なんて小さい事言わず、世界最強でも通じそうな強さだな……』

功は長刀を振るいながらも呟いた。

『良いね、キャッチフレイズは世界最強の中隊ってのはどう？』

慎二は笑いながらそう言いアグニを撃ち込んだ。

『最強なのは隊長で俺達じゃ無いでしょうが』

玲人は詰まらなさそうに呟きながら低反動砲を撃ち込んだ。

しかし、このお喋りは長くは続かなかった。

『貴様等！！ 何時までお喋りしている心算だ！！ 任務に集中しろ！！』

真那は緩まった指揮を締めなおすべく怒鳴った。

『全く……隊長が戦うと戦場は啞然とするか騒ぎ立てるかのどちらかなだ……』

唯依も部隊の緩みに呆れながらもキラの戦闘に呆れていた。

ソレを見たスレイヤー中隊以外の衛士達は啞然とした。

『と、突撃級を蹴り殺した？ 何てデタラメに硬い装甲なんだ！？』

『何て速さだ！？ 目で追えない！？ 白い軌跡しか解らなかった……』

『レーザーを避ける事が出来るなんて……噂は本当だったのか……』

『アレが……帝国最強の衛士……』

『帝国の白い閃光……』

『帝国の剣……』

戦いはベータ殲滅と言う快挙で幕を下した。

帝国政府はキラとガンダムそしてスレイヤー中隊の成果を大々的に喧伝した。

そして、キラと“ガンダム”名は全世界に広まりを見せた。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 9 話 『第二次ベータ新瀉上陸』

ガンダムとキラの成果は世界中にその広がりを見せる。

その頃、横浜基地は完成し、香月　夕呼は鳳翔の提供とキラを教官として出張を要求したのだった。

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 0 話

『横浜基地』

新たなる大地に立て！　ガンダム！！

日本帝国はキラ達、スレイヤー中隊と富士導隊で得られたデータを元にダガーLこと、鳳翔とその名を改め、先行量産型の配備が着々と進めていた。

最初は帝国本土防衛軍や富士導隊から徐々に配備が進んでいった。

しかし、遅々として進まない鳳翔の配備に現場からの批判の声も上がっていた。

一応は、古くなった機体のリサイクルや不知火や武御雷の配備を取りやめての急ピッチでの生産は行っているものの、やはり、中四国、関西エリアの壊滅は日本帝国の生産能力を下げるには十分過ぎた。

『アメリカ程の生産力と工業力と資源があれば……』

この言葉はキラ達開発人や、製造者達の共通の愚痴だった。

無論、キラ達もその様な無い物強請りはしないが愚痴は自然と出てしまう。

幾ら、キラの世界のオートメーション技術やマザーマシンを使っても原材料やそれを管理する人間までは生産できない。

無い資源は買わなければならないが、帝国自体余裕が無いのと、技術流出を防ぐ為の政策が裏目に出て、オーストラリアや東南アジアからの資源輸入が難しくなった。

アフリカからの資源輸入1本にシフトを切り替えているが、各国との資源獲得競争も激化し、資源単価の価格高騰が帝国の財布を圧迫していた。

帝国として手を拱いていた訳では無いが、世界情勢が世界情勢だけに、各国は日本の技術に対価に物資の関税の撤廃や資源の格安提供を餌に交渉を迫った。

帝国の首相、榊 是親は苦肉の策として、横浜ハイヴに建設された横浜基地にいる香月博士の部隊たるA-01に提供したのである。

なぜ、国連基地に配備する事を決めたかと言えば、国連軍という特殊な軍隊にある。

国連軍は命令系統は国連軍だが、人員及び、兵装は現地国家軍のものを使用している。

ココに着眼した榊首相は香月博士が鳳翔をA-01の機体として要求していた事を思い出し、この要求を呑んだ。

何せ、オルタネイティヴ4が成功にしろ失敗にしろ人員や兵装は日本帝国の物は返却される。

無論、損失はあるが国際協力の名の下にソレは各国は目を瞑る事になっている。

其処から技術が流れるにしろ、日本帝国の技術な為、形だけは著作権的な問題やライセンス生産取得の為に日本帝国には莫大な金が舞い込む。

さらに日本帝国はキラの技術を日本帝国が開発した技術と国連と言う正式な場で発表し、裏では兎も角、表ではライセンス契約を行わなければならないとなった。

更に言えば、かの香月博士ですら解析できない技術や解析できても生産を行うマザーマシンの無い為、劣化コピーがいい所だった事からも、この要求を了承した。

もつとも、香月博士が目にしたのはベータの技術に頼らないで精製された量子コンピュータの方だった……

何れにしろ、キラと真耶の二人は横浜基地に赴く事になった。

キラは今回の“出張”が国家的な思惑がある事を理解した上で今回の任務について思いかいしていた。

(……しかし……今回の任務はあくまで国連に対する国際協力任務と位置づけているけど……城内省としては僕を香月副指令の所に行かせたくは無かっただろうな……)

横にいる真耶をチラリと見ながらキラは内心溜息を吐きながら運転する。

その端正な顔立ちは明らかに“私、不機嫌です”と言わんばかりに車の窓の景色を半ば睨めつけながら見つめていた。

眼鏡の奥の瞳は明らかに苛立ちを湛えている。

キラは運転しながら考える。

（日本の国連嫌いはアメリカが原因とは言え……あくまで国連は国家が集合して出来た組織だ……アメリカはソレを有効活用したに過ぎないんだけど……そう言う意味では外交では強かだよあの国は……逆に日本はそこら辺が下手糞だね……今回は外務大臣を経験している榊首相が旨く立ち回っただけ……そこら辺を理解していない国民や軍部は不満タラタラだろうね……新聞の社説ではあんまり評価が良くなかったから……外交圧力がどれほどキツイか理解しているのかな……？ それに安全保障を他国の武力に依存する危機感を持てなかった日本も悪い……僕の世界では真っ先に叩かれる要因だな……セイランも地球連合の武力に期待やその圧力に屈したのだけどその結果は国を焼く結果だった……）

キラが考え事をしていると、真耶が突然、語り掛けてきた。

「綺羅、今回の任務、私は些か納得がいかねる。幾ら殿下の命とは言え、国連のしかも、かの魔女のいる魔窟に行くなど……我々、斯衛軍の沽券に関わる。まして、そなたを名指しだぞ！ これは我々、帝国斯衛軍に対する挑戦状だ！！」

真耶の言葉を聞きつつキラは溜息を内心吐きながら言う。

「真耶……下された命令はその命令がよほどの間違いじゃない限り

覆らない……ソレは僕より君が良く理解してると思うけど？ 違うかい？」

キラの言葉に真耶は口を尖らせ口ごもる。

「それは……そうだが……」

キラはその仕草を微笑ましく思う。

軍人としての真耶は忠義に篤い冷徹な武人である。

ソレが自分の前だけこんな顔をするのだ。

男にとって普段見せない顔を見せてくれるのはある意味嬉しい事である。

キラは左手で真耶の頭を優しく撫でながら言う。

「ま、なる様になるよ。心配しないで真耶、僕がついてるから。ね？」

真耶は頭を撫でられて頬を赤く染めながら言う。

「綺羅……そなたは……まあよい……それと私は子供ではない！
その手を退けぬか！」

キラは苦笑しながら左手を退けながら思い出した様に言う。

「そう言えば……真耶と同じ年の従姉妹が護衛任務に就いているんだっけ？ 確か、真那さんって言うの？ 会うの楽しみだな……」

それを聞いた瞬間、真耶の顔が凍りついた。

そして……車内の温度も氷点下まで一気に下がった。

（あれ……僕、何か不味い事いった？　もしかして従姉妹同士仲が悪いか……？）

「アレの事は如何でもよい。綺羅よ……」

真耶は素敵な笑顔のままそう言った。

「いや……でも……」

尚も食い下がるキラに真耶は素敵な笑顔のまま言う。

「如何でもよい」

「……」

その無言の圧力に屈したキラは押し黙り、運転に集中する事にした。

真耶は自分の御し難い感情に思考する。

（何故、綺羅に頭を撫でられただけで私が頬を赤らめなければならぬのだ！？　大体、綺羅も綺羅だ！　私がいるのに何故、真那の名を出すのだ！！　全く！！　綺羅は私だけを見てればよいのだ！！　ソレを……）

キラと真耶は気まずい雰囲気のまま横浜基地に到着した。

横浜基地のゲートを抜けて、車を駐車場に止めると案内に従い、受付で自分達が来たことを伝え、受付は内線でそれを伝え、キラ達を待合室に通した。

キラ達に通されて1時間が経過した。

キラは静かに目を閉じ座っていたが真耶は明らかに苛立っていた。

肝心の香月副指令と司令のラダビノット司令が来ないからだ。

約束の時間は既に過ぎている。

真耶が苛立つのも無理は無い。

「遅い……客人を、それも向うから呼びつけた客人を待たせるなど……何を考えているのだ……」

キラは目を静かに見開き、真耶を嗜める。

「真耶、落ち着いて……」

キラの呼びかけに真耶が愚痴る。

「綺羅、我々は客人なのだぞ!! それを向うが此方の予定に無理やりねじ込んで来いとまで言ってきたモノを待たせるだ!!? どう言う神経をしているのだ!!? 我々として暇ではない!! 部隊の

試験訓練を篋に任せ、私達二人で来いだと！？ 殿下の命で無ければ断固拒否だ！！」

キラは出されたコーヒーを飲みながら今日、何度目か解らない溜息を吐いた。

この世界では珍しい天然物のコーヒーに内心ケチをつけながらも呟く。

「兎に角、落ち着いて、真耶。君がそれでは如何しようも無いよ……」

そう言われ押し黙る真耶。

その時だった、ノックと共に応接室の扉が開く。

「待たせたわね」

その言葉と共に入ってきたのは紫色の髪をカールを下した髪型で、白衣を着た美女が現れた。

キラと真耶はスッと立ち上がり、お辞儀をした後、名乗りを上げた。

「初めまして、香月博士、私は日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊、隊長、大和 綺羅です。そして、此方が副隊長の月詠 真耶です」

キラは香月博士に自分と真耶の紹介をすると香月博士も名乗った。

「初めまして、香月 夕呼よ、早速だけど今回の鳳翔の受領と機体

説明と訓練の日程を決めましょう」

そう言うのと3人はソファに座り打ち合わせを開始した。

キラ達が話し合いで決まった事は、鳳翔の受領は明日の0100時、細部調整と各衛士の操縦記録のインストールと細部調整開始が0230時、終了予定時刻が0500時、其処からキラと真耶の休憩を挟み、0600時よりキラによる機体説明、0800時よりA-01の衛士による機体完熟機動となった。

計画自体を早めたかと言えば、香月博士の要望が大きいのとキラ達の予定が詰まっているのが大きな要因だった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 0 話 『横浜基地』 (後書き)

横浜基地に配備される大鳳。

キラと真耶は果たしてこの任務を成功させる事が出来るのか？

次回、M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 1 話

『演習』

その存在を示せ！ ガンダム！！

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 1 話 『演習』 (前書き)

キラの言い回しがキラらしくない……

違和感バリバリだな……

このキラ……

MUV－LUV SEED Destiny 11話 『演習』

キラと真耶がOSの調整やA－01の全衛士のデータを全て調整し終わると休憩に入る為、ツナギから斯衛軍の軍服に着替えPXに来ていた。

5時を少し過ぎた辺りだが仕込みは終わり、早出の兵が食事をイソイソとしている。

夜勤と日勤の時間帯の食事が6時位と聞いたキラ達は混雑しないでよかったと思った。

キラ達はメニューを見ながら其々メニューを決めた。

「すみません」

キラの呼びかけに元気のいいオバちゃんの声が響き渡る

「はいよ」

「朝定食をお願いします」

「此方も同じものを」

真耶もキラと同じものを注文した。

「あいよ、見ない顔だね……斯衛軍の軍服と言う事は出張かい？」
オバちゃんの言葉にキラはにこやかに答える。

「ええ、新しい機体の受領と機体説明の為に」

おぼちゃんは納得したみたいに相槌をうつ。

「ああ……アンタ等かい？ 水月ちゃんが言ってた斯衛の衛士は、がんばんなよ！ コイツはサービスだ」

そういい、おぼちゃんはキラ達の小鉢を1品追加してくれた。

「有難う御座います」

「かたじけない」

キラ達は其々、礼を述べると空いてる席に座り、食事を開始した。

キラ達は食事を取りながらも今後の予定について話し合う。

「次の予定がA—01への鳳翔の説明かな……」

キラの言葉に真耶が反応する。

「ああ、今回は衛士への詳細説明と整備兵への機体説明及び、整備方法の説明も含まれる。幾ら横浜基地が優秀な人員をそろえているとは言え時間が少なすぎる。大まかな所までしか教えられない」

真耶の言葉にキラも頷く。

「うん、今回は概要や概念が主だね……矢継ぎ早の説明になるから理解できるかどうか……」

真耶もキラの言葉に肯定しながら頷く。

「ウム……後はマニュアルを参考にしてもらわなければならない……」

キラは思い出した様に懐のポケットから携帯を取り出し、データを見る。

「……今回の講義に参加する衛士は新人を入れて10人か……実戦経験は豊富、後は第四戦術機の概念の理解をいかに進めていくかが課題かな……」

真耶は箸を置き、湯呑に手を伸ばしながら言う。

「しかし、新人は兎も角、古参兵は順応しづらからう？ ソレをいかに修正していくかは綺羅、お主の腕の見せ所であろう？ 富士教導隊も仕上げたのだ。ソナタなら出来る」

キラは溜息をつきながら真耶の言葉を返す。

「幾らなんでも期間が短すぎるよ……富士教導隊は1ヶ月の研修期間があったからこそ出来た事だよ。高々1週間で出来るわけ無いよ」

真耶にしても解っていた事だが、幾ら機体性能が良くても操縦概念や操作方法がわからなければただの飾りだ。

整備にしても整備方法が解らなければ唯の鉄屑でしかない。

結局は扱う人間の質によって左右されるのが物の欠点だろう。

まして、第四世代型戦術機、キラの世界のMSはこの世界では考えられない高度な技術の塊なのだ。

整備する整備兵だけではなく衛士にも高い理論や簡単な整備は行わなければならない。

機体を知らないで乗るのと、機体を理解して乗るのとでは明らかに操縦に差が出てくる。

そう言った地味な事ほど実戦に出やすい。

これは、キラと行動を共にした真耶だからこそ再認識できた事だし、キラにしても開発者としてのキャリアを積みば積むほど再認識させられた事だった。

機体を知るとは正に基本中の基本なのだ。

その基礎というプロセスを疎かにする事は出来ない事からもキラは講義内容を、基礎を圧縮して教える心算だった。

真耶にしても訓練内容は基礎しか教えない心算だった。

兎に角、二人は限られた訓練時間でどれだけ濃密な内容に出来るかを予定が決まったその日から考えなければならぬという厳しい内容だった。

この事からも真耶がこの任務に納得できなかった理由の1つだろう。

キラ達がPXで内心頭を抱えていたのを遠目でヴァルキリーズが見ていた。

「へ……アレが斯衛軍から来た、衛士なわけ？」

速瀬 水月がキラ達を見つめながら言う。

「あんまり見ちゃ駄目だよ、水月、相手は斯衛の赤だよ？」

涼宮 遙は親友を宥めながら嗜める。

「ほう……速瀬中尉はああいった草食系が好みですか？ 相手は斯衛の赤ですよ？ 余りガツガツしないで下さい」

宗像 美冴がチャチャを入れる。

「む……かくた……!？」

宗像に飛び掛りそうな勢いで迫る速瀬。

「と、高原が言っておりました」

「へ!?! わたし!?!」

宗像に無茶ブリをされて混乱する高原 杏。
速瀬はその標的を高原に移した。

ソレを横目で見ながらもヴァルキリーズの隊長、伊隅 みちるはキラ達を見ながら考える。

（アレが大和 綺羅と月詠 真耶か、帝国斯衛軍最強のエレメントにして、帝国斯衛最強の部隊スレイヤーズを預かる二人。フム、演習が楽しみだ）

キラの講義が終わり、いよいよ実機訓練に移る時、水月がキラに質問した。

「大和大尉は演習に参加されないのですか？」

その質問にキラは答える。

「予定では月詠中尉が演習でのアグレッサーになってるから問題は無いよ」

その言葉に水月は明らかに残念そうに言う。

「そうですか、残念です……帝国最強の實力が拝めると思ったのに……」

その言葉に伊隅が慌てて水月に注意しキラに詫びをいれる。

「速瀬、貴様！！ すみません、大尉！ 部下の無礼をお許しください。速瀬、貴様も謝れ！」

それでも食い下がる水月。

「大尉も見たいと思いませんか？ “帝国最強”とやらの實力がどれ程のものか……」

「速瀬！ 貴様、まだ……」

そのやり取りを見てキラは溜息を吐きながら言う。

「いいでしょう、僕“だけ”が出ます。ただし、ヴァルキリーズ全員で挑んでください」

そのキラの言葉に全員が息を呑んだ。そして、明らかに怒りに似た不快感がキラに集中した。

水月など明らかに怒っていた。

「あら、面白い事いうじゃない？」

扉の方から女性の声が響き渡る。

「香月副指令！？」

伊隅の言葉と共にヴァルキリーズ全員が一斉に敬礼する。

キラも遅れて敬礼した。

「止めて頂戴、そんな無駄な事。それは兎も角、大和、アンタ、中々面白い事言うわね？ まさか、極東国連軍最強の部隊に喧嘩売るなんて」

夕呼の言葉にキラはシレッと云ってのける。

「別段、エレメントはいらないですよ。それに、全員の实力を理解する時間の短縮になって丁度いいです」

キラの言葉に夕呼は口元を吊り上げながら笑うように言う。

「へー面白いじゃない良いわ、許可するわ」

キラはその言葉を聞き、頭を下げながら言う。

「有難う御座います。では0800時に演習場で」

キラはそう言うのと部屋を出て行った。

キラが出て行った扉を見つめながら夕呼は思う。

（突然とはいえこれで大和の实力が知れるわね。アレだけの開発能力そしてブラックボックス化された量子コンピューターの情報、そして、自身の謎の経歴、見極めさせてもらうわ、大和 綺羅）

キラが廊下を歩いていると真耶が壁に寄りかかりキラを待っていた。

「綺羅、如何いう心算だ？」

険しい表情で質問してくる真耶。

「如何、とは？」

キラは惚けた様に聞き帰した。

「惚けるな。そなた達の会話は聞かせて貰った。そなたならあの様な安い挑発に乗る様な事はすまい？ ソレが、そなたから挑発するなど、らしく無いにも程がある」

キラは真耶の横を通り過ぎながら呟いた。

「昔の僕だったらそうだったさ、でも、今の僕は君達の上官だ。そして、帝国の最強の衛士だ……そのプライドはあるつもりだよ。それに……」

「それに……」

真耶が聞き返す。

そして、キラは静かに、だが、ハッキリとこう言った。

「意地があるんだよ……男の子には……」

キラは鳳翔のコックピット内で機動シーケンスを行っていた。

発進シーケンスを完了した時、真耶から通信が入る。

『綺羅、ストライクでなく鳳翔でよいのか？ 今ならまだ間に合う。ストライクを運搬させるが？』

キラはその言葉をスッパリと切り捨てた。

「不要だよ。同じ機体じゃないと彼女達の実力が計れないから、ソレに貴重なデータが取れるし、香月博士にも売り込みと世界に対して鳳翔の優位性が証明できるし」

その言葉に呆れながらも真耶は呟いた。

『そなた……男の意地と言いながらも抜け目が無いな……いや、まさか……アレは演技か？』

その言葉にキラはニヤリと意地の悪い笑みをその顔に湛えた。

「半分は、ね、もう半分は詰まらない男の意地さ……ソレに……」

『それに？』

真耶が聞き返すとキラはテレながら答える。

「部下の前で良い格好はしたいでしょ？　ソレが僕の右腕ともなればなおさらだよ」

真耶は呆れながらも微笑み、キラに言う。

『そうか……なら、圧倒的勝利を。私にそなたの勝利をくれ』

「仰せの通りに、我が麗しの姫」

キラは芝居がかった言い回しで真耶の注文に答える。

キラが演習場に到着するとヴァルキリーズの面々は既にスタンバイが完了していた。

其々が自分のポジションに合ったストライカーパックを装備していた。

対峙する1機と10機。

キラが改めて10機の鳳翔を見回した時、オープンチャンネルで通信が入る。

『これより、ヴァルキリーズ及び、大和大尉の戦闘訓練を開始します。ジェイブス機動を確認、演習開始30秒前』

涼宮はカウントを開始する。

キラはコックピット越しに感じるプレッシャーに懐かしさを感じていた。

（対人戦、ソレも戦闘演習……懐かしい感覚だ。ムウさん以来だな
そう言えば）

『5、4、3、2、1、演習開始』

涼宮の声と共にヴァルキリーズはキラに向かって陣形を取りながら高速で迫る。

キラはソレを見るやフットペダルを踏み込み、エールストライカーのスラスターを全開にして動き出す。

キラは操縦桿を操作し、敵の牽制射撃を回避する。

（牽制射撃は悪くない）

キラはそう考えながら低反動砲とドッペルホルンの砲撃をかわし、横に飛びのきながら後方の敵に狙いを定める。

「先ずは後方から叩く」

キラはそう呟きながらビームライフルを4連射した。

4つのビームの筋は後方の鳳翔の両手足の関節のジョイントを狂い無く撃ち抜く。

『風間機、全マニユピレーター破損、致命的損傷大破』

「次」

キラは次の標的をアグニを装備している鳳翔に絞る。

その間にもヴァルキリーズの猛攻は続くが、その悉くをかわす。

『な！？ 当たらない！？』

『速すぎるわよ！！ 何よ！？ あの時さ！！』

涼宮と速瀬が叫びながらも射撃や斬撃を繰り返すがそのことごとくを巧みにかわす。

『クッ、まさか、これ程とは』

『あ、当たらない！？ 何で！？』

『また消えた！？』

宗像、築地、高原も援護しているがかすりもしない。

その瞬間、キラの鳳翔は一気に築地、高原に詰め寄り、ビームサーベルを引き抜くと、バレルロールしながら両機のメインカメラを切断する。

しかし、キラはそれだけに留まらず、ビームサーベルを仕舞うとビームライフルを取り出し、後方に8連射した。

『築地機、高原機、致命的損傷大破』

余りの速さに築地、高原は反応できなかった。

『う、ウソ……』

『そんな……』

そんな呟きと共に唸然と砂嵐になった高解像度網膜投影機を見詰めていた。

キラは射線を得意の高速変速機動でかわし、ビームライフルを撃ち込む。

アグニを装備した鳳翔は回避するが、キラは高速機動で回避先に先回りし、両マニピレーターを交差させ、ビームサーベルを引き抜き、右足、左腕、左足、右腕と切り裂く。

『柏木機、致命的損傷大破』

空中でバランスを崩した柏木機を壁代わりにし、横に跳躍するとエールを装備した鳳翔に迫る。

鳳翔は慌てて牽制に頭部バルカンを乱射するが、キラはソレを全てかわす。

援護に入った5機、ビームや105ミリがキラの鳳翔を襲うがキラはやはりソレをかわす。

そして、エールを装備した鳳翔にビームを撃ち込みメインカメラを

破壊する。

それでも射撃を止めない鳳翔。

キラは膝を折り、体勢を低くし、左マニピレーターでビームサーベルを引き抜くと、下から上へと振り上げた。

右マニピレーターを根元から切り飛ばされる敵の鳳翔。

キラの攻撃はそれで御仕舞いでは無かった。

其処にトドメとばかりにビームライフルを3連射し、その四肢を破壊した。

『宗像機、致命的損傷大破』

キラは振り返りながら牽制射撃をする2機の鳳翔に8連射する。

『麻倉機、武井機、致命的損傷大破』

『……』

『うそ』

麻倉と武井は啞然とキラを見る。

それを知ってか知らずか、キラは鮮やかに空中高く舞い上がり、ビームやミサイルや105ミリをかわしていく。

しかし、ソレを逃がすまいと対要塞級刀を持った鳳翔が追いつがる。

接近し、対要塞級刀を振りかぶる鳳翔。

しかし、キラはソレより早く、敵の鳳翔を蹴り飛ばす。

『きゃあああ!!』

接触回線で女性特有の叫び声が聞こえてくるが、キラはそれに構わず頭上からビームの雨を降らせる。

その正確無比なビームの雨は二機の四肢を奪い去る。

『伊隅機、涼宮機、致命的損傷大破』

キラはゆっくりと鳳翔を地表に着地させる。

『ふざけんじゃないわよ!!』

オープンチャンネルで聞こえてくる女性の声。

対要塞級刀を持った鳳翔はキラの鳳翔に切りかかる。

しかし、次の瞬間、キラの行動は予想外だった。

突如、ビームライフルを上空に投げ上げたのだ。

そして、振り下ろされる対要塞級刀を両掌に挟みこんだのだ。

キラの鳳翔の頭上で止まる対要塞級刀。

『へ？』

咄然とした声がインカムから聞こえてきたが、キラはそれに構わず対要塞級刀を左側にやり、敵鳳翔を蹴り飛ばす。

『きゃあああああああ！？』

キラは投げ上げたビームライフルをキャッチするとソレを敵鳳翔に向けて4連射した。

そして、最後の敵鳳翔も四肢を撃ち抜かれ沈黙した。

演習場は静まりかえっていた。

その様子を見た夕呼は咄然とした。

（何よ……アレ……1分？ 1分でヴァルキリーズが全滅？ レベルが違うどころの騒ぎじゃないわ。次元が違いすぎる……それに真剣白刃取りなんて初めて見たわ……しかも戦術機でソレをやらかすなんて……非常識にも程があるわ）

一方、真耶はキラの操縦センスに恐怖を抱いていた。

（何て技術だ……戦術機をあんな使い方するど……想像も出来ない。それに、1機たりとも管制ユニットに当てていない……わざとだ。もし、これが管制ユニットに当てていたらこの演習、もっと早く終わっていた。キラの操縦技術は帝国、いや、世界最高峰のレベルだ。人間業じゃない。綺羅……そなたは凄いな……だが、何時か、そなたの横に並んでみせる！！）

こうして横浜基地での初演習は幕をとじたのだった。

キラ達が横浜から舞い戻った時、唯衣がキラの執務室に報告書を抱えて入室してきた。

キラ達に敬礼をした彼女は試験の報告を開始した。

その顔は喜びで満ち溢れていた。

「大尉、試験は成功です。大鳳と鳳翔の実戦配備型が完成しました！」

キラと真耶はその言葉に驚く。

「もう！？ 試験を開始して、2週間しかたっていないのに！？」

これには真耶も驚きの声を上げた。

「それは真か？ 簗！？」

嬉しそうに声を弾ませる唯衣。

「はい！ これでいよいよ量産できます。今までは先行量産機の配備でしたがすぐに回収し、実戦配備型がどんどんロールアウトしています！ やはり、技術提供の資金や鉄鉱石の格安輸入が大きいです。これで工場の建設が殿下の命により急ピッチで進められています。」

す！ 帝国全軍に配備されるのは早くても来年の1月には配備が完了します！」

キラはこの報に思わずガッツポーズをしてしまった。

「やった~~~~~!!!!」

その喜びはキラだけでは無い。真耶も喜びを露にした。

「やったな!! そなたの努力が報われたのだ。これで帝国の戦力は大幅に上がる」

その真耶の言葉を付け足すように唯衣が更にキラを喜ばせる事を言う。

「更に嬉しい報告です。実戦配備型大鳳のスペックは先行量産型大鳳の1.5倍のスペックです!! 更に、鳳翔は2倍に跳ね上がりました! 隊長の開発した新型OSを乗せた結果です!!」

キラはこれを聞き考える。

(これでスペック的には実戦配備型大鳳のスペックはグフに匹敵する。更に実戦配備型鳳翔に到ってはザクに匹敵するこれは成果だ!!)

これはキラが戦術機開発に携わってからの命題の一つをクリアした事になる。

キラは何故、コーディネーターの乗ったザクがあれ程、連合のウィンドラムを圧倒できるのかを考えた。

1つ目はコーディネーターの身体能力、2つ目は機体性能、3つ目は運用方法だ。

1つ目は言うまでも無い。

2つ目はザクと言う機体の頑丈さとMS単体でのキャパシティ。

3つ目は連合はMSとMAの二本立ての運用、ザフトはMS1本に絞った運用だ。

これはザフトという軍隊に由来する所が大きい。

地球連合は巨大で多くの資金と人を抱えた組織だ。対してザフトは国土も狭くサイズの統一性の無いMAは特殊な設備を新設しなければいけない。地力は低く人数も少ないザフトにそんな余裕が無いなら、自分達コーディネーターの能力をフルに再現できるMSこそと考え、MS1本に機動兵器を集中した運用をせざるおえなかった。それ故にザフト系MSは少数で多数を撃破することを求められた先鋭的な技術を満載したMSとなった。

同世代機でもザク、ウィンダム、ムラサメの内、頭一つ性能が飛びぬけているのはザクだった。

極端な例なら以前のキラの乗る、フリーダムがいい例だろう。

対して地球連合は全体的にナチュラルの軍隊、圧倒的な力を持つコーディネーターの脅威から国を守るにはMS技術だけでなく数で押さなければならぬ。

従来のMAではMSを倒せない。MAはそのまま消え去る筈だった。

でも、誰かが考えたのだろう。ナチュラル一人では無理でも、複数

のパイロットなら一人のコーディネーターに対抗できると。

複数のパイロットを乗せるのにはコックピットは元のMAのままでは狭すぎる。

それに、パイロットが複数になると、火器管制にも余裕が出るから武装が増えても対応出来るようになる。機体を大型化して、武装も強化した。

ソレが、連合の大型MAだ。

連合の作戦記録を見れば、初期の試作機や一部の例外を除けば、特化した能力が必要な場合はモビルアーマーに任せている。

その為、ウィンダムやダガー系は比較的、誰が乗っても同じ性能になる。

逆を言えばカタログスペック上の力しか引き出せない設計となっていた。

これでは、ベータの物量戦に押しつぶされてしまう。

何せ、連合軍のMSは大量投入とMAの連携があって始めてその優位性が発揮できる機体なのだ。

これは、資源や人員の少ない日本帝国では度台無理な相談だ。

かと言って、ザクやグフをナチュラル用に改良すると性能が落ちてしまう。

そこでキラは考える。

ナチュラルでもザク並みの機体性能を引き出せる機体に出来ないかと。

その時からキラはナチュラル専用OSとMSの開発を進めた。

その結果が、実戦投入型大鳳と実戦投入型鳳翔だった。

更にこのキラが開発したOSを載せればコックピットの改修だけでザクやグフといったザフト系のMSも機体性能を落とす事無く使用できることから欧州向けに販売を検討していた。

大鳳は操縦面での強化を鳳翔は機動性と操縦面での強化が改良点となった。

「資金回収は順調、資源の輸入も再開と先行きは良いようだね？」

キラの質問に唯衣は城内省から送られてきた資料を見ながら説明する。

「ええ、各国に技術の販売は順調です。ビーム兵器のブラックボックス化により帝国から購入しないと手に入らない代物ですから。しかも、威力は我が軍が使っている半分の威力です、つまり、ビームマシンガン1発分、ビームライフルのフルオート1発分にすら劣ります。それでも突撃級の装甲は簡単に貫通できますから評価は上々です。更に、戦術機対応の改良OSの評価が一番売りが良いですね」

キラは唯衣から資料を見ながら言う。

「ウン、やっぱり、簡単に戦術機を改良できる戦術機対応の改良O

Sの売り上げが1番多いのは予想通りだね。ビームライフルを1番多く買ったのはヤッパリ、アメリカだね……」

このことに真耶は鼻を鳴らす。

「フン、金に物を言わせての大量購入か。この資料の数からして彼奴等が採用している第三世代型戦術機、ラプターへの配備であろうな」

この言葉に唯衣も暗い顔をしながら頷く。

「ええ、やはり、第三世代型戦術機最強のラプターに新型OSとビームライフルを乗せる事で戦闘能力の強化に努めているみたいですよ」

キラも自分なりの意見を言う。

「でも、ラプター最大の売りであるステルス性は完全に潰されているよ。3・5世代型戦術機の敏捷ですらレーダーに移るから、ステルス性は脅威じゃない。問題は数だね。第四世代型の鳳翔とのキルレシオは1対20、1機の鳳翔に対し、ラプターは20機も配備しないといけない計算になる。でも、アメリカはソレを平然と出来る経済力と人員を抱える超大国だからね。経済力は何とか出来ても、人員は難しいよ」

キラ達の課題はいかにしてこのイニシアティブを崩さないようにするかが最大の課題だった。

キラ達が開発の成功に喜びの声を上げている頃、各国では改良OSと劣化ビームライフルの採用試験を行っていた。

このアメリカ、グルームレイク基地でもその試験は行われている。

「ウソだろ、オイ……蜂の巣になっちゃった……」

ユウヤ・ブリッジスは管制ユニットの中で啞然としながら呟いた。

最初は所詮、ジャップの作った兵器と馬鹿にしていた彼だったが蓋を開けてみれば、自分の考えが間違いだった事に気付かされた。

何せ、規格から外れたとは言え、対レーザー蒸散膜処理を施した再突入殻を10キロ離れた地点で撃ち込んで蜂の巣にしたのだ。

1撃1撃の威力でこれ程なのだ。フルオートしようものならと想像したユウヤは冷や汗をかいた。

（密集地帯での射撃はフレンドリーファイヤーだな）

そう思った時、CPから通信が入る。

『CPからバスター1、報告を』

「バスター1からCP、セミオートでの射撃テストを終了。続いてフルオートでの試験を開始する」

『了解、試験を継続せよ』

「了解」

ユウヤは完結的に答えフルオートでの射撃試験を開始した。

（日本製と言うのが気に食わないがとんでもない代物だって事は理解した。クソ！？ 何で日本から頼んで買わなきゃなんないんだよ！？ 製造できるだろ！？）

日本製品にケチをつけながらもユウヤは射撃テストを行っていた。

その頃、EU、欧州連合では劣化ビームライフルと新型OSの試験を終了させ、搭載を完了させた。

国連大西洋方面第1軍ドーバー基地群、グレートブリテン島の南端、英仏海峡を睨むドーバー城周辺一帯に建設された大規模基地群であり、周辺一帯に連なる複数の軍事拠点、要塞線の総称で通称、“地獄門”と呼ばれるこの基地群は正に欧州ベータ戦線の最前線である。

規模再上陸と将来的な欧州奪還を見据えた前線中継基地で最新鋭の兵器が配備されるのは自然な流れになった。

その基地群の新米衛士であるイルフリーデ・フォイルナーは戦術機管制ユニットの中で新たに配備されたビームライフルと新型OSの性能に感動にも似た震えを抑えていた。

「これが……ビームライフルと新型OSの性能……」

イルフリーデは咄然としながらも管制ユニットの中で呟く。

日本にとって劣化ビームライフルは規格外だが欧州では立派に前線を張れる。

訓練が終わり、イルフリーデが休憩室に戻ると、ヘルガローゼ・フアルケンマイヤーとルナテレジア・ヴィッツレーベンが話し込んでいた。

「お疲れ様、イルフリーデ、訓練は無事終了ね」

ルナテレジアがイルフリーデに気付き、声を掛ける。

「ええ、ルナもヘルガもお疲れ様、如何、調子は？」

イルフリーデもそう言いながら今回の訓練の出来栄を聞いた。

「ああ、順調だ。しかし、流石、『キラブランド』と言った所だ。OSを変えるだけで、我等のタイフーンがまるで別の機体に早や変わりしてしまった」

聞きなれないヘルガローゼの言葉に疑問の声を上げるイルフリーデ。

「何？ その『キラブランド』って？」

その言葉にルナテレジアが驚きの声を上げる。

「イルフリーデ、知らないの！？ キラ様が作り上げた技術の事を世界各国の衛士がそう言ってるの」

「誰？ そのキラって……？」

またもやイルフリーデが解らない固有名詞を質問した。

「ええ！？ 知らないの！？ いくらなんでもキラ様を知らないなんて！？」

驚きの声を上げるルナテレジア。

ヘルガローゼも額に手をやりながら呆れていた。

「全く……世俗に疎い私でもそれ位は知っているぞ」

ルナテレジアも付け加える様に説明する。

「キラ・ヤマト、日本帝国、斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊所属、階級は大尉。帝国最強の衛士にして、帝国最高の開発者だよ」

その言葉にピンときたのかイルフリーデが思い出したかの様に言う。

「ああ、あのガンダムの衛士か……」

ソレを聞いたルナテレジアが身を乗り出す。

「そう！！ 第4世代型戦術機の母体にして、キラ様が作り上げた技術の集大成！！ あの様な素晴らしい機体を作り上げるなんて……尊敬いたしますわ……キラ様……ガンダムのは性能は素晴らしいですわ。何せ……」

ルナテレジアの言葉に二人は呆れながら呟く。

「始まってしまったか……ルナの戦術機談議……」

ヘルガローゼの囁きに溜息を吐きながら答えるイルフリーデ。

「こうなると長いわよ……昼休みがこの話題でつぶれるのは覚悟しときましょ。相変わらずね……流石、『戦術機を婿にする女』の異名は伊達じゃないわ」

そう思いながらもイルフリーデは思った。

（キラ・ヤマト……か……何者なんだろ……）

その頃、横浜基地では、キラとの演習の検討を行っていた。

映像を見ながら始めて理解した。自分達とキラとの実力の差と言う物を。

暫く、映像を見た時、水月はある事に気が付いた。

キラが真剣白刃取りをした時、キラのコックピットに設置されたカメラの映像でキラの瞳のハイライトが消えているようだ……

（何かしら？ コイツの瞳？ さっきまでの雰囲気とはまるで違う……アイツは一体何なのよ！？）

水月の心の疑問は誰にも答える事は出来なかった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 1 3 話 『運命の歯車が動き出す』

ストーリーの展開上、話が制限されてしまう為、ストーリーを変えました。

すみません。

キラ・ヤマトと白銀 武。

本来、会う事の無かった違う世界の人物、この二人が出会う時、物語の齒車がその速度を上げながら動き出した。

キラが白銀 武と出会ったのは些細な偶然だった。

2001年、10月22日の事だった。

キラは、資料を横浜基地に持っていく為、一人で車を運転しながら旧市内の道を走っていた。

旧住宅街を走行していたその時だった、キラの視界に国連の訓練生の軍服を着た少年が目に残ったのは。

キラは不思議に思いながらも車を少年に沿わす様に停車させパワーウィンドーを開き、少年に声を掛けた。

「君、こんな所で何したの？」

その言葉に少年はビクツリとしながらも疑いの目でキラを見ながら答えた。

「……横浜基地に行こうかと……」

その言葉にキラは考える。

（横浜基地？ 訓練兵かな？ 軍服から見てそうなんだろうけど……何か、違和感があるな、この子。何か隠し事してるのは確かだけど……）

少年もキラの登場に戸惑う。

（こんな奴、“前回”じゃいなかったぞ！？ 一体、コイツは！？ それに着ている軍服は斯衛軍の軍服……一体誰だ？ こんな奴の記憶は全然無い）

キラは確かめる為に少年に声を掛ける。

「僕も横浜基地に用があるけど如何？ 乗っていかない？」

キラはそう言い助手席のドアを開けた。

少年はキラを不審者でも見る様な目をして見ながら答える。

「……解りました……お願いします」

（解らないなら確かめる！ ソレしか方法は無いんだ！）

武もキラの正体を知る為に虎穴に飛び込む覚悟をした。

キラが運転しながら会話をする。

「僕の名前は大和 綺羅、君は？」

武は名乗られたからには名乗らなければならないと言う心境で答える。

「白銀……武です。白い銀に武と書いて」

「強そうな名前だね。君、訓練兵だよな？ 何処か出かけていたの？」

キラの言葉に武は曖昧な返事で答える。

「……ええ、まあ」

キラは突如、急ブレーキをかける。

武は、前のめりになりながらシートベルトのロックで体を固定されダッシュボードとキスするのは避けられた。

その瞬間、キラは目にも留まらぬ早業で日本帝国軍が正式採用しているシグザウアー P220を引き抜き武に突きつけた。

シグザウアー P220を突きつけながらキラは武に語りかける。

「君は一体何者だい？ 訓練兵は見てきたけど君を見た事が無いよ。それに、不振な点は幾つもある。最初に不振に感じたのはその綺麗な軍服。明らかにポリエステルの精錬技術が綺麗だ。訓練兵の軍服はもう少し縫い目が荒い。訓練兵にかける服で其処まで拘るほど日本の財政は裕福じゃないから。それと、一番、怪しいと感じたのはその言葉遣い。幾ら訓練兵でも斯衛軍の衛士にその態度は日本帝国

国民ではあり得ない」

勿論、キラの言葉はブラフと推測を織り交ぜた物だが確証があったからこそこの様な行動を取ったのだ。

前のめりのまま目線だけはキラから放さない様にしている武。

キラの隙を窺っているが隙が全然無い。

（クソ、隙が全然ない！！ 何者だ！？ コイツ！？）

尚もキラは武に語りかける。

「まさか、アメリカのスパイと言う訳では無さそうだし……少しは訓練を受けている様だけど余りにもお粗末だよ」

キラの言葉に武も返す。

「そう言うアンタはマジで一体何者だ？ 横浜基地に何の用だよ」

その言葉にキラは確信が持てた。

「君は僕の事を知らないみたいだね。少なくとも日本帝国では結構、名前と顔は知られているんだけどな」

帝国政府がプロパガンダの為にカバーストーリーのキラの経歴と顔は出している。

つまり、帝国はもとより世界中でキラの顔と偽の経歴は結構出回っていた。

ソレを知らないのは不自然だ。

そう考えたキラはこの少年が怪しいのと、ある突拍子も無い事を考えていた。

（もしかしたらこの子は僕と同じ違う世界から来たんじゃないだろうか）

と。

そう言う考えに至ったのは武の言葉だった。

『そう言うアンタは“マジ”で一体何者だ？ 横浜基地に何の用だよ』

この世界で“マジ”という単語は使わない。

使われだしたのはキラの世界の西暦の頃の話だ。

少なくともこの世界の西暦世代の人間でない事は推測できた。

その推測を確かにする為にキラは武に語りかける。

「持ち物を見せて貰うよ」

そう言う武の持っていた持ち物の確認をする。

武は渋々と自分の持ち物を取り出していく。

最初にキラが目を引いたのは携帯電話だった。

この世界に携帯電話は無い。

あるにはあるが、軍が使う様な頑丈で少し重いわ、機能は余り充実してない。しかし、武の持っている携帯は明らかに薄型で軽く、画像も綺麗だ。それでもキラの世界の携帯に比べて旧式なのは否めない。

キラが確信を持てたのはゲーム機だった。

正確にはゲーム機の製造年月日だが。

「なるほど……この世界には無い技術だね……それにこのゲーム機……製造年月日が2001年となっている……君は違う世界の住人かな？ 何せこの世界ではこんな物、無いからね」

その言葉に解るくらいにビクリッと反応する武を見ながらキラは銃口を逸らし、懷に仕舞う。

不振に思いながらも戸惑う武。

「あ、アンタは……一体……何者だ？」

キラは微笑みながらも答える。

「ご覧の通りの軍人だよ」

その瞬間、キラに一瞬の隙が生まれる。

ソレをチャンスと捉えた武はキラの顔面目掛けて殴りかかった。

しかし、キラは目線を逸らしたままその拳を左手で受け止める。

「いい、拳を放つね。でも、ソレが作られた隙かそうでないかを見分ける術を見につけないと」

そう言いながらキラは左手の力を強める。

「グッ!？」

痛みで歯を食い縛りながらも振り解こうとする武。

しかし、キラの力は緩まる所か強まるばかりだ。

ミシミシという音だけが不気味に車内に響き渡る。

キラが左手の力を緩めると慌てて武は右手を引っ込めた。

「ッア……」

右手を左手で覆いながらも目線だけは外さない武。

一方のキラは涼しい顔をしながら正面を向いていた。

「とりあえず、落ち着こうか。コーヒーがある。君も飲む？」

キラは助手席を隔てるボードから魔法瓶の水筒と紙のカップを取り出しながら言う。

「……いただきます……」

キラの提案に毒気を抜かれてしまった武はそう言いながら背凭れにその身を預けたのだった。

お互い無言でコーヒーを啜る武とキラ。

「どうだい？　僕がブレンドしたコーヒーの味は？　それでも自信はある積もりだよ。コロンビア4割、ブラジルが3割、モカが2割、ロブスタが1割の構成。まあ、ポピュラーな配合かな」

キラは鼻を擽る香りを楽しみながら口に広がるコーヒーの苦味と酸味を楽しんでいた。

一方の武はコーヒーなんかの知識が無い人間である。

詳しい豆のブレンドを言われてもチンプンカンプンである。

だが、これが本物の豆から抽出されたコーヒーだと言う事は理解できた。

武とて今の日本の状況を解っている。

こんな贅沢な飲み物を販売できる程の店は日本には珍しい。

だが状況は、久しぶりに飲む本物のコーヒーを楽しむ心境にはなれない。

益々、コーヒーを美味しそうに飲むキラに困惑するばかりだ。

「コーヒー……詳しいんですね」

武の言葉にキラは苦笑しながら答える。

「うん、コーヒーに五月蠅い人がいてね。その人の影響かな」

何か懐かしむ様な顔をしながらコーヒーを啜るキラ。

「その人の直伝ですか？」

武の質問にキラは懐かしさと少しの寂しさを湛えた顔をしながら静かに答えた。

「うん、まあね……」

キラはコーヒーを飲みながら武に質問する。

「君はどんな人生を歩んできたんだい？」

その言葉に武は言葉を吐き出した。

平和な世界の事、ある日、目が覚めて家を出ると世界が一変していた事、横浜基地で香月 夕呼と出会い、この世界の現状をしり、取り乱した事、学校の友達が訓練生として現れ、自分を知らなかった事、そして、オルタネイティヴ5発動とその後の混乱。

キラはその話を聞きながらも武の目を見ながら思う。

（この子は、昔の僕と似ている……あの頃の僕もこんな感じだったのだろうか？）

キラは武を見ながら懐かしくも苛立つ感覚を隠しながら車を横浜基地へ向けて進ませた。

キラ達が横浜基地に到着しゲートを潜り、キラと武は夕呼の執務室へとやってくる。

自動ドアのロックが開かれ、扉を潜るとキラ達は夕呼の部屋へと入る。

「あら、何時ものお供はいないの？ ソレにソイツ誰？」

夕呼の疑問にキラは答える。

「お供が真耶を指しているなら今日は一人で来ました。ソレと、この子はまあ、貴女の客人です。何でも貴女に用があるとか」

キラはそうにこやかに答えながら武の背中を押す。

武はオズオズと夕呼の前に歩みを進める。

そんな武に夕呼は不信感と不快感を露にした。

隠そうとしない所が、彼女の美德だろうか。

「で、アンタ誰？ 訓練生に知り合いはいないんだけど？」

夕呼の言葉に武は内心、ヤッパリと言う感情を抱きながらも話をす

る。

「初めまして」、夕呼先生。お元気ですか？」

その言葉に夕呼はポーカーフェイスで切り捨てる。

「悪いけど、アンタみたいな生徒を持った覚えは無いわね？」

その言葉に武は二の矢を放つ。

「研究は順調ですか？ 確か、“掌サイズの半導体150億個分の量子コンピューター”の製作は順調でしたか？」

その言葉に夕呼の眉根がピクリツと動いた。

その仕草をキラは見逃さない。

（掌サイズの半導体150億個分の量子コンピューター？ ソレでか、香月博士が量子コンピューターの情報を引き出そうとしていたのは。でも、あの様子や僕がハッキングした限りじゃあ、成功はしていない。つまり、まだ、出来ていないという事か）

キラはこのやり取りを見ながら思考する。

尚も武の言葉の矢がふる。

「お空では逃げ出す為に船は製作中ですよ」

その言葉に夕呼はいよいよ苛立ちを露にした。

「で、アンタは何が言いたいの、そしてアンタの目的は？」

引き出しから国連軍正式採用しているH&K USPを取り出し、構える。

しかし、女性が護身用に持つには大きい銃で銃口は少しぶれている。770グラムを片手で保持したままの射撃はハッキリ言って余り当たらない。

距離的にざっと5メートル、訓練を受けた兵士ならまだしも文官しかも、目線から推測して照準は頭、素人が一番狙う位置だが普通は当たりやすい上半身から当てて動きを止めてから相手を制圧するのが常だ。

防弾装備をしている人間ならまだしも、武は明らかに防弾装備をつけていない。頭を狙うのは不適切だ。

更に使われている弾は多分、9mmパラベラムのノーズラウンド、一般に軍が使われている弾で室内での使用には適さない。弾道が硬く丸い為、跳弾の危険性が大きい。

室内ではホローポイント弾が基本のはず。

キラはこの事からも脅しである事は明らかだと推測した。

キラがこう、推測できたのも紅蓮との訓練を積んでいたからこそ推

測できた事だ。

元々、斯衛軍は將軍家の護衛を主に行う軍隊だ。

この手の対人戦闘の知識も紅蓮から叩き込まれた。

（あの人の場合、訓練と言う名の拷問だけど）

キラは紅蓮の苦行を思い出しながら内心溜息を吐いた。

キラの思考を余所に武と夕呼の話は続く。

「ある意味、アンタと私の利害は一致している。ということかしら」

その言葉と共に銃を下す夕呼。

武は何を早合点したか夕呼が信じたと過程して話をしている。

「それじゃあ、先生!!」

武を見ながらキラは思う。

（旨く絡められたな……武は多分信じてくれたと勘違いしているが、香月博士は多分、武を利用する気だ。何らかの餌をばら撒いて武を餌付けした後、情報を小出しにして自分の有利に進める気か。えげつない。まあ、彼女の立場からすれば時間も無い。武の話が確かならクリスマスがタイムリミット。僕の持っているデータが流出するのもその期間だな。これは何としても香月博士には成功してもらわなければならない。G弾なんてふざけた物使わせる訳にも行かない）

武が退出を命じられると部屋に残ったのはキラと夕呼だけとなった。

「で、何でアンタはアイツを連れて来たの？ まさか、アンタほどの男が気まぐれとか言い出す訳無いわよね？ 多分、白銀の話も聞いているはずだから退出はさせなかったけど」

夕呼の言葉を聞きながらキラは静かに言う。

「ええ、勿論、武の話が本当の事実と仮定するなら貴女と僕の間はクリスマスまでですから」

キラの言葉に夕呼も頷く。

「ええ、そうね。私が何の成果も出せなければ即、オルタネイティヴ5が発動される。そして、アメリカはオルタネイティヴ権限の名の下にアンタの技術を接収する可能性が高いわね」

キラも頷く。

「ええ、間違いなくアメリカは僕の技術を接収して自軍の強化をするでしょう。帝国もワッセナー協定を持ち出しますが、ごり押しで接収される事は明白ですから」

東側陣営への物資や技術の流出を抑制するため、1949年に西側陣営で発足したココム（対共産圏輸出統制）が冷戦終結により実効が無くなった事により、より現状に見合った物に調整し直した協定で、オランダのワッセナー市で行われた協議で結成が合意されたため、この名が付いた。事務局はオーストリアのウィーン。

旧ココム参加国と新たにソ連などの東側国で構成され、目的は『地域の安定を損なう恐れのある、通常兵器の過度な移転と備蓄の防止』

であり、協定参加国は、通常兵器はもとより兵器製造の原料となる材料や工作機械、各種電子機器（センサーやコンピュータ機器、暗号装置、航法装置、推進装置など兵器製造に必須な物）の自国からの輸出状態を管理規制し、定期的に参加国間で情報交換を行う。

解りやすく言うなら「自国の製品が他国で迷惑かけないように、ちゃんと面倒見とけ」協定。

と言う協定をキラは持ち出し、兵器輸出を制限していた帝国ではあったがベータ侵略があつてからはこの協定は形骸化したものだった。

キラの世界ではこの協定は西暦1996年に発足したが、この世界では1950年に発足していた。

何れにせよそんな人間同士の条約や協定なんかベータには関係無い。

ベータが人間の意を汲んでくれるなら地球は安泰だ。

何れにせよキラも夕呼も白銀 武の出現と自分達の置かれた状況を考えて行動しなければならなくなった。

「何れにせよ、僕が言いたいのは、帝国は出し惜しんでいる余裕が無くなった訳です。無論、僕も。そこで、香月博士が欲しがっていた量子コンピューターを無償提供します」

そのキラの提案に夕呼はニヤリとしながら言う。

「その代わり、アンタは何を望むの？ 私を提供するものは？」

夕呼の言葉にキラは答える。

「佐渡島攻略の為の全国連軍衛士の5割の提供」

それでもこれは無茶な注文だろう。

何せ全国連軍の半分を投入しろと言っているのだ。アジアエリアだけじゃない、中東エリアやソ連エリアの国連軍も持って来いと言うのだ。

この無茶な要求に眉根を顰める夕呼。

「アンタ、自分がどれだけ無茶を言っているか理解できて？ 高が量子コンピューターの為に全体の5割を動かすなんて出来るわけ無いでしょう？ 考えて要求しなさいよ」

無論、却下される事は理解していたキラだがココで食い下がる訳にも行かない。

「別に無茶でも無理でも無いでしょう？ 貴女のオルタネイティヴ権限と僕の開発技術を餌にして旨く絡めれば出来ない事も無い。僕も貴女も形振り構ってられない以上、使えるものは使う。そうでしょう？」

その言葉に夕呼は呆れながら言う。

「アンタ、事がバレたら、帝国から消されるわよ」

キラは何事も無いように言う。

「まあ、帝国には僕が国連のコンピューターをハッキングして情報

を手に入れた事にします。その間、香月博士、貴女は僕の提供した量子コンピュータを使って何とか成果を出してください」

夕呼は溜息を吐きながら答える。

「全く、白銀が現れてから忙しさが倍増したわ。まあ、いいわ、出来ない事でもないし、交渉は成立と言う事ね？」

「ええ」

キラと夕呼は握手をした後、キラは夕呼の執務室から退出した。

ソレを見送りながら夕呼は手元の端末を操作した。

その直後、銀色の髪をサイドポニーにし、青い瞳をした少女が隣の部屋から出てきた。

「如何、あの二人の思考は読めた？」

夕呼の言葉に少女は静かに答える。

「白銀さんの方は読めました。唯、大和さんの方はまるで読めませんでした。何か強い力が阻んでいる様な感じです……」

その言葉を聞きながら夕呼は呟く。

「肝心の方が読めなかったか。まあ、いいわ、社、お疲れ様」

その言葉を聞き、社と呼ばれた少女は一礼すると元の部屋へと戻っていった。

夕呼は社の言葉を思い返しながら考える。

（『何か強い力が阻んでいる様な感じですか、社のリーディングですら読めないその思考、本ッ当に厄介なヤツだわ……アイツは今の所、利用価値もあるし、目的も今の所は合致している。何が目的なのかしら？　そして何者なの？』）

そう思いながらキラのお土産である魔法瓶の水筒に入っているコーヒーを飲みながら夕呼は呟く。

「珈琲の入れ方が旨いのは確かね……」

と。

キラはこれまで集めた情報と改竄した情報を織り交ぜた資料を纏め上げ、悠陽、斑鳩、紅蓮、真耶だけを急遽、召集した。

キラの召集に何事かといぶかしみながらも、キラの声音が明らかに慌てていた事からも4人は尋常でない事態が起こっている。または進行しつつある。と言う事は理解できた。

悠陽、斑鳩、紅蓮、真耶の4人は円卓を囲みながらキラの到着を待っていた。

「綺羅め、あ奴が自分から召集を呼びかけておいて遅刻とは、あ奴らしくないのう」

紅蓮の言葉に真耶は頷きながらも疑問を口にする。

「ええ、ソレに、あの様な綺羅の声音は初めて聞きました。一体、何を綺羅は調べていたのでしょうか？」

斑鳩は目を瞑りながらも1週間前のキラを思い返す。

（あの尋常じゃ無い顔、そして、鬼気迫る勢いでパソコンに向かう姿。正直、怖いくらいだ。今でも思い出す。あの、瞳孔の光を宿さぬ目、そして、私すら一瞬で震え上がらせる程の静かで重々しい気迫。大和が本気になる程、事態は切迫しているのか？）

「何れにせよ、全ては綺羅が来てからです」

悠陽の言葉で斑鳩の思考は中断されたが、悠陽の言葉の通りなのでココは無心でキラを待つ事にした。

その時だった、室内にノックの音が響き渡る。

「入るがよい」

悠陽の許可と共に扉が静かに開かれる。

斯衛軍の軍服と軍帽を身に纏い、鞆を左手に持った、キラが現れる。

鞆を床に置き、軍帽を脱帽するとソレを左脇に抱え、軍靴を鳴らしながら直立不動の姿勢を取ると敬礼をした。

その瞬間、斑鳩、紅蓮、真耶も立ち上がり、敬礼した。

キラは軍帽を右脇に抱え直し、左手で再度、鞆を持ち上げると円卓の空いている席に座る。

「これで全員が揃ったな、綺羅よそなたの召集により集合した訳だが、してその内容は？」

悠陽の質問に、キラは鞆から資料とUSBメモリーを取り出し、資料を隣にいる真耶と紅蓮に渡した。

紅蓮と真耶はそれぞれ隣にいる斑鳩と悠陽に渡した。

そして、キラは手元のパソコンにUSBメモリーを差し込み、データを開く。

そして、説明していく。日本帝国が今、置かれている状況とオルタネイティヴ4の期間とオルタネイティヴ5発動時期、そして、G弾運用に置けるアメリカの極秘資料とG弾運用が齎すであろう影響を。

キラの説明を聞く内にキラ以外の顔色が見る見る悪くなる。

真耶など怒りと恐怖が入り混じった顔になっている。

「これは真か、綺羅よ？」

紅蓮の言葉にキラは静かに答えた。

「ええ、今、提示した国連のオルタネイティヴ計画のタイムスケジュールはご覧の通りです。これはあくまで国連上層部が決定する事柄ですから前後するかと、G弾大量運用による弊害は正に絶望的です。これは、アメリカ国防総省が纏めた結果であり、若干の楽観的な予測も含まれてはいますが、やはり、電磁場や衛星への被害、地球全土への異常気象は避けられないものとなります。加えて、この世界での殆どが衛星からのデータリンクに頼った戦術、戦略の構成が主ですから、軍団としての機能は麻痺状態に陥るかと」

C・E.の世界では第二次ヤキンドゥーエの戦いでザフトにより地球軍の管理する軍用衛星は破壊され、拳句の果てにNジャマーを地表に撃ち込まれ、地球上の通信はズタズタにされてしまった。

元々は、電波通信を使っていた。

電波通信は波長が長いから空中を自由に伝わる事ができるし天候状態に左右されない為、C・E・でもこの世界と同じ電波通信を使っていた。

しかし、ニュートロンジャマーのせいで波が打ち消されてしまう為、長距離通信では使えなくなってしまうた。

代替手段としてレーザー通信が注目された。レーザー通信は電波と逆に波長が短い為、Nジャマーにも打ち消されないですんだ。だが、これにも欠点はある。大気中の水蒸気や他の粒子に跳ね返ってしまう性質がある為、霧の濃い日や大雨の日は通信が途切れる事がある。

そして、最後に、量子通信である。電波通信とレーザー通信は電気や光の波の性質を利用するが、量子通信はそれとは違い電子や光などの粒子の性質を利用する技術である。

絶対に解読不可能な暗号通信ができ、しかも超高速、大容量通信技術ではあるが、何故、軍関係や政府一部機関でしか見かけないかといえ、お金がものすごく、途轍もなく、圧倒的に掛かる事だろう。量子通信装置は物凄く高価だ。消費電力も物凄い。一般の通信装置とは規格が全く違う。其れゆえに、使う場合は既存の通信装置も一緒に用意する必要がある。コストを考えたら採用を見送るのは明白だろう。

基地用でも高いのにMSに搭載できるサイズのものになると、通常規格の通信機も載せないといけないわ、死ぬほど電気を喰うわと、とんでもない事になる。

因みに、キラの乗るストライクフリーダムのドラグーンもこの量子通信で誘導している。

兎に角、連合、ザフト、オーブなどでは偵察用MSか余程の一品物

にしか搭載しない様な代物なのだ。

ハッキリいって、この世界で量子通信を実現した国家は日本帝国、唯一国というのが現状である。

アメリカですら実験の域を出ない代物が今の日本帝国では実用可能な技術なのだ。

この事からもキラは日本帝国のデータリンクや通信技術を量子通信に切り替える様、提案した。

しかし、途轍もない金額になる為、悠陽や斑鳩は勿論、渋い顔をする。

当然だ、予算と工業能力と人員に余裕のあるアメリカですら難しい提案なのだ。

今の日本帝国では最早不可能事に近い。

これも、キラは解りきっていた事だった為、第二の案を提出した。

つまり、量子通信能力のある偵察型ストライカーパックの作成と、戦艦に搭載可能なレーザー核融合路の作成及び、量子通信可能艦の改造と言う物だった。

更に、マストライバーの建設もココに盛り込み、G弾に破壊されるであろう、衛星の打ち上げに使う。

これなら、少し無理をすれば帝国でも何とかできる為、これは採用された。

あくまで、キラの提案は二次的対策、詰まる所、夕呼が失敗、オルタネイティヴ5発動を想定した案である。

一次対策としては夕呼に量子コンピュータの提供と00ユニット完成と同時に佐渡島制圧、横浜基地に殺到する事が予測されるベータ群の迎撃と西日本エリアの奪還が盛り込まれた。

二段構えで帝国は備える事にしたのだ。

金は掛かるが国家は元より地球自体が終わるかも知れないのだ。

日本帝国は白銀 武の出現により、金が如何とか言ってられない状況に追い込まれた。

たった一人の出現が国にこれ程、大掛かりな決断をさせた事にキラは正に眩暈を感じていた。

会議が終わり、自分の、つまり大和家の家に久しぶりに帰る事にしたキラ。

と、言っても悠陽がカバーストーリーの為に与えた小さな武家屋敷な為、自宅という実感が湧かない。

出迎える人もいない。家族もいない。隣人も知らない人。

キラにはココが自分の家と言う実感が湧かなかった。

その為か、キラはこの小さな武家屋敷に余り近づかない。

むしろ、帝国斯衛軍第一師団の基地のキラの士官室がキラの家と感じているくらいだ。

悠陽から休暇を1週間貰ったはいいがやる事が無い為、自宅に帰ってきた。

久しぶりに自宅に帰ったキラは、車を駐車場に止め、車のドアの鍵を閉めると、小さな武家屋敷の門の鍵を開け、玄関まで歩き、玄関を抜けると、自室にて軍服を脱ぎ、着物に着替え、総檜の浴槽にお湯を張る。

（こんな時位かな？ この家に帰ってきて良かったと思えるのは）

考えていると虚しくなる事を思いながらもキラは湯船がお湯で満たされるのを待つ。

湯船に湯が溜まるとキラはソレに浸かり、鼻歌を飛ばしながら少し長めに浸かるのだった。

キラが入浴を楽しんだ後、着物に着替え、乾いた喉を潤す為に台所に行くと、人の気配がした。

キラは慎重に襖を静かに開けると其処には、

其処には着物を着替え、割烹着を身に着けた真耶が料理をしていた。

「……何してるの？ 真耶？」

キラは取り合えず思った事を口にした。

「綺羅か？ 待っておれ、もうすぐ出来上がる」

真耶の言葉にキラは取り合えず突っ込みを入れる。

「いや、あのね、何で、真耶は僕の家で料理なんか作っているのかなど」

真耶は御玉で味噌汁を少量すくい、小さな小皿にソレを移し、味見をした。

「ウム、我ながらよい出来だ。それはな、私も丁度休みがそなたと重なったのだ。それで一年前に約束した事を果たそうと思ってな」

真耶の返答にキラは記憶を掘り起こしていく。

「一年前……ああ、あの時、真耶が料理できるか如何かが話題になってソレを何時か証明してみせるとか何とか言ってたっけ？」

キラがそう言うとき真耶は微笑みながら答える。

「そういう事だ。さあ、料理が完成した。盛り付けるからそなたは座って待っておれ」

真耶の言葉にキラは自分も手伝うと進言する。

「手伝うよ。皿の位置とか解らないでしょ？」

そう言うとき真耶はキラに再度座って待っている様言う。

「いいから、綺羅は座って待っていればよい。私が手料理を振舞うと言ったのだ」

そう言われ、綺羅はオズオズと座布団に座り待つ事にした。

料理の内容はご飯、肉じゃが、鯖の味噌煮、豆腐の味噌汁と言う内容だった。

キラと真耶は向かい合う様に食卓を囲みながら食事を取る。

「美味しい……」

キラの端の速度が徐々に早くなっているのを見て、真耶はにこやかに言う。

「まあ、合成食品ゆえ味は落ちるが、其処まで喜んで貰えて幸いだ」
真耶も味噌汁に口をつける。

お互い他愛の無い話をしながら真耶の作った料理を食べる。

キラ達が夕食を済ませ、お互い茶を啜っているとキラはチラリと時計を見る。

「送るよ。もう8時だ。着替えてくるね」

そう言うときらは立ち上がり居間を出ようとする。

「ソレは不要だぞ綺羅」

「如何して？ 夜の一人歩きは危険だよ？」

キラがそう言うときら真耶はシレッと言う。

「安心しろ、そなたの所に泊まるから」

この言葉にキラは固まってしまった。

「へ」

「だから、その、何だ、そなたが迷惑でなければの話だが」

頬を赤らめながらしおらしく言う真耶。

キラは反射的に言葉を紡いだ。

「迷惑だなんてそんな！？」

「なら……泊めてはくれぬか？ 綺羅……」

キラは持ち前の押しの弱さに押されて真耶を泊める事にした。

早い話がキラが真耶の仕草にときめいたとか、キラが真耶の着物から覗くうなじに見とれたとか、着物を着た女性特有の色香に中てられた訳である。

キラは真耶を客間に案内して自分は自室に滑り込んだのだった。

キラは障子から射し込む柔らかな朝日と雀の鳴き声で目を覚ました。

「フア~~~~、良く寝た。こんなにゆっくり寝たのは何時くらいだろう？」

キラは欠伸をしながら上半身を起こし、背筋を伸ばした。

C・E：世界ではベッドで寝るのが当たり前だったキラにとって、畳に布団を敷いて寝ると言う経験が無い為、最初は寝苦しかったが、慣れればこれはこれでいい物だと感じるようになった。蘭草の香りも中々どうしていい物だと感じれるようになった。

キラは両手を敷布団の上に置いた筈だった。

しかし、左掌が何やら柔らかいモノの上に置いている感触がする。

（何だろ、この柔らかい感触？ 以前に知ってる様な……）

キラがそんな事、考えていると突然、女性の甘い声が聞こえた。

「あっあん……」

「は？」

キラが間拔けな声を出しながら左下を見ると其処には、

真耶が寝ていた。

しかもキラは真耶の胸の上に思いっきり左手を置いていた。

「キラ、そなた、朝から中々顔に似合わず大胆だな？」

「ふえ？」

またもや間拔けな声を出すキラ。

それに構わず真耶は微笑みながらもキラに言い放つ。

「私としては嬉しいのだが、そろそろ退けてはくれまいか？ 少し、重い」

ソレを聞いた瞬間、キラは大慌てで飛び起きる。

「な、な、な、な、な、な、何で真耶が！？」

大慌てで混乱中のキラを余所に上半身をゆっくりと起こしながら真耶は前髪を掻き上げる。

「何を慌てておるのだ？ 別段、慌てる事でもあるまい？」

「あるから！！ 大有りだから！！ 一体、何やってるの！？ 真耶！？」

真耶の言葉にキラは大慌てでありながらも突っ込むキラに、真耶は尚も言い放つ。

「何と言われても、添い寝だが？」

「いや、いや、いや、いや、可笑しいから！！ 明らかに可笑しいからソレ！！ てか、添い寝って何！？ 何で添い寝！？ そもそも、何で真耶が僕の部屋に！？」

キラの疑問に真耶は頬を赤らめながらモジモジと答える。

「昨日は、その、何だ、10月の終わりにしては寒かったであろう？ それ故な、人肌が恋しく、もとい、その、そなたに毛布を借りようと部屋を訪れたのだが、そなたが熟睡中でな、これは丁度良いや、仕方ないと諦め、そなたの温もりで暖をとろうとしたに過ぎぬ。他意は無い」

所々、何か本音が混じっている様な気がするが、キラは右手で顔を覆いながらも、唸るように言う。

「何でさ？ 何で人の体温で暖をとるの？ ソレに何か訳解らないよそれ……ソレに気配を消して部屋に入らないでよ。更に気配を消して布団に忍び込まないでよ……」

キラとして紅蓮の訓練で例え寝ていても気配で人が来たことを察知する訓練は受けている。

ある意味、特殊部隊も真っ青な訓練内容を潜り抜けて来た訳だが、敵意の無い気配を消した状態で近づかれた挙句、殺気も無く布団に

潜りこまれてはキラとて対処のしようがない。

兎に角、キラは真耶を自室から追い出すと着替える事にした。

キラと真耶が休日を満喫していた頃、帝国各部署の長達は緊急招集され、キラが集めた情報を多角的に検証する事が進められた。

キラから齎された情報やその情報の信頼性が検討された。

検討資料は内閣情報調査室、帝国情報省、国防省情報本部、外務省国際情報統括官組織、のトップが一同に会し、キラの資料と自分達が集めた資料を検討した結果、キラの提出した資料は90%以上の確立でオルタネイティブ5が12月25日に始動する可能性を示唆していた。

これに慌てた、榊首相は大急ぎで各情報部にこれまで以上の情報収集を内密で行う事を命令した。

また、榊首相は大蔵省、農林水産省、労働省、経済産業省、運輸省、建設省、自治省の大臣を全員呼び寄せ、会談を行い、キラのプランが実現可能かどうかの検討を多角的に進めた。

極秘で非公式、非公開会談であった為、各省庁は資料集めに奔走する事になった。

だが、キラの纏め上げた各省庁のデータのお陰でサクサク会談は進み、年内の配備は不可能であると言う結論に至った。

何時、『バビロン作戦』が発動されるか解らないという恐怖、何時、G弾総攻撃による異常気象がおこり、何が起るのか予測ができないと言う恐怖が今の日本帝国を動かす事となった。

各省庁も予算が如何とか、隣の省庁が如何とか言ってられない状況である事を認識させられてしまったのだ。

日本帝国の外面は平然とはしていても内部は台風のような状況だった。

これを察知した各国は、日本の奇妙な行動に一体何事かと思いつながらも様子を窺う事にした。

今、日本帝国は色々な意味で注目されていた。

アメリカは次の日本の手が解らずカードを切れずにいる。

欧州も日本と政治的なパイプは強めたものの日本の手札が解らない以上、カードは切れない。

正に、日本の出方で世界の方向が決まろうとしていた。

そんな、状況に納得できない国がある。

その国は、建国有史以来、外敵から攻められた事が無く、また、戦争では敗北を知らない国家で、世界の財の3分の2を独占し、世界最強の軍隊を持つ国家。

その名を、アメリカ合衆国と言う国だった。

如何にかこの流れを寸断して、流れを引き戻したいアメリカとしては、日本の情報を得る事に躍起になっていた。

アメリカは多くの情報員を日本に派遣し、情報収集を徹底的に行う。

世界の歯車は白銀 武と言う少年の出現により徐々にその回転速度を速めている事を感じながらキラは呟いた。

「動き出してる……世界が凄い速さで動いている」

と。

キラが休暇を終えて横浜基地を訪れたのは武達B分隊が総合戦闘技術評価演習をパスして戦術機の訓練を行う段階に入った時だった。

キラは夕呼の応接室のソファ―に座りながらキラが持ってきたコーヒ―を飲みながら待っていた。

夕呼が雑務を終わらせて向かい側のソファ―に座り本題にはいる。

「で、アンタ等、最近、滅茶苦茶忙しそうに動いてるじゃない？」

夕呼の指摘にキラは何時も通りの顔で返す。

「ええ、彼が来てからお互い途轍もなく忙しくなりましたから」

その言葉に、夕呼が苦々しく頷きながらキラの持ってきたコーヒ―を煽る。

「まあ、ね……。それにしても前と味が違うわね？」

その言葉にキラはにこやかに答える。

「ええ、今回はブラジルが40%で焙煎度はシティー、コロンビアを30%でフルシティー、グアテマラが30%のフルシティーに変えてみました。どうです？」

その言葉に夕呼が鼻を鳴らしながら答える。

「フン、私はもう少し、酸味があった方が良いわね。まあ、旨い事だけは確かね」

キラは肩を竦めながら言う。

「ソレは兎も角、送られた命令書、読んで頂きましたか？」

夕呼が頷きながらも答える。

「ええ、読ませてもらったわ。でも、いいの？ アンタ、斯衛軍の特殊部隊でしょ？ 国連軍の基地、しかも、オルタネイティヴ計画の重要基地なんか駐屯するなんてありえないわよ。月詠みたいに“護衛対象”がいるなら話は別だけど」

キラは苦笑しながらも説明をする。

「僕達の扱いはあくまで、独立試験遊撃中隊ですからまあ、スタンスは特殊部隊に近いかも知れませんか。ソレは兎も角、今回は何を言うにも非常事態と我が帝国は考えています。極秘とはいえ殿下からの正式な命令書ですからソレ」

キラはコーヒーを煽りながら言う。

夕呼もコーヒーを飲みながら言う。

「ええ、全くだわ。白銀のガキが来たお陰で忙しさ倍増ね」

お互い、コーヒーを飲みながら今後の課題やキラ達の扱いについて話し合った。

その結果、国連の重要作戦やオルタネイティブ計画に関する命令以外は殆ど自由に動く事が出来るようになった。

キラが夕呼と話しを終え、地下の廊下を歩いていると、ある事に気が付き、監視カメラの死角に移動した。

「お久しぶりです。鎧衣さん」

キラの問いかけに曲がり角から鎧衣が出てくる。

「気付いていたか、大和 綺羅」

鎧衣がそう言いながらキラと同じように監視カメラの死角に移動する。

「ええ、まあ、それは兎も角、移動しませんか？　ココでは何かと話辛い」

「良からう」

そう言いながらお互い、エレベーターに乗り、地上に移動した。

二人は基地を出て、暫く歩くと小高い丘に行く。

「ココならば問題はありませんね」

「そうだな」

そう言うと、キラと鎧衣は話を始める。

「今回、彼方方外務2課が担当している例の“企画”の進行はどうです？」

行き成り、本題の確信に迫る言葉に鎧衣は内心驚いた。

キラの目が誤魔化しや嘘を許さないと言う目をしていたし、キラがどんな情報でも正確に収集する事は鎧衣とて理解している為、何時もの様な相手を煙に巻く手法は通用しないと理解した。

「前置き無しかね？ 全く、最近の若い者はゆとりが無いな。それではいい人生は送れないぞ。大和 綺羅」

ヤレヤレといいながら、一拍置き本題に入った。

「今のところ“彼の国”が行おうとしている“計画”に変更は無いみたいだ。そもそも、“彼の国”が我が国に干渉するのは我が国の立ち位置とハイヴの立ち位置が問題になったからに他ならない。更に、この計画を機に君の作り上げた技術を横取りできれば幸いと考えているようだ」

キラは右手を顎にやりながら呟く。

「アメリカとすればベーリング海とチュコト海を越えればアラスカと近いですからね。エヴェンスクハイヴがある以上、楽観論者の多いアメリカでも肝は冷える思いでしょうから」

鎧衣も頷きながら答える。

「ウム、米国も我が国を防波堤代わりにしたいのだろう。更に君の技術力が相まってその利用価値も大きい。その為、今の櫛 是親の存在は邪魔以外の何者でも無いのだろう。更に上は君の集めた極秘資料のお陰で表面上は1枚岩と来ている。ソレに楔を打ち込むことが米国情報部の目的でもある」

キラは鼻白らみながらも答える。

「それで、彼方達は米国の計画を利用して、内部にいる俗物を炙り出し、米国や他の国の利害から切り離す。と？ ふざけないで下さい。ソレで一体、何人の犠牲者を出す心算ですか？ 人の命は机の上の紙切れの計算ではないのですよ？ 彼方達に他人の命をどうこうする権利は無い。ソレは傲慢だ」

キラの言葉に鎧衣も言う。

「何かの犠牲無く物事が為せるとでも？ ソレこそ傲慢と私は思うがね？」

キラはこの言葉に尚も言い放つ。

「確かに何かを行う時には対価が必要でしょう。でも、その対価を何の罪の無い人達に払わせる事が間違いだと僕は思うのです。何時の時代でも対価を払わされるのは弱い立場の人間から順番に払わされる。ソレは、政治家や僕達軍人や彼方達諜報部の無能です。ソレと忘れてはいけません。犠牲になる人達や対価を支払う人達の事を、ソレを当たり前と思った時、政治家や僕達軍人や彼方達諜報

部が本当の意味で殺戮者に成り下がる」

その言葉に鎧衣は頷く。

「確かに、な。私とて忘れはしないさ。切り捨てた者達の事は。私や君や香月博士も死者の上に座っている事は忘れてはいない。そうだろう？」

「ええ」

そう言いながら、鎧衣は懷からタバコを取り出し、ソレに火をつけ煙を吸い込んだ。

キラは空を見上げた。

キラが鎧衣との話を終わらせ、基地に戻り、PXで食事を取ろうとした時だった。

武と衛士二人が揉めていた。

キラはこの事態を收拾するはずの人間がいない事に憤慨しながらも怒鳴りつける。

「何の騒ぎか!!」

キラの言葉にその場の喧騒が嘘の様に静まり返った。

問題を起こした衛士二人と武、その隣にいた冥夜も固まる。

キラは静まり返った、PXを歩みながら二人に近づく。

キラが踏み鳴らす靴音だけがPXを支配していた。

「もう一度聞く。何の騒ぎです?」

キラの静かな問いかけがやけに場に響き渡る。

「いえ、あの、ソレはコイツ等が俺達の質問に答えなかったから、それで……」

言い訳をする衛士にキラは答える。

「では、どのような質問かこの場で答えてくれますか?」

キラの言葉は丁寧だろう。しかし、その内に秘めたるプレッシャーは相当な物だ。

「いや、その、あの……」

醜く言いよどむ男の衛士を捨て置き、キラは訓練兵である武達に質問した。

「では、其処の訓練兵、何があったか説明できるかな?」

キラの問いかけに武が答えた。

「この二人がハンガーの機体を質問したから、『ソレは上からの命令でしょうか?』と答えました」

キラはこのガキの喧嘩と変わらない状況に内心、頭を抱えながらも言葉を吐く。

「解った。大体、察しはついた。その言葉に腹を立てた二人が階級を盾に殴りつけたと……」

そのキラの推測に慌てた2人の衛士がキラに何か言おうとしたが、キラは目線だけでソレを黙らせる。

キラは階級章でその二人が少尉である事を見ると古株の少尉が訓練兵イビリをしていると推測した。

「少尉、貴官には発言の機会を与えたと認識しているが、何故、その時に発言しなかった?」

キラの質問に黙り込む二人。

「まあ、いい。早く行きたまえ。これ以上無様を曝すなら此方も情けは掛けない」

キラの言葉にスグスグと逃げるように立ち去る二人を尻目にキラは冥夜に命じる。

「君は彼を医務室に連れて行きなさい」

キラの命令に冥夜は敬礼だけすると武の肩を抱き、医務室に誘導した。

キラは静まり返るPXを後にし、廊下へ出ると、真那を見つける。

「何故、あの時、出て行かなかったのです？ アレは明らかに護衛対象が危険に曝されている。ソレを見逃すだけでなく、静観とは一体どういう事ですか？」

キラの言葉に真那では無く、神代 巽が答える。

「アレは、白銀 武の調査の為に行った行為、決して、護衛対象を放置した訳では御座いません」

その言葉にキラは言い放つ。

「貴公に発言の許可を出した覚えは無いと記憶していますが？」

その言葉に押し黙る巽。

「まあ、いいです。護衛対象に危害が無い為、この事は不問とします。殿下にも報告はしません。ですが、護衛対象の危機的状況を見逃す事は謹んで下さい」

「ハッ、申し訳、ありませんでした」

真那は敬礼し、謝罪する。

去り行く4人を見ながらキラは溜息を吐きながら呟いた。

「全く……前途は多難だな……」

キラ達、スレイヤー中隊が横浜基地に引っ越して来てから1週間が過ぎた。

キラ達が先ずこの基地で最初に始めた事は、ZGMF-X12DガンダムアストレイアウトフレームDの試験を開始した。

キラと巖谷はアストレイアウトフレームDを最新型量産機として、ス衛軍と一般衛士の共通の機体とすべく検討していた。

その理由としては、帝国の抱える諸事情にある。

現在、帝国ではオルタネイティヴ5に備えての予算編成にシフトした為、帝国としてはス衛軍用戦術機と一般衛士と戦術機を分けての運用は正直、コストが嵩む。

ソレに、一々、戦術機を作戦や陸、海で分けているのは作戦内容が違うと言う合理的な分け方をしているからに過ぎない。

実際、英国近衛騎馬砲兵王国戦術機中隊ではタイフーンを採用しているに過ぎず、この明らかに無駄な予算を食い潰す城内省の考えに各省庁から批判が集中した。

英国近衛は陸軍の管轄の為、陸軍採用のタイフーンを使うのは当たり前である。

日本の斯衛軍は將軍家直属の部隊で城内省管轄であり、將軍家護衛と言うその任務性質上、高性能機が求められた。

何故、高性能機が斯衛軍に求められたかと言えば、

最初の正式採用機の瑞鶴は斯衛軍専用の少数配備故に生産効率が高められず、斯衛用のハイチューン故に整備性も問題になったが、これらの問題は帝国軍にも瑞鶴を配備すれば自然と解決した。瑞鶴は通常運用なら撃震と同程度の生産性と整備性を維持できた上に、撃震を上回る格闘性能を実現した改良機なので、瑞鶴の開発を成功に導いた巖谷と唯依の父親は伝説とまで言われているのだ。

ライセンスの問題で撃震の代替機となれるが故に問題となった。しかし、改修機も作れないでは技術蓄積など度々無理な話。そこで時の政府は苦肉の策として配備数を制限する条件にして、アメリカ側と部品のライセンス契約で合意に至った。そして斯衛軍専用機とする事で、瑞鶴の配備数が制限されている事実を隠したのだ。

撃震に国産技術を加えて改良した瑞鶴は、アメリカが権利を保有する技術の使用比率が低くなり、ライセンス料もそれだけ下がる事になる。アメリカから見れば瑞鶴の開発は、ロイヤリティの値切りに等しかったのだろう。アメリカが巨費を投じて戦術機の基礎を築いた事は確かなだけに、アメリカだけを悪く言うことも日本には出来なかった。

使用する技術を減らしても、ロイヤリティを変えない契約は議会に対して説明が付かないので無理だ。そこで斯衛軍の独自調達の伝統を理由に専用機とする事で、斯衛軍の定数、予備機込み以上に瑞鶴が配備されなくても誰も疑問に思わないという状態を作り出した。

その時は、それが帝国の限界であったと言い訳が出来た。だが、一度制度として定まれば時を重ねるに従い、伝統、利権と絡み付き、変え辛くなる。さらに多くの犠牲を払えば、城内省としても早々変更も出来ない。

しかし、帝国を取り巻く情勢が切迫してきた事を受けて、城内省だけが特別と言う状況にはできなかった。

殿下もこの意見に賛同し、城内省も我を折らざるを得なかった。

さらに、開発当初保有していた第四世代型戦術機の数が増え、作戦などで想像以上に減少したため、帝国軍は更なる高性能戦術機の増産を余儀無くされ、大鳳及び、鳳翔の生産体制が限界に達していた事も手伝って次期主力戦術機の開発命令がキラ達、スレイヤー中隊に下された経緯がある。

そこで、キラと巖谷を開発責任者と置いた。

開発責任者が二人いる理由は、帝国軍と斯衛軍の双方の意見を取り入れられる様、国防省と城内省がキラと巖谷の二人を開発責任者として抜擢した経緯がある。

しかし、大半がストライクフリーダムのデータを元に開発している為、キラがメインとなることは城内省、国防省共に知らない事である。

二つの省としての要求は攻撃型追加兵装の装備可能な第四世代型戦術機で大鳳を超える機体性能を実現し、量産し易く、操縦しやすい事が条件として挙げられた。

この無茶な要求に答えるべく、キラと巖谷や何度も会合を重ね、その結果、テストメントが上げられたが、PS装甲やコーディネーター用OS、核エンジン及び操縦系統の調整で機体コストが掛かりすぎる事を考えて、性能的に同列でナチュラルも扱え、生産性の高い、アストレイアウトフレームDの採用となった。

更にキラと巖谷はアストレイアウトフレームDの装甲である発泡金属装甲から超高硬度金属製錬技術を用いた重力下でも精製できる発泡金属装甲の精錬に成功し、ソレを採用した。

重さは47tと1トン近く重くなったが機動性は損なわれず強度はザク系列の装甲に匹敵する事に成功した。

また、アストレイアウトフレームD自体が、元はZAFI製ガンダムのファーストステージと言う血筋の良さも相まって性能的にはバッテリー駆動にも関わらずザクやグフのスペックを超えている事からも条件を満たしていた。

操縦系統やOSはキラがアストレイアウトフレームD用に作り上げたOSを積み込み、その性能を遺憾なく発揮した。

完成した試作型アストレイアウトフレームD、12機の運用試験をキラ達は開始した。

キラ達は、アウトフレームDのテストを横浜基地ではなく、斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊専用試験演習場で行われた。

これは、機密保持という観点からも必要な措置でもあった。

キラはアウトフレームDのコックピットの中でOSを弄りながら考

える。

（Z A F Tのファーストステージか、フリーダムやジャスティスと同じステージのはずなのに、こんな汎用性が高く、量産しやすいとは……やっぱり、ザクシリーズを生み出す土壌にもなったのかな？
ソレを、ザク量産試作型とのすり合わせを行ったんだろうな）

キラが心の中で推測していると、真耶から秘匿回線で通信が入る。

『どうだ、綺羅？　O Sの調整は済ませたか？』

真耶の問いかけにキラは答える。

「ウン、丁度、完了したとこだよ」

キラの答えに真耶は付け足す様に言う。

『解っていると思うが、今回の試験は帝国初の試みだ。何せ、斯衛軍と一般部隊の戦術機を同じにするのだからな』

キラは苦笑しながら答える。

「解ってるよ。真耶もそんなに気を張らずにリラックスして行こうよ」

キラがそう言うのと真耶は厳しい目でキラを見つめながら言う。

『綺羅、今回の試験は斯衛軍だけでない。日本帝国を象徴する新たな戦術機の誕生なのだ。我々の試験の結果次第では帝国軍全体にまで影響する事を忘れてはいまいな？』

キラはソレを苦笑しながら聞き、真耶を宥める。

「落ち着いて、真耶。今から君がそんな調子じゃあ、いい結果も出ないかも知れないよ？」

キラは真耶を何とか宥めると、また考え事をする。

（今回、帝国の経済状況を考えて正式採用機を統一したんだろうけど、城内省としては納得はしてないだろうね。でも、帝国の財布事情は理解しているからこそ余り強くは言わなかったんだろうな。でも、レッドフレームのガーベラストレートを斯衛軍だけに装備させる様、腰回りを改造しろと言う仰せだ。それなら正式採用をレッドフレームにしろと言いたくなっただけ、レッドフレームの性能事態がウインダムと同じ性能だからね……僕も巖谷さんも考えたんだけど、大鳳と大差無いから別の機体にしたんだよね……）

かくして、キラ達、スレイヤー中隊の試験は良好の内に終了した。

キラが横浜基地に到着し、夕呼の所に資料を持って行く。

室内に入ると、武が夕呼に何かを話していた。

その話を聞いていると、武は天元山の退去命令に従わない不法占拠住民の強制退去させて欲しいと言う内容だった。

キラは武が何でこの話題をするのかと疑問に思った。

何故、武がこの話題を挙げるのかと言う疑問が。

武の存在を考えて過去に何かあったと推測する。

（天元山に何かがあるんだろう。確か、あそこは火山脈が通っていた。成る程、火山脈から溶岩が流出する可能性があるのか。多分、帝国はベータの防衛戦で手一杯のはず。そこで国連軍にお鉢が回ってきたのかな？　しかし、何で訓練兵が災害救出任務に当たるんだろう？）

武と夕呼の話が終わり、武が意気揚々と部屋から出て行くと、夕呼は溜息を吐く。

キラが歩みを進めると、ソレに夕呼が気付き、話しかける。

「あら、アンタ、来てたの？」

その素っ気無い物言いにキラは苦笑しながら答える。

「ええ、まあ、ところで、武のあの話は？」

キラの質問に夕呼は鼻を鳴らしながら答える。

その顔は明らかに不機嫌と解る。

「全く、あのガキにはホントに困るわ。情報も活かせない癖に情報を欲しがる。自分に解決能力が無いくせに他人の事に口を挟む。挙句、何も出来ない奴が他人に口出し？ 冗談じゃないわよ、全く」

会話の内容でなく愚痴を言いまくる夕呼に苦笑しながらもキラは答える。

「まあ、武は武なりに“覚悟”はしているのでしょう。それに、戦術機の操縦を見せてもらいましたが、普通の衛士じゃ、武は倒せません」

キラの言葉に夕呼は一笑に付した。

「ハン！ あんな薄っぺらな覚悟で何がしたいの？ あんなの、何かあればすぐに剥がれ落ちるわよ。それに白銀クラスなら世界にゴロゴロいるわ。ソレに、アンタなら瞬殺でしょ？」

この言葉に流石のキラも苦笑するしかなかった。

今の武クラスなら、例えば武が三次元機動を使ってもソレこそ夕呼の言うように武に匹敵する、或いは超える衛士はゴロゴロいるだろう。

今のキラと武の差は語るまでも無い。

キラにしてみれば、武ご自慢の三次元機動もキラのレーザー照射すらかわす、空中超高速機動の前では標準的な戦闘技術でしかない。

武が変態的機動とするならキラの機動は神技的機動なのだ。

実力が如何とかの問題では無い。次元が何段階も違うのだ。

比べる方が間違っている。

更に武とキラの差を挙げるなら、戦闘技能ですら武はキラには勝てない。

キラは第二次ヤキンデューエ戦役からメサイア戦役までを戦い抜き、生き残ってきた歴戦の猛者なのだ。

圧倒的不利な状況からの生還、大多数の敵との戦い。強大な敵。

16歳から18歳、その間にブランクはあるがキラの戦いは常に自分より数が多いか、自分と対等の実力かソレより少し下くらいの強者との戦闘が多かった。

更に、ストライクに乗っていた時は兎も角、フリーダム以降は不殺の戦闘を心情とするキラ故に苦戦する時も間々あった。

中には殺してしまった事もあったが。

一方、今の武の実力は訓練兵として見るなら飛びぬけているが、衛士として見るなら普通より少し実力のある衛士止まりなのだ。

しかし、キラはこうも考えている。

（武は成長期だ。まだ伸びる。実戦経験と、揺るがぬ“信念”を持つ事が出来るなら武は今より上のステージへ上がる事が出来ると思う。武の戦う根底は希薄だ。意気込みはあるけど根底が薄いから空回りしている節がある。更に、自分さえ良ければソレでいいと言う感じを受ける。世界を救うとか言いながら自分の周りしか気に掛け

ていない。ソレが悪い事とは言わない。自分の知る人達がいて自分
と言うものを構築できる。大切な友や家族を守るために世界を救う
と言うのは解るが、武の場合、漠然とし過ぎている)

キラはそんな事、考えながらも夕呼と今後の打ち合わせを行った。

キラ達がアウトフレームDの開発を終了させ、帝国斯衛軍、横浜基地と帝国富士導隊及び、本土防衛軍に優先的に配備された。

両腰部はアーマーシュナイダーとテストメントと同じ形をしたセカンドステージシリーズの大出力低電力型ビームサーベルへと変更された。

これにより、ビームサーベル同士の鏖競り合いが可能となった。

従来のビームサーベルはミラージュコロイドの応用でビームの刃を形成してるのだが、ビームサーベルの刃自体が触れ合っていると、双方の磁場が干渉し合って刃が維持できなくなる。セカンドステージのビームサーベルはミラージュコロイドの改良などによりソレが可能となった。

干渉が途切れると即座に刃が形成される。だから、刃を干渉させたまま斬りつけるのに有利なポジションの取り合いをする事になるが、ソレをしなくていい為、衛士の負担も減らす事が出来た。

シールドはGフライトの可変翼を取り外した物を装備した。

流石にラミネート装甲は高価な為、ザクに使われた超高硬度金属製錬技術で作り上げ、そこに、アンチレーザーコーティングを施した物となった。

装甲素材も同じにした為、コストは発泡金属より安く抑える事が出来た。

パワーエクステンダーを更に改良したハイパワーエクステンダーの装備とガンダムフェイスから105ダガーの顔に改良された。

理由としてはガンダム独特のVアンテナやウイングダムのアンテナは破損率が高かった事と、への字型の頭部冷却システムの廃熱効率を見直した為、105ダガーのアンテナも取り払い、指揮官のみアンテナを装備するという流れになった。

名も“祥鳳”と改められ、配備される。

ストライカーパックも新たに改良され、高機動型攻撃兵装は105mm単装砲から同口径のビーム砲に改められる。

対要塞級長刀兵装はストライクノワールのフラガラツハ2本に改良された。

長距離砲撃兵装はアグニを長距離狙撃用にスコープをカスタマイズし、トリガーグリップを横から銃底部に変更した。

支援砲撃兵装はカートリッジ方式のビームバズーカを追加した。

ココに新たに、早期警戒管制通信兵装が新たに追加された。

これにより、正確なベータの数や移動速度、ハイヴ内でのクリアな通信が可能となった。

感じとしてはコマンドザクCCIのバックパックと余り変わらない形をしている。

これらが新たに帝国の剣として配備された。

しかし、この時、キラ達はこの事を大いに悔やむ事になるのだが、ソレは後に語る。

兎に角、キラ達スレイヤー中隊はA－01に訓練を開始した。

12月4日の寒さ厳しい時期だった。

キラ達がA－01との訓練を終えて食事を取りにPXに行くが席が疎らにしか空いていなかった。

キラ達はそれぞれ席を見つけて座る事にした。

キラは暫く歩きながら空いている席を見つける。

其処にいたのは武と冥夜が言い合いをしていた。

キラは歩み寄り、その話を聞く。

「そなたは解っておるのか？ そなたとて政府公式発表を全面的に信じておる訳ではあるまい？」

その言葉に武は頷きながらも、挑むように答える。

「まあな、寝込みを奇襲、麻酔銃で黙らせて強制退去だろうな」

武がそう言った瞬間、冥夜が激昂した。

「解っておるなら何故、あそこでニヤケられる！？ 彼等の意見を無視して軍は襲撃したのだぞ！？」

冥夜の激昂に武もまた感情任せに言う。

「じゃあ、如何すりゃいいんだよ！？ あそこは危険地帯で何時、溶岩が噴出すか解らない場所なんだぞ！！ ソレに軍だって危険が付く纏うんだ！！」

そのやり取りを聞いたキラは溜息を吐きながら呟いた。

「結局の所、行動だけが答えを得る事が出来るという事なんだよ。何も行動しないでテレビの前で論争した所で水掛け論だし虚しいだけだね」

その言葉に武と冥夜が此方を向く。

「やあ、こんにちは」

キラが微笑みながらそう言うと2人は慌てて敬礼した。

キラも敬礼を返しながら続ける。

「まあ、武の言い分も解るね。基本的には軍は国民の税金で動いている。人員だって無限じゃ無い。更に優秀な陸戦隊員は数が知れる。

ソレを危険に曝して、緊急出動させたんだ。正直、部隊の安全を預かる身としてはヒヤヒヤするね。彼等は良くやったよ」

ソレを聞いた瞬間、冥夜は不満を露にした顔をして武はホラ見ろと言った顔をした。

「でも、だからといって彼等の前途は明るくは無いよ。辛うじて風雨を凌げる程度の仮説住宅に押し込まれ、食料の配給も足りず、医薬品も充分にない。まあ、人並みの生活は保障されないだろうね。しかも、我々、軍は彼等の思い出の詰まった場所や家に土足で踏みにじった挙句、人間以下の生活をさせている。ソレを思うと、どうにもやるせなくなる。これは僕達、軍や政府の傲慢だよ。自分たちは合成とは言え3食がつく。雨風は完全に防げる寝床がある。寒さに震える心配が無い空調設備が完備と来ている」

ソレを聞いた瞬間、武も苦い顔をした。

キラはソレに構わずに話す。

「更に彼等は自分達の親兄弟や子を徴兵されある者は帰らぬ人だ。残るは家族と過ごした情景と記憶のみ。ソレを此方の勝手な都合を押し付けて思い出の詰まった情景を奪い去るのは傲慢以外の何者でもないよ。思い出を踏みにじり取り上げる権利は僕達には無い。ソレを奪い取るのは物を取り上げる事よりも罪が重いと僕は思っている。物は買い換えることは出来るけど、人の思い出は買い換える事は出来ないよ。ソレを政府は自分達の都合を押し付けて強制退去、無能の証明だよ」

キラは2人が暗い顔になった事に気付き、話を終わらせる。

「ま、終わった事をとゴチャゴチャ言っても始まらない。今に目を

向けよう。指し当たって今は食事の時間だ」

キラがそう言った瞬間、トレーと食器が落ちる音が聞こえる。

キラ達が音の方角に目を向けると慧が走り去る姿が目に入る。

「冥夜、後片付けを頼む！ 俺は彩峰を追う」

「解った」

残されたキラは溜息を吐きながら静かに食事を取る事にした。

キラは考える。

（クーデターが起こるだろうな……この頃、帝国軍内部で不穏な動きが目立つ。何だか嫌な予感がする。第二次戦備体勢と“警告”は出しておくか）

キラは食事を終わらせると、外へでて携帯電話を懐から取り出し真耶に通話した。

ワンコールで真耶が通話から出た。

「もしもし、真耶？」

『キラか？ 如何した突然？』

真耶が質問するとキラは静かに命じる。

「月詠 真耶中尉、直ちに第二次戦備体勢へ移行。何時でも出られ

る様に」

その命令を聞いた瞬間、真耶の声が軍人としての声になる。

『説明願う。大和大尉』

キラはソレを確認すると言いつつ。

「帝国軍内部にてクーデターの疑い有り、首謀者は帝国本土防衛軍帝都守備第1戦術機甲連隊所属、沙霧 尚哉大尉の模様。クーデターの目的は現帝国議会に対する政治クーデターの疑い。目下、帝国情報相が調査中との事です。質問は？」

キラの状況説明に真耶は暫く考え込んだ。
状況を冷静に分析していく。

『殿下はこの事を？』

「勿論、知っている。“例の脱出路”にて退避の準備は完了している」

ソレを聞いた瞬間、真耶はホッと息を吐いた。

更に真耶は質問をする。

『各閣僚の警備状況は？』

キラは鎧衣から聞いた状況を即座に思い出す。

「勿論、この事は通達、退避済み。カモフラージュとして公邸は通

常警備としている」

『警察機構及び情報省の介入は？』

「現在、公安第三課、及び帝国情報省外務二課が担当しているよ」

その回答を聞いた真耶は不思議そうな声を出す。

『公安三課の調査は解るが、何故、対外諜報を専門とする外務二課が？』

キラは核心迫る事をこの場で言う。

「今回のクーデター、CIA及び、DIAが関与した疑いがある」

ソレを聞いた真耶は愕然としながら叫ぶ。

『な！？ 米国が！？ いや、有り得ぬ話ではないな……彼の国ならやりかねない』

キラは慌てて付け加える。

「あくまで疑いであり、二課も確証や証拠は無いよ。だけど、スタンバイはしていて。何時、出撃が下るか解らないから」

『了解した』

キラは終話ボタンを押し、続いて紅蓮大将に連絡をした。

キラ達が慌しくしている頃、合衆国陸軍第132戦術機甲部隊を乗せた合衆国太平洋艦隊ハワイ方面軍第7艦隊はハワイ、ホノルル基地から発進し、ハワイと日本の中間地点に指しかかっていた。

旗艦、ジョージ・ワシントン艦橋に2人の男がいた。

一人はジョニー・バロン、もう一人はジョージ・オールストンだった。

オールストンは今回の作戦をバロンに確認する。

「司令、今回の作戦、我が国の立ち位置は“仙台の臨時政府”側についての作戦と聞いています。正直、日和見主義的な彼等に、私は些か信用が置けません」

オールストンの言葉にバロンは頬杖をつきながら言う。

「君の言いたい事も理解できるよ、副指令。だが、そう言った連中ほど我が国の政治家にとっては利用しやすいのさ。ソレに、我が国が抱えている状況は樂觀できない。ソ連が不甲斐ないばかりに我が国にまでその被害が及ぼうとしている。ソレは看過できんよ。正直、日和見主義者でも日本帝国の底力は凄まじい物がある。自国にハイヴを抱えながらも国としての形態を維持しているばかりか、我が国を超える技術力を身に付けた。幾ら追い詰められた者の馬鹿力とは

言え侮れんよ。ソレに、キラ・ヤマト……コイツが全てのキーマンになる事だけは確かだ」

バロンの言葉にオールストンも頷く。

「確かに、日本は追い詰められて、柔軟さを手に入れたようですね。キラ・ヤマトという若い人材を採用したのが良い例かと」

バロンは軍帽を被り直し、前を向いた。

「兎に角、我々の任務は臨時政府及び、在日国連軍と協力してクーデター軍を撃破する事にある。油断せずにかかれ、相手は第四世代型戦術機を駆る精鋭部隊だ。最早、ラプターの優位は数で押すか、戦術を駆使するしか方法はないぞ」

その言葉にオールストンは敬礼し答えた。

「ハッ！！ 全力を尽くします！！」

その頃、とある料亭では。

「沙霧大尉、決行は0100時です。いよいよ我が帝国は生まれ変わります！！」

脇にいた青年将校がそう言う。沙霧は重々しく頷いた。

「ああ、我等は、国政を恣にする奸臣共を討ち、殿下に政治をお返しする事こそ我等が使命。幸い、帝国斯衛軍から最新鋭機が到着した」

ソレを聞いた青年将校達はどよめいた。

しかし、ある一人の将校が口を挟んだ。

「しかし、斯衛軍の介入は有り得ます。大和殿率いる部隊の精強ぶりは無視できません」

その言葉に、沙霧は頷きながらも言う。

「確かに、だが、大和殿とて人の身、あの方が強いだけでは話にならないよ。軍とは部隊で動くものだ」

そう言う。沙霧は計画の最終調整を開始した。

日本帝国に嵐が吹き荒れる事をキヲは穏やかな夕焼けを見ながら思った。

（これは……剣を隠している状況じゃ無いな……）

と。

12月5日、ソレは極東の島国で引き起こされたクーデターだった。

その島国の名は日本帝国と言う島国だった。

そのクーデターはやがて世界から注目の目を注がれる事となる。

世界中の衛士がその戦いの悲惨さを目の当たりにすると同時に故郷と仲間を思った。

世界中の政治家はその戦いを恐怖と同時に自分達の戒めとした。

世界中の開発者達はその戦いに使われた兵器の性能に恐怖すると共に、何時か自分達も開発したいと考えた。

兎に角、このクーデターは12・5事件と呼称され、全世界を震撼させる結果となった。

何せ、この事件は公式記録としては世界初の戦術機同士の戦闘であり、第四世代型戦術機同士の戦闘であり、第四世代とそれ以外の戦術機との次元の差を見せ付ける結果であり、日本帝国の精強さを見せ付けた戦場であり、世に“ガンダム神話”が広く世界に知れ渡った事件でもった。

そして、『ガンダム』と言う名と共に“大和 綺羅”、“日本帝国の白い閃光”、“日本帝国の剣”、“蒼い翼の大天使”と言う名が世界に広まる事件でもあった。

本人のキラからすれば名が知れる事はどうでもいい事なのだが。

キラが事件を知ったのは午前2時の事だった。

キラはその日、夕呼に呼び出され、祥鳳の攻撃型兵装の詳細説明を午後11時に終え、遅めの夕食を取り、横浜基地から借り受けた士官当直室にて睡眠を取っていた。

簡素なベッドの上で寝ていた時、突如、備え付けの机の上に置いてある携帯がけたたましく鳴り響いた。

キラは眠い目を擦りながらベッドから起き、携帯のディスプレイを見た。

「真耶から……こんな時間に？ まさか……」

キラは嫌な予感に駆られながらも通話ボタンを押す。

「如何したの？ 真耶」

キラの質問に真耶は完結的に答える。

『キラ、そなたの嫌な予感的中した』

と。

キラは慌てて状況説明を真耶に求めた。

「状況は？」

キラの質問に真耶は的確に答える。

『0100時、帝国本土防衛軍帝都守備連隊が一斉蜂起、帝都主要施設を瞬く間に強襲した』

キラはその言葉にチラリと時計を見る。

「な！？ 制圧速度が速過ぎる！？ 僅か1時間で帝都の要所を制圧した！？」

キラの驚きに構わず、真耶は更に現状報告を続ける。

『更に帝都には戒厳令が敷かれた』

真耶がそう言い終わると同時に、サイレンが基地中に鳴り響いた。

「どうやら国連も感づいたみたいだね。其処まではボケてないみたいだ」

『ああ、その様だな、米太平洋第7艦隊も近づいている様だ。現在、領海ギリギリで停泊中。まあ、国力を振り翳して安保理に働きかけはするだろうな』

それを聞いたキラは唸りながらも呟く。

「時間の問題だね……」

『ああ』

「殿下は？」

キラの質問に真耶は落ち着かせる様に言う。

『安心しろ、帝都城は第一大隊が守備を固めた。ソレに彼等とて殿下の御命を狙う心算は無い。堀を挟んで背を向けた状態で睨みあいだ』

取り合えずは悠陽の身の安全は保障されていると言う事だ。

キラは安堵の溜息を吐く。

そして、キラは決意した。

自分の“剣”を引き抜く事を。

「真耶、斑鳩さんに“鍵”を貰ってきて、直ぐに戻るから」

その言葉に真耶はある意味、予想していたが洩る。

『よいのか？ そなたの“剣”の封印を解き放つ事を意味するのだぞ？』

真耶の言葉にキラはハッキリと決意を込めて言う。

「体裁や機密をどうこう言っている余裕は帝国にはもう無い。僕も鞘の内で収めたかったけど、もう無理だ。事態は深刻だ」

その言葉に真耶は自分も覚悟を決めて言う。

『あい、解った。だが、もう一つの“鍵”は如何する？ アレは今、殿下が所持している』

その言葉にキラは言い放つ。

「昨日、殿下からもしもの為と渡された」

ソレを聞いた瞬間、真耶は溜息を吐きながら言う。

『……成る程、殿下も帝国の危機と御判断されたか……最早何も言うまい。解った。今直ぐ戻って来い。待っておるぞ』

そう言い真耶は終話した。

キラは携帯を机の上に置くと直ぐ様、近衛の軍服に着替えた。

キラは非常事態といい、夕呼を何とか説得し、A H—64 D アパッチ・ロングボウを借りソレを飛ばす。

流石に、戦術機は借りられないし、輸送ヘリでは戦闘に遭遇した時に回避も反撃も出来ないし足も遅い。

攻撃ヘリなら速度も兵装も申し分ない。

キラはアパッチに乗り込むと即座に飛び立った。

戦闘に遭遇する事無くキラは基地に到着した。

ヘリポートでは真耶が待機していた。

「綺羅！！ 急げ！！ そなただけだ！！ 遅刻したのは！！」

真耶はヘリの爆音にかき消されぬ様、叫んだ。

「ゴメン！！ 直ぐ準備する！！」

キラはヘリのコックピットから飛び降り、着地すると真耶と共に走った。

狭い通路を走りながらキラと真耶は話合う。

「急げ、綺羅！ 余り時間は無い」

「解ってる」

そう言いながらエレベーター前まで到着するとキラと真耶はソレに飛び乗りパネル下の装置にキラのIDを翳す。

電信音と共にエレベーターが動き出し、エレベーターは最下層に到着した。

キラと真耶は完全に扉が開くのを待たず滑り込む様に外に出る。

廊下を全力疾走した2人は大きな金属製の扉の前に到着した。

「真耶、左を、僕は右を回す！！ タイミングを合わせて！！」

「解った！！」

そう言うのと左右両端にある装置にそれぞれ移動すると、キラは首から提げていたドッグタグと一緒にいた金の鍵を鍵穴に鎖し込んだ。

真耶も首から提げていた銀色の鍵を装置の鍵穴に射し込む。

「行くよ、3、2、1！」

キラの言葉が言い終わると同時に2人は同時に鍵を回す。

その瞬間、電信音が響きわたり重々しい扉がゆっくりと静かに開く。

キラと真耶が扉を潜ると暗い室内が証明が一気に明るくなる。

眩く白い光に照らしだされていたのはストライクフリーダムともう

1機の“MS”だった。

「これは……」

キラが呆然と呟くと真耶がその“MS”の名を口にする。

「“ガンダム”が2機？」

2人が呆然としていると後ろから声が響きわたる。

「驚いたかね？」

2人が慌てて振り向くと其処には斑鳩が立っていた。

斑鳩は2人に歩み寄りながら語る。

「ZGMF-X12A、テストメントガンダム……」

その言葉に真耶は目を見開き、キラは驚きを露にした。

「どうやって開発を!？」

キラの怒鳴るような質問に斑鳩は静かに答える。

「無論、君のフリーダムのデータを元にだよ。それ以外がありうるのかね？」

最もな回答にキラは次の質問をした。

「何故、テストメントを？」

その質問に、斑鳩は答える。

「ソレは君への対抗措置だよ。君の力はハッキリ言って異常だ。なればこそ、君が掌返して我等に仇なす可能性はある。ソレに対抗するにはフリーダムと対等に渡り合える戦術機が必要だった。しかし、フリーダムを含むサードステージの開発は帝国では困難だ。そこで我々は祥鳳の元となった機体にしてバチルスウェポンシステムというウイルス兵器に目をつけた。幾らソフト面で強い君でも戦いの最中にOSを直す余裕は無いだろう？ 更に真耶に監視させ君の動向も探らせた」

真耶は苦い顔をしながらキラを見た。

その目には申し訳なささと辛さが混じっていた。

キラはそれを理解していたが故に何も言わず真耶の肩を優しく叩いた。

「真耶よ、今から貴公がこのガンダムの衛士となり綺羅と共にエレメントを組め」

ソレを聞いた瞬間、真耶は驚きながらも問う。

「何故、私なのですか？」

その質問に、斑鳩は静かに答える。

「今現在、綺羅とマトモにエレメントを組めるのは帝国全軍探してもそなた以外は無。ソレに綺羅の癖や特徴をよく理解している」

真耶は目を瞑り静かに息を吐き出しながらも敬礼しその命令を受け入れた。

「ハッ！！ 全力を尽くします！！」

キラは2機のガンダムを見上げながら思う。

（嵐が吹き荒れる。僕達はその只中に行くのか……だけど、何でだろう？ フリーダムに乗っている時以上の安心感は……？ まるでアスランと一緒に戦う様な感覚。そうか、真耶というパートナーがいるからか……）

キラは忘れかけていた懐かしい感覚に囚われながらもフリーダムを見つめた。

M U V — L U V S E E D D e s t i n y 2 1 話 『それぞれの正義』

確かに言われてみてジャステイスはチートが過ぎる為、テストメン
トに変更しました。

皆様には大変ご迷惑をおかけした事、この場を借りてお詫びいたし
ます。

すみませんでした。

キラは目の前のテストメント見た後、斑鳩に問いかける。

「何故、テストメントの開発を？ ストライクの開発と同じ理由でも明らかにこれは日本の開発能力や財政能力を大きく超えています。幾ら僕への対抗措置でも行き過ぎでは？」

このキラの疑問に斑鳩は目を瞑りながら答える。

「ああ、正直、君のフリーダムは、大抵の物理的な衝撃を無効化するV P S 装甲、アメリカの正規空母の核エンジン約10機分に相当する出力を生み出すハイパーデュートリオンエンジン、最高の盾たるビームシールド、どのM S をも超える火力と正に我々には未知の領域だった。

そこで、我々は祥鳳の元となった機体で、量子コンピューターウィルス送信が出来る、テストメントを開発した。

私と巖谷、紅蓮は殿下に進言した。君の離反があった時、対抗できる手段を作り出したいと、しかし、殿下は賛同してはくれなんだ『大和は我等に力を与えてくれた。その恩義を刃で返すは非礼』とな、我等は何とか殿下を説き伏せ、テストメントの開発を開始した。君の目を誤魔化す為にマザーマシンの開発をストライク開発で誤魔化し、正式採用機もアウトフレームDへと誤魔化した。君もストライクとアウトフレームDに目が行き我々の真意には気が付かなかった。だがそれでも開発は3年掛かったが」

キラは自分が上層部から其処まで恐れられていた事に内心、頭を抱えながらも次の質問をした。

「何故、僕を其処まで恐れるのです。あくまで僕は個人で国の力の前では無力でしょう？」

斑鳩はキラを見つめながら言い放つ。

「君は自分の力を過小評価しすぎるくらいがある。君は私や紅蓮が出会ったどの衛士よりも強い。世界最強といってもいいだろう。多分、歴史を刻んでも君以上の衛士は現れないと確信している。

君は生きた伝説になるだろう。元の世界の事は私達は余り知らないが、少なくともこの世界では正にハイヴすら陥落できる最強の存在ではないかと思っている。私が最初に君に恐怖を抱いたのは君と初めて演習をした時だ。私を君は僅か2秒で撃破した。今でもありありと思い起こされる。君の圧倒的な強さと君への恐怖が……」

そう言いながら斑鳩の手は僅かに震えていたのをキラは見逃さなかった。

キラは以前、紅蓮にも同じ事を言われた事を思い出した。

尚も斑鳩の言葉が続く。

「更に君は自分の信念を貫き通す男だ。自分の信念に沿わぬ者とは断固として戦う。政治とは時に信念を曲げて“落とし所”という物が必要だ。しかし、君にはソレが無い。自分の固い信念の為なら自分の命を平然と懸ける。真に国としても兵を預かる身としても君ほど御しがたい存在を私は知らなかった。故に、君の信念が我々を滅ぼすのではと疑念を抱かずにはおれなかった」

キラはその話を聞いて、言葉を紡いだ。

「でも、今は違う。と?」

キラはそう言いながらも斑鳩の目を覗き込んだ。

斑鳩もキラの目を見る。

「ああ、今の君ならば、“信頼”出来る。私と日本帝国を任せられる」

そう言いながら斑鳩は静かに頭を下げた。

「頼む。綺羅よ。どうか、どうか、我が国を救って欲しい!」

キラは目を伏せ、静かにだが、だが、力強く言う。

「この国の未来、確かに、私がお救いいたします」

真耶はテストメントのコックピットに乗り込み、自分のデータをインストールしていた。

テストメントのコックピットの中でディスプレイに映し出されたキラと斑鳩を見ながら集音マイクで会話を聞きながら思う。

（斑鳩殿の懸念も理解は出来る。正直、ストライクフリーダムに乗った綺羅を止めるのは事実上不可能だ。ならば何らかの対抗措置を取る必要があるのは理解できる。しかし、綺羅が以前話した、アウトフレーム事態、帝国の財政を圧迫している。元の機体だからそのプロトタイプはあるだろうが些か、上層部が綺羅に抱く感情は異常だ。しかも、コンピューターウイルスを使つての騙まし討ちなど、帝国軍人として恥ずべき行為だ）

更に、真耶はキラを見ながら考える

（綺羅は以前、自分の過去について話してくれた。戦闘中にOSを書き換えたと、同じ事をされたらハッキリ言つて負けるな……）

キラへの恐怖心も薄らいでいるとは言え、上層部としてはキラへの恐怖を肌でヒシヒシと感じてはいるだろう。

しかし、真耶は思う。

（幾ら装備を充実させても兵器を運用できる人間がいなければ話にならない。更に綺羅は操縦技術だけでなくソフト面では正に天才、同じ手は二度も食うまい。一発勝負になつてくる。無茶にも程がある。しかし、私に扱えるだろうか？ いや、扱いこなして見せる！我が帝国の為、そして綺羅と対等になる為に！！）

真耶はそんな不安を拭う様に外部音声でキラと斑鳩に語りかける。

「PS装甲を起動します」

そう言うと斑鳩が言う。

『ウム、起動してみせよ』

それを聞くと真耶はPS装甲の機動ボタンを押したのだった。

機体の色はメタリックグレーから鮮やかな深紅へと機体が染め上げられる。

キラはこの様子を見ながら思う。

（ああ、ヤッパリ、真耶には紅がよく似合う。守って見せるさ！）

こうして、『人と神との契約』は地獄の世界に体现された。

キラ達は、国連安全保障理事会が、相模湾に展開中の米国第七艦隊を国連緊急展開部隊に編入する事を決定。正式発表は約二時間後の7時00分。それに伴い、同時刻より横浜基地は米国軍の受け入れを開始した事を知った。

現在帝都はクーデター部隊によってほぼ完全に制圧。

最後まで抵抗を続けていた国防省が先程陥落。帝都城の周辺で斯衛軍とクーデター部隊との戦闘が始まった。

仙台臨時政府の発表によると、将軍と帝都奪回の為の討伐部隊を集結中との事。クーデター首謀者は帝都防衛第1師団、第1戦術機甲連隊所属、沙霧尚哉大尉。榊首相を初めとする内閣閣僚数名が暗殺される事無く何とか首都を脱出した。

キラ達はこの報告を聞き、事態はキラ達が予測していた通りになった。

そして、テレビでの沙霧の演説が開始される。

『親愛なる国民の皆様、私は帝国本土防衛軍帝都守備連隊所属、沙霧尚哉大尉であります』

眼鏡をかけた青年が映し出され、キラは沙霧を見つめる。

そして、思った。

（間違いない。彼は、エースだ）

尚も沙霧の演説は続く。

『皆様もよくご存知のように通り、我が帝国は今や、人類の存亡をかけた侵略者との戦いの最前線となっております。殿下と国民の皆様を、ひいては人類社会を守護すべく、前線にて我が輩は日夜生命を賭して戦っています。それが政府と我々軍人に課せられた崇高な責務であり、全うすべき唯一無二の使命であるとも言えましょう。しかしながら、政府及び帝国軍は、その責務を充分に果たして来たと云えるでしょうか？ 先日天元山火災救助作戦を報じたニュー

スを、国民の皆様は覚えておいででしょうか？ 報道では、危険を顧みず、救助活動に挺身する軍人、国民の生命財産の保護の優先などという美辞麗句が並べられていました。もちろん、作戦が人命救助の見地から立案、実施された事は疑いようもない事実でしょう』

そこで、沙霧は一拍置き、目を見開いて強い口調で断罪する。

『しかし、かの作戦の実態は、帰還住民の意思と彼らの権利をまったく考慮せずに、強制排除を事務的、効率的に行ったに過ぎないのです。救助部隊が行った作戦は、住民の身柄を就寝中に麻酔銃で襲撃するという拉致にも等しい方法で確保し、彼らを難民避難所に移送しただけというのが実情です』

キラは内心、辟易しながらも思う。

（なら、貴方はどう言った解決法がある？ 少なくとも貴方はその行為を断罪する権利はもう無い。武力を用いて従わぬ者は排除する。やってる事は同じだろうに）

『辛うじて風雨を凌げる程度の仮説住宅に押し込められ、食料の配給も足りず、医薬品も充分にない。何の咎もない国民が、恰も罪人がごとく扱われる。これが難民収容所の実態なのです。国民の皆様、これは氷山の一角に過ぎない事例であります。殿下のご尊名に於いて遂行された軍の作戦の多くが、政府や軍にとっての効率や安全のものが優先され、本来守るべき国民を蔑ろにしています』

キラは尚も心の中で突っ込んだ。

（じゃあ、貴方のやっている事は殿下の賛同を得てやっている事だとしても？ 帝都を戦火に巻き込み国民を不安のどん底に突き落とし

た貴方がソレを言う資格は全然無い)

『しかも国政を恣にする奸臣どもは、その事実を殿下にはお伝えしていないのです！ このままでは、殿下の御心と国民は分断され、遠からず日本は滅びてしまうと断言せざるを得ない』

今度は手を高らかに掲げた。

『超党派勉強会である“戦略研究会”に集った我々、憂国の烈士は、本日、この国の道行きを正すために決起致しました。我々は殿下や国民の皆様には仇成す者ではありません。我々が討つべきは日本を蝕む国賊、亡国の徒を滅すのみであります』

キラは内心、怒りで叫んでいた。

(国を正すなら先ず、自分の仕出かした事を省みる！ 貴方の行動事態がその殿下や国民の皆様には仇成す行動だろうに！ 人を殺めた者が正論など虚しいだけだ!!)

沙霧は弾圧をするような目を引っ込め、今度は詫びるかのように深くお辞儀をした。

『現在、戒厳令を発令中につき、国民の皆様、特に帝都の皆様にはご不便とご迷惑をおかけしておりますが、今しばらくご辛抱下さい』
キラはいい加減、苛々してきたのでテレビの電源を落とし、呟くように言う。

「人を……人を殺しておいて、奇麗事……昔の僕みたいだ……」

キラは昔、アスランに言われた事を皮肉にも呟いた。

（彼等にも守りたい物があつたんだろう。でも、その手を血で汚して得た正しさは本当に正しいのだろうか？ 自分の信念や守るモノの為に戦い流される血を彼等は振り返る事は出来るのか？ 今の彼等には無理な相談だろう武力を振り翳し、力でねじ伏せ、自分達の作り出した正義に酔っている彼等にはもう無理だ。『本当に正しい答え』なんてモノは無い。一人一人が皆違う答えがある。正しい戦争なんて無い。戦争は、全員が正しいし、全員が間違っている。本当に僕達、人に必要なのは分かり合う心と人の持つ暖かさなんじゃないかな……ソレがこの世界で見つけた僕の『答え』なんだ）

キラは真耶を見ながら思う。

（今まで気付けなかった自分の狭い考え、ソレが変わったのは真耶のお陰かな……）

キラはフリーダムのコックピットに乗り込みながら沙霧を討つ覚悟を決めたのだった。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 2 1 話 『それぞれの正義』

緊急告知、

テストメントや祥鳳の新しいストライカーパックをアンケートで採用してみたいと思います。

どうか、アイディアをよろしく願います!!

キラと真耶は沙霧の演説を聴き、直ぐ様飛び立ち、現在、帝都に向けて進軍中だった。

真耶が装備しているストライカーはデイベインストライカーの特徴である隠し腕への変形機構をオミットし、中央のシールドを取り外し、隠し腕の捕獲用のクローに変形する所はビーム砲が内蔵された。取り外されたシールド部分は手持ちのシールドとして運用される。キラはこのストライカーの名をスカーレットストライカーと名付けた。

更に、ファーストステージであるテストメントには搭載型核動力が搭載されている。

出力でこそストライクフリーダムを含むサードステージには及ばないが、出力で言えば従来機の比ではない。

超高速で飛ぶフリーダムに何とか追いつがる真耶。

「真耶、もっと速度を上げて」

キラの通信に真耶は何とか答える。

『解っておる！』

真耶とて一流の衛士だ。だが、キラの直線とはいえその超高速機動に着いて行くのがやっとだった。

（クッ!? まさか、ココまで綺羅が化物とは考えても見なかった。此方はリミッターをかけているとは言え全開に踏んでいるんだぞ!? しかし、綺羅は余裕すら窺える。これが今の私と綺羅の差か）

真耶は悔しさに歯を食い縛りながら超高速に耐える。

キラは高度を取ってもよかったが、真耶の安全を考え、水平巡航跳躍にて高速で移動していた。

幾ら、アンチレーザーコーティングされたシールドやレーザー感知システムがあろうと、空中での高速機動戦闘の経験が少ない真耶では厳しいとキラは考えての決断だった。

キラはリーダーを見て、真耶に通信を送る。

「真耶、帝国軍とクーデター軍が動いた! 戦場が動いてる!」

その通信に真耶も首肯しながら答える。

「ああ、殿下が帝都城を脱出され、自らを囷となされたか。食い止めるぞ、キラ!!」

「うん!」

キラと真耶は戦場の最前線へと向かった。

キラ達が最前線へ到着すると帝都の町並みは戦場の爪跡が残されていた。

キラは真耶に秘匿回線で通信を送る。

「真耶、クーデター軍の後方を強襲する！！ 真耶がトップで僕がバックで行く！！」

「了解した！！ 綺羅、そなたの美しい砲撃に期待する！」

そう言いながら真耶はキラの前方に進み、キラは上空高く舞い上がる。

そして、ビームライフルを放つ。

緑色のビームは粒子の尾を引きながら亜高速で加速し、クーデター軍の祥鳳のビームライフルに当たる。

祥鳳のビームライフルはその場で爆散し、祥鳳は左手のシールドで自機を守りながら後退した。

『な！？ 一体何が！？』

クーデター軍の祥鳳の衛士が何が起こったのか理解できず網膜投影機やレーダーで確認するが見えなかった。

ソレもそうだ、まさか、自分が超高高度から狙撃されたとは理解でき
る訳が無い。

そして、次の攻撃が近づいてきた真耶によって浴びせられる。

真耶は超高速の水平巡航跳躍にてクーデター軍の祥鳳に接近しビ
ムサーベルを居合い抜き、要領で引き抜き、祥鳳の胴体を擦れ違
いに切り裂いた。

祥鳳は上半身と下半身が真っ二つに切り落とされ爆散する祥鳳。

『悪いな、私は綺羅みたいに武器や手足だけを破壊する天才的な器
用さも無ければ、慈悲も無い』

ソレに気付いたクーデター軍は狼狽する。

『が、ガンダムが2機!?!』

『あの様なガンダムは見た事が無いぞ!?!』

その時だった、キラは機体の高度を下げ、戦場に降り立ちながらオ
ーブンチャンネルで語りかけた。

「此方、日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊、大和 綺羅で
す。クーデター軍に通告します。直ちに戦闘を中止し降伏を」

キラがオーブンチャンネルで呼びかけて瞬間、場は喧騒へと変わる。

『な!?! 大和 綺羅だと!?! 帝国最強の衛士が!?!』

『帝国の……白い閃光が!?!』

ざわめく部下に隊長機が渴を入れる。

『怯むな!?! 相手は二人ぞ!?!』

その瞬間、フリーダムに無数のビームが迫る。

キラはソレを全弾かわしながらコックピットで溜息を吐く。

「仕方ない……警告はしたよ」

キラはドラグーンを放出し、マルチロックオンシステムを展開する。

中央の球体型のレーダーの光点が次々とロックオンされていく。

ロックオン限界に達した瞬間、キラはトリガーを引き絞る。

その瞬間、機体からは緑の光が2筋、黄色の光が2筋、赤の光が中央に一筋が一瞬にして放たれる。

そして、上空を舞っていたドラグーンから8筋のビームがそれぞれ違う角度から放たれた。

合計13門の砲から放たれる光は次々と周囲にいたクーデター軍の祥鳳のメインカメラ、両手足、兵装、メインカメラを撃ち抜いて行く。

『な!?!』

『これは!?!』

30機いたクーデター軍の祥鳳を全て戦闘不能にするとキラは瞬時に飛び上がり次の戦場へ向かう。

真耶もソレに追従した。

其処に残った帝国軍の衛士は眩くのだった。

「す、凄すぎて、訳が解らない……」

と。

真耶はキラの後を追従する形でテストメントを水平巡航跳躍させながら思う。

（何て機体だ……開いた口が塞がらない性能だ……これがキラとストライクフリーダムガンダムの力か……テストメントとてガンダム、同じ事が出来るはずだ! 私とて負けてはいられんな）

真耶は決意を新たにすると、速度を上げてキラの前に飛び出し、ビームライフルを乱射した。

真耶が放ったビームは祥鳳のコックピットと動力部に当たり2機とも爆散した。

真耶は超高速で水平巡航跳躍をするとビームサーベルを引き抜き、祥鳳を袈裟懸けに切り裂く。

不意を突かれた形で袈裟懸けにされ撃破される祥鳳。

真耶はこの瞬間、ある事を思いつく。

(……綺羅はガンダムや戦術機を動かす時、どうしてた？ 確か、私達、衛士のように地上での跳躍は殆ど無かった。殆ど浮いてる様な……確か……こうか？)

真耶は操縦桿を操作しながらキラが行った操作を真似てみる。

その瞬間、機体は空へと浮かび上がる。

「確か、目線はレーダーと敵を見ながら」

数機の祥鳳がビームをテストメントに向けて乱射する。

しかし、テストメントは空中で鮮やかな回避行動を取りながら全てをかわす。

「そう、相手の銃口、機体のマニピレーターの動きを把握しながらレーダーでも確認」

そう呟きながら、後ろからビームサーベルを抜き放ちながら襲い掛かる祥鳳をかわし、ビームサーベルで逆袈裟に切り裂いた。

その時の真耶の目は、瞳孔のハイライトが消えていた。

キラ達が次々とクーデター軍を倒している頃、クーデター軍とアメリカ軍が戦闘を開始していた。

『クソ！？ コッチの攻撃が全然あたらねぞ！！』

アメリカ軍の一人がF-15の中で唸りながらビームマシンガンをばら撒く。

『全機！！ 散開しろ！！ このままじゃやられる！！』

『チクショ！！ 何でアイツ等のシールドはそんなに硬いんだ！？ 貫けね！！ ソレに何だよ！？ あの速さ！？ ありえね！？』

1機のF-15は管制ユニットをアグニの赤いビームに貫かれ中の衛士ごと蒸発してしまう。

『ふっ、馬鹿め。貴様等の戦術機と我が軍の第四世代型最強の祥鳳を一緒にするな！！』

『さっさと帰って出直して来い！！ 貴様等と我等とは実力の差があるんだよ！！』

戦闘はあっけなく終わった。

『全機、集結』

祥鳳がそう呼びかけると、全機が集結した。

『被害状況は？』

『此方、A小隊、被害無し！』

『此方、B小隊、被害ありません！』

『此方、C小隊、楽勝過ぎて被害無し！』

それに満足した中隊長が呼びかける。

『上出来だ。国連の犬共を追うぞ！！』

『『了解』』』

そう言いながら、祥鳳の編隊は国連部隊の後を追った。

一方、沙霧は祥鳳のコックピットの中で報告を聞いていた。

「ソレは、本当か！？」

沙霧の声は驚きと怒りと恐怖が混じりあった声音で部下を問いただした。

『ハッ、信じがたい事に事実であります。大和大尉及び月詠中尉のガンダムにより、この30分で我が部隊の戦術機の3分の1が撃破されました』

沙霧は眉間に皺を寄せて怒鳴った。

「馬鹿な！？ たった2機で我が軍の3分の1を撃破だ！？ クソ！！ 斯衛軍も腐った体制に組するとは……しかし、大和殿の實力がそれ程の物だったとは……計算違いもいいところだ」

沙霧はこの事態に自分も命を懸ける決断を下す。

「輸送機の用意をさせろ！ 空挺降下強襲にて殿下をお救いいたす！！！」

戦場の終わりは近い。

武達は戦闘を回避しつつ全力で逃げていた。

自分達の後方には鬼気迫る勢いで追いかけてくる帝国本土防衛軍帝都守備。

その速度は尋常ではない。

高機動型攻撃兵装の装備での追跡だろう。

通常のスラスターしかない敏捷では正直、207B分隊の全員が捕まると考えていた。

しかし、クーデター軍の祥鳳と敏捷との距離は縮まらない。

帝国軍やアメリカ軍、スレイヤー中隊が全力で押し留めているのである。

武は膝の上にいる悠陽に気を使いながらもいかにして速度を落とさず進むかに苦心していた。

悠陽の顔色は明らかに悪いと解る。

本人は化粧と気力で誤魔化してはいるが、やはり誤魔化しきれものではない。

『01から06、速度は上げられないの!?!』

千鶴が焦る様に武に通信する。

「解っている!! だけど殿下の体調が……」

武が言い終わる前に悠陽が武に命じた。

「白銀、速度をお上げなさい」

武はこの命令に戸惑う。

それもそうだ、幾ら、キラが開発した高性能Gキャンセラーが付いていても強化装備なしで乗るのは推奨されていない。

キラは強化装備無しでも平然と乗っているがソレは例外中の例外だ。

高性能重力キャンセラーでも殺しきれない重力は多い。

キラの世界のノーマルスーツにも対G緩和機能がついているがソレを装着しないで乗っている例外もある。

クルーゼやネオ、ガイなどいるが余りお勧めは出来ない行為だろう。

宇宙空間では対Gだけでなく撃破され、宇宙にそのまま放り出されるだろうし。

高性能Gキャンセラーだけでは重力下では戦闘時の急な衝撃や高速旋回時、急上昇時のGを殺しきれない。

キラやアスラン、シンでさえ、緊急的な強襲を受けて仕方なく私服や軍服で操縦していた。

ソレに、軍隊での規約にはノーマルスーツの着用が義務付けられている。

クルーゼやネオは上層部が黙認しているし、ガイの場合は傭兵であるからその様な義務に縛られる事は無い。

ソレを見るからに体調の悪い悠陽が実戦するのは正直、躊躇われる。

「しかし……」

武の戸惑いの言葉を悠陽は強い口調で切り捨てた。

「早くなさい！」

武は覚悟を決めた。

「行きますよ!!」

「ッ！」

武と悠陽を乗せた敏捷は加速していくのだった。

武達が全力で逃げている頃、後方では激戦が繰り広げられていた。

「ホワイトファンング1より各機！　ココを通すな！！　いいか！
殿下の退路！　何としても死守だ！！！」

『『『『『了解！！』』』』』

キラが斯衛軍使用にあしらえたストライカーパック。“三種の神器”を装備したスレイヤーズはクーデター軍を押し止めていた。

この“三種の神器”とは早い話がライゴウガンダムのアナザーストライカーにキラ独自の改良を加えた物だった。

高機動型攻撃兵装の『翼鏡』はビームサーベルからビーム砲に変更され、ビーム砲一体型ミサイルポッドやライフルホルダー、プロペラントタンクの着用などが可能でより高加速、攻撃能力の向上にも繋がった。

対要塞級長刀兵装の『神剣』はキャリバーンと変わらないが右のマイダスメッサー改が取り外された。理由としては余りブーメランと言う兵器の使用頻度が少なかった事が挙げられる。

長距離砲撃兵装の『勾玉』はサムブリットストライカーのアグニ改を左から右に変更したのと、プラズマサボット砲、トードスブロック改を左に変更した。

また、アグニ改を大型ビームガトリング砲に変更でき、トードスブロック改を取り付ける事も可能、両肩にトードスブロック改を装備する場合は低反動砲やビームバズーカがオプションとして装備され

る。

斯衛軍の衛士はこれら三種の神器攻撃兵装を装備していた。

唯衣はビームライフルをリアスカートにマウントすると、対要塞級長刀兵装の対要塞級長刀改を引き抜き敵陣に躍り出る。

「はあああああ！！」

唯衣は上段に対要塞級長刀改を振り上げ敵に斬り付けた。

気合いと共に振り下ろされる長刀はクーデター軍の祥鳳を真っ二つにした。

『何だコイツ等！？ 強いぞ！！』

『色つきの祥鳳に斯衛軍の紋章！？ 斯衛の者か！？』

『腐った体制に組する者が！！ 我等の道を阻むか！？ 其処を退け！！』

クーデター軍の祥鳳3機が一斉に唯衣に襲い掛かる。

しかし、左にいた祥鳳が赤いビームに貫かれ爆散、右にいた祥鳳はビームガトリングの吐き出す無数の緑のビームに機体をズタズタにされた後、トードスブロック改の砲弾に貫かれ、撃破される。中央の祥鳳は斜め上からビームライフルで管制ユニットごと撃ち抜かれ機能を停止した。

『隊長！ ご無事で？』

玲人が唯衣に呼びかける。

「ああ、大事無い。其方は？」

その言葉に、功が答える。

『今の所、全機健在です』

慎二も通信をする。

『しかし、アイツ等、何考えてんだか。俺達が丹精込めて作った機体を人殺しの道具にするなんて……胸糞悪りゝス』

慎二の言葉に唯衣が嗜める。

「言うな。今はソレを言っても始まらない。今はココを死守する事だけを考えろ」

『了ゝ解』

慎二の回答に満足すると唯衣は各小隊に命じる。

「A小隊は左翼の敵部隊を抑えろ！ B小隊は右翼を！ C中隊は私と共に中央に來た敵を受け持つ！」

『スレイヤーズ2了解！』

『エンジェルス2了解！』

『ホワイトファンク2了解!』

正樹、香奈、功の小隊副隊長が答える。

「全機、我に続け!!」

斯衛軍の祥鳳はクーデター軍を蹴散らすべく戦場に躍り出た。

一方、武達は戦術機が着地できる谷間に待機していた。

『白銀、殿下の御容体はどうだ?』

まりもの質問に武は何とか答える。

「バイタルデータではBP、P共に乱れています。呼吸も荒く、発熱も見られます。

KTは38.9℃と高く、これ以上の移動は困難です」

『嘔吐は?』

「ありません、ですがこれ以上は危険かと」

『発汗の度合いは?』

「レベル4です」

『……脱水症状も併発している可能性もあるな……』

武はまりもの思考にイライラしながら待つ。

（クソ！！　今は考えている場合ではないだろう）

其処に、アルフレッド・ウォーケンが質問する。

『白銀訓練兵、スコポラミンの投与は？』

武は何とか答える。

「発進前に2錠飲んでいただきました」

ウォーケンは唸る様に言う。

『限界量のスコポラミンが効かない、か……』

まりもとウォーケンは殿下の状況を話あった。

武の苛立ちは募っていく。

（だから、今は思考している場合じゃないだろうが！！　クーデター軍だって迫ってるんだぞ！？）

その時だった、ウォーケンは武に命じたのだった。

『白銀訓練兵、トリアゾラムを投与しろ』

その命令に武の鼓動が一瞬早くなった。

『早くしろ、白銀訓練兵、精神安定剤の投与は重度加速度病に対する通常の処置だ』

その命令に待ったをかけたのはまりもだった。

『ウォーケン少佐！ お待ちください！ 再考願います！ 戦闘が続く以上、トリアゾラムの投与は……』

其処に、真那が割って入る。

『神宮司軍曹の言うとおりです。少佐、殿下の症状と戦況の好転から考えて、更なる投薬のリスクは不要ではないでしょうか？ ソレに、睡眠導入効果が高いトリアゾラムは同時に筋弛緩を引き起こします。睡眠状態での嘔吐により、窒息死する可能性を看過するわけにはいきません』

その言葉に武は内心、頷いた。

（そうだよ、そんな事したら殿下の命が……）

しかし、ウォーケンは真那の言葉を指揮官としての立場から冷たく切り捨てた。

『なるほど、可能性は否定できない。だが、それはあくまで可能性の話だ。殿下の容態を鑑みれば、一刻も早く戦域を離脱するのが、最良の選択だ。お眠りいただく事で速度を上げ、移動時間を短縮出

来れば、殿下が戦術機に乗られる時間も、敵に発見されるリスクも少なく済む』

武やまりも、真那はソレが理に適ったやり方である事は理解している。

だが、人間的な所がウォーケンの言い分を拒んでいた。

まりもと真那は何とか再考してもらおう為に食い下がる。

『お待ち下さい少佐！ 殿下の症状と戦況の好転から考えて、更なる投薬のリスクは不要ではないでしょうか？』

『トリアゾラムの投与が必ずしも適切な処置でない以上、殿下の体調回復のため、10分以上の休息时间を取るべきと具申致します』

しかし、ウォーケンとして現場を預かる指揮官、自軍の安全確保が最優先である事は揺らがない。

その判断の元にウォーケンは決断を下す。

『白銀訓練兵、何をしている。早くトリアゾラムを投与しろ』

真那は殿下の護衛と言う斯衛の立場から武に命じる。

『ならんぞ、白銀訓練兵。少佐、休息时间の再考を具申致します』

板挟みになった武は尚も悩む。

（チクシヨ！？ 如何すりゃいいんだよ！？）

迷う武にウォーケンの言葉が突き刺さる。

『その休息時間の間に何人の人が死ぬと思う？　それは本来、人類の宿敵ベータと戦うべき命なのだぞ！』

（そうなんだよ！！　でも、何だ！　何なんだよッ！？　この気持ち
ちは！？）

武の迷いの迷路に思考が陥ろうとした時、殿下の声が武の耳元に入る。

「……っ……し……ろ……がね……」

悠陽の声に武が反応した。

「っ！　殿下！？」

「……葉……を……わたくしに……」

（な、何で……？）

尚も言葉を紡ぐ悠陽。

「……わたくしは……だいじょうぶ……」

（いつから……いつから……聞こえていた？）

「白銀……葉を……」

武は押し黙るしかなかった。

（殿下……）

「……愚か……者……時間を……無駄にするで……ない……」

（なんで……）

「多くの……命を……散っていった……命を……無駄に……」

（何で……そんなに……？ 何で自分が死ぬかもしれないのに！）

武は心で叫ぶしかなかった。

ウォーケン、まりも、真那、そして、悠陽、それぞれが、それぞれの正しさがある。

其処に迷いが無く、自分の信念に則って行動していた。

武の頭の中で以前、キラが言った言葉がフィードバックした。

『結局の所、行動だけが答えを得る事が出来るという事なんだよ』

（結局、俺は何も行動しじゃない……結局の所、全員の言い分を聞く事なんて不可能だ……なら、誰かを切り捨て、誰かに賛同しなければならぬ。もしくは自分なりの解決案を提示する……駄目だ！！ 俺にはどれも出来そうにない……）

自分に正しさを見出せないまま決断を下せず、唯、時間だけが悪戯に過ぎていくのを享受するしかない自分に歯噛みする武。

その時だった、上空にA n—225の編隊がレーダーに映し出されたのは……

ムリーヤから空挺降下してきたのは祥鳳だった。

『友軍の戦術機か！？ 帝国軍671航空輸送隊！？ 作戦参加は聞いているが……』

ウォーケンの叫びと共に空挺降下した祥鳳の群は武達を取り囲み包囲した。

『帝国軍、671！？』

まりもは慌てたように叫びながら戦闘態勢をとる。

『少佐……671輸送隊は厚木基地所属の部隊です』

真那も臨戦態勢をとりながら答えた。

厚木基地は武達が箱根を出発する時点で陥落している。

詰まる所はクーデター軍が掌握している事になる。

オープンチャンネルで呼びかけられ、全員が自分達の置かれた状況を理解した。

『国連軍指揮官に告ぐ。私は、本土防衛軍、帝都守備第1戦術機甲連隊所属の沙霧尚哉である直ちに戦闘行動を中止せよ。我々の目的は戦闘ではない。繰り返し、直ちに戦闘行動を中止せよ』

この事件はいよいよ最終局面を迎えた。

クーデター軍の祥鳳が武達を取り囲み包囲網をしいている。

しかも、地形でも武達は下側に位置し、沙霧達は上をとっていた。

沙霧達の優位は揺るがない。

沙霧はオープンチャンネルで尚も呼びかける。

『故あって決起し、立場を異にする諸君らと対峙しているが、我等の目的は戦闘ではない。諸君等が無法にも連れ去ろうとしている我らが殿下を、お迎えにあがったのだ。いささか一方的であるが、諸君らに、只今から60分間の休戦を申し入れる。なおこの休戦は、燈武院悠陽殿下のご尊名に懸けて履行されるものである。我々からそれを破ることは有り得ない』

沙霧は一拍置き、武達に提案と言う形で命じた。

『その間、現在置かれている状況、諸君らが我が国に対し行っている行為の当否を冷静に熟慮し、現実的で誠実な対応を取られんことを切に願う。60分後、再び全回線にて呼びかける。返答無き場合、我等は必要と思われる全ての手段を以て事態の収拾を図る。そう心得られよ！ 以上！』

一方的に提案を押し付け沙霧は通信を終了する。

武達は戦術機から降りて、悠陽の警護の任に就くことになった。

手には国連軍正式採用のH&KのUSP拳銃が握られていた。

フレーム下部にはタクティカルモジュールが装備されたUSPを握りながら武は思った。

（実際、沙霧達は殿下の名を持ち出し、交渉をしてきたから不意を突いての強襲の確率は限りなく0に近いだろうな……）

だが、そこら辺が解らないアメリカ軍人のウォーケン少佐は全集警戒と歩兵の襲撃に備えての配備をしいた。

武はUSPを専用のホルスターに納めると当ても無く歩き出した。

武が当ても無く歩いている時だった。

壬姫と米軍の衛士が何やら話し込んでいた。

「訓練兵を出撃させるなんて、極東国連軍の人手不足は相当深刻ね。あなたも災難だったわね」

流暢な英語が翻訳機能で日本語に変換される。

壬姫は日本語でソレに答える。

しかし、答える声に何時もの元気は無かった。

「あ、いえ……」

武は声のする方へ歩みを進めた。

米軍衛士は尚も語りかける。

「私もね、まさか人間相手の作戦に駆り出されるなんて、思っても
みなかったわ」

壬姫はその顔に影を落とし、無言になった。

「……」

「日本には、1度来てみたいと思っていたんだけど、こんな形で、
それが叶うなんてね」

それを気にせず柔らかい笑みを浮かべながら語りかける米軍衛士。

「……はい」

壬姫の顔色は尚も晴れない。

「すみません少尉……あの……こんな事になっちゃって」

「え?」

壬姫のお詫びの言葉に戸惑う米軍衛士。壬姫は搾り出すように言葉を
紡ぐ。

「今は人間同士で戦っている場合じゃないのに……」

「どういう事？ どうしてあなたが謝るの？」

怪訝な顔をしながら質問する米軍衛士。

しかし、何か思い当たったらしく、壬姫に質問を投げかけた。

「もしかして……あなたは、日本人？」

壬姫は申し訳無さそうに肯定した。

「はい、そうです……少尉」

「成る程、そう言う事か……私ね、フィンランド人なの。戦災難民なのよ。ほら、私の国もう無くなっちゃったから」

笑いながら言う女衛士に壬姫はすまなさそうに言葉を紡いだ。

「あ、あの、私、なんていったらいいか」

ソレに構わず、微笑みながら言う女衛士。

「ああ、別にいいのよ。気にしないで」

と。

壬姫と女衛士の話を聞きながら、武はキラが話した事を思い出した。

『でも、だからといって彼等の前途は明るくは無いよ。辛うじて風雨を凌げる程度の仮説住宅に押し込められ、食料の配給も足りず、

医薬品も充分にない。まあ、人並みの生活は保障されないだろうね』

『更に彼等は自分達の親兄弟や子を徴兵されある者は帰らぬ人だ。残るは家族と過ごした情景と記憶のみ』

（多分、あの人には家族と過ごした情景はベータに蹂躪されてもう無いんだろうな……市民権を得る為に徴兵、ソレも退役まで勤め上げて始めて貰える物……キラさんが以前言ってたっけ、欧州やアジアはハイヴとベータで埋まっている。国を追われ必死に逃げて中には力尽きて倒れる者、男は徴兵に取られ、女は子に食事を与える為に軍隊に入るか、軍関係で働くか、最悪なのは娼婦として身を落とすかの選択肢しかないって……そんな最悪が有り触れた悲劇だなんて……俺は幸せな部類なんだろうな……）

武が思考していると壬姫が気づき、武に駆け寄った。

「あの人達を、私のパパが、パパがあの人達を巻き込んだのかもしれないんだよ」

武は壬姫の言葉にどう返したらいいか解らず壬姫の名を呼んだ。

「タマ」

「パパはいつも言ってた。日本を守るためには米国の力が必要だって」

「でも、それは事実じゃないのか？ 現に今だって、こうやって」

「怖い」

「え？」

「もしかしたら、このクーデターを起したのも……米軍を引き入れたのも……」

武は壬姫の言葉を否定は出来なかった。

確かに米軍はその兵力では世界最強なのは間違いない。

事実、最新鋭の第4世代型戦術機を押し留めていた。

更に、珠瀬事務次官の発言はアメリカの介入が予め織り込み済みの様な発言をしている。

武は何も言えない自分に歯噛みしながらも壬姫を慰めた。

壬姫を何とか慰め、冥夜と話がしたいと思いつながらも見つからず空を眺めていると、巽が武を呼び止めた。

「白銀 武」

武は振り向き、巽の名を呼ぶ。

「え？ あ、神代少尉」

「搜したぞ。休憩とはいえ、この状況でうろつき回るとは……国連軍の程度が知れるな」

武は3バカと呼んでいた、あの世界では考えられないギャップに内

心苦笑した。

「まあ、いい、急げ、殿下が御呼びだ。着いて来い」

武は巽の後をついていくのだった。

殿下、白銀武をつれて参りました」

「ご苦労でした、下がちなさい」

「ハッ」

神代はそう言い、敬礼をした後、下がっていった。

悠陽はそれを見送った後、

「白銀、ここへ」

「は、はい」

武は戸惑いながらも悠陽の元に歩み寄る。

武はこういう時の失礼の無い座り方がわからなかった為、戸惑っている、悠陽が命じる。

「如何しました？ 楽になさい」

「す、すみません、失礼します」

武はその場に座る。

「このまま話す非礼を許すがよい。身を起こすと、少々辛い故」

先ず悠陽は木に寄りかかりながら話す非礼を詫びる。

「いえ、オレは失礼ばかりなんで、気にしないでください」

「フッ、本当にそなたは面白い男ですね……大和に聞いた通りの男です」

武が突然、キラの名を出され戸惑う。

「キラさんが、何か？」

悠陽は軽く驚きながら言う。

「あの者の名を呼ぶとは驚きです。あの者の名を呼ぶのは真耶ぐらいと認識しています」

キラの名を呼ぶ人間は意外と少ない。

帝国最強にして家柄も小礼と比較的高く、開発でも帝国の技術を何世紀も先に進めた人物としてキラは帝国から畏敬の念を込められている。

更に、御家断絶の大和家を1代にして再興、その跡目人が紅蓮と言う豪華な面子、悠陽からの憶えも高く、斑鳩からも特別視されているという経歴の持ち主なのだ。

そんな人物を名前で呼ぶなど考えられない行為である。

大礼や小仁、大仁の斯衛でさえキラが道を通れば自然と道を開けるほどキラの帝国の立ち位置は極めて大きかった。

そのキラを名で呼ぶ者が日本にいる事、事態が悠陽を驚かせた。

「いえ、まあ、俺は無礼な奴ですから……」

その事を知らない武は頬を人差し指で掻きながら言う。

悠陽は微笑みながらも何か納得したように言う。

「大和から聞き及んでおります。荒削りながらもそなたの才能や技術は他に無い輝きがあると、経験を積み、何れは国連を代表するであろう衛士になると」

しかし、次の言葉で悠陽は暗くなった。

「本来ならばそなたの技能、人類の仇敵、ベータを討ち滅ぼすために用いられるべき物、そなたのみならず、此度の争乱に用いられるすべての将兵、物資も然り。それが、このような形で失われていくのは残念なことだとは思いませんか」

悠陽の考えている事は正に武が考えている事そのものだった。

ベータがいる限り人類に未来はない。皆、思想や行動は違えど、それを理解しているはず。

しかし、今起こっているこの事態はどう説明すべきだろう。

『目的が同じでも重んじるものが違えば行く道が変わる』

冥夜の言葉が武の心に突き刺さる。

武はあの悲しい世界の記憶が朧げではあったが、憶えている。

絶望しかない未来を知る故に武は冥夜のように言うことも出来ない。

また、キラの様に全てを受け止めた上で背負い、自分の下した決断に責任を持ち、その決断を振り返り反省し行動する勇氣も無い。

良くも悪くも武は子供だった。

「私は、先ほどから考えていた事があります」

悠陽の問いかけに我に帰る武。

「何故あの時、そなたがトリアゾラムの投与を躊躇ったのか、と言う事です」

その言葉に武は呼吸が止まる感覚に陥る。

「その時の米軍指揮官と月詠の遣り取りは、朦朧となりながらも聞こえていました。米軍指揮官の言葉、あの者の立場では正しいとそなたは思いませんか？」

「はい……」

悠陽の言葉に武も首肯するしかなかった。

ウォーケンの言葉は作戦指揮官と言う立場から見ると作戦の効率的な遂行と、その目的の達成を第一に考えれば正しい。

「では、あの時の月詠の言葉はどうでしょうか、そなたはあれの言

葉をどう受け取りましたか？」

「正しいと思います」

悠陽の質問に武は正しいと答えた。

「双方正しかったのであれば、そなたは何故、米軍の将校ではなく月詠の言葉に従ったのですか？」

この質問に武は答える事が出来なかった。

自分の中では答えが出ているのだ。

臆病風に吹かれ、ビビって選ぶ事が出来なかった。

別の選択肢を用意できる程、頭も良くない。

結局、自分は行動しなかった臆病者なんじゃないかという事を。

（じゃあ、本当の勇氣って何だ？ 本当の正しさって何だ？ 俺が今まで信じていた事は本当に正しかったのか？ 冥夜には冥夜の、沙霧には沙霧の、月詠中尉には月詠中尉の、ウォーケン少佐にはウォーケン少佐の正しさがあり、それに基づいた行動をしている……じゃあ、俺は？ 俺は俺の正しさに基づいて行動をしているのか？ ベータを倒すと言う俺の信念は変わらない。でも、俺は本当に行動しているのか？ 口先だけのじゃ無いのか？）

『人類を救うっていうあんたの決意……自分で思っているほど固くないんじゃないの？』

夕呼の言葉が刃となって武の心を切り刻む。

（だけど！！　だけど、俺は決めたんだ！　前に進むって！！　進む事しか俺は知らないから！！）

押し黙る武に悠陽は語りかけた。

「無理に答えずともよい。白銀……そなたはその優れた資質故に、いつか人の上に立つこともあるでしょう。人の上に立つという事は、多くの責任を背負い、多くの決断を下さねばならぬということです。国家や組織はその拠って立つ処が違えば、各々に理想や信念が異なるもの。それは、人も同じです。何か為そうとすれば、必ずそれを善しとする者と、悪しとする者がいるでしょう。されど、それぞれの立場に立って、ものを見ることが出来れば、各々が拠り所とする正しさも見えてきましよう。そして、悲しい事です、それら全ての者達の望みを満たす道が、常にそなたの前には限りません。その時そなたが、何に拠って決断し、どの様な道を彼の者達に指し示すのか、その時、もしそなたに迷いがあったなら、原点を顧みる事。立ち止まる勇氣を持つのです。そして、自らの手を汚すことを、厭うではならないのです」

（自らの手を汚す……か……）

「道を指し示そうとする者は、背負うべき責務の重さから目を背けてはならないのです」

武はその言葉に考え込んだ。

（オレはある意味、天元山の老婆を切った。それは、人類を救うという信念があったから。オルタネイティヴ5発動までの残された時間を無駄にしたくなかったから出来たんだ。それに従えば、殿下に

トリアゾラムを投与できたはずだ。なのにできなかった。それは自分の手を汚す事にビビって出来なかった……)

「私はあの時、流れに身を委ねたわけでも、己が死を以て責任を果たそうとしたわけでもありません。私が信ずる正しさに従い、トリアゾラムの投与が最良と判断したのです」

(殿下も自分の正しさを信じて行動していたんだ……あの場で行動していないのは俺だけか……じゃあ、俺の正しさは？ 俺の信念の原点は何だ?)

必死で考える武。

その時だった。平和な世界に住んでいた仲間達と、訓練で苦楽を共にした仲間達が重なる。

(そうか……俺が守りたかったモノは……“アイツ等がいる世界”なんだ……何時の間にか、ソレが、“全世界”に摩り替わっちゃったんだ……何だそれ……俺は結局、自分が守りたかったモノを見失っていたんだ……)

悠陽は武に下がる様、命じる。

しかし、下がらない武に疑問を投げかけた。

「？ 何か、申したいことがあるのではないですか？」

「いいえ何も……」

悠陽の質問に武は否定した。

「偽るでない。そなた、私を侮っていますね？」

その言葉に武の心臓が1拍跳ね上がる。

「そのような険しい顔をして、何もないと申すのですか？」

その時、武は悠陽に自分の想いを吐き出していくのだった。

タイムリミットは刻一刻と迫る。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 2 4 話 『それぞれが抱く正しさ』

申し訳ない!!

文章が纏めるの下手で中々纏まらないわ、話が長くなるわ……

文才があれば……

武は敏捷の管制ユニットに冥夜と共に乗り込み、真那を伴い交渉の場に少しずつ近づく。

あの後、ウォーケンや207分隊の訓練兵達とで悠陽への謁見の機会が設けられた。

その時、作戦が決まり、冥夜を替え玉に仕立て上げ、冥夜の機体に殿下が乗り込み、説得に失敗した場合は悠陽を逃がす手筈だ。

武はこの状況に冷や汗をかきながらも何とか緊張に耐える。

最初に真那がオープンチャンネルで沙霧に語りかけた。

『沙霧大尉に告ぐ。私は帝国斯衛軍、第19独立警備小隊の月詠中尉である』

その通信に沙霧は即座に答える。

『私は帝国本土防衛軍帝都守備連隊、沙霧大尉である。貴官らの熟慮の結果、聞かせて頂こう』

月詠は言葉巧みにウォーケンが提案した策をフォローしつつ、この作戦の成功率を上げていく。

正直、真那としては沙霧を騙すこの策は気乗りしないが、殿下と冥

夜の命が掛かっているために選り好みも出来ないし、これが最良の策だという事は自分自身も納得していた。

こうして、沙霧と冥夜との交渉が始まる。

沙霧は先ず、冥夜に自分達が蜂起したのは帝国に巢食う者共を討ち、殿下に政権をお返しする為に蜂起したと言う事を、しかし、冥夜は沙霧達がやっている事は彼等と変わらない。寧ろ、ソレよりも悪い行為である事を言い放つ。

暫くの話し合いの末、沙霧は投降の意思を固め、同士達の善き処遇を求めた。

このにて一件落着かに見えた次の瞬間、事件は起きた。

沙霧の横に控えていた衛士目掛けビームが飛び込んできた。

膝を立て控えていた衛士はビームの高熱に焼かれ蒸発し、管制ユニットごと熔かされ消滅したのだ。

全員が全員、事態が飲み込めなかった。

無線越しで怒号が飛び交う。

『ハンター1からハンター2！ 何故撃った！？』

『マーカーが消えた！？』

『一体何が！？』

怒号と混乱が錯綜する。

沙霧は混乱からいち早く立ち直り、無言のまま踵を返して祥鳳の管制ユニットに入って行く。

「な！？ 一体何が！？」

叫びながら啞然とする冥夜を武は強引に管制ユニットに押し込みハッチを閉めた。

「武！？ まだ、私の話は終わっては！！」

「もう、無理だ！！ 逃げるぞ冥夜！！」

真那は武達の前に躍り出る様に盾になった。

「白銀！ 早く“殿下”を逃がせ！！ 急げ！！」

対要塞級長刀を引き抜くと真那はそう叫んだ。

武は大急ぎで敏捷を下がらせる。

武は心の中で憤りをぶちまける。

（クソ、クソ、何だよ！？ 何でこんな事に！？ 旨くいったんだ！！ 何だよ！！）

武が大急ぎで後退している頃、戦場は退却戦に移行していた。

『早くルーキーを下がらせろ!! 邪魔だ!!』

アメリカ軍の一人が通信越しに叫びながらビームサブマシンガンを乱射する。

まりもは慌てて通信する。

『20700から207各機!! 後退だ!! 目標地点まで後退しろ!! 兵器使用自由!!』

まりもも訓練兵を守りながら自分の鳳翔のビームライフルで反撃する。

『よし! プランA第3フェイズに移行!』

ウォーケン は各部隊に命令を下し、悠陽を乗せた、月詠を除く19小隊が離脱に成功した。

『抜けた! ハンター3、行ったぞ!!』

『ようし! いただきだ!』

ハンター3はラプターに銃を構えさせ、ビームサブマシンガンを放つ。だが、それらのビームは敵に当たらない。

『畜生! かわされた!』

『馬鹿野郎!! そっちはルーキー共が!』

『正面、来てます！ 4機！？』

『やるしかないよ！！』

美琴はそう言って、自分と壬姫を鼓舞するが、どう見たって撃ちたくないと言外に言っている。

壬姫と美琴はビームを撃ったが、そんな覚悟がない弾などに当たってくれる程、敵は軟でもなければ弱くも無い。

確固たる信念があり、覚悟を持って挑む彼らに、撃ちたくないと牽制してみた射撃しかない壬姫と美琴の弾幕では怯ますことすら不可能だ。

まりもは射撃に気を取られていた祥鳳にビームを撃ちこんだ。

祥鳳はビームに貫かれ爆散する。

『よく持ち堪えた！ 2人共、下がるぞ！！』

『『は、ハイ！！』』

二人は返事をすると思座に後退する。

『ここは私達がなんとかするから、あんた達は、仲間と合流しなさい！！』

イルマ少尉は2人に命じ、戦線を構築しようとしていた。

その時、後方で爆発が起こった。

『……イルマ少尉のマークが、き、消え、た？』

『壬姫さん！』

壬姫の機体が啞然とし、止まってしまふ。美琴の声も無駄だ。

『あ、あ、イルマ少尉！？』

『壬姫さん、しっかりして！』

今もこの場では銃弾が飛び交っている。

『イルマ少尉~~~~~！！』

壬姫が堪えきれずに泣き出してしまった。

たとえ、一回会っただけでも、見知った人の死。

ソレを壬姫に受け止めろと言うには重過ぎる。

しかし、ここは戦場だ。そんな時間を与えてはくれやしない。

『壬姫さん！！ ココは下がろう！！ 下がらないといけないんだ
！！ 下がって！！』

美琴は何とか壬姫を宥め下がらせる事に成功する。

武は執拗な沙霧の追跡に必死で逃げていた。

相手は第四世代型最新最強の祥鳳で装備は高機動型兵装、片や武の敏捷は第三世代型で通常兵装でしか無い。

ラプターと同じ速度の敏捷では高機動型兵装装備の祥鳳とでは話にならない。

「クッ!!」

(あと、少し! そうすれば、合流できるんだ!!)

何とか機体の不利を補うにも限界がある。

如何すべきか考えていると冥夜が嗜める。

「タケル! 集中しろ! 私のことは気にしないでぞ!」

武はその言葉に覚悟を決めたその時だった。

沙霧の放ったビームが肩の装甲に当たる。

「おわあああ!?!」

「グッ!?!」

肩部の装甲損傷の文字が網膜投影される。

敏捷は地面に叩きつけられる様に転がる。

沙霧の祥鳳が近づいてきたが武と沙霧の間にビームがソレを阻む。

「少佐!？」

ウォーケン は武に命じる。

『訓練兵にしては良い動きだ。その調子で後退しろ!!』

「り、了解!!」

武は機体を起こして答える。

『20700、06に続け』

まりもの命令により全集警戒の陣形が組まれ移動する。

『傲慢なる米国人よ! これ以上、邪魔をするな!!』

沙霧はビームライフルを撃ち込みながら左マニピレーターでビームサーベルを引き抜く。

『月詠中尉に言われた通り、私は貴様達を少々侮っていたようだ。だが!』

ウォーケンはビームサブマシンガンを放つ。

『私も合衆国に忠誠を誓った人間なのだ! 祖国の誇りに懸けて! ここを抜かせる訳にはいかないのだ!!』

沙霧がビームライフルをリアスカートにマウントしビームサーベルを構える。

『殿下が御座す限り国は変わる！ 我が逝くは血塗られた外道！
引き返すこと叶わん！ なれば！』

ビームサブマシンガンの弾幕を回避、或いはシールドで防御しつつ
沙霧はウォーケンの懷に潜り込んだ。

そして、ラプターのビームサブマシンガンを切り裂き、使用不能に
する。

『何と！？』

『終わりだ！！』

沙霧はビームサーベルを引きラプターの管制ユニットに突き入れよ
うとした時だった。

上空から狙い済ました様にビームサーベルの先端にあるビーム発生
装置を狙撃される。

『『な！？』』

奇しくも沙霧とウォーケンは同じ反応をした。

両者とも機体を後方に下がらせる。

そしてレーダーに二つの新たな光点を捉えると網膜投影機でレーダ
ーに映し出された方角を見た。

其処には8枚の蒼い翼を広げ、白い装甲と細身のボディー、黄金の
輝きを放つ間接部、黄色い二つ目のセンサーと左右対称の4本のア

ンテナの戦術機が旋回し、静止している所だった。

その余りの美しさに戦場の誰もが見入ってしまった。

機体の美しさだけでない。

その操縦技能の美しさにも見入ってしまったのだ。

誰かが不意に呟く。

「ガン……ダム……」

と……

そして、ガンダムはオープンチャンネルで通信をする。

『此方、日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊、大和 綺羅です。クーデター軍に通告します。直ちに戦闘を中止し降伏を』

自由の剣は今此処に、蒼い翼を広げ舞い降りたのだった。

キラは内心悔やんでいた。

自分が開発した機体殺人の道具に使われている事に。

本来であればその剣はベータを打ち倒す物であり、人類の希望になる筈の物だった。

（間に合わなかった、でも、まだ最悪じゃない！）

キラは、今は邪魔な思考を振りほどく様に首を左右に振ると真耶に命じた。

298

「真耶、彼等の護衛を、僕はクーデター部隊の討伐を行う」

『解った。綺羅、頼むぞ』

そう言うとき真耶はテストメントを訓練兵がいる地点に振り向ける。

ソレを見送ったキラは瞳を閉じる。

そして、自分が慣れ親しんだ“力”を解放した。

自然と頭の中がクリアーになっていく感覚。

マルキオが以前言っていたSEED能力の開放を行った。

そして、キラはフリーダムを急降下させる。

『!?!? 撃て!!』

沙霧は我に返り、自分の部下に命じる。

しかし、フリーダムはビームやミサイルを悉くかわし、或いはビームシールドを展開して防ぐ。

『な、何だ、あの動きは!?!?』

『速い!?!? 目で追い切れない!!』

『手から光が!?!? 何だあの装備は!?!?』

口々に飛び交う困惑。

キラは急降下の速度を殺さずに両マニピレーターのビームライフルを腰に仕舞うと、ビームサーベルを引き抜き、2機の祥鳳の間をすり抜ける様にバレルロールし、頭部と左右マニピレーターを切断する。

余りの速さに白い光の閃光を残し通り過ぎた様に錯覚する2機の祥鳳。

『な!?!?』

『うそ……だろ……』

キラはビームサーベルを仕舞い、ビームライフルに持ち変えるとフリーダム目掛けて飛んできたミサイルを鮮やかな機動でかわし、通り過ぎたミサイル数機にビームを撃ち込む。

武達の上空で爆発するミサイルを見やるキラ。

跳躍して左右から近づく二機の祥鳳に左右のマニピレーターを広げるようにビームライフルを構え放つ。

右の祥鳳は頭部を破壊され、左の祥鳳は右の手を破壊される。

更に前後から近づく2機の祥鳳には機体の上部を捻り、ビームを撃ち込む。

「ック」

しかし、それでも攻め立てる祥鳳にキラはドラグーンをパージした。

8機のドラグーンはスーパードラグーン機動兵装ウイングの大型マウントアームから一斉に放出される。

ドラグーンは超高速でフリーダムの周囲を飛び回り、キラの意思のままに動き、敵のメインカメラやマニピレーター、足を破壊していく。

『な、何だと!?!』

『一体何が起こった!?!』

事態が飲み込めないクーデター軍の衛士は呆然とするしかない。

それもそうだ、いきなり、翼が超高速で飛翔したかと思えば、自分達は撃破されていたのだ。

訳が解らぬまま撃破される恐怖は尋常ではない。

ソレは、その様子を見ていたアメリカ軍衛士や武達207分隊、帝国斯衛軍、第19独立警備小隊にも伝染する。

『おい、おい、おい、おい、おい！！ 一体なんだありゃ！？』

『ジャパンの衛士は化物か！？』

『あれもガンダムなのか！？ にししちゃ、派手で出鱈目だなオイ！？』

アメリカ軍の衛士が訳が解らず叫んでいる。

武は呆然としながらも呟いた。

「アレが……ガンダム……リアル無双かよ……」

「私もあの様な機体が帝国にある事事態、知らなかった……」

武の呟きに“リアル無双”とは何だと思いつながらも冥夜も呟いた。

一方、帝国斯衛軍、第19独立警備小隊の面々はキラの実力に啞然とするしかなかった。

『アレが大和殿の実力……では、今まで抑えて戦っていたのか!?!』

異の言葉は全員の言葉を代弁するものだった。

正直、真那や他の3人はキラの事を頭でっかちの文官軍人で訓練も真耶が行う事が多かったし、戦術機開発の為、指揮官として戦場に出ることは少なかった。

噂話ではキラの活躍は聞いても実際に見るのと話を聞くのでは大きく違う。

どんなに強くても戦況を引っ繰り返す程の実力は有り得ない。

噂話に尾鰭がついたのだろうと考えていた。

しかし、いざ実戦でキラの本気を目の当たりにした4人は恐怖すら感じた。

真那は以前、斑鳩とキラについて話した事があった。その事を思い出す。

（以前、斑鳩殿はこう言っていたな……『あの者は恐ろしい。多分、帝国、いや、世界最強の衛士だろう』と……私は大和殿と余り関わりが無い故にその事を冗談か何かかと思ったが、こうして近くで見ると、成る程と頷きたくなる。これが紅蓮殿を軽くあしらう実力か……）

優雅に上空を飛び回り、華麗に敵を蹴散らす様は正に最強の名に相応しいと思えた。

沙霧はいよいよ覚悟を決めるしかなかった。

自分の部下をキラ達を留める防波堤にしたが僅か1時間と少しで突破されたのだ。

その防波堤をしていた部隊からも通信は殆どが返ってこない。

撃破された事は明確だった。

「これが……帝国の白い閃光の実力か……」

キラはマルチロックオンシステムを展開し、全ての敵をロックオンする。

「もう、これで終わらせる！！ いけ！！」

その言葉と共に13の砲口から吐き出される光の柱は敵に反撃の暇も与えず撃破した。

クーデター軍は沙霧を含めて3機になった。

ゆっくりとフリーダムを沙霧達に近づけるキラ。

沙霧を残し、2機の祥鳳はビームライフルを乱射するが、キラはそのビームの悉くを回避し、ビームサーベルを引き抜き頭部とマニユピレーターを破壊する。

『クッ！？ 大和 綺羅！！ 貴様も！！ 貴様も斯衛でありながら！！ なぜ米国の片棒を担ぐような真似をする！？』

沙霧は残っている右のビームサーベルを左で引き抜き、フリーダムに襲い掛かる。

袈裟懸けに振り下ろされるビームサーベルをビームサーベルで受け止めるキラ。

「……」

しかし、キラは一言も発さず無言で沙霧と対峙する。

『貴様も他者に隷属する事を良しとする日和見主義者か！？』

「……」

怒りと共に振り下ろされるビームサーベルを受け止めながらもキラは無言を貫く。

『如何した！？ 答えろ！ 大和 綺羅！！』

尚も苛烈に振るわれるビームサーベル。

『答えろ！！ 大和 綺羅あああああ！！』

次の瞬間、防戦一方だったフリーダムがビームサーベルを振るい、沙霧の祥鳳を吹き飛ばした。

『ナッ！？』

吹き飛ばされながらも体勢を立て直す沙霧。

しかし、その顔にはアリアリと恐怖が浮かんでいた。

「解る。貴方の言いたい事も解ります」

突如、無言から一転、静かにだが、力強く話すキラに誰もが聞き入る。

「それでも、僕は貴方を討たなければならない」

そして、キラは目を見開き、叫んだ。

「貴方達の行動の為に大勢の人が死んだんだ！！ 其処には貴方の想いとは関係無い人達も大勢いたんだ！！ 明日を信じて！ この国を大切に思いながらも貴方達に無念の内に殺された人だっている！ 貴方達のやっている事は唯の人殺しだ！！」

沙霧はビームサーベルを振るいながらキラに向かって叫ぶ。

『外道とてこれは皆に望まれた事!! 誰かがやらねばならんだ!!』

しかし、キラはこれもまた押し返す。

「自分の行為から逃げるな!!」

沙霧は体勢を立て直し叫ぶ。

『しかし、これは殿下の御為!!』

しかし、この言葉にキラがとうとうキレた。

「殿下の……為だと……」

そして、体勢を立て直した沙霧の祥鳳にビームサーベルを叩きつける。

沙霧の祥鳳は防御するがやはり吹き飛ばされた。

『グワアアアアア!!』

「巫山戯るな!! 殿下の為だと!? 貴方は何時、殿下の想いの代弁者になった!! ソレは貴方の傲慢だ!! 貴方は自分の罪を殿下に擦り付けて自分の仕出かした行為を正当化しているだけだろうが!!」

沙霧は衝撃で頭を打ったらしく額から血がにじみ出していた。

それでも沙霧は叫ぶ。

『今、我等がやらなければ日本帝国は何れ滅ぶ！！　今やらなくては、日本は米国の属国になってしまう！！』

「ソレは貴方の理屈だ！！　人の死で変わる国に何の意味がある！！
血で汚点を洗った所で、血で汚れるだけだと言う事を理解しろ
！！」

沙霧は体勢を立て直し、即座にキラにビームライフルを乱射する。

しかし、キラはその軌道の悉くを読み取り、ビームサーベルで弾き返していく。

『我等の先達は！！　日本をこのような国にする為に、死んでいったのではない！！』

「死者に囚われて世直しを語るなどと！！」

キラはビームライフルから吐き出されるビームをビームサーベルで弾き返しながら叫ぶ。

想いと想いがぶつかる世界に誰もが見入っていた。

クーデター軍や207の訓練兵が、途中駆けつけたスレイヤーズ中隊とヴァルキリーズが、19独立警備小隊が、そして、アメリカ軍すらもその戦いに見入っていた。

感情むき出しの戦いではあるが、その余りにも高次元の戦いに誰も

が見入っていた。

本来フリーダムは空中戦を得意とした機体だ。そのアドバンテージを放棄して沙霧の祥鳳と同じ陸戦で戦っている。

この事に真耶は思った。

（綺羅は沙霧の想いを受け止める心算だ。実際、綺羅は何でもこなせるオールラウンダーでも射撃や狙撃、砲撃殲滅戦が得意なはず……ソレをあえて接近戦のドッグファイトをするとは……）

お互いがお互い、ビームサーベルを引き抜き、激しく刃をぶつけ合う。

『日本は変わる！！ 殿下が御座す限り何度でも！！』

沙霧はそう叫びながらビームサーベルを振るう。

「貴方の気持ちも解るけど！！ 殿下は……！！ 殿下は今泣いてるんだぞ！！ 国民同士が殺しあって！！ 戦火で国を焼かれ！！ 憎しみが憎しみを呼ぶ今の状況を！！ 歯を食い縛って！！ 18、19の可憐な少女が！！ それに必死で耐えながら！！ 泣き言一つ言わず！！ 僕達大人に隠れて！！ 密かに独り！！ 肩を震わせて！！ 声を殺して泣いてるんだぞ！！ ソレを貴方は見たことがあるのか！？」

『な！？』

その場にいた沙霧は元より斯衛軍も愕然とする。

キラは、悠陽が泣く所を見た事を1度だけ見た事があった。

月を眺めながらさめざめと声を殺して涙を流す姿を。

キラは声を掛けようとしたが、必死の思いでその感情を押し留めた。

悠陽とて立場がある。ソレに今慰めても悠陽の悲しみを汚すだけだと考え、そっとしておいた。

そして思うのだった。

自分達大人が、悠陽に身勝手な期待や責任を押し付けて自分達の不出来を悠陽の責任にしているという事に。

大人として自分が情けなくなった。

年齢18、19の子供に責任を押し付けている自分が。

啞然とする沙霧。

「それを聞いてもまだ、殿下に責任を押し付けて逃げるなら!!」
僕は、貴方を討つ!!」

キラは一瞬にして、狭霧の祥鳳の懷に潜り込み、左のビームサーベルを逆手に持ち替え、下から上へ振り上げ、狭霧の祥鳳の右マニピレーターを切断する。

沙霧は残った左マニピレーターでリアスカートにマウントしてい

「終わった……けど、これからが忙しくなる……世界はフリーダムの事を執拗に知りたがるだろうな……言い訳、考えなきゃ……」

キラの眩きは朝焼けに吸い込まれ消えていった。

テストメントはゆっくりとフリーダムの横に着地し、真耶もコックピットからでてキラに語りかけた。

「殿下は御無事だ。綺羅、帰ろう」

キラは心配させまいと微笑みながら頷いた。

「うん」

キラ達は朝焼けに背を向けて飛び立つのだった。

キラ達が、引き上げてから5時間が経過した。

世界各国の反応は速かった。

国連は即座に調査委員会の委員を派遣し今回の事件調査に乗り出した。

国連としての表向きの調査は日本帝国の戦後処理の監視及び、国連軍の被害調査だが、裏の調査は第四世代型戦術機の戦闘データを夕呼から引き出す為の裏取引が目的だった。

この調査にはアメリカの調査委員が入っていた事からも、アメリカの意向が含まれている事は明らかである。

更に、最悪は重なり、フリーダムの戦闘映像がアメリカのペンタゴンから意図的に流出、ソレをマスコミが大々的に放送した事からフリーダムが存在は世界各国の知れる所となる。

ソレに関連して各国の大使館から日本政府に対して、フリーダムとキラへの質問状が外務省に多数届けられた。

各国のマスコミも駆けつけ、今回の事件の真相や調査の詳細、果てはキラの事についてまで逐一取材しようと日本帝国に詰め掛けた。

真実を伝えない事で有名なソ連共産党機関情報誌、『プラウダ』や『イズベスチア』までもが真実を報道しようとしている事からも今回の事件が世界の関心事となっている事が明らかだろう。

キラや真耶、果ては彼等の部下であるスレイヤーズにまで取材のオフアーが来るほどだった。

これはあくまで極秘として突っぱねた。

突っぱねる事が出来たのは政府がデータを餌に交渉を行ったからである。

正直、戦闘から帰ってきてようやく報告書と事後処理を終わらせたキラ達にとってはいい迷惑だった。

いい加減、戦闘の疲れと徹夜明けの眠気を堪えながらも『斯衛は帝国軍人の規範たれ』という心情を貫かねばならず、正直、今はこの心情が疎ましく思えた。

兎に角、共同調査を1週間後としてもらいキラ達は休息を得る事が出来た。

一方、日本帝国政府もゴタゴタしていた。

今回の事件の責任は明らかに沙霧にあるのだが、ソレを偶発する政

策を取った政府にも不満の声が膨れ上がる。

ハッキリ言えば、沙霧達の怒りは帝国国民の怒りでもあった。

政府閣僚たちはこの事件の政治的決着を図ることに苦心していた。

正直、このままでは政治的空洞が生まれる事は必至であった。

榊首相は閣僚達を見回しながら言う。

「今回の事件は我々政治家にも大いに責任がある。実際、大和殿が齎した資料やクーデターの情報を吟味し解決を行うべきだった。ソレを我々は、武官の戯言と切り捨てた。その結果が今回の事件だ。大和殿の忠告を無視して公邸に留まった者の全員が粛清されたのだから」

その言葉に国防省長官は静かに口を開いた。

「死傷者数の総合計は1321名、この中に民間人、クーデター軍、米軍、国連軍も含まれてだ。茶番の為にこれだけの死傷者だよ。我々の無能が引き起こした惨事がこれだ」

大蔵大臣も唸りながら言う。

「被害総額は約9兆円。この中に物質的、人員的も含まれてだ。倒壊した建物は公的機関を含めれば1895棟が戦闘で焼かれた」

榊首相はざわつく一同を治めると話し出す。

「最早、私達では帝国の政治の信用回復は不可能に近い。何せ、政

治的失態を軍事で取り返すなど政治家としては無能の証明だ。我々は自分達では何もやっていない。唯、軍に命令を下したただけだから。このクーデターは防げたクーデターだった。こんな事になる前に何か手は打てたはずだ。しかし、我々は何もしなかった。そして、事が起これば武力で解決、国民から無能の謗りを受けても反論は出来んよ」

その言葉に全員が押し黙った。

「ソレに、我が国民も理解しただろう。無能な政治家に国を託すと言う事は国を焼く事に繋がると」

押し黙る閣僚を見やりながら榊首相は口を開いた。

「そこで私からの提案だ。殿下に御立ちいただき、政に参加していただきたいと思う」

その榊首相の提案に閣僚はざわつく。

「榊首相！？ 何を！？」

「殿下に、ですか！？」

榊首相は手を翳しながら場を静めると真相を述べる。

「今回で解ったであろう？ 我々の慢心が今回の事態を引き起こし、米国にも付け入る隙を与えてしまった。決して犯してはならないミスだ。そこで、殿下に政治に参加していただき、我々の監視役として我々の行動をチェックしてもらう」

「し、しかし……」

尚も反論する閣僚に榊首相は睨みつけながら言う。

「我々は結局の所、殿下から国政を御預かりしているに過ぎぬ身。それを然も自分達の特権と勘違いしたからこそこの惨状であろうに。ソレを理解できず、尚も言い訳を重ねるなど無様が過ぎると思わなかね？ ソレにこの国は殿下と其処に住む日本帝国臣民の物ぞ！我等の所有物では断じて無い！！」

こうして、閣議で殿下に国政に参加していただく案が御前会議にて提出される。

世界各国では今回のクーデター事件に様々な思惑が錯綜していた。

アメリカでは今回の手痛い敗北と、第四世代型戦術機のパフォーマンスに恐怖した。

アメリカ兵器業界連合会は今回の戦闘映像を見て呆然とした。

特にラプターを開発、販売しているロックウイード・マーディン社は愕然として言葉が出なかった。

自分達が最強と世に謳ったラプターが“元”最強に成り下がってし

まっただのだから。

これは、アメリカ国防総省すらも揺るがすに十分すぎる激震だった。アメリカは早くキラにユーコンに来るよう打診するのだった。

一方のEU、欧州連合では今回の戦闘映像を見ながらキラがEUの最新戦術機コンペーションに提出した、『ザク』の技術購入を検討し始めた。

この、キラが開発したザクシリーズはC・E・世界と変わらないが、ナチュラルでも操縦可能な様、OSとコックピット回りを改良し、ビームトマホークをハルバートタイプに変更し、ビームトマホークと同じ大きさに変更、ハルバートタイプの刃の部分にビーム発生デバイスを取り付け、出力を変更する事で、ビームソードとしても使うことができる物をドイツ使用、グフのテンペストビームソードを採用したのをイギリス使用、テンペストの原理を応用して、先端が鉤爪状に湾曲させた物をフランス使用と大まかに分けた事と、ザク量産試験機からある腕部関節にある、シールド装着部分に、タイフーンの前腕部についている固定兵装を装備したのと、スラッシュウイザードのビームアックスがドイツはそのまま、フランスはフォビドゥンのニーズヘグ刀身を折り曲げるようにし、ビーム発生デバイスを取り付けられたのと、イギリスはアビスのビームランスを収納時には柄を短縮できるタイプに変更したのが主な改良点である。

EUとしては第四世代型戦術機のノウハウが無い為、日本帝国からの技術的協力を極秘裏に提供してもらおう密約を獲得した。

その為、欧州でザクウォーリアを50機が試験導入される事となった。

日本帝国はその国土を奪還すべく、その刃を着々と磨き上げていくのだった。

キラ達、日本帝国が12・5事件の事後処理に紛糾し苦心している頃、遠く、ヨーロッパは地獄門ではザクの試験が完了し、120機余りが先行配備されていた。

ザクの種類は一般兵がザクウォーリアを部隊隊長及びエース向けにはザクファントムが支給される。

何故、欧州連合の次期主力戦術機がザクになったかと言えば、帝国と欧州連合との間での政治密約が大きな要因だったと言える。

欧州連合はキラの開発した技術を得る為に日本帝国の政治的パイプを強める事に苦心した。アメリカに悟られる事無く、日本大使館に外交機密文書や大使を呼び寄せてのアフリカに眠る資源の関税緩和や撤廃などの交渉や、日本にある各国の大使館からの機密交渉を重ねた。

最初の頃は日本側も渋っていた。

理由としては日本帝国独自の力である『キラブランド』をタダ同然で提供し、日本の力が弱まるのではないかと言う懸念が議会や内閣閣僚にもあった。

しかし、キラが推し進める佐渡島及び日本本土奪還計画には欧州や国連の兵力は必要不可欠とも言えた。

まして、日本は先の12・5事件により優秀な軍人の多くを損失すると言う大惨事となった。

独力での佐渡島及び本土奪還が可能だが、その後が問題となる。

本国奪還が適えば日本帝国は南北アメリカやアフリカ、オーストラリアと同じ、後方支援国の責務を負わなければならない。

この、後方支援国とは、ベータにより占領された前線国家に軍事的、経済的な援助を義務付けられた国の事を指す。

アメリカの場合は兵員の派遣や戦術機などの兵器を各国に格安で販売したり、技術開発協力を行ったりする事が責務となる。

オーストラリアの場合は食料精製プラントを拡大、合成食品を各国に格安で輸出する。

アフリカの場合は関税付きの資源の中立的な販売が義務付けられる。

日本に各国が期待をしたのは日本帝国が後方支援国となり、技術開発能力の提供を行う義務に期待したからに他ならない。

アメリカも日本を防波堤代わりにしたいと言う思惑と、G弾使用による佐渡島ハイヴの排除と奪還を行い、日本を後方支援国とし技術を吐き出させる狙いがあった。

キラもこの事が解っていたからこそ、『佐渡島の奪還が完了するまでは帝国に残る』と言う事を明言した。

キラと榊内閣はキラの技術を先行して出すのを餌に佐渡島奪還の為の兵員の確保を推し進めたのである。

御前会議で悠陽の承認を得て行われた。

ソレが功を奏し、国連欧州宇宙軍の兵員の借受に成功した。

これで降下兵団の確保が十分整った。

陸戦は日本と極東国連軍との共同作戦な為、十分な兵員が確保できた。

キラが夕呼に提案したように国連の半分は確保できなかったが十分な兵数が確保できた。

参戦する欧州連合にはその報酬として極秘裏にザクシリーズ120機が支払われた。

報酬と言う側面を隠す為、キラと榊内閣、欧州連合各国は、先ず、キラがザクを欧州次期主力戦術機コンペに提出し、試験を重ねた結果、採用したと言う形を取った。

欧州も日本の思惑が解ってはいいたが、第四世代型戦術機のノウハウと『キラブランド』のライセンスという誘惑に引っ張られた形となった。

それほどまでに欧州は切迫した状況だったといえた。

その事を知らない、『地獄門』の兵たちは第四世代型戦術機が導入された事に大いなる喜びを露にする。

イルフリーデ・フォイルナーもその一人である。

イルフリーデはザクのコックピットの中で訓練を行いながらも呟く。

「これが、ザク……」

ビーム突撃銃をターゲットに乱射しながらイルフリーデはビームハルバートを引き抜き、高速軌道を行いながらターゲットに接近して上から下に振り下ろした。

規格から外れた、対レーザー蒸散膜処理を施した再突入殻をバターの様に簡単に何の力も無く切り裂いたのだ。

「す、凄い……ザク凄いよ!!」

ソレを横目で見ながらヴィルフリート・アイヒベルガーはザクファントムを操縦しながら思う。

（真に優れたる兵器と言う事は理解できる。タイフーン以上に陸戦を意識して作り上げられている。欧州の戦いは基本的には陸戦が多い。詰まる所焦土戦だ。キラ・ヤマトがソレを意識して設計、開発を行ったのだとしたら侮れんな……衛士としての技量だけでなく戦況を見る目もある日本帝国斯衛軍も中々いい仕事をする。しかし、政治的な思惑が其処に介入すると余り素直には喜べんな……我が軍は一体どの様な見返りを要求されるか）

イルフリーデ達が演習を終えて休憩室に來ると、其処にはフランス軍の第13戦術竜騎兵連隊が演習を終え、休憩を取っていた。

イルフリーデ達3人は開いている席に座り、それぞれお気に入りのドリンクを飲みながら今回の演習について話す。

「タイフーンのハルバートに比べて軽い印象を受けるわね。これならもっと素早い取り回しも可能だわ」

イルフリーデの言葉に2人は頷きながら答える。

「ああ、アレだけ重量が軽減されていれば乱戦での固定兵装の使用頻度は大幅に減る。よく考えられた設計だ。固定武装の使用は腕や足に負担をかけるからな」

ヘルガローゼの言葉にルナテレジアも頷きながら答える。

「そうだね。この休憩が終わると今度は『ウィザードシステム』のテストか……私はガナーウィザードだけど、2人は？」

その質問にヘルガローゼが先に答えた。

「私はスラッシュウィザードだ。イルフリーデは？」

イルフリーデも自分のウィザードを答える。

「私はブレイズウィザードのビーム砲タイプね。ミサイルは使いづ

らいから」

3人は暫く話し込んでいるとイルフリーデはふと疑問に思った事を口にした。

「ねえ、何でキラ・ヤマトはザクって言う名前にしたんだろう？」

イルフリーデの疑問にヘルガローゼは首を傾げながら言う。

「そう言われれば確かに……」

その疑問に答えたのはやはり、ルナテレジアだった。

「それはザクが略されて付けられた名前だからだよ。ザクの本当の名前は『Zodiac Armored Keeper of Unity』、“鎧に身を固めた黄道十二宮の統一の守護者”って意味だって。何でZodiac、黄道十二宮なのかといえば欧州連合軍徽章に描かれている12の星、ヨーロッパに伝統的に伝わる『完全と無欠(perfection and completeness)』の星を12の星座に見立ててヨーロッパを黄道十二宮とし、欧州奪還と言う決意の統一を胸にその決意の守護者たれと言う意味だって」

ソレを聞いた、ヘルガローゼは、呟くのだった。

「キラ・ヤマトも存外にロマンティストなのだな」

と。

横でベルナデット・ル・ティグレ・ド・ラ・リヴィエールはその話を聞きながら思う。

（キラ・ヤマトか、帝国、いいえ、世界でも最高峰の実力者。そして戦術機開発も行える天才、か……帝国では生ける伝説とまで言われる紅蓮大将を軽くあしらう天才。国の危機に馳せ参じ、將軍の敵を討つ最強の騎士と言ったところかしら？ それにしてもザクか……性能は最高なんだけど顔は気に食わないわね……）

フランスでのザクの評価は上々なのだがフランス人からすればザクの顔は気に入らないらしい。

ドイツ第三帝国を思い出すからと言う理由で頭部だけフランス流に改良する事が真剣に話し合われた。

そのロマンティストと言われたキラは帝都城に呼ばれていた。

キラは帝国斯衛軍の正装に身を包み、謁見の間に通された。

そこでキラは大札の位への格上げと少佐への昇進が言い渡される。

キラ達スレイヤーズ中隊も1階級上がることになった。

真耶には正式にテストメントガンダム受領する事になった。

そのナンバーもZGMF-X12AからTSF-12Aと改められ、名前もテストメントからイザナミとされた。

名の由来はキラと共に多くの戦術機を開発した事からキラを伊邪那岐命、真耶を伊邪那美とし、戦術機開発を国産み、神産みと見立てている。

また、伊邪那美は黄泉国の主宰神で別名、黄泉津大神と呼ばれ、ベータを黄泉路へ案内する物と言う意味合いも込められている。

キラ達は、とりあえず、自分達の基地に戻ると、自分達の部下に報告を行う。

報告を終え、キラ達は新たなストライカーの開発に着手した。

キラはPCと睨めっこしながら独り言を呟く。

「うーん……現場からの報告を見るとストライカーパックに柔軟な兵装選択の幅が欲しいと言う要望が多いね」

そのキラの独り言に真耶も反応する。

「ああ、ソレは私も思う所がある。エールならエールで統一されてるし、ソードならソード、ランチャーならランチャーと武装が決まっている。エールにランチャーの肩の兵装を装備できればいいのだが……」

「ソレだよ！ 閃いたよ！！ 真耶！！」

キラは真耶のその言葉にピンときたらしくキラは早速、作業に入る。そこでキラが開発したのは、“タクティカルシステム”というシステムである。

このシステムは戦場や作戦にあわせて、ストライカーの追加兵装である肩や腕にマウントされる兵装を装備できるようにした物である。組み合わせの例とすれば、エールにランチャーのコンボウエポンプルドを両肩に装備する。

ソードの左側にトードスブロック改を装備させるなどの幅を広げる事で柔軟な対応を取らせる事にした。

キラ達はこの新たなるシステムの開発と実験を開始するのだった。

うゝむ……ザクの名前もこじつけだし、イザナミにしても名前に
どうなんだろう？

名前を決めるのは難しい……

キラ達が事後処理を完全に終わらせた12月10日、キラ達スレイヤーズ中隊は夕呼に横浜基地でのタクティカルシステムのトライアル開催の為、準備を開始していた。

このタクティカルシステムの検討の為に国連や各国関係者が詰め掛ける大盛況となった。

帝国側は後の後方支援国の役割を担う時の為にライセンス料と技術料、兵装の著作権などの使用料を取る為と、国外に日本帝国の開発能力を示す意図があった。

各国はキラブランドの最新作がいかほど物かという評価と、ストライカーシステムやウィザードシステムに転用は可能かと言う評価、価格交渉の為、来日した。

その仲介として極東国連軍横浜基地は活用された。

そこでキラ達はユーコン基地で開発、実地試験を行う二つの機体を携えていた。

1つ目はアメリカ向けの機体、2つ目はソ連向けの機体である。

アメリカ側の機体はハイペリオンGにストライカーシステムのプラグを装備した。ハイペリオンFを、ソ連側にはイージスの可変機能

キャンセルし、P S 装甲を通常装甲にし、スキュラをオミット、バグパックのスラスターをストライカー搭載可能なプラグに切り替えたタイプで、頭部はV アンテナを取り払い、フェイスはダガー系に変更した。名をペルーンとした。

キラの考えた名の由来はハイペリオンの場合はギリシャ神話のヒュペリーオンから取られている。アメリカが世界で始めて戦術機を開発し、ソレが世に広まった事を、ヒュペリーオンは初めて人に天体の運動と季節の変化の関係を教えた事に見立てて名付けられた。

ペルーンの場合はスラヴ神話の主神で雷神である。名の意味は壊す、打つ者と言う意味があり、ペルーンは嵐としての雨だけではなく、農作物の実りを豊かにする慈雨をもたらす神であり、また雷をもって敵を退ける性格から戦争や闘争と結び付けられ、しばしば戦士の守護者として崇められた事から、ベータとハイヴを壊す者という意味合いと雷をもって敵を退ける者、或いは、ソ連に恵みの雨があらん事と言う意味合いから名付けられた。

キラと真耶はモニターで武達のトライアルを眺めながら話し合う。

「この中で一番タクティカルシステムを理解してるのはヤッパリ武だね。さすが国連衛士訓練校始まって以来の天才の呼び名は伊達じゃないね」

その言葉に真耶はムスツとしながら言う。

「しかし、操縦技術はまだまだ未熟。機体をあの様な無茶な負荷を与えるなど、長期戦必至のベータとの戦闘では機体が持たない」

その言葉に頷きながら言うキラ。

「確かに、ね、補給だって無限じゃない。特にハイヴ攻略戦は機体補給やメンテナンスなんて出来ない。あんなに次々兵装を使い捨ててたら何れは丸腰だね」

正直、武はゲームの延長線上で戦術機を動かしている。

ゲームでは弾薬補充の心配の必要も無ければ、国家が支払う訳では無いので兵装を使い捨てる事が出来るのだろう。

対して、キラや真耶の場合はどうだろうか。

キラの場合、ストライクに乗り込んだ時から兵装や部品、メンテナンスに必要な必要物品の節約を行いつつ、ザフト最強と名高いクルーゼ隊と渡り合ってきたのだ。

フリーダムに乗り換えてからも兵装や部品、メンテナンスに必要な必要物品の節約を迫られる事となった。ミーティア装備時はその火力の性質や戦況上、撃たなければならなかったが。

真耶の場合も日本帝国の切迫した台所事情や実戦での補給や糾弾に掛かる時間のシビアさなどを知っているが為、兵装を使い捨てには出来ない。

まあ、デットウェイトになる物なら迷わず捨てるが、それ以外なら

何とか糾弾に掛かる時間を節約したり、補給中は一人にならないと言う事を徹底して叩き込まれる。

戦場とゲームは違う。

まして、キラの世界の戦争はMSを主体にした戦争なのだ。

その差も如実に現れている。

キラの世界のナチュラルでも武クラスならゴロゴロいる世界なのだ。何せ、コーディネーターのエースとマトモに渡り合うナチュラルもいる世界で、武は良くて中の上、悪くて中の中と言った戦闘能力ではない。

更に、真耶をキラの世界のレベルで当てはめるなら、上の中位だ。

キラになれば世界最高峰の部類に入る。

因みにこの中にはアスランやクルーゼ、ガイやムウ、シンやレイなどが食い込んでくる。

この次元になるとハッキリ言って絶対的強者の部類である。

絶対的強者であるキラの視点からすれば真耶も武も然程変わらない実力差なのだ。

トライアルは順調に進んだ時だった。

突如、警報が鳴り響く。

「な！？ 警報！？」

真耶の驚きにキラは即座に真耶に支持を出した。

「真耶！ スレイヤーズに緊急戦闘配備！ 僕と真耶は自分の機体に！！！」

「了解！」

そう言いながら、キラと真耶は廊下を全力疾走で走りぬけた。

キラと真耶がフリーダムとイザナミに乗り込み、演習場に到着すると大惨事になっていた。

「クッ！ スレイヤー1からスレイヤーズ！ 撤退する戦術機を援護しつつベータを殲滅するぞ！ いいか！！ あの忌々しいクソ蟲共に、我々の怒りを教えてやれ！！！」

『了解！！』

キラの怒鳴り声にスレイヤーズも怒鳴るように答える。

ソレもそうだ、自分達の発表の場にこの様な大惨事になってしまったのだ。

お陰でトライアルは御破算である。

キラはドラグーンをパージするとマルチロックオンシステムを展開しフルバーストする。

全ての砲門からビームとレール砲の弾道が狙い違わずベータを焼き払う。

真耶もビームサーベル2本を引き抜き、ソレを連結させ双頭刃形態にしソレを自在に振り回す。

50体近くいたベータは瞬時に焼き払われ、切り殺される。

唯衣も神剣型攻撃兵装から対要塞級長刀改を引き抜き、横薙ぎに薙ぎ払う。

スレイヤーズの介入から戦闘は沈静化の方向に向かいつつあった。

その時だった、キラのレーダーに友軍とベータが戦闘をしているのを捉えたのは。

「な！？ トライアル中の機体が戦闘をしている！？ ジャイブスは切っているけど、囲まれているは」

そう言いながらキラはその地点に向かう。

「ぎゃあああああああああああああああああー!!」

強烈な振動と共に崩れ落ちる鳳翔。

仰向けに倒れ、要撃級の前腕が鳳翔のメインカメラを破壊する。

「いやだ……死にたくない……死にたくない……」

その瞬間、コックピットから怒号が響き渡る。

「いやだあああああああああああああああああー!!」

それが止んだ瞬間、コックピットハッチが火花を武に浴びせる。

「ひやあああああああああー!!」

そして、切り裂かれたハッチから太陽の眩い光が射し込む。

武はそれを両手で覆う。

外部から聞こえた音はスピーカーを通して男の声だった。

『大丈夫か!? 返事をしろ!! おい!!』

その瞬間、武は気絶したのだった。

武は破壊され自分が引きずり出された鳳翔の前に座り込んでいた。

其処に足音が響き渡る。

「ここにいたのですか？　白銀少尉？」

その声に振り返る事無く武は胡坐をかいて項垂れる。

それでも語りかけるまりも。

「少尉、『死の8分』と言うのを御存知ですか？　それは新人衛士が戦場で経験する最初にして最大の関門。多くの衛士はこの関門の前に夢半ばで散って逝きます。ですが、ソレを乗り越えた時、新米は初めて一人前になれる。少尉、貴方は大幅にその時間を乗り越え生き残りました。誇ってください。貴方が、貴方自身が生き残った事に」

その言葉に項垂れながら武は呟く。

「俺は……俺は最初、世界の為に戦うと息巻いて此処に来ました。でも、ソレは俺の思い違いでした。俺はクーデターの時、決断を迫られて何もしなかった。世界を救うと息巻いていながら目の前の命すら救えない。更に消えかける命を切り捨てる事も守る事も決断できなかった。その時でした、キラさんに言われた事を思い出したんです」

武の懺悔にも似た独白にまりもは問う。

「大和少佐が言われた事？」

武はまりもを背にして呟いた。

「『結局の所、行動だけが答えを得る事が出来る』です。自分はその時、臆病風に吹かれて何も出来なかったんです。自分の手を汚す事を恐れたんです……結果的に殿下は助かり、俺達も生き残る事が出来ましたが結果論でしかないんです。ソレに解ったんです。いや、今まで隠していた事が表に出たんです。俺が救いたかったのは人類や世界なんてデカイ事じゃない」

武は上を向いて涙を流しながら叫んだ。

「唯、周りの連中が、一緒に訓練して馬鹿やった皆のいる世界が俺の守りたかった世界なんです！！俺はソレを何時しか世界全体と置き換えてしまった！！デカイ目標にする事で俺の認識している世界が壊れるかもしれないと言う恐怖から目を逸らしていたんです！！」

武は左手で顔を覆いながら右手で握り拳をつくりソレを地面に叩きつけた。

「俺は怖かった！自分の世界が壊されるのが！！自分の知り合いが死ぬのが！！何もかも奪われてしまうのが怖いんです！！」

武は何度も何度も地面を叩きながら叫んだ。

「でも、俺は自分が臆病者だと認めたくなかった！！だから……逃げたんです……自分と戦う事から……俺は臆病者な上に卑怯者だ……皆だって、そんな恐怖を背負って戦っているのに俺だけ逃げてたんです……」

その言葉を最後に武は涙を流した。

「いいじゃない。臆病者で」

まりもの言葉に思わず顔を上げる武。

「いいじゃないですか。臆病者で……それを自覚できずに強がって戦っている方がよっぽど臆病者で卑怯よ。でも、貴方は、ソレを自覚したじゃないですか。ソレを自覚し、ソレに貴方は立ち向かおうとしている。今は駄目でも貴方は目を逸らさなかった。誰にもできる事じゃないわ。誇りなさい。白銀少尉」

武が振り返ったその時だった兵士級がまりものに接近していた。

慌てて武は叫ぶ。

「まりもちゃん!! 後ろ!!」

振り向くとまりもの後ろ1メートルに兵士級が迫っていた。

まりもは飛び退き腰からH&K、USPを引き抜くがもう遅い。

あわやまりもが喰われる時だった。

上空から轟音が響き渡り、兵士級をミンチにした。

武とまりもは慌てて上空を見上げると其処には、フリーダムが頭部機関砲から煙を出して飛んでいる姿だった。

『これで二度目だけど無事？』

外部スピーカーで呼びかけるフリーダムを見ながら武は本日2度目の気絶をした。

極東国連軍が即座に事故調査とトライアルに参加し、生き残った衛士達の事情聴取を開始した。

基地内にいたキラ達も事情聴取をされるはめになり、正直ウンザリしていた。

しかし、調査と事情聴取が進むにつれ、キラは今回の事件の詳細が見えてきた。

キラは説明のあった捕獲したベータのケージを調べる。

「これは……ロックが外部から切断されている。ソレにベータが抵抗した後が無い……何者かが意図的に逃したのか……」

更にキラは調査を始めていく内にある結論に行き着く。

更にキラは国連軍のPCにハッキングを開始し、情報を集める。

しかし、PC内にはその様な命令は存在しなかった。

（考えられるのは、敵勢力の妨害。そして、正式記録に残せない極秘任務のいずれか。アメリカやその他の軍が兵を派遣した形跡が無い。だとすれば、考えられる事は……）

その瞬間、キラは横浜基地内の全戦術機発進状況記録を閲覧する。

その時、出番が無いはずのA-01の部隊がベータ強襲1時間前に実弾の積み込み及び、ビーム兵装や駆動系のフルメンテを行っていたのだ。

これは可笑しいとキラは睨み、伊隅大尉に世間話をする様に見せかけて質問した。

その話の内容は至って単純な答えをキラに齎した。

そう、その命令は夕呼が命じた事を匂わせる内容だった。

キラは自分が集めた資料の内容と各方面の自己調査及び、聞き取りから1つの結論に達した。

「まさか……“彼女”は自分の基地を襲わせたのか……？」

キラは自分の独白を有り得ないと思いつつも、現状証拠や各調査内容、更に聞き取りから香月博士が今回の事件の黒幕ではないかと言う結論に至った。

しかし、キラとしてはこの考えを否定したかった。

（まさか、自分の基地を襲撃する事を画策する副指令が存在するのだろうか？　でも現状証拠や証言は全て香月博士に繋がっている……）

そして、キラはこのままでは埒が開かないと考え、ある決断をする。

「危険かもしれないけど……直接、本人に聞くしか道は無い……か……」

キラはそう一人呟きながら資料を更に集めた。

キラは資料を完成させ、夕呼にアポを取り、彼女の執務室に乗り込んだのは、あの事件から既に3日が過ぎた頃だった。

キラが彼女の執務室に入室すると、其処には武と夕呼が向かい合っていた。

「香月博士、今回は前置き無しで質問いたします。今回のトライアルでのベータの襲撃、アレは貴女が画策した事ですね？」

キラの直球の質問に武は驚きを露にし、夕呼の眉根は僅かに釣りあがる。

「な！？ キラさん何を言ってるんですか！？ 夕呼先生がそんな事する訳が無いでしょう！？ 自分の基地ですよ！？」

武の悲鳴にも似た否定に対し、夕呼の声は至って冷静に返ってきた。

「その根拠は何？ まさか、冗談とか言い出すなら斯衛の品格も地

に堕ちたわね」

そう言う2人にキラは懷からディスクを取り出し、夕呼の机に放り投じた。

プラスチックが机に当たりその音だけが室内に鳴り響く。

そのディスクを武は何だコレと疑問の目をディスクに向けた。

「僕が今まで独自調査で得た証拠の品です」

その言葉に夕呼は無言でディスクの透明なプラスチックケースからディスクを取り出し、自分のパソコンにソレを入れる。

ソレを小一時間ほど眺めた後、溜息を吐きながら呟く。

「全く……独自で此処まで調べ上げるなんてね……感心するわ。是非とも私の部下に欲しい位に」

その言葉に、武は状況を飲み込めないで彼女の名を呼ぶ。

「夕呼先生……?」

その言葉を皮切りに夕呼は語りだした。

この事件の真相を。

ソレを聞き終わった瞬間、武は夕呼に食って掛かる。

「夕呼先生!?! 何で!?! 何でそんな事を!?!」

武の質問に夕呼は冷たくあしらう様に質問を返した。

「アンタ、この基地は何？」

その質問に困惑する武。

正直言って今更な質問である。

「横浜基地ですよね？」

その回答に呆れながら夕呼は言い放つ。

その表情には怒りと呆れが入り混じった何とも言えない表情だった。

「そう、国連太平洋方面第11軍、横浜基地、極東国連軍最前線にしてオルタネイテヴ第四計画の最重要基地なのよ！？ ソレなのにこの兵士共ときたらロクに最前線である事を認識していないわ！
！ 自分達が戦場のど真ん中にあることを認識してない！！ コレがこの基地の実態なのよ！」

ソレを聞いた瞬間、武は怒鳴る。

彼の怒りも無理は無い。

基地の訓練場は大損害、死傷者多数、あわや恩師が死ぬ一歩手前だったのだ。

彼の怒りも正当な物だろう。

むしろ殴りかからなかっただけ紳士的だ。

「何故ですか！？ 先生！？ ソレを理解させる為だからってコレはやりすぎです！！ 多くの人が死んだんですよ！？ 多くの人が怪我をしたんですよ！！ まりもちゃんも死に掛けたのに何で！？」

その武の怒りの声を封殺するように夕呼が冷静に言い放つ。

「ソレが如何したの？ 悪いけど今の私達人類にはそんな甘ツチョロイ倫理観や正義感を振り翳してる余裕は無いのよ。私にもアンタにもね。私は人類勝利の為なら何でも差し出すわ。ソレが唯一の親友だろうとね。アンタは如何なの？ アンタは自分が掲げた人類勝利に何が出来るの？」

その冷酷な問いかけに武は言葉を詰まらせる。

正直、武にはそんな壮絶な覚悟は持ち合わせてはいない。

冷静にかつ冷酷に言い放つ夕呼の姿を武は巨大に感じていた。

しかし、此処で割って入った人間がいた。

キラだった。

「全てを差し出す？ ソレで勝っても意味は無いんですよ？ 戦争の勝利は明確な達成目的が存在します。ですが、目的を達成できても手元に残る物がゼロでは作戦は失敗です。正直、今回は払うべき対価の方が多い。何せ、優秀な極東国連軍の衛士と貴重な戦術機を損失と言う対価で得た物といえば『気を緩めるな。緩めればこうなる』という事くらいですか？」

ある意味皮肉といえるキラの言葉に鼻で笑いながら言う夕呼。

「ハン、安いモンでしょ？ この事件でいかに自分達が緩んでいたか理解したわ。アンタなら理解できるでしょ？ ここの指揮の緩み具合が」

その言葉に無言でキラは頷く。

キラの考えてとしたら明らかに此処の指揮は帝国軍の後方支援基地以下の緩み具合だ。

だからと言って貴重な人員と装備を犠牲にするのは正直、度を越している。

明らかにやり過ぎの今回の事件にキラは夕呼をたしなめる。

「何度も言いますが、今回の事件で多くを失いました。戦術機なら値段は高いですが生産は可能です。しかし、1度失われた人命は戻ってはこない。命は……何にだって1つだ」

「そうね……」

その言葉を聞きながら夕呼は椅子を回転させ左に向きながら言う。

「で？ アンタはそんな事を言う為に態々私の所まで来たわけ？」

その問い掛けにキラは答える。

それも武を一瞬見て。

「話が早くて助かります。僕の要求は1つ。白銀 武を我が日本帝国斯衛軍第一師団独立試験遊撃中隊への転属をお願いしたい」

その言葉に武は驚き、夕呼は驚きの表情をした。

「ちょ！？ キラさん！？ アンタ一体何考えてるんですか！？」

「へ〜……白銀を……その理由は？」

武の驚きを無視して夕呼はキラに質問した。
正直、話の話題の武が蚊帳の外ではあるが。

「その理由は武の戦術機特性とその操縦技法です。貴女にとっては“まあ、使える駒”程度の認識でしょうが、僕にとっては“優秀な人材”なんですよ。彼は……磨けば光りますよ、彼は。僕が保障します」

その言葉に夕呼はニヤリとしながら武を見て皮肉る。

「良かったわね、白銀。アンタ、世界最強の衛士からお墨付きがもらえたわよ？」

その言葉に武は戸惑う。

「ちょ、ちょっと夕呼先生！？ それにキラさんまで！？ 冗談なら笑えませんか！？ 俺なんかが世界最強の部隊が欲するなんて！？」

キラは微笑みながら言う。

「いや、これがホントだから笑えるんだよ」

その言葉に武は頭を抱える。

（いいのか！？ 帝国斯衛軍人がこんなに軽くて！？）

「白銀、行ってきたさい」

その言葉に武は驚きの声をあげる。

「夕呼先生！？」

「アンタはハッキリ言えば未熟よ。人としても、衛士としてもね。揉まれてきなさい。アンタは気付かなかったかもしれないけど、大和という時のアンタ、活き活きしてるわ。ただし、期間は5ヶ月。5ヶ月で男を磨いてきなさい」

その言葉に武は悟る。

今の夕呼には何を聞いてもはぐらかされる。ならキラの所に転がり込んで夕呼が何をしたいのか探る事にした。

「……解りました……行きます。5ヶ月で夕呼先生を驚かせるくらいの男になって見せますよ」

夕呼は武の変化に内心驚く。

（あのガキが、聞きたい事を飲み込んで私を観察しに掛かったか……一寸はマシになったじゃない。良いわ。私を驚かせて見せなさい。
白銀）

「期待しないで待っているわ」

そう言うのと夕呼は2人に退室を命じた。

キラと武は並んで廊下を歩く。

武は正直、キラの真意が解らず質問した。

「何で俺なんですか？　俺以上の衛士なら日本に幾らでも……」

その問い掛けにキラは明確に答えた。

「実力ならね。でも、君以上の発想と柔軟性を持った衛士はお目にかかった事が無い。ソレが理由かな。我が弟子」

その言葉に武は聞き返す。

「我が、弟子？」

キラは其処意地悪そうな笑顔で答える。

「香月博士を驚かせるんだろ？　なら手伝うよ。僕も彼女の驚く所が見たいからね」

そう言いながら武もニヤリとしながら答える。

「上等です。やりましょう。キラさん。いや、師匠」

「よろしい」

そう言いながらキラは武の頭を乱暴に撫でながら歩くのだった。

大変、お待たせいたしました。

ようやく書く事が出来ました。

正直、トータルイクリプスが終わってないのに書くのを躊躇いしましたが、

『そんなの関係ない！！ 書きたいから書く！！ 唯、それだけ』

と俺の魂が叫んだので書きます。

キラと武は車内で今後の事を話し合った。

「キラさん、俺を弟子にするのはいいんですけど、俺の立ち位置は？」

武の質問にキラは答える。

「公式記録では国連軍衛士訓練校から僕がスカウトした事になっている。だから、立ち位置としては僕の部隊に配属になるかな」

その言葉に武は納得するがこれがどれ程異例で異様か理解していない。

何せ、帝国斯衛軍に入隊するには先ず、斯衛軍士官学校に入校しそこで訓練を受けなければならない。しかも1年間、異例の特例としてキラは訓練校を僅か3ヶ月で全カリキュラムを収得している。しかもオールAと言う好成績で。

武の場合は輪を掛けて異常で訓練校すら入校しないのだが。

更に入校には自身の経歴は勿論、家族構成、家柄、門地、身分までも入念に検査される。

一般の衛士の場合は上官の評価から部隊での作戦内容と成果及び素行までも調べ上げられる。

集められた訓練兵は1から徹底的に厳しい訓練を課せられる。

先ずは対人戦闘から対戦術機戦闘、対ベータ戦闘、SPが講師をする護衛方法やカウンタテロ、国賓要人警護の方法、斯衛としての立ち振る舞い、殿下やその親族との接し方まで徹底的に叩き込まれる。

つまり、武家の家の者は兎も角、一般の衛士からすれば正にエリート部隊に入隊する為のプロセスを武は全てスキップしたといえる。

そこでキラは武に1ヶ月短期集中訓練を施す事にした。

そう、キラはかつて紅蓮大將がキラに施した訓練を武にやろうと言うのだ。

キラですら地獄と証する訓練を武が耐えられるかは甚だ疑問ではあるが。

兎に角、キラは自分の基地に戻った。

キラは武を更衣室へ案内すると黒い斯衛軍軍服を渡す。

「これに着替えて、生憎と武は一般兵からの選出だから黒ね」

そう言われ武は生返事を返して着替える。

武が着替え終わるのを見計らいキラは

「どうやらサイズはピッタリだね。行こう」

そう言うときらは踵を返して、武の前を歩く。

武は自分の格好に落ち着かないのかオドオドしく歩く。

暫く2人が歩くと扉が現れる。

キラはその扉をノックせずにドアノブを回し扉を開け放った。

そしてキラは臆面も無く部屋に入るとその瞬間、真耶が大きな声で命令を下した。

「気を付け！！」

その瞬間、室内にいる全員が背筋を伸ばした。

「敬礼！！」

その命令と同時に室内の全員が一斉に敬礼した。

キラは無言のまま敬礼し、中央を歩く。

武もオズオズと敬礼しながらキラの後ろを歩く。

そしてキラが全員の前に歩み寄ると敬礼をやめた。

その瞬間を見計らい真耶が号令した。

「休め!!」

その瞬間、全員が敬礼をとき、休めの姿勢なる。

キラは全員を見渡しながら訓示を述べる。

「諸君、先のトライアルでは大変ご苦労だった。“ベータ強襲”と言う予期せぬ事態に見舞われた物の、我等の成果はある一定は果たせたと確信している。各国は我々が開発したタクティカルシステムは奇しくも実戦で評価された事に他ならないからである。無論、慣れな国連軍衛士は死傷者を出す結果とになった事は非常に残念ではあるが」

キラはそう区切り目を瞑る。

キラを見ながら武は考える。

（うわーキラさんが隊長してる所、初めて見た……何時もキラさんって話すときは気安い印象があったけど隊にいる時は隊長してるんだ……）

「我等の次の任務は佐渡島ハイヴ攻略戦である。気を引き締めてかれ」

そう言い終わるとキラは敬礼をする。

「敬礼!!」

真耶も副隊長として敬礼を命じ、全員もそれに答えた。

全員が敬礼をとくとキラは武の肩を軽く叩いて全員に言う。

「さて、硬い話は終わりにして僕達の部隊に新人が1名補充される事になった」

そう言うときラは武を前にだしながら言う。

「白銀少尉、挨拶を」

その言葉に武は背筋を伸ばし敬礼しながら挨拶をした。

「本日より着任いたしました、白銀 武少尉であります」

そう武が自己紹介するとキラが簡単な武の経緯を説明する。

「まあ、武は国連軍横浜基地の衛士訓練校から僕がリクルートした。これでも彼は国連軍衛士訓練校史上始まって以来の天才だから」

その言葉に真耶以外の全員がどよめく。

そのキラの紹介に唯衣が戸惑いながらも質問をした。

「隊長、彼は斯衛軍訓練校は卒業してここに来たのでしょうか？」

「いや、即、配備」

その質問にキラは臆面も無く答える。

その回答にどよめきは更に大きくなる。

「オイオイ、本気かよ？　うちの隊長？」

「あの隊長だから本気なのでしょうけど……」

「訓練校上がりたての坊やがうちで使えんと？」

「あり得ないしょ？」

「でも国連軍の衛士訓練校ではダントツだったんでしょ？」

「そうらしいな」

「静まれ！！　馬鹿者！！　隊長の話は終わっておらんぞ！！」

そのどよめきを真耶が怒鳴りつけて沈める。

こうして武の自己紹介と各自の自己紹介が終わり、キラは武の訓練を自分自らが施す事を言うのと更に場が騒がしくなり真耶が沈める格好となった。

キラは武の教育の為の資料を集める為、資料室のパソコンからベータのデータと戦術機の歴史やその特性の資料をSDカードに落としていた。

その時だった、後ろから真耶が声を掛けて来た。

「そなた……何を考えておるのだ？」

その真耶の問い掛けは明らかにキラに対する怒りにも似た声だった。キラはそれに構わず涼しい顔をしながら言う。

「何、とは？」

質問を質問で返され真耶は激昂した。

「そなた、白銀をこの部隊に入れる為に無理をしたであろう！！
紅蓮大将から聞いたぞ！！ そなた斯衛の決まりを破る為に態々殿下にまで掛け合ったそうではないか！？ 明らかに越権行為なのだぞ！？ 良くて軍籍剥奪！！ 悪くすれば武家の位まで剥奪されても可笑しくない行為だ！！」

「うん、そうだね」

キラはその激昂にも涼しそうに答える。

もう、真耶からすれば考えられない行為だ。

何故、訓練生風情に帝国最強の衛士にして最高の戦術機開発者であり、斯衛の少佐の地位にあり更に大礼であるキラが自分の未来を閉ざしてまで白銀 武を斯衛軍に迎え入れるメリットは何処にあると言おうのだろうか。

ハッキリ言えばキラが何のお咎め無しなのは今までの武勲と帝国に齎した技術革新に尽力したからである。

更に言えば“大和 綺羅”と言う英雄をそんな理由で軍籍剥奪できるほど帝国もゆとりが無いからに他ならない。

「解っていないながら何故!？」

その問い掛けにキラは答える。

「彼の柔軟な発想とあの操縦技法かな？ 彼は何れ日本帝国に返却される人材だよ。更に彼は香月博士に最も近い人間。其処を利用して僕達の開発した兵器を国連安保理の無駄な手続きをスキップして前戦に配備できるかなと考えてね。彼を極東国連軍の兵装オペレーターとしての役割を担わせたいのが目的だよ。なにせ佐渡島攻略戦が近いから」

その言葉に真耶は冷静な軍人としての思考が働く。

「成る程、態々我々が出向かずとも白銀を窓口として置く事で国連軍の戦力を引き上げる事が出来るか」

真耶の回答にキラはほぼ正解だったのか少しだけ付け足す。

「まあ、真耶が言った通りで大体は合ってるかな。全問正解では無いけど……こちら側の情報漏洩を最小限に抑えると共に香月博士の情報を引き出す。断片的ではあるけどより多くの情報を得る事が出来るよ。更に僕達が出向く手間も省けて開発に少しは専念できるよ。何せ極東国連軍の兵装指導は武に一任するのだから……この時間の余裕を利用して帝国軍の強化に専念する事が出来る。しかし、あの香月もその事は解っている。後はさじ加減だろうね」

真耶は呆れながら呟く。

「そなたは……中々腹黒いな……」

その言葉にキラは微笑みながら答える。

「まあ、武の才能に惚れたと言うのも理由の一つだけだね。見てみたいよ。彼が何処まで強くなれるのか」

「そなたが鍛えるのだろ？　なら、才能が無くとも最良の衛士にはなれる」

そう言いながら真耶はキラの肩にそつと手を添えて耳元で囁く。

「私を心配させてくれるな……綺羅……そなたは時々無茶をする。私だけなのだぞ？　そなたをこの世界で1番心配しているのは」

キラも肩に置かれた真耶の手を握りながら言う。

「ありがとう……真耶……僕は、幸せだよ……」

その言葉に真耶は頬を赤く染めるが次のキラの言葉で落ち込む。

「君みたいな副官がいてくれて」

グラウンドにキラの怒声が響き渡る。

「遅い！！　その程度では！！」

そう言いながらキラは2本の小太刀を巧みに操りながら武を叩きのめす。

勿論、模造刀だが喰らうと痛いし、最悪、先端が突き刺されれば死ぬ可能性だってある。

「ヒッ！？　クソ！！　マジかよ！！」

武は叫びながらも太刀の模造刀を振るうが当たるところか掠りもしない。

彼は1時間、ブツ通しで剣術の訓練をしていた。

最初の内は手加減していたキラだったが、武が余りに粘るものだから少しずつ力を出していった。

「フッ、それではな！！」

キラはそう言うとも模造刀を武に叩きつけた。

「グッガッ……」

武は呻きながら地面に顔を埋め悶絶した。

こうして、剣術の訓練は幕を閉じた。

キラは武を鍛えるに辺り、重きを置いたのは実戦での感覚を叩き込む事だった。

それ故、殆どがシミュレーターの訓練を行わず、実機での訓練を課した。

今日もキラと武は祥鳳に乗りこみ、向かい合っていた。

その様子をモニター越しにスレイヤーズの全員が眺める。

キラは武に今回の模擬戦の意味を説明する。

「今回の模擬戦の趣旨は祥鳳の性質を実戦で理解してもらう為に行う。質問は？」

『無いです』

その問い掛けに武は明確に答える。

それに満足したキラは頷きながら光に命じた。

「よろしい。高野、管制よろしく」

そう言われ、淀み無く光はキーボードをタイプしながらソレに答える。

『了解、演習システム起動を確認、演習を開始して下さい』

その瞬間、キラも武も同時に動き出す。

ストライカーパックは装備せず、ノーマルの祥鳳のままだ。

それでも第4世代最速の機動性は伊達ではない。

その機動性に武は振り回される形となった。

『クッ！？』

武のうめき声がインカム越しにキラの耳元に流れ込んでくる。

「機体の性能に頼るな！！ だから振り回される！！」

そう言いながらキラはビームライフルをセミオートで撃ち込む。

武は何とか得意の3次元機動を活用して回避した。

『クソ！！ これ以上は……やらせるか！！』

武はそう激昂しながらビームライフルを乱射する。

しかし、キラにしたら温い射撃だ。

軽く回避されてしまう。

「遅い!! そんな射撃では!!」

そして、キラは高速機動を生かした接近を開始しながらビームサーベルを引き抜く。

武もビームライフルを投げ捨て、ビームサーベルを引き抜く。

キラが左から右に横薙ぎにビームサーベルを振るうが武は倒立反転でソレをかわし、キラの後方を取る。

『もらった!!』

そう言いながら武は袈裟懸けにビームサーベルを振るう。

しかし、キラはソレを正確に読み取っていた。

「甘い!!」

そう言いながらキラは左マニピレータを右腰にやり、逆手でビームサーベルを引き抜くと振り返り様に武の斬撃を受け止めた。

『何!?!』

これには流石の武も驚いた。

何せ、自分が絶対の自信の元に放った必殺にして渾身の一撃を難無く受け止めて見せたのだ。

「戦場で止まるなど!!」

『クソ！？』

キラはそう叫びながら右のビームサーベルを武の管制ユニットに突き入れる。

武はギリギリの所でバックステップでソレを回避して見せた。

『白銀機、管制ユニット小破、戦闘継続に影響無し』

光の声が二人のインカムから聞こえてくる。

その頃、スレイヤーズの面々は驚きを持ってその様子を眺めた。

「オイオイ、あの隊長と3分以上やり合ってるぞ」

正樹はおどけながらも驚きの声は隠せない。

「本当に訓練校出たての新人少尉様か？」

佑もまた驚きを隠せない。

「滅茶苦茶だがいい動きだ。あの隊長相手に3分以上戦って小破だけなんです。いる所は賞賛に値する」

総司もまた、武を賞賛した。

「だが、アレでは機体の駆動系が持たない。長丁場のベータ戦闘では聊か無理があるな」

優美は腕を組みながら武の操縦の荒さを指摘した。

「でもでも、あの隊長相手にそんな事考えながらは流石に戦えないかな……白銀君はよくやってる方だよ」

舞はそう言いながら武を弁護する。

「だが、それでも荒い。あんな使い方したら班長に怒られるわね」

苦笑しながら香奈はそう言う。

「流石は隊長が引っ張ってきた人材と言った所か……」

玲人もまた感心しながらその様子を眺めた。

「ま、何にしても即戦力は有難いね。何せ俺達実働部隊じゃん？優秀なヤツは大歓迎だね」

慎二は嬉しそうにウンウンと頷きながら言う。

「経験を積んだら俺達以上だな。全く、才能あるヤツが多いねここは」

功はそう言いながらも嬉しそうにその様子を見やる。

そう言う中尉達を見ながら唯衣はモニターに視線を戻した。

（全くもって面白い衛士だな。国連にも中々の手練はいるものだ）

そう感心しながらその様子を見やる唯衣の左側で真耶はキラに対して呆れていた。

（全く……遊びが過ぎるぞ……そなたなら軽く秒殺だろうに……幾ら新人の力を見極める為でもそれはやり過ぎだ）

事実、キラは鼻歌交じりで武は肩で息をする程疲れきっていた。

ある意味、キラも人が悪い。

武が勝てそうで勝てないラインで力をセーブしつつ戦っているのだ。

ここで真耶はある事に気が付く。

「そう言えば……綺羅と白銀の声……何処と無く似ているような……」

その呟きに全員がハツとしたのだった。

武がスレイヤーズに入隊してから早や2ヶ月が過ぎた。

武自身、自分が成長している事に嬉しく思う反面、キラと戦えば戦う程、自分とキラとの実力差が天と地ほど差がある事を思い知らされる毎日だった。

武は余った時間や休暇さえシミュレーター訓練に割り当て自分の機体特性を把握すべく必死になっていた。

自分のログを見ながら武は歯噛みした。

「クソッ！ 何だ？ 俺とキラさんの違いは何だ？」

武は必死になって自分の動きとキラの動きを確認するが何も掴めない。

その時、武は自分がかなり力んでいた事を知り、一旦、空気を肺一杯に吸い込んだ後、大きく吐き出した。

「駄目だ……これじゃあ何しても上手くない……息抜きでもするか……」

そう言いながら武は立ち上がりP Xにてコーヒーマドキを飲むべく歩き出した。

武はPXからコーヒーモードキを持って来てソレを飲みながらボンヤリと自分の機動ログを眺めた。

「しかし……この祥鳳ってマジ凄いよな……俺が今までやりたかった事が簡単に出来ちゃう。そうだ、息抜きもかねてバージャンンの機動が出来るか試して見るか……」

武は思い立ったら吉日とばかりにコーヒーモードキを一気に飲み干し、紙コップをゴミ箱に投げ捨てるとシミュレーターに乗りこむ。

武は取り合えず訓練メニューを自由動作訓練に切り替え色々遊んでみた。

武は宙返りをしながら後方に足を突き出してみる。

右足の足の裏のスラスタから力強い光が漏れ出し、祥鳳は右足を突き出したまま真っ直ぐ跳んでいく。

「ワ〜オ！ スッゲ〜。何か空に壁があるみたいだ」

そう言いながら武はその体制から上空で三角跳びをしてみる。

「上空で三角跳びが出来るのか、コイツ!？」

武は驚きながらも何だか楽しかった。

その何が楽しいのか武自身にもよく解らなかったが凄く楽しい。

この世界に放り込まれて以来、余り感じなかった。

いや、元の世界にも感じたこと無い何か武の心を擦る。

本心から笑みが零れる。

今の武は正にそんな感じだろう。

「マジ楽~~~~~し~~~~~い~~~~♪」

武はついに鼻歌まで飛ばしてしまう。

とうとう武は上空を飛び跳ねながら踊り出した。

「凄く……楽しいです……プックククク……」

武は以前、霞が言った台詞を吐き出しながら笑い出す。

余りに似てない自分の声音に笑い出す。

最早、笑いの循環機能が作用した。

端から見たら怪しさ大爆発なのだが、武自身は楽しくて仕方ないのだ。

その時だった。

武の頭の中に何かが閃いた。

「そうだ!! これをキラさんとの演習で使って見るか……」

武は悪戯小僧の様な笑みを浮かべてほくそ笑みながら実戦に耐えられる様な機動をピックアップしていくのだった。

翌日、キラと武は祥鳳に乗りこみ実機訓練を行っていた。

「武の様子が何か変だ……あえて大人しい機動をしている……何かをする気だな」

キラはそう思いながらビームライフルを管制ユニットに撃ち込む。

その時だった、武は待つてましたとばかりに体勢を低くして上空に跳び上がる。

「それじゃあ、ただの的だよ」

キラは呆れながらビームライフルで狙撃する。

しかし武の祥鳳が自分の想像を超える機動をして魅せた。

何と武の祥鳳は三角跳びをしながらキラの放ったビームを回避して見せたのだ。

流石のキラもこれには内心驚いた。

（理論上は可能だけど……ソレを本気でする衛士は始めてみた……）

キラはそう思いながらも武が何処まで出来るのか試したくなった。

キラは今度は三角跳びでの回避コースを読んでビームライフルを撃つ。

しかし、武は射線を反らす様に機体を回転させ回避すると今度は横垂直に飛び退きながらビームライフルを撃つ。

キラは難無くかわすが内心は驚きの連続だ。

（凄いね……僅か2ヶ月でこの機動。更に僕の世界にいないタイプの戦闘機動が可能なんて……国連衛士訓練校始まって以来の天才の名に偽り無しかな？）

キラは密かに微笑みながら徐々にその速度を上げていく。

その光景をモニター越しに見ていたスレイヤーズは啞然としていた。

「オイオイ……何の冗談だ……戦術機が……あんな事出来るのかよ……」

慎二は啞然としながらその様子を見つめた。

「正直……変態すぎるぞ。武の奴……」

正樹もまた啞然としながら驚きを露にする。

全員は黙ってはいたが皆、大体は同じ事を考えていた。

『コイツは変態だ。間違い無い』

と。

真耶はその様子を眺めながら冷静な分析を開始した。

（白銀の奴の機動……アレは第四世代型の特徴である脚部スラストの多様にある。本来なら跳躍中の機動補正に使われる脚部スラストを瞬時に最大出力に切り替え、足場にしたのか……しかし、幾ら第四世代型最高最強の祥鳳でも推進剤の容量からして10分が限界……当然だ……あんな無茶苦茶な機動、もつ訳が無い。それに比例してあんな無茶な機動をすれば管制ユニット内部は途轍もないGが衛士を襲うだろう）

真耶の予測とは裏腹に武は無茶苦茶なGの中で笑っていた。

（スゲエ！！ 機体が思い通りに動く！！ したい事が、やりたい事が、出来る！！）

そう思った瞬間だった。

突如、耳元でアラームが鳴り響く。

「な！？ クソ！！ マジかよ！？ 脚部の推進剤切れ！？ 折角ここまで来たのに！？」

その瞬間、キラが放ったビームが管制ユニットに直撃、訓練は終了した。

武との演習が終了したキラは武に精密検査を受けさせる為、帝都医大へ行くよう命令した。

そして、キラは武の乗った祥鳳の全データを解析していた。

「そんな……信じられない……」

キラはそう呟きながらも一度データを入念に調べ上げた。

しかし、調べた結果は同じだった。

「信じられない……若干、アドレナリンの数値は高いが許容範囲内だ。にも関わらず、脳波は比較的安定してるし、肉体の疲労も許容範囲内？」

キラは次に整備部の所まで行き、班長と話す。

その時、班長が語った事に驚きを露にした。

「隊長、白銀と一体どんな訓練をしたんです！？ 隊長の祥鳳は修理可能許容範囲内ですけど、白銀の奴が動かした祥鳳はもう使い物になりませんよ！！ アッチコッチがイカレてて手の施しようが無い。機体バランサーはガタガタ。骨格フレームはアッチコッチが変な方向に歪んでる。マッスルパッケージの電子線はズタズタ。スラストは脚部がオーバーヒート。他のスラストもオーバーヒート寸前。挙句の果てに機体保護の為にリミッターが解除されてる。何があったんですか！？ 新品の祥鳳があそこまで痛めつけるなんて

ただ事じゃないですよ!! 何せ突撃級の突進にも耐えられる様設計されてるんですよ!? 何があったんです!? これじゃあオーバーホールするより新品を買った方が安くつきますよ!!」

班長はキラに怒鳴る勢いで質問した。

キラは今回の記録を班長に見せる事にした。

一部始終を見た班長は天を仰ぎながら呟くように言う。

「隊長も化けモンですけど白銀も負けて無いですね……上空で三角跳びする衛士がいるとは……整備人生30年の俺でも予測の外ですよ……それは兎も角、白銀の奴は大丈夫ですかい? あんな機動した後だ。Gで体にガタがきてないといいんですけどね……機体は修理すりゃあ使えますけど人はそう言う訳にはいかんですから」

その言葉にキラは肩を竦めながら苦笑して言う。

「ええ、ピンピンしてますよ。余りに元気なので帝都大学医学部に精密検査を受けさせました」

その言葉を聞き、班長は口元をヒクつかせながら唸る。

「ハハ……変態ここに極まれり。ですか……」

キラは苦笑しながらもソレを否定できないでいた。

キラは次に帝都大学医学部に向かう。

「キラさん。遅いですよ!」

武が剥れながらキラに文句を言うがキラはソレを苦笑しながら迎える。

「どうだった? 検査の結果は?」

その言葉に武はニンマリしながら答える。

「何処も異常無し。医者から太鼓判おされました」

武の言葉に内心キラは『本当に武はナチュラルだろうか?』と言う疑問を抱きながら武を車内に待機させ、主治医の所まで向かう。

主治医に武の精密検査の結果を聞かされた時、キラは驚きの声を上げてしまった。

「全く異常無しですか……?」

その言葉に主治医が沈黙したまま頷いた。

「正直……ありえませんか……何と説明したらよいのやら……医師生活10年の私からしても彼様の例は初めてですよ……対G能力が他の一般的な衛士と比べてずば抜けてるんです……あえて表現するなら……『衛士になる為に作られた体』と言った所でしょうか……」

その主治医の言葉にキラは内心本当に驚いた。

（資料を見る限り、武は対Gだけ見ると並みのコーディネイターを超えている……反射速度もだ……でも、処理能力や分析能力は平均的なナチュラルと同じか少し上くらいか……）

キラは内心唸りながら今後、武をどう育てるべきか苦心した。

キラ自身、武がどのような衛士になるのか検討もつかなかった。

実際、武の才能や資質はキラの想像の斜め上を行くものだった。

そんな時だった。

キラにとっては不謹慎なのかもしれないが丁度良かったのかもしれない。

武の本当の意味で実力を測る場が与えられた。

そう、武の正式では初めての、実質では2度目の出撃が訪れたのだ。

ソレは突如として何の前触れも無く遣って来た。

キラと真耶がスレイヤーズの衛士とCP将校の光を集めての新たな中隊運用案を検討している時だった。

突如として警報が基地内にけたたましく鳴り響き場を騒然とさせる。

キラはその大きな警報に勝るとも劣らぬ大声で即座に命令を下した。

「総員、第1種戦闘配備！！ 強化装備に着替えて各機にて待機！
ブリーフィングは全員着座後に行う！！」

『了解』

全員が敬礼をしながら慌しく、それでいながら効率良く動き出した。

武も古株に負けず劣らずの反応を見せる。

全員が無言のまま走り抜ける。

光は斯衛軍第一師団の基地地下にある作戦司令室に滑り込み、インカムを耳に引っ掛けながらキーボードを素早くタイプする。

キラの速度には劣るがそれでも素早いタイプでキーボードを叩いた。

キラ達は無言のまま更衣室に滑り込み、斯衛の軍服を素早く脱ぎ捨て、強化装備に手早く着替えると各自の機体に取りこんだ。

キラはストライクフリーダムのコックピットに乗り込むと素早くなれた手つきでOSを起動させる。

真耶もイザナミに乗り込み、これまた、なれた手つきでOSを立ち上げる。

武や唯衣を含むスレイヤーズ全員が祥鳳に乗り込み全シークエンスの機動を確認した。

全機の機動を確認すると光が全機に通信を開始した。

『スレイヤーマムよりスレイヤーズへ。1102時より突如、佐渡島より旅団規模のベータ群が帝国領土に進行を開始、これを緊急展開を受けた本土防衛軍守備隊1個大体がこれに応戦。現在、戦場は旧燕三条へ移動、信濃川を挟んでの防衛線を展開しています』

その内容にキラは考える。

（ベータの進撃速度が速い……いつもなら中ノ口川で防衛線を展開できる筈だ……第一防衛ラインを割られるとは……海軍の攻撃の網を掻い潜るのも数が多すぎる……）

キラは思考を取りやめ即座に命令を下す。

「諸君、聞いての通りだ。旧国道289号線を通り進撃を開始する。信濃川の防衛ライン到着後、半包围陣形にて全力射撃を慣行。防衛線を押し上げる。防衛線崩壊の場合は残存勢力を糾合と同時にH Qに増援要請を行いつつ即座に防衛ラインを旧国道290号線まで後退させる。質問は？」

キラの問い掛けに無言を貫く一同。

「無いならいい。ソレと武？」

キラは武に通信を送る。

『は、ハイ!!』

武は慌ててその通信に答える。

その声は何処か震えていてきこえない。

何時もの自信に満ち溢れた声はなりを潜めていた。

キラは内心溜息を吐きながら武にこう言った。

「白銀少尉。君は僕の直援だ。センターを任せる。背中では気にするな」

その指示に真耶以外は驚きの声を上げた。

それもそうだ。

そもそもキラの直援は真耶のポジションだ。

つまり、スレイヤーズにとってキラの直援イコール部隊ナンバー2の称号と同じ事なのだ。

斯衛軍の中でキラの戦闘技能や戦闘機動に着いて来られる衛士が紅蓮と真耶しかいないと言う事がそれに拍車を掛けていた。

ソレを訓練校出たての新人少尉様が担当する事などありえない。

しかし、部隊長であるキラが下した命令に異を唱える者はいない。納得はしていないが。

「さて、諸君。戦争をしに行くぞ」

元の世界でバルドフェルドが言った言葉を部隊員全員に向かって言

うキラ。

『了解！！』

その言葉を全員が決意を持って答える。

戦争が始まる。

そう武は本能的に感じ取った。

穏やかなキラの声とは裏腹にその内に潜むモノは得物を狩る狩人を武に連想させた。

スレイヤーズの了解のコールでさえソレを連想させる。

以前、夕呼から聞いた事がある。

『アイツ等は日本帝国全軍の中で最も洗練された戦術機機甲部隊だ』
と。

その言葉に嘘偽り、看板倒れはありえない事を武は本当の意味で理解した。

戦場は膠着状態が続いていた。

『ランダム1よりHQ！ 援軍はまだか！？ 我が部隊の弾薬が50%を切った！ 数が多すぎる！！』

その通信にHQは彼等に朗報を告げる。

『HQよりランダム1。現在、スレイヤーズが1分後に到着するそれまで現状を維持しろ』

その朗報に意気消沈のランダムズが息を吹き返す。

『了解した。ランダム1からランダムズ、聞いたか！？ 野郎共！
！ 帝国最強部隊が投入された！ ソレまで死ぬんじゃないぞ！！』

『了解！！』

キラは眼下に広がる戦場を見やりながら命令を下す。

『スレイヤーズ1より各機に通達。作戦プランはAで行う。繰り返す。作戦プランはAで行う』

『了解！！』

全機淀みなく答えるとそれぞれ作戦に沿って任務をこなしていく。

この時、武は思った。

（キラさんを司令塔して部隊が一つの機械に早や代わりした……しかもその速度が尋常じゃない……これが……帝国最強の部隊の動き……）

武がそう思った時、キラが武に命令を下す。

『武！ 突っ込め！！ 後方を気にせず全力で！！』

その通信により武は覚悟を決めた。

「了解！ 隊長……」

武の問い掛けにキラは答える。

『何だい？』

武は引きつった笑い顔をしながらキラにこう言った。

「突っ込むのは構いませんけど……アレを全て殲滅しても構いませんよね？」

その問い掛けにキラは目を丸くして驚いた後、突如として笑う。

『プックク……震えながらもそれだけ大きな口を叩けるのなら君はもう衛士だ。上等だ。いいよ。訓練生で『死の8分』を乗り切ったんだ。自身の恐怖を飼い慣らしてみせろ』

「了解……」

そう言い武はペダルを全開に踏み込むのだった。

キラは武を援護しながら両手のビームライフルを乱射していく。

その中でキラは武とスレイヤーズを総体的に見ながら思考する。

（武は実戦2度目とは思えない働きだね……ストームバングード向きだね……教えた通り、エールの高軌道を生かしながらも機体に負荷を掛けない様に操縦している。でもまだ遠近の兵装選択や攻撃と回避のバランスが悪いね……攻撃一辺倒になりがちかな。真耶は遠近での攻守のバランスが良く取れてる。唯衣はフルオート射撃の命中率精度も悪くない線は行ってるかな。古株少尉達はスレイヤーズは得意分野の上達が目覚しいね。エンジェルはバランスに益々磨きがかかってる。ホワイトファンクスは唯衣を中心に良く纏まっている。全体的にいい傾向だね。武がいい意味でカンフル剤になってくれている証拠だよ）

キラはそう結論づけると真耶に命令を下す。

「真耶。防衛ラインが何とか押し戻った。レーザー級の存在も認められない。畳み掛ける」

その命令に真耶も答える。

『了解！ エンジェル1からスレイヤーズへ。これより我々は残存ベータ群に対し、機動突撃を開始する！ 第3小隊がトップを、第

1、第2小隊で側面を固めろ。西進しベータを本土から追い出すぞ』

『了解!!』

各隊の隊員も真耶の命令に答える。

武は内心驚きの声を上げた。

(コレは最早防衛線じゃない……殲滅戦だ!!　これが帝国最強の部隊……マジでスゲー……俺も負けてられない!!)

そう決意を新たにすると武は突撃を開始する。

武の祥鳳のスラスタは唸りを上げて敵陣に躍り出た。

武はビームライフルを乱射しながら左マニピレータで右腰のビームサーベルを引き抜くとソレを居合いの要領で横薙ぎに振り抜く。

ビームの嵐を浴びたベータの群れは蜂の巣にされ、接近したベータも横薙ぎの斬撃を喰らい切り裂かれる。

武は上空高く飛び上がると脚部スラスタを使い、直角に左右に移動しながらビームライフルを乱射する。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!　失せろよ!!　化け物が!!」

武はコックピットの中で叫びながら縦横無尽に上空で動き回る。

『ほくやるねくうちの新人は。負けてられないなくと!!』

慎二はビームライフルを乱射しながらそう言う。

『まあね!!』

そう言いながら舞は低反動砲をベータ群に撃ち込む。

キラの思惑通り、武の存在はいい意味でカンフル剤になっている。

キラ達スレイヤーズはベータ群を全て撃破、全機健在である。

こうして武の初出撃は幕を閉じた。

キラは今回の武のレベルを加味した結果、祥鳳では武の操縦技能についていけない事が判明した。

コレはある意味とんでもない事である。

そもそも、斯衛軍の祥鳳はハイチューンが施された全く別の機体と言っても過言ではない高性能機だ。

更に言うならこの祥鳳、正確にはアウトフレームDはテストメントと言うザフトファーストステージガンダムの設計を流用している事からも高性能機である事は疑いようの無い事実である。

ソレすら満足に武の操縦技術に追従出来ないときている。

正直、キラは如何した物かと頭を悩ませた。

余っているストライクに武を乗せるか如何か迷ったが、正直、G A T - X シリーズでは武の操縦技術に追従する事は不可能だ。

そんな事を考えながらフリーダムデータを眺めていたキラはあるデータを見つける。

『アクタイオン・プロジェクト』と言うデータを。

そもそもこのアクタイオン・プロジェクトとはファントムペインが

アクタイオンインダストリー社をリーダーカンパニーとした複数の企業がエースパイロット用カスタマイズMS開発計画だ。

アクタイオン・プロジェクトにおいては、豊富な運用データが有り、当時の最先端技術を用いて開発されていた初期GAT-Xシリーズが選択された。計画の概要として、まずヘリオポリス製Gの設計データを元にそのまま5機のGを建造、そしてこれらの機体を部隊内で特に素養の高いパイロットに与え、実戦を含めた度重なる運用試験を行う。

その後、得られたデータやパイロットの意見を元に機体をカスタマイズし、最新の技術を使用し、あるべき次期主力機の姿を探るといった研究を行うのがプロジェクトの目的であった。これにより生まれ変わった5機のGは、C・E・73年代の機体群に匹敵するスペックを獲得したのである。

キラはこのプロジェクトに着目した。

ストライクと言う原型の機体がある。

これを再利用しない手は無い。

そう考えたキラはアクタイオン・プロジェクトを参考に新しい戦術機開発計画、通称、RGプロジェクトを立案した。

このRGプロジェクトのRGとはリファイン・ガンダムの略であり、白銀 武をストライクに登場させ機体の改良点及び新たなストライカーパックの想像とOSの進化を促し、4・5世代型戦術機を作成、其処から得られるデータを元に第五世代型戦術機を開発すると言う計画だった。

この計画を纏め上げたキラはコレを城内省と国防省に提出した。

だが、この計画案は反対多数で却下されたのである。

その理由が日本帝国の武力と技術力の象徴であるガンダムを国連のしかも、香月博士の子飼いに与えるなど論外と蹴られたのだ。

この理由に納得出来ないキラは直接將軍である悠陽に直訴すると言
う行動に打って出た。

キラの意見は国連だ帝国だと今の帝国にそんな余力は無い。使える
ものは猫の手だろうが国連の魔女の子飼いだろうが仕える手は使う。
帝国将兵の命と格式や面子のどちらが重いかは明白である。

そう訴えた。

悠陽はその意見に賛成だったが、斑鳩、紅蓮などが猛反発する。

はっきり言えばキラの言葉は斯衛の軍人として有るまじき発言だっ
た。

この発言の為、御膳会議にキラは召集される。
事実上、コレは査問だった。

キラは居並ぶ国家の重鎮達を前にしていた。

正直、皆の顔は余り宜しくない。

「大和 綺羅少佐、今回の貴官の計画及び発言は斯衛軍人として甚

だ立場に欠いた行動だと認識しておるかね？」

城内省の最高責任者たる城内大臣の質問にキラはキツパリと答える。

「いいえ」

「ほう、天才と誉れ高い貴官らしからぬ回答だ。いいかね、少佐、ガンダムとは確かに君が開発した機体だ。だが、アレは帝国の物だ。更に言うならガンダムとは帝国の武力と開発力の象徴、ソレを国連の衛士訓練校を出たばかりの少尉、しかも、かの魔女の子飼いに与えると言う事は帝国の顔に傷がつくばかりか技術流出と言う恐れも孕んでいる事は理解しての発言かね？」

その城内大臣の発言にキラはあえて言う。

「何度も申し上げましたが、彼は今は帝国斯衛軍人。それに今は佐渡島攻略と言う段階です。戦力は多いに越した事は無い。たとえ佐渡島奪還が叶ったとしてもベータとの戦いは続きます。今の帝国は確かに戦力的に見ても単独での佐渡島奪還は可能でしょう。ですが、その為に一体何名の死傷者が出るとお思いですか？ 我々は今、面子が如何とかプライドが如何とか象徴が如何とかと論ずる状況で無い事は私よりも貴方方が一番理解しているとお思いですが？ それに技術流出は避けられません。遅いか早いかの違いです。何せ、私は佐渡島奪還が完了した時点でアラスカに向かわなければならないのですから」

アラスカ行きと言う言葉に全員が嫌な顔をする。

尚もキラの言葉は続く。

「確かに香月博士に最新鋭ガンダムのデータが渡る可能性は付き纏います。ですが、白銀少尉ほどの才覚ある衛士は今の帝国を探しても先ずお目にかかれない。使わない手は無いと思いますが……」

その言葉に斑鳩がキラに問いかけた。

「大和よ。其処までの物言いをするにはその白銀と言う少尉。本物であろうな？　ガンダムに乗せる価値がその少尉にあるか如何か私は知らぬ」

その言葉にキラは用意した映像を皆に見せた。

ソレを見た全員の息を呑む声をキラは聞いた。

映像が終わると斑鳩は咄然としながら呟いた。

「大和よ……コレは真の映像か？」

「ええ、彼は今後の帝国の戦術機開発に大きな影響を与えてくれる事は確かです」

キラの自信の満ちた言葉に他の大臣達は反発を示す。

「香月博士め……この様な者を子飼いにしていたとは……」

「危険だ……余りに危険だ！！　国連の魔女の子飼いは余りに危険すぎる……！」

「だが……確かに、技術は飛躍しそうだな……香月博士も中々面白い者をお持ちだ」

「フン、国連の衛士風情がガンダムなど……」

その喧騒の中で悠陽が発言する。

「大和よ、このプロジェクトの意義は理解した。だが、技術流出と言う愚を冒してまで得られる成果が新たな戦術機の想像だけでは帳尻が合わぬのもまた事実。まして、例の計画が絡むとなれば尚更であろう？ 貴公、この足らぬ帳尻を如何合わせる気だ？」

キラは悠陽の言葉は確かに政治家としては当然の問いかけだ。コレが機密裏に行われ、尚且つ帝国の衛士が行うなら話が違ってくるが、オルナネイティヴ計画が絡む計画となれば話はややこしくなる。

そこで、キラはこう言った。

「確かに表向きは帳尻が合いますまい。ですが、計画とは表と裏の双方があります」

「つまり……今、話した内容は表向き……と……」

悠陽の問い掛けにキラは頷きながら裏の話しを行う。

「ここで技術をオープンにする事で世界は我が帝国の技術力をより明確に理解します。当然、各国は裏表関係なく我が国の技術を盗む筈です。そこで我等は彼等が欲する情報を小出しにしてソレを販売し外貨を獲得します。無論、ライセンス料や技術料が発生します。帝国はその資金を元に帝国復興を行える。更に戦術機などの軍事に傾いた経済を戻す為にその資金を使い各企業に援助を行う。軍事だ

けでは経済は何れ窒息してしまう。なら私達はその他の産業、軍事生産から民事生産への移行が重要です。ここで重要なのは帝国復興と食料自給率の引き上げ、戦災者への遺族年金や傷病軍人の生活保護。そして、退役軍人の新たな働き口や借金など今まで帝国が目を背けていた事柄の解決の為の資金に捻出できましよう？」

その言葉に大臣達は鼻白む。

確かに、ベータ大戦の影響で各国、特にアメリカは極端に軍事に傾いている。

正直、人類全体が健全な財政状況とは言い難い。

まして、戦争と言う事もあり人物金が全て戦争に注ぎ込まれる。

その他の産業が働き手や担い手を取られるから更に生産量が苦しくなる。

その悪循環が今の世界だ。

つまり、キラの狙いは軍事産業で設けた差額を通常産業に振り分け財政の建て直しを図ると言う方法だ。

無論、兵器開発関連企業からの批判が挙がる事はある。

だが、財政が軍事一辺倒では正直、財政は健全化しない。

だからこそ今の余裕が生み出せる時期を狙って荒稼ぎをして財政を健全化させると言う狙いがあるだけに大臣達是否とは言えなかった。

大蔵省や産業省は特にキラの話が魅力的だったらしく賛成に回った。

国防省と城内省は最後まで反対したが賛成多数でキラの案は可決された。

あの時から5ヶ月が過ぎ去った。

白銀 武はキラと向き合いながらお互い立っていた。

「武、5ヶ月の研修、お疲れ様。もし、極東国連軍が解体されたら僕の所においで。微力ながら力になるよ」

キラは微笑みながらそう言う。

「有難う御座います。師匠……俺は、貴方や……スレイヤーズと共に戦えた事を誇りに思います……」

武は深々と頭を下げながらそう言う。

キラはふと思った事を口にした。

「輸送機は君が操縦を？」

「ええ、俺一人で……夕呼先生とは一人で対峙したいですから」

コレは武なりの決意なのだろう。

武は夕呼と自分一人で何処までやれるか知りたい。

他の人間の雑念は入れたくない。

そんな想いから一人で行く事にしたのだろうとキラは推測した。

そんな子供染みた強がりに微笑ましくも、自分の弟子が遅しくなった事にある種の感動を覚えた。

（紅蓮さんもこんな感じだったのかな……）

キラは心の中の寂しさをかき消す様に右手を差し出した。

「また会おう。武……今度は戦場で」

「はい、キラさん戦場で会いましょう」

そう言いお互い握手を交わした。

武は手を離れた後、敬礼をしてキラも敬礼を返礼する。

そして、武は歩み出す。

自分の戦場へと。

キラが敬礼を解いたのを見計らい真耶が壁際から姿を晒す。

「行った……あ奴は」

「うん……」

真耶の問い掛けにキラは頷きながらも真耶の方に踵を返した。

「良いのか？ あ奴めに“アレ”を託して？」

その言葉にキラは微笑んで答えた。

「心配無いよ、真耶。何せ武は僕達スレイヤーズがその総力を結集して育て上げたんだ。それに“アレ”も我が部隊がその持てる技術を結集して作り上げた最高傑作さ……」

キラはそう言いながら歩き出す。

「さて、城内省の役人に言い訳を言いに行きますか？」

「そなたと言う奴は……」

キラの朗らかな言葉に呆れながらも真耶はキラの隣に立ちながら腕を組む。

「真耶？」

「エスコートぐらいしても撥は当たるまい？ ソレも男の甲斐だ」

そう言われキラは苦笑するのだった。

武は輸送機のコンソールを弄りながら溜息を吐いた。

「ハ……アレだけ大口を叩いたんだ。白銀 武！ しっかりしろ！ お前は夕呼先生の所に戻るんだろ？ 無様は出来んよ！！」

そう言いながら武は両手で両頬を2回ほど叩いた。

武は無線を管制塔に繋げる。

「帝国厚木コントロール。こちらJT128便、離陸許可願う」

『JT128便、こちら厚木コントロール。離陸を許可する。良いフライトを』

「有難う」

そう言うのと武は操縦桿を操作しながらC-5ギャラクシーを滑走路に走らせた。

「テイクオフ」

そう言いながら武は速度の載ったギャラクシーの操縦桿を引いた。

若き鳥が自分の巣から飛び立つ時の心境を武はこの時満喫していた。

空へ飛び立つ不安と巣立つ事への解放とほんの寂しさ。

武は思考した。

（コレが親元から旅立つっていう感覚なのかな……だとしたら俺はまだまだ子供なんだろうな……）

武は良しも悪しも自分が子供である事自覚していた。

夕呼からはソレを指摘され良い様にあしらわれたし、キラはソレを

指摘し、ソレを認めながらも自制する術を教えられた。

そう、ここにいる白銀 武は過去の白銀 武とは違う。
一回り二回り成長して帰っていくのだ自分の古巣に。

「さあ、帰るぜ！ ホームグラウンドへ！！」

武が飛び立った後、キラは夕呼の所に電話をかけた。

「ヤマトです。香月博士、お久しぶりです」

その言葉に夕呼は面倒臭さそうに対応した。

『ああ、大和？ 何、私、今途轍もなく忙しいんだけど？』

その横柄な態度にキラは苦笑しながらも用件を述べた。

「武が其方に帰っている所です。厚木からギャラクシーでの帰りで
すから今だと30分後ですかね」

その言葉に夕呼は興味を示したのか声音が変わる。
それも面白そうな物を見つけたが如く。

『へ〜……と言う事は研修は終わったの？』

その言葉にキラは自信と誇りを漲らせる様に夕呼に言い放つ。

「僕が仕込んだのですよ？ 更に言えば元が良かったから貴女の想像以上かと」

その言葉に夕呼は意地悪な声でキラに言い放つ。

『へへへ大した自信じゃない……』

「まあ、武が着いてからののお楽しみですね」

そういうキラは受話器を置いた。

その姿に真耶は呆れながら言い放つ。

「加の魔女を煽って如何する？」

キラは微笑みながら言うのだった。

「香月博士を驚かせたくてね」

そう言うときらはコーヒークップを端整な指で持ち上げるのだった。

その数分後、夕呼は自分の子飼いの部隊、ヴァルキリーズを召集していた。

「副指令、全員召集いたしました」

「まりも、アンタちょっと硬いわよ。後、敬礼はいいから」

その言葉にまりもは呆れながらも親友のその態度を相変わらずと思
って内心苦笑した。

「まあ、改めて、実戦部隊復帰おめでとうと言っておくわ」

「ハッ！ 有難う御座います」

お互いそう言うのと夕呼は本題に入る。

「今から30分後にテロリストに占拠されたギャラクシーがこの基
地に着陸するわ」

その瞬間、ヴァルキリーズの顔が引き締まる。

「勿論、中には帝国軍が我が軍に譲渡する機体が搭載されているわ。
十分な燃料が無かったのかテロリストは事もあるうに私の基地に給
油を要請してきたわ」

その言葉に全員の顔に緊張が走る。

それもそうだ、核爆弾が搭載された輸送機が基地に突っ込もうとし
ているのだ。

皆の緊張を他所に夕呼は尚も説明を続ける。

「アンタ達の任務はそのギャラクシーの撃破、勿論、テロリストご

と機密も撃破しなさい」

その説明にみちるが質問する。

「帝国軍はこの任務には関与するのでしょうか？」

その質問に夕呼は答えた。

「大和曰く。最早其方の手に移ったのなら其方の物。如何様に処分しても構わないそうよ」

その言葉に全員が絶句した。

「大和少佐が！？　じゃあ、その機体は大和少佐が開発した機体だと！？」

冥夜が唸るように夕呼に質問した。

「と、言うより今の帝国で戦術機開発出来る人間なんか大和以外いないでしょ？」

その言葉にまりもは夕呼に問う。

「そんな重要な機体を撃墜して宜しいのですか？」

「各国が血眼になって欲しがる技術の塊よそれをみすみす海外に逃がす位なら撃墜した方がマシだわ」

そう言われ渋々まりもも納得し、撃墜の為、部隊を編成した。

（幾ら何でも最新型戦術機の為にヴァルキリーズを総動員？ 過剰過ぎない……夕呼、一体何を隠してるの）

その疑問は全員にもあったが今は言われた任務を完遂する為に全員が思考を切り替えた。

武は通信で横浜コントロールに通信を繋いでいた。

「此方、帝国ス衛軍第一師団独立試験遊撃中隊所属、白銀 武。横浜コントロール。応答せよ」

しかし、武が呼びかけても反応は帰ってこない。

「可笑しい……周波数はこれで合っているはずなんだが……」

武は明らかに可笑しい事に気が付く。

（まさか、このノイズは無線封鎖！？ 冗談じゃない！ じゃあ、今横浜は第2戦闘配備か！？ いやな予感がする……）

そう考えた武は即座にマニュアルからオートに操縦を切り替え、格納庫に向かった。

武は其処に格納されていた戦術機のコックピットに乗り込むとキーボードを取り出しそれを素早く叩く。

（ギャラクシーの操縦管制を此方側に移譲。ルート顕現を確認。通信を国際救助チャンネルに切り替え、横浜コントロール司令部に直結……）

その作業を武は淡々とこなす。

（さて、通信は繋がった。後はコールするだけ……鬼が出るか、蛇がでるか……）

そして、武は司令部にコールした。

「繋いで」

「了解」

簡素に答えるピアテフ。

そして、繋がった画面には白銀 武が映っていた。

『此方、日本帝国斯衛軍、第一師団独立試験遊撃中隊所属、白銀武。横浜UNコントロール。応答願う』

その言葉に、夕呼が通信に答える。

「あら、白銀、元気そうね？」

その言葉によりやく通信が繋がった事に安堵する武。

『お久しぶりです。夕呼先生』

「相変わらずその呼び方ねアンタ」

『先生こそ、その物言いは相変わらずですね』

お互いそう言うのと苦笑する。

その会話にラダビノット司令以下司令部にいる全員が目丸くした。

それを他所に武は夕呼に質問した。

『で、何の騒ぎです？ 無線封鎖なんて穏やかじゃありませんよ』

その言葉に夕呼は皮肉を言う様に武に言い放った。

「ああ、その事、今からテロリストに占拠されたギャラクシーがこの基地に来るから撃墜命令を出したところ」

その言葉にさしもの武も啞然とするかと思っただけだったが武の次の言葉に啞然とした。

『菌応えのある訓練相手ですか？ これでも斯衛は対人戦闘や対戦術機戦闘もシコタマやられるんで。それなりの相手を用意してお

いてくださいね。後、殺さない様手加減しますから』

そう言う武は通信を一方的に切った。

コレには流石の夕呼も驚くしかない。

（アイツ、本当に白銀？ 何か変わってない？）

「ピアテフ、A－01に連絡、目標を目視で確認しだい撃ち落しなさいと」

「了解」

夕呼はそう命令しながらも画面を睨みつける。

（上等！ 白銀風情がこの私を試した事を後悔させてあげるわ）

目視で確認しだい撃墜せよと言う命令を受けてまりも達A－01は迎撃体勢を整える。

「ヴァルキリー01よりヴァルキリー6、ヴァルキリー9狙撃位置に着け」

『『了解』』

晴子と壬姫はその命令に従い予想進路に銃口向ける。

『ターゲット視認、距離6000。真っ直ぐ此方に突っ込んできま
す』

壬姫の言葉に全員の緊張が走る。

まりもは即座に撃墜命令を下す。

「撃て」

『『了解』』

それに従い壬姫と晴子は発砲した。

赤いビーム2筋がギャラクシー目掛けて寸分違わず殺到する。

そして、

ギャラクシーに直撃し爆散した。

『あっけないわね……』

水月のボヤキに全員が内心同意する。

（確かに呆気無い……向うから何かしらの通信があっても然るべき
なのに何も無い……一体何が……）

そうまりもが思った時だった。

爆煙から高速で“何か”が飛び出す。

そして、その“何か”はまりも達の通常兵装射程圈内上空ギリギリで静止した。

だが、まりも達A-01は何故か発砲しなかった。

『ば、馬鹿な……』

みちるは唸るように呟いた。

その敵の“容姿”にだ。

『ウソ……でしょ……』

何時もの力強い水月からは想像できない怯えに似た呟きを漏らす。

全体的に白いに近い白銀。

黄色のツインアイ型メインカメラ。

額中央の中央に黄色、外側に白のV字型アンテナ。

マスク部分への字型ダクトスリットが二つ。

そして、赤い口

『……ガン……ダム……』

誰知らずその名を口にする。

大和 綺羅がその持てる技術の粋を凝らして開発され、日本帝国が

その威信を懸けて創り上げられる日本帝国の武力と開発力の象徴。

帝国の切り札。

帝国の技術の結晶

帝国脅威のメカニズム。

全世界の衛士の遺風の念を抱かせる存在。

その白銀のガンダムから突如として全周波数で通信が入る。

その顔を見たまりもと元207B分隊の全員が驚愕する。

『スレイヤーズ5、白銀 武、シルバーストライクガンダム。いき
ます！！』

その言葉と共に白銀のガンダムは横浜の空を舞う。

横浜基地は愈々以って混乱を極めた。

突如、攻撃対象のギャラクシーから白銀はくぎんのガンダムが飛び出し、その姿を横浜基地の眼前に曝すと敵は何と名乗りを上げた。

それも日本帝国最強の部隊名を高らかにである。

最たる混乱はその迎撃任務に当たっていたオルタネイティヴ4直轄部隊のヴァルキリーズが最も混乱の極みにあった。

『どう言う事！？ スレイヤーズ！？ 帝国最強の部隊が何で！？』

『そんな……ガンダムだなんて……』

『何故、ガンダムが！？』

その喧騒の最中、みちるはまりもに指示を仰いだ。

『如何します？ 一旦下がりますか？』

その言葉にまりもは反応しなかった。

彼女は白銀 武と言う名に反応していた。

まりもだけではない。

彼女の最後の教え子たる207B分隊の面々も驚きを隠せないでいた。

『少佐！ 神宮司少佐！？』

みちるの呼びかけに我に帰るまりもは慌てて隊列を整えて下がる様命令すると、司令部に通信を繋げる。

「ヴァルキリー01よりHQ！ 敵勢力はガンダム！ 繰り返す！
敵勢力はガンダムと判明！！ 撃墜しますか！？ もし迎撃する
なら増援を！！」

何故、まりもがその様な通信を司令部に繋げた理由はガンダムと言う機体が敵になると言う事に他ならない。

そもそもガンダムとは日本帝国が世界に誇る言わば帝国軍の武力と技術力の象徴であり、帝国軍衛士の規範である。

それを撃つと言う事は日本帝国の武力と技術力に弓引く行為であり日本人として躊躇われた。

更に悪い事にガンダムに搭乗する事を許された衛士は皆、日本帝国で考えられる最高ランクの衛士しかその搭乗を許されない。

大和 綺羅がいい例である。

現に将軍である悠陽は乗っていない。

つまり、ガンダムとは帝国政府と将軍家が認めた最高の衛士にしか送られない称号であり名誉である。

それを討つと言う行為自体がまりもを躊躇させた。

まして、その榮譽を授かったのが自分が見込み手塩にかけて育て上げた教え子である。

まりもが躊躇う理由は武が攻撃対象であることが最大の理由であった。

『いいから撃ち落しなさい！！ 命令よ！！ 後、増援は後5分掛かるわ』

しかし、夕呼はまりもに撃墜を命じた。

「……了解……」

まりもは搾り出す様にそう言うと言の自身を振り払う様に全員に怒鳴る様に命じた。

「各機、聞いたな！！ 全機兵器使用自由！！ 目標、ガンダムタイプ！！」

その命令に異を唱える者達がいた。

元207B分隊出身者達だ。

『神宮司少佐！ 再考願いませんか！？ これは何かの間違いではない？ あの者が、武がテロを企てるなど考えられません！！ まして斯衛の、ガンダムを賜る榮譽を得る者に発砲など！！』

冥夜が叫ぶ様に命令再考を具申した。

『私も御剣の意見に賛成します！ 少佐、再考願いませんか！？』

千鶴も冥夜の再考を支持する形でまりもに再考を促す。

『……私からもお願いします。少佐、再考を……』

慧も懇願する様にまりもに再考を具申した。

『そ、そうです神宮司少佐！ あの武さんがテロだなんて考えられ
ません！！ 再考を！！』

壬姫も慌てながらもまりもに再考を具申する。

『僕も同意見です。タケルが、テロを引き起こすなんて考えられま
せん！！ 再考を！！』

美琴も再考を具申する。

しかし、まりもは烈火の如き怒声で5人を黙らせる。

「馬鹿者！！ 下された命令は撃破だ！！ それ以外の命令はあり
得ない！！ 詰らん事を考えるな敵を撃破する事だけを考えろ！！」

まりもとてその魅力的な意見を聞き入れたかった。

しかし、指揮官として今、彼女は戦場に立っている。ならすべき事
は眼前の敵ガンダムタイプの撃破と言う命令を遂行する他はあり得
ない。

他の面々は置き去りにされる形となったがある事に気が付く。

これまでのやり取りに要した時間は1分弱。

しかし、敵ガンダムタイプからの攻撃は一切無い。

つまり、横浜基地手前で静止しているのだ。

これに身構えながらもみちるは疑問に思った。

（何故発砲してこない？ あちらも射程圏内の筈だが……）

しかし、ガンダムは上空で制止したまま棒立ち。

撃って下さいと言わんばかりだ。

『これは如何言う事なんでしょうかね？』

美冴はみちるに疑問を投げかける。

『解らん……此方の出方を見るにしても消極的過ぎる……何が狙いだ？』

『目的が読めませんね……』

椿子もこの謎の静止の意図が解らず図りかねていた。

『大尉、如何します？ 相手はガンダムタイプですよ？ 如何戦えばいいんですか？』

ここに来て現実的な疑問を投げかける水月。

正直、ガンダムタイプは例外なく何かしらの特殊な装備を搭載している。

まりもは警戒しながらも改めて全員に発砲命令を出した。

「各機、兵器使用自由！ 撃て！！」

その命令と共に放たれるビームやミサイル、砲弾の雨がシルバーストライク目掛けて殺到した。

「ようやくか……疑り深い物だ……まあ、夕呼先生の部隊だけあって深慮深いのも頷けるけど……」

武はロック警報をその耳に聞きながら銃口が此方に向いた時点で即座に回避して魅せた。

追いかけてくるミサイルはイーゲルシュテルンで迎撃する。

「まあ、牽制射撃の次に来るのは恐らく、援護射撃と牽制射撃に合わせて前衛が打って出るだろうな」

武は冷静にそう判断すると射撃を回避しながら左右両腰にマウントされているビームライフルショットティを2挺引き抜くとフルオートで連射した。

狙いは前衛の足止めだ。

前衛の足元にビームが爆ぜて爆発を巻き起こす。

出鼻を挫かれた前衛は慌てて後方にジャンプして爆発を回避した。

「クッ!!」

「ええい！ 解っちゃいたけど上手くないか!!」

冥夜と水月は舌打ちしたくなる衝動に駆られながらも大急ぎで下がる。

「これじゃ前進できない!!」

「クッ……」

茜と慧もここで足踏みしてしまう。

突撃前衛と強襲前衛が足踏みすると言う状況に陥る。

先ずこうなったら戦線が伸びず、降着状態の状態になる。

それを打開する筈の後衛の射撃も掠りもしない。

「ウソでしょ!? 何、あの回避!?!」

「戦術機が上空で三角跳び!? 冗談でしょ!?!」

千鶴と美琴もその起動に啞然とした。

武は回避中にキラの教えを思い出す。

『武、いいかい。回避行動はあくまで最小限にかつ次の行動を行い易くする事を心がけてみなさい』

（回避は最小限にかつ次の行動に繋がる回避を……）

操縦桿を動かしながら武はまたもキラの教えを思い出す。

『敵の全体を見るんだ。レーダーも含めて。敵の動きはラインになる。そのラインを読む事で自ずと回避先は見えてくる』

（敵の全てを見る……そして、敵の動きを線として見極める）

そして、シルバーストライクは鮮やかに三角跳びの最中にビームを正確に撃ち込んで行く。

それを受けた美冴機と禰子機に着弾。

美冴機はライフルを、禰子機は右マニピレーターを撃ち抜かれる。

「ク!？」

「きゃあ!？」

この射撃に流石のみちるも驚きを隠せない。

（そんな!？ あんな機動中に正確な射撃が!？ 馬鹿な!？ あんな事が人間に可能なのか!？）

しかし、晴子は冷静だった。

（なら、その移動終着点を狙うだけ）

そしてその時は来る。

「取った!!」

そういいトリガーを引く晴子。

しかし、武は左マニピレーターを掲げると其処に着いている小型の楯を前面に押し出した。

その瞬間、ビームの幕が楯表面に展開しアグニのビームを防いだ。

これには晴子も驚きを隠せない。

「そんな!?! ビームシールド!?!」

アグニを乱射するが物の見事に赤いビームはシルバーストライクの前方で完全に防がれる。

「ビームシールドは正確に作動したか……しかし、トンでも技術だなホント……ビームやレーザーが完全無力化出来るんだからスゲーナ……」

武にとっては不思議技術で片付くがヴァルキリーズはそれではすまない。

「ビームシールド!?! あんな物まで!?!」

「何とまあ、さすがガンダム。何でもありですな……」

椿子は驚きを露にして叫び、美冴は冷や汗を額に滲ませながら愚痴る。

「クッ……一旦引くぞ!! 体勢を立て直す!」

まりもはそう命じるが武の方が速かった。

「陣形は立て直させない!!」

次の瞬間、武は全力のブーストで砲撃支援の所に加速した。

「先ずは後方を押さえる!!」

その言葉どおり武は何も無い空中で脚部のスラスターを使って鮮やかに回避して見せた。

「しかし、このシルバーストライカーはスゲーな……俺の無茶な回避に純粹に着いてきている」

武のシルバーストライカーの元はノワールストライカーを元に武の機動性に合わせて改良されたストライカーパックなのだ。

主な改良点は中央のワイヤーアンカーを取り払い大型スラスターを搭載した事と二連装リニアガンから収束ビーム砲に変更した事とフラガラッハビームブレードのビーム発生部分を切先まで延長した事と収納スペースを収束ビーム砲フラガラッハ共に翼部分ではなくメインスラスターを挟み込む形で装備し、翼部分はサブスラスターを

搭載し加速性能と急速旋回を実現させた仕様になった。

余りの急加速に晴子と壬姫は対応できなかった。

そしてシルバーストライクは壬姫の前に躍り出るとビームライフルショットを両腰にマウントするとフラガラッハ改を2本一気に引き抜くとその速度を殺す事無く上から下に切り裂いた。

両肩をアグニごと切断される壬姫の祥鳳。

「へ……?」

訳が解らないまま壬姫は啞然とした。

しかし、武の攻撃はこれだけでは終わらなかった。

今度は壬姫機の空いた股に刃を突き入れ、それを内から外に振るった。

その瞬間、壬姫の祥鳳の両足は切断された。

そして、中に浮いている状態の祥鳳を晴子機目掛けて蹴り飛ばした。

「きゃあああああああああああああああああああ!」

衝撃と横Gで悲鳴を上げる壬姫。

そして、壬姫の機体は晴子の機体にぶつかる。

「きゃあああああああ!」

晴子も衝撃と横Gが急速に襲い掛かる。

壬姫の機体は晴子機に当たった後、地面に転がる。

どうやら爆散はしなかったが修理は不可能に近いだろう。

晴子は倒れた機体を立て直そうとするがそれを武が見逃す筈も無い。

武は急速起動で晴子機の両肩を足で押さえ込み倒すとその両肩にフラガラッハを突き入れる。

激しい火花と共に晴子機の両腕が斬り飛ぶ。

そして、メインカメラにフラガラッハを突き入れるとその場を飛び退き今度は美琴と禰子を倒しに掛かる。

武の戦術は至極簡単。

シルバーストライクの機動性を利用して相手の後方を叩き、然るべき後に後方から順当に倒していく戦術だった。

後ろを強襲された格好のヴァルキリーズは大慌てで後方に向くがもうその時には美琴機と禰子機は既に四肢を切断され行動不能だった。

「この嫌らしい戦い方……大和 綺羅に似てるわね」

水月の吐き捨てるような言葉にみちるも同意した。

「ああ、あの管制ユニットを狙わない舐めた戦い方といい、あの両

腕のライフルや剣の振るい方といいな……似ていない所を探せばあの変態的な起動くらいだろう」

「劣化版大和 綺羅ですかね？」

その水月の皮肉にまりもも同感と感じた。

そう、キラの腕前には及ばないもののその技の運びも斬撃の動きもキラに通じるものがあった。

（厄介になって帰ってきたものだ……もし大和少佐にその業の全てを授かったのなら白銀の技術は格段に成長している）

「如何します？ 新宮司少佐？ 正直、現勢力ではあのガンダムを抑えるのは不可能です」

まりもはみちるの言葉に考える。

「後、1分で増援がくる。それまで防衛陣形を取って撤退する」

皆、それが妥当だろうと判断している。

幾らガンダムタイプとは言え横浜基地全軍を相手に戦える訳が無い。

なら、体勢を立て直す意味でもここは下がる事が懸命と判断したまりもは戦線縮小を決断したが時既に遅かった。

武はその決定的隙を逃す訳が無い。

ここでもキラの教えが反映される。

『敵が引く時はその瞬間こそ最大のチャンスだ。其処から切り崩せ』
その教えに則り、武は即座に千鶴に狙いを定める。

武は収束ビーム砲を展開し千鶴機の両足を射抜くと同時に千鶴機の背後を取り逆さの状態からビームライフルショットを撃ち込む。

両腕を持っていかれた千鶴の祥鳳は地面に転がる。

「ウソ……でしょ……何も、出来なかった……」

啞然とする千鶴を置き去りに今度は茜機をビームライフルショットを2発づつ正射しその四肢を撃破する。

そして今度は横に手裏剣の様にローリングしながらみちる、水月、冥夜、慧の射撃を回避しながらビームライフルショットを乱射した。

「何、あの動き!？」

シールドでビームを防ぎながら水月は叫ぶ。

そして、シルバーストライクは鮮やかに着地し、今度は慧機に迫る。

「クッ!？」

慧はビームサーベルを引き抜くがそれより速く武は慧の前で急速上昇し慧の抜刀をかわすと慧機の頭上を飛び越え、鮮やかに着地すると機体を半回転させ両腕を広げ発砲。

慧機とみちる機の頭部を吹き飛ばす。

「これでは撃てない!？」

そう、これ程近いと発砲すればビームライフルだとフレンドリーファイヤーとなってしまう。

ここでもキラの教えが活かされる。

『相手の懷に飛び込んでの銃撃戦は常に射撃対象と敵援護を直線で結べ。そうすれば敵はフレンドリーファイヤーを恐れて砲撃を躊躇う』

(確かに躊躇う。そして、その隙は大きい)

武は今度は左横に飛び退きビームライフルショットを両腰にしまうとフラガラッハ改を引き抜き慧機の左足とみちる機の右足を切断すると今度はその勢いのまま左マニピレーターのフラガラッハを下から上へと振るい水月機の右マニピレーターを切断した。

そして、右のマニピレーターのフラガラッハは上から下に振るいまりも機の左腕部を肩口から切断し、返す刀で両機の両足を切断した。

その鮮やかな手並みに流石の水月も声が出なく啞然とした。

残るは冥夜機のみ。

冥夜は愈々覚悟を決めた。

「確かにそなたは強い。だが、私とて極東国連軍最強の特殊部隊の一員だ！　ここは引かぬ！！」

冥夜はビーム長刀を引き抜きそれを構えた。

武もまたフラガラッハを構える。

最初に仕掛けたのは冥夜だった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

冥夜は雄叫びと共に刃を振り下ろしシルバーストライクを袈裟懸けに切り裂こうとした。

しかし、武も袈裟懸けで受けて立つ。

その時、武はある事に気が付く。

（この太刀筋……冥夜か！？）

しかし、武は頭を左右に振り雑念を払いのけた。

「甘いぜ冥夜！　左手を忘れているな！」

武がそう叫びながら左のフラガラッハを冥夜機の左足に打ち据えた。

突然の奇襲にしてやられたと思った冥夜を他所に武は右側のフラガラッハを捻って冥夜の斬撃をいなし、左側のフラガラッハを下から上に振るい冥夜の右腕を切断した。

「クッ!!」

呻く冥夜。

しかし、武の攻撃はこれだけに留まらない。

今度は右側を上から下に振るい冥夜機の左足を切断し蹴り飛ばした。

崩れ落ちる冥夜機を見やりながら武は横浜基地を見据える。

戦端が開かれてからこの間、3分。

武はヴァルキリーズを僅か3分で撃破したのだ。

「さて……夕呼先生は如何出るかな……」

武はコックピットの中でそうボヤキながら夕呼の出方を待った。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 3 8 話 『真実の入り口』 改変

読み返してみても今までのストーリーと話が合わなくなっていました。
ので一部書き直しています。

皆様には大変ご迷惑をお掛け致します。

暫くの間、武は戦場を眺めていた。

（何とまあ、我ながら派手に暴れたな……）

自分の仕出かした事に如何した物かと考えていると横浜基地から通信が入る。

武はそれを応答した。

『白銀、中々派手にやらかしてくれたわね？』

その言葉に内心武は同意しつつも夕呼に質問した。

「これでも可愛い位ですよ。師匠、大和少佐なら同じ時間で横浜基地が陥落している」

『何とまあ、アンタも常識が通じない人間になりつつあるわね』

その夕呼の言葉に断固否定したいが思い当たる節があり過ぎるので反論はしない。

その代わり、この質問をしてやることにした。

「それで？ このまま、続けますか？ それなら、此方も手加減や情け容赦無く管制ユニットを狙いますけど？ そうなったら的が増えるだけですよ」

『あら？ アンタまだやる気？』

その挑発に武は答えて見せた。

「まあ、ガンダムがその気になればここを落とせますよ？ それに、帝国軍が横浜基地に向けて輸送中の最新鋭ガンダムを何を狂ったか横浜基地はこれを迎撃、脱出した生存者に攻撃したので十分叩かれる覚悟で挑んできたのでしょうか？ 何なら今すぐ、帝国軍の増援を呼んでもいい。帝国軍関東方面軍の5割が出てきます。さて、横浜基地は何分耐えられるでしょう？」

つまり、武はこれ以上戦うなら国際問題にしよう事をその言葉に込めた。

事実、帝国所有のギャラクシーを何の勧告無く撃破した挙句、ガンダムまで攻撃したのだ。明らかに夕呼に分が悪い。

夕呼は表面上では微笑みを湛えつつも内心地団駄を踏んだ。

（してやられた！！ 大和と白銀に！！ 私もヤキが回ったわね……まさか、こうもアツサリ相手の策にホイホイ乗るだなんて。この場合、横浜基地に着陸させてから強襲部隊を送り込むのが最も賢いやり方だった。それを大和と白銀の挑発に乗るだなんて我が人生最大の不覚だわ！！）

そう、夕呼は舐めていた。武と彼の今バックにいるキラを。

武がまさかここまでするとは思わなかった。

軽く恫喝してその態度を見極める心算が、武に秤ごと破壊され、更に自分が追い詰められた。

正に油断だ。

武がヴァルキリーズを倒せる訳無いと言う油断。

武の手札を把握していない状況で此方の手札を切った傲慢。武を舐めて掛かった結果がこれだ。

「まあ、今回は“たまたま”無線が故障し連絡がつかず、“たまたま”演習中の部隊が迎撃の任に当たった。そして、“たまたま”部隊との連絡がつかず、戦闘となった。これは不慮の事故です。そうですよね？ 夕呼先生？」

武の言葉は何とも可笑しな偶然が乱立する事でしか成立しない偶然である。

つまり、武は其方の計器故障が原因でこういう事が起きた。

不慮の事故で穏便に済ませると言う打開策を提示した。

現に武から攻撃を行っていない。

相手が攻撃し、初めて発砲したのだ。

つまり、圧倒的に非は横浜基地、夕呼側に不利であった。

確かにキラや武に挑発されたとは言え明らかに手を出したのは横浜基地である。

更に無線封鎖をしていた為、武側に利と義がある事は覆らない。

まして、帝国に無線封鎖の理由を説明する場合も問題となる。

この為、夕呼はこの武の提案と言う屈辱的な事を吞まざるおえない状況になっていた。

こうして、本事件は不慮の事故として処理される事となる。

その事件の“加害者”として扱われるヴァルキリーズは屈辱の極みにいた。

たった1機の戦術機に自分達は蹴散らされた。

この屈辱的な戦闘の内容を理解するのは早かったが納得は出来なかった。

いかに最新鋭ガンダムタイプとは言え相手は1機。

それを意図も容易く自分達が蹴散らされた事に屈辱感が支配していた。

まして、相手は管制ユニットを狙っていない。手加減された状態で蹴散らされたのだ。

その事が彼女達をより屈辱の極みへと追い遣った。

自分達は幸いにして怪我は無かったが、機体は全てスクラップ。一方のガンダムは無傷で優雅に横浜の空を跳梁している。

その様を見せ付けられる屈辱感は一入だろう。

彼女達は救出部隊に助けられ一路横浜基地を車の中で屈辱感に苛まれながら無言を貫いた。

そして、ヴァルキリーズ全員が自分達を撃破した武の顔を拝む為ハンガーに集結した。

ヴァルキリーズ全員がハンガーに到着した時に丁度シルバーストライクも着陸し誘導官の支持に従いハンガーを歩いていた。

「やはりと言うか何と言うか。着地も歩行も上手いですね」

美冴の悔しさを滲ませた褒め言葉にヴァルキリーズ全員が同意した。

ここまで基礎が完璧だと粗を探すのが困難だ。

その言葉にある意味まりもは誇らしかった。

プライドが高い戦術機衛士、それも極東国連軍最強の彼女達をしてここまで言わしめる武に元教官として鼻が高かった。

そして、武は自分が想像する遥か高みにいる事もまりもを誇らしくした。

だが、まりもも衛士。

プライドは高い。教え子に蹴散らされたとあっては彼女の序列がそれを良しとはしなかった。

ガンダムがハンガーに固定されるとその眩しい白銀はくぎんからメタリックグレーへとその色を変えた。

「色が変わった!? 何で!?!」

美琴の疑問に誰も答える事は出来ないがガンダム特有の特殊な装甲なのだろう事は自ずと想像できた。

そして、ガンダムの腹部が開くと、中から黒いス衛軍の軍服を着た青年がその姿を現した。

その手にはスツケースを握りながらワイヤーラダーに片足を引っ掛け地上に降りてくる。

完全に下りるとワイヤーラダーから足を離し鮮やかな足取りで周辺に集まる人達に敬礼をして名乗りを上げる。

「認識番号2001198、日本帝国ス衛軍第一師団独立試験遊撃中隊所属、白銀 武少尉であります」

その名乗りに全員が驚きの声を上げながらも慌てて敬礼した。

遠巻きにいた整備兵や衛士達はそのビックネームに小声で話し合う。

「ウソだろ！？ 帝国ス衛軍独立試験遊撃中隊っていや……精鋭部隊じゃねえか！？」

「精鋭も精鋭。その名は高きスレイヤーズだぜ……」

「帝国最強の衛士、大和 綺羅が作り上げた最新戦術機研究実験特殊部隊で未だに損害ゼロ。文字通り帝国最強部隊だ……」

「更にあの少尉、ガンダムドライバーかよ……明らかに18、19のガキが……？ あの歳でガンダムドライバーって事はス衛で確実に出世を約束されてるぞ！？」

「何れは白か山吹色かよ下手したら赤いくかも……」

「ケツ……帝国のエリート様かよ……」

そんな中、武はある事を質問する。

「横浜基地副指令、香月 夕呼技術大佐の所まで案内して頂きたい」

その言葉にまりもが歩みより質問した。

「どの様なご用件で副指令への面会を？」

武は平然とした顔でハキハキと言う。

「大和少佐より香月副指令宛てに最新型戦術機譲渡の書類とそのマニュアルのDVDディスクを持参いたしました」

その言葉にスーツケースを見たまりもは納得したのか案内する。

しかし、まりもはMPに連絡し、その脇を固めさせた。

この事に武はこう思わざる終えなかった。

（成る程、俺にとってここは他国なんだ……）

其処には恩師との再会の喜びも嘗てのクラスメイトとの再開の懐かしさも一瞬で色あせた。

武とまりもは無言のままエレベーターへと乗り込みその中でも終始無言だった。

「此方です」

「有難う御座います。少佐」

そう言いながらまりもと武は歩き出す。

ここでも無言。

そして、案内が終わるとまりもは去っていこうとした。

しかし、武はその背に語りかけた。

「神宮司教官、俺はあの時の貴女の言葉に支えられて戦っています。今でも……」

その言葉を背に浴びながらまりもは静かにこう言った。

「私はもう教官ではない。事実、今は少佐だ。だが、お前の強さの中に少しでも私の教えが生きているならそれは私にとって最大の誇りだ。お前は言葉でなく衛士らしく行動でそれを示してくれた。私はそれだけで満足だ」

武はその言葉に振り返るとまりもの背に向かって深々とお辞儀をした。

（有難う、まりもちゃん……）

そして、まりもは武に背を向けたまま嬉しさで静かに涙をながした。

（白銀、強く、なったわね……あゝあ、歳を取ると涙脆くなっちゃ

うものね……生徒の成長がこんなに嬉しいだなんて……)

武はまりも見えなくなるまでお辞儀をし続けた。

武は夕呼の部屋に久しぶりに上がり込んだ。

5ヶ月前と変わらないこの部屋だけは相変わらずだった。

(ま、性格はそうそう変わるものではないか……)

武はそう思いながらも夕呼を待った。

そして、待つこと暫し、夕呼と霞が入ってきた。

「あら、待たせたかしら？」

その問い掛けに懐かしくも新鮮なものを感じながら武は頭を下げて挨拶した。

「お久しぶりです。夕呼先生。霞も久しぶりな」

その挨拶に夕呼は苦笑して、霞は僅かに、本当に僅かに微笑みながら挨拶をした。

「ホント、長い事会って無かったわね」

「お久しぶりです。白銀さん」

その言葉と共に夕呼は本題に入る。

「で、大和から預かってきた資料は？」

その言葉に武はスーツケースのロックを外して資料とDVDディスクを夕呼の机に置いた。

「最新型4・5世代型戦術機、“祥鳳式型”および“デストロイガンダム”の譲渡書及び、そのデータを収めたディスクです」

それを受け取った夕呼はそれを読み始める。

「……書類に不備は無いわね。いいわ。これで調印するわね」

そう言うのと夕呼は書類にサインと判子を押す。

そして、夕呼は切り出す。

ある意味、彼女にとってこれは賭けだった。

「そうそう、OOユニットが完成したわ」

その言葉に武は反応する。

何せ、この世界の夕呼が心血注いで研究した代物だ。
興味無いと言えは嘘になる。

「マジですか？」

「マジよ。……って私も白銀語がうつったわね……まあ、いいわ拝ませてあげる」

そして、武は夕呼の案内で隣の部屋に移動した。

しかし、其処にあったのは物ではない。

人だった。

武の心拍数が徐々に跳ね上がる。

（え……？ 何だ“コレ”）

赤いポニーテール。

赤い瞳は虚ろ。

「ウソ……だろ……」

武はそう呟く。

「そんな……だって、夕呼先生、言ったじゃないですか……」

虚ろに見つめるその姿は人形の様だった。

「純夏はいないって……」

微動だにしないその人形の様な様。

「言ったじゃないですか!!」

武の絶叫は虚しく部屋を満たすのだった。

武は横浜基地の屋上で茜色に染まる空を見上げていた。

武の胸に去来する物は悲しみと怒りと虚しさと絶望だった。

そう、数時間前の事を思い出していた。

武の絶叫は部屋に虚しく響く。

しかし、状況は変わらないとばかりに夕呼は現実を突き付けた。

「ええ、確かに、もう鑑 純夏はいないわ。正確には、鑑 純夏だったものはあったわね」

その言葉に武は過去の記憶で霞が叫んだ言葉がフラッシュバックした。

そして、それを見る。

そう、クリスタル状の中にあった脳髓が無いのだ。

「まさか……じゃあ、あの脳味噌は……」

武はその想像に至った時、自身の胃からせり上がる物を感じとりそれを無理やり押さえ込んだ。

「そう、アンタ、5ヶ月前より察しが良くなったじゃない。その通り、この横浜基地が作られる前、甲22号ハイヴに囚われていた数多くの捕虜の内、唯一の生き残り。最も、その状態を生きていると言うならの話だけど」

その言葉を聞いた瞬間、武は足元から崩れ落ちそうになった。しかし、何とか気力を振り絞ってそれだけは避けた。

ここでもキラの教えが生きている。

『どんな状況でも冷静さを放すな。それが君の生命線になる』

しかし、今、自分が立っているのかさえ怪しい浮遊感に陥る。

そして、夕呼は過去を語りだした。

横浜に1998年にハイヴユニットが落下、近隣に住む住人の生存は絶望的と判断し軍は撤退。

1999年に明星作戦にて横浜を奪還、その作戦にキラも参加していた事、そして、アメリカは2発のG弾投下を強行した事。

更に、その中に大量にクリスタル状の物体の中に脳髓が大量にあった事。

その内の一つが鑑　純夏だった事を聞いた。

その話を聞き、武はある疑問が沸き起こる。

何故、その脳髓が純夏だと断定できたのか。

何故、ほぼ全員が死に絶えた中、純夏だけが生き長らえたのか。

と言う疑問だった。

それを問い質した時、夕呼は感心した様に呟いた。

「へー……前みたいにギャアギャア喚き散らすのかと思えば。冷静で中々いい着眼点ね。褒めてあげるわ」

その言葉に武は目の前の夕呼を今すぐ絞め殺してやりたい衝動に駆られながらもそれを寸前の所で押し留めた。

キラの教えが無ければそうしていただろうが武とて並ではない。

あのキラの訓練を潜り抜けて来た猛者なのだ。

「……どうなんです？　こんな事を俺に話したんだ。なら、夕呼先生は話してくれるんですよね？　そうじゃなければ俺にこんな機密のオンパレードをベラベラ喋る筈が無い」

その言葉にまたもや夕呼は感心する。

「今回は如何したのアンタ。コレだけの会話でここまで察するなんて。前は考え無しに質問したのにね。いい成長だわ。大和に預けたのは正解だったかも」

夕呼は武の成長を加味した結果、ある程度話す事を決めた。

そう、00ユニットを見てその反応を見極め、秘密を明かす度合いを決めていたのだ。

その結果、武は夕呼の想像以上の得点を叩き出した。

（コレは精神面での点数も上方修正しなくちゃね……力は太和のお墨付きだし、見せてもらった。精神も格段に成長を見れた。この賭けは成功だわ……）

夕呼は内心ホクソ笑みながら武にオルタネイティヴ計画を語った。

それを聞いた武の表情は第三計画で更に険しくなった。

「つまり……霞は第三計画により生み出された……と？」

「正確には、第六世代だから実戦は経験してないわね」

その言葉に何とも言えない想いが武の胸を満たした。

そして、肝心の第四計画を話し出す。

「まあ、私の計画は第三計画をシェイプさせた物だけどね」

その言葉に夕呼がこれ以上明かす気は無い事を悟った武は考える。

（先生の計画はあくまで第三計画をシェイプした計画だ。第三計画をどう形にした。そもそも第三計画はESP能力者をハイヴやベータの戦場に送り込み意思疎通や情報を聞き出す計画だ。しかし、ベータに意思はあったがコミュニケーションは取れなかった。では、第四計画の目指す所はもっと高次元な事……そう言えば師匠が以前言ってたっけ……夕呼先生に量子コンピューターの設計図を提供したと……そもそも量子コンピューターは従来の計算機は1ビットにつき、0か1の何れかの値しか持ち得ないのに対して、量子計算機

では量子ビットによって1ビットにつき0と1の値を任意の割合で重ね合わせて保持することが可能だとか。確か、今のパソコンが数千年掛かる計算を数十秒に縮める事が出来るのが量子コンピュータだ。なら、一体そんな性能が必要な事って何だ？ 確か……先生が研究していた課題って……因果律量子論だったかな……師匠から論文見せてもらったけど理解できない内容のオンパレードだった。そもそも、数多ある平行世界の情報をどうやって統制するんだよ……おい、まさか……ほぼ無限にある平行世界の情報を集計、整理、今起こるであろう事象を予測する為の技術が掌サイズの半導体150億個分の量子コンピュータか！？ でも、それがどう第三計画と繋がる？ まさか数多ある平行世界からハイヴやベータの情報を引っ張り出すんじゃないだろうな？ もしそうなら夕呼先生の計画は、ベータ相手に諜報戦を仕掛ける気か！？ 平行世界の情報や更にデストロイに純夏を乗せてベータの情報を探らせるのか！？」

「……夕呼先生、第四計画について自分なりに考えました。間違ってるなら笑い飛ばしても構いません。自分でも突拍子の無い事を今から言いますから……」

武はそう前置きすると、この考えを纏め上げて話した。

それを聞き終えた夕呼はその微笑みをより一層強めた。

「アンタ、マジで如何したの？ アンタ神でも降りて来たの？」

その言葉に夕呼は第四計画の真意を武に話すのだった。

「純夏……結局、俺はお前を殺す手伝いしちまったんだ……」

武は自分の掌を眺めながらそう呟いた。

「ゴメンな……気付いてやれなくて……辛かったろ……？ 寂しかっただろ……？ 悲しかっただろ？」

武はその後、夕呼の命令を受ける。

00ユニット、鑑 純夏を調律せよと。

確かに00ユニットは完成したがあのままではいけない。

そう、人形に魂を吹き込む作業。

俺の記憶や平行世界での出来事をリーディングさせ魂を吹き込む作業。

それを武に1ヶ月でやれと言うのだ。

その命令を武は蹴ろうとした。

しかし、純夏が突如、絶叫を上げベータへの憎しみを吐き出しながら暴れる姿を見た時、武はいてもたってもいられず、純夏を抱き寄せた。

武の胸の中で暴れている時、突如、こう叫んだ。

『武ちゃんを私から奪わないで』

と。

覚悟はしていたがこの世界の武は純夏の目の前でショッキングな死に方をしたのだろう事を想像した。

そして、武の腕の中で崩れ落ちた。

武は結局この依頼を受ける事にした。

そして、時系列は戻り、屋上で武は夕焼けを眺める。

「自分の無力さに泣いた事がある人間は強くなる……か……師匠、俺はヤッパリ、アンタみたいに強くなれないや」

そう呟くとフェンスを握りながら武は項垂れた。

その時だった、昇降口が開く音がしてその音に武は振り返った。

其処には冥夜がいた。

「そなたはこの様な所で何をしているんだ？」

その問い掛けに武は暫く沈黙しようやく答えた。

「何も出来ないで唯、自分の弱さを再確認していた所かな……」

その言葉に冥夜は何も答える事無く武の前まで歩み寄った。

「我等、ヴァルキリーズに勝って弱いと申すか？　なら、そなたは何処まで行けば自分が強いと思えるのだ？」

その問い掛けに武は答える。

「何処まで行っても俺は弱いままさ……泣き言言って、散々喚くしか出来ないガキさ。でも、何度でも立ち上がり前へ進むと決めた以上、歩くさ。何処までも生き抜いて無様でもみつともなくてもな。それが俺の覚悟かな……」

武はそう言いながらもコレは自分に言い聞かせる為に吐いている言葉である事を理解している。

そう、折れそうな自分の心を奮い立たせる為の作業だ。

それを聞いた冥夜は武を真っ直ぐ見つめながら言う。

「そなたは昔とちっとも変わらん……あの時の純粹なままだ。何処までも純粹で、何処までも子供で、その癖、滅法強くて、滅法弱い。だが、自分の信じた信念を曲げぬ男だ」

その言葉に武は照れ臭そうに頭を掻いた。

「よせよ……そんな事言う俺、すぐ増徴しちまうぜ？」

「その様な所もな」

そう言われた瞬間、武も冥夜も笑い出した。

どれだけ笑っただろうか。

解らない。

でも、武と冥夜は嬉しかった。

「さて、もう戻るか」

その言葉に武はこう言った。

「一緒にPXまで行かないか？」

「どうしてだ？ 場所は変わっていないだろう？」

その問い掛けに武は困ったように言う。

「今の服装見ろよ？ 俺、こんな格好だぜ？ 入り辛いよ」

その言葉に冥夜はキョトンとした目をした後、それが可笑しくなつて笑い出した。

「プッククク……そなたらしくないな。まあ、いい」

そう言うとき冥夜は左腕を差し出した。

「エスコートしていただく。それも男子の務めぞ？」

武はその様子に可笑しくなつて笑いだ出した。

「似合わねゝまあ、いいか」

そう言うとき武はその手を取ってこう言った。

そう、何時もキラが真耶にする様な仕草を真似て。

「仰せのままに、麗しの姫」

お互い笑いながら階段を下りる。

暗い未来を吹き飛ばすかの様に。

M U V - L U V S E E D D e s t i n y 4 0 話 『真実を知る者』 (前編)

明けましておめでとう御座います！

今年もよろしく願います！

武と冥夜がP Xに来た時には既にピークの混雑は過ぎ去り人も疎らだった。

武は久しぶりに来るP Xに何とも言えない感覚に囚われていた。

「あの、すみません……」

「あいよ」

気風のいい女性の声が響き渡る。

京塚 志津江がその姿を現し、武を見た時、驚きの声を上げた。

「おや、誰かと思えば武じゃないかい!? 元気にしてたかい?」

その言葉に武は泣きそうになった。

この横浜基地を他国と思っていたらこんな暖かく迎えてくれた京塚に武は万感の思いで頭を下げた。

「お久しぶりです。おばちゃん。元気でやってます」

端から見れば斯衛の軍人らしくない挨拶だろう。
しかし、武の掛け値無し自分の本心だった。

「おやおや、訓練生時代に風雲児で鳴らした武とは思えない挨拶だね。何にするんだい？」

その言葉に武は答える。

「合成サバミソ定食でお願いします」

「其処はかわらないんだね。あいよ、待ってな」

待つこと数分、美味しそうな匂いが武の鼻を刺激する。

「あいよ。お待ちどう」

「有難う御座います」

武はそう言いながら頭を下げるとそれを受け取った。

冥夜も同じものを頼んだらしく同じ定食が一緒に出てきた。

それを持って武と冥夜が空いている席に座ると武は手を合わせてこう言った。

「いただきます」

と。

冥夜もそれに習い同じ事をする。

暫く、無言で食べた後、武は箸を置き冥夜に質問する。

「さて、聞きたい事があるんだろ？ 国家機密と軍事機密以外なら何でも聞いていいぜ」

その言葉に流石の冥夜も驚きの声を上げた。

「どうして!？」

武は茶を啜りながらも余裕の表情で答えて見せた。

「態々、夕暮れ時に屋上に来る人間なんて珍しいだろ？ なら、何かしらの目的があるってことだ。更に付け加えるなら突発的に会ったにしては驚きの表情ではなかった。なら、多分、俺を探していたんだろ？」

その言葉に冥夜は目を見開き武に言う。

「そなた、何時からその様な推理力を身に付けた？」

武は苦笑しながら言う。

「まあ、師匠の下で訓練すれば嫌でもこうなるわ……」

その言葉に冥夜が質問する。

「師匠とは誰だ？」

その質問に武は納得したのかこう言った。

「ああ、そう言えは知らないんだったな……俺の師は大和 綺羅少

佐だ」

そのビクネームに冥夜のみならず周りの聞き耳を立てていた兵士達も驚きの声を上げた。

そう、偶々隣の席に居合わせたヴァルキリーズの面々もだ。

「まさか……彼の帝国の白き閃光から教えを受けていたとは……通りで強い筈だ……」

その言葉に武は苦笑しながら否定した。

「俺は弱いよ……師匠に比べたら俺なんて屁の突っ張りにもなりはしないよ……」

その言葉に冥夜は呻く様に言う。

「あれだけ強くてか……？　なら、大和少佐は一体どれだけ強いんだ？」

武も苦笑するしかない。

「まあ、あの人の強さは水準^{レベル}ではなくて次元^{ディメンション}の違いだから……何次元も先の領域にいる別の強さだ。俺達が論じている強さなんて物はとっくの昔に置き去りにした人だ……あの人がすれば俺達が論じている強さなんて幼稚臭いんだろうな……」

その言葉に冥夜は驚きを持って答えるしかなかった。

「世界とは真に広いのだな……」

「ああ、広い。あの人の下修行していると時々、自分が如何に狭い世界に生きているか実感させられる位に」

武と冥夜がキラに想いを馳せている頃、キラと真耶はイヤホンをしながら何かを聞いていた。

「成る程ね……だから量子コンピューターが必要だったのか……」

「しかし、武も中々難儀だな……アレでは彼の魔女に飼い殺しだぞ」

その言葉にキラはイヤホンを外して立ち上がりながら窓に歩み寄る。

「鑑 純夏……か……武が別の世界の人間である事は知っていたが、まさかこの様な形で幼馴染との再会とは……人生とは皮肉と苦難の連続だよ。真耶」

その言葉に真耶は目を伏せる。

「しかし、お主も中々に悪よの。武にナノマシンを注入し体内通信を開きっぱなしにして彼の魔女との会話を盗聴、それをシルバーストライクに極秘裏に積み込んだ量子回線通信で暗号化してストライクフリーダムに受信。暗号を解読して音声データとして今こうして聞いている訳だが……魔女だけでなく武が聞いたらさぞ怒る事だろうな。そなたも人が悪い」

キラは溜息を吐きながらこう言った。

「これがインテリジェンス諜報活動と言う物だよ。真耶。時には味方も欺き情報を得る必要もある。武には酷い事をしたな……」

真耶はその言葉を聞きながらメガネを外すとそれをテーブルに置き、キラの所に歩み寄った。

そして、キラの肩に優しく手を置いた。

「それも時には必要な時もある。お陰で00ユニットと言う物が判明したし、その対策も我等にはある。そう、我が愛機、イザナミがな……帝国はコレで国連の諜報活動に対して万全の対策が立てられる」

キラは肩に置かれた手をそっと握ると真耶に向き直り礼を言った。

「有難う、真耶」

「いい、私がしたいと思っでしている事だ」

そう言うとき真耶はキラから手を離すと名残惜しそうにソファに座り急須を取る。

合成玉露の香りが真耶の鼻をくすぐる。

真耶はユツクリとなれた手付きで急須の合成玉露を湯呑に注ぎ入れそれを呑む。

キラはコーヒーを呑みながら今回の事について考える。

（さて、ベータ事態に諜報戦を仕掛ける事は理解したけど……今回の事でベータも此方の情報を収集する可能性がある事が判明している。多分、横浜ハイヴは明らかに我々人類を研究する目的で作られた可能性を示唆している。その証拠にハイヴ内に無数の脳髓が発見されている。まあ、ベータが此方を研究する前に此方が叩き潰すまでけどね……その為に対要塞攻略兵器であるデストロイまで持ち出したんだ。国連には頑張って僕達帝国の被害を抑えてもらわないと……）

その思いに至った時、キラは自身がアコギな事を考えている事に気が付く。

（駄目だね……我ながら心が荒んでいる証拠だ……）

その時だった、真耶がキラに質問した。

「綺羅、今回が最後の休暇だが何処で過ごすのだ？」

その言葉にキラは諦めに似た溜息を吐いた。

「今回は家でユックリ過ごすよ。別に誰かと会う約束も無いし、何をするでもない。一人者の寂しい休暇だよ」

その言葉を待っていたとばかりに真耶がキラに提案する。

「その、何だ……それなら……私と一緒に過ごさないか？ 折角、休みが合ったのだ。旅行にでも出かけぬか？」

その魅力的な誘いにキラは二つ返事で了承する。

「いいね、旅行か……そう言えばこの世界で旅行をするのは初めてかも」

「であろう？　なら一緒に行こう。我が家が管理している温泉と宿がある其処はどうだ？」

「さすが月詠家のご令嬢。お金持ちだね」

キラは驚きの顔をしながら言う。

「茶化すな。で、どうだ？」

キラは微笑みながら頷いた。

「じゃあ、そこで、近場なら車を出すよ」

その言葉に真耶は不安な顔からその美しい顔を笑顔にした。

「割と近くてな、任せる」

「じゃあ、行こう。2人で」

「ああ、2人で」

そう言いながらキラと真耶は笑い合いながら旅行の予定をたてるのだった。

時は五月、^{サツキ}日本で生活するには最適な時期だろうか。

キラは車を運転しながらフロントガラスに移り行く景色を眺めながら運転していた。

「ここら辺は自然が多いね」

キラの何気ない言葉に真耶は誇らしく語る。

「そうである？ この辺りは比較的自然が多くてな。ベータが進行していない地域と言う事もあり自然が多く残されておる。道路も綺麗だ」

キラはその言葉に微笑を浮かべながら語りかける。

「これから行く所って真耶の家、月詠家が管理している所でしょ？
きつといい所だろうな」

「正確には分家、我が家が管理しておる。本家は関西脱出の折にその土地の大半を消失しておるからな。関東に住んでいた我が家はこう言った物も残っておるわけだ」

その言葉にキラは考えながら言う。

「何だか違う家みたいな言い方だ？」

その言葉に真耶は鼻を鳴らす。

「まあ、本家は本家、家は家だ。そんな瑣末な事より、キラ。折角の休暇なのだ。羽を伸ばそう」

「そうだね」

そう言いながらキラと真耶は他愛無い話で盛り上がった。

真耶の案内でたどり着いた場所は竹林に囲まれた奥床しい武家屋敷だった。

「成る程、別荘か……僕の家とそう変わらない大きさだね」

「まあ、綺羅の家はどちらかと言えば仮の住まいであろう？ ベー
タを追い出せば何れ大札の位に見合う敷地と屋敷を構えられるさ」

その言葉にキラははにかむ様に笑いながら言う。

「まあ、僕は大きな土地や屋敷には興味無いよ。僕と、何れは出来るお嫁さんと子供達が過ごせる大きさをえあれば問題無いね」

その言葉に真耶は頬を赤くしながらキラに問うた。

「その、何だ……何れ出来る嫁はいるのか？」

その問い掛けにキラは苦笑した。

「いないよそんな人。いたらいいんだけどな……巖谷さんや紅蓮さんからお見合いを勧められてるけど、その断りをするのに必死かな……今はそれど頃じゃないし……」

その言葉に内心、真耶はガッポーズを作る。

（よし！！ 綺羅めに恋仲の奴はいない、まして巖谷殿や紅蓮殿の見合いの話も蹴っている！ コレは最大級の好機ぞ！！）

内心、意気込む真耶にキラは疑問を浮かべながらも諭した。

「真耶、このまま突っ立っていても如何しようも無いよ。案内よろしく」

その言葉に真耶は我に帰りキラを案内した。

「よし、行こう。直ぐ行こう」

「ちょ、真耶。引っ張らないでよ」

そう言いながらも二の腕に当たる真耶の胸の感触にドキドキするキラだった。

キラが荷物を置くと真耶と共に別荘周辺を散策した。

それはとても美しい光景だった。

初夏特有の眩しい光が木陰に差し込み葉と光のコントラストが世界を美しく彩る。

そして、川のせせらぎが耳を打ち、日差しの暖かさと川の流れて涼を感じさせる。

キラはその何とも美しい世界を眺めながら呟く。

「綺麗だ……」

真耶もキラと同じ世界を感じながらもキラと同じ様に呟いた。

「真にな……自然の成せる業なのだろうな。人が加えた庭も悪くは無いがアレは余所余所しくていかん。やはり自然とはこうでなくてはな……」

暫く散策した二人は川原の近くにある茶屋で一服する事にした。

2人は冷やし飴湯を注文するとそれを飲みながら川の流れを見ながら沈黙する。

「こんなに穏やかな時間は無かったから落ち着くね」

そのキラの言葉に真耶も肯定した。

「まあな……私もそなたも走り続けて来たからな……こうしてこん

なに落ち着いて座っているのも珍しい。何せ、座っているのは何時も戦術機の管制ユニットの座席か部隊室の椅子だからな。時には何も考えずこうして過ごすのも悪くない」

また、暫く沈黙しキラは真耶にお礼を言った。

「有難う、真耶……誘ってくれて……心が洗われたよ」

その言葉に冷やし飴湯を煽りながら真耶はこう言った。

「気にするな。そなたは私のパートナーでエレメントだ」

「それでもだよ、有難う、真耶」

そう言いながらキラは真耶の頭を優しく撫でた。

その行動に驚きはしたものの真耶はされるがままに暫くその行動を享受した。

暫く歩いて別荘に戻った時には夕暮れだった。

キラは真耶が作った食事を取りながら暫く他愛の無い話をしながらお茶を啜りユックリとした。

「温泉に入ってくればどうだ？　ここの温泉は露天風呂だ丁度、星と月が出ていて景色もいい。入ってくるといい」

その言葉にキラは頷きながらそれに賛成する。

「そうだね。丁度、歩いて疲れたし温泉で汗を流すのもいいか」

そう言いながらキラは立ち上がると真耶の案内に従い露天風呂を指した。

キラは着物を脱いでそれを畳み籠に入れるとタオルをその手に持ち、木製の開き戸を置けると其処には石畳と石造りの浴槽、古竹で編んだ仕切り。そして、空は満天の星空と大きな月が世界を照らしていた。

「これまた……美しい景色だ……」

キラはそう呟きながら空を見上げる。

「全く……今が異星人と戦争真っ最中である事を忘れそうだよ」

そう言うときラは掛け湯をして湯に浸かる。

「ふっふ……最っ高」

キラは両手を組んでそれを天へと持ち上げ背を伸ばす。

「思えば……随分と遠くまで来てしまった……僕は変わったのかな……何かを得て、何かを失って……その繰り返しで……ここに多くの大切な物がどんどん増えて、そして、あの世界の大切な物を失った……」

そう言いながらキラは右手を天高く伸ばした。

「ラクス、アスラン、カガリ、皆……僕は何が出来たかな……？
何か成せたかな？　僕はこの世界の為に出来たかな？　あの世界で
出せなかった答えを僕は得た。でも、その代わり、君達の世界から
追い出されたよ……」

そして、掲げた手を握り込む。

「デュランダル議長、貴方は自分と人類に絶望したかも知れない。
でも、僕はまだ信じてる。まだ、戦える。まだ歩ける。だから、見
ていて下さい。貴方が得たくて諦めて諦め切れなかった物がこの世
界に一杯ある事を僕は生きてる限り証明し続けます」

そう言うときらはユックリと手を下ろすと握り拳を解き掌を見つめ
る。

「そなたは頑張っている。安心しろ。私が保証する」

その他者の言葉にキラは振り返る。

其処にはバスタオルを体に巻きつけた真耶が徳利と一合徳利とお猪
口を二つずつ持って現れた。

「い、ゴメン！　直ぐ出る！」

キラは慌てて出ようとするが真耶はそれを制止した。

「いい、そなたとこうして飲みたかった」

そう言いながらバスタオルを取ると真耶は浴槽まで歩み寄る。

その行動に慌ててキラは真耶の反対方向に向き見ない様にした。

陶器が石に当たる音に続き、お湯が肌に当たり石畳を打つ音がキラの耳に響いた。

「何時までそうしている気だ？ 流石にそれでは辛かろう？」

（今の状況が僕は辛いよ！！）

その問い掛けにキラは心の中で叫びながらも何時までも背を向ける訳にも行かず。真耶の方を向く。

それを見たとき、キラは息が止まりそうになった。

満天の星空と月が真耶を美しく照らし、その端整な顔を一際際立たせる。

そして、その首筋から流れる雫は星明りと月光に輝きを放ち胸元まで滴らせる。

女性特有の美しさに我を忘れその様子を見つめるキラ。

真耶は頬を赤らめながらも苦笑しながらこう言った。

「その様子では、私は女としてまだ捨てた物では無いらしい。男にその様な反応をされては照れてしまう」

その言葉にキラは我に帰り、大急ぎで真耶から視線を外すがもう遅い。

「今更目を逸らさずとも良い。勝手知ったる仲であろ？ それに紅蓮殿の訓練時代に嫌と言う程見ておるではないか」

そう言うとき真耶は一合徳利とお猪口を取りこう言った。

「飲まぬか？ たまにはそなたと飲みたい。それとも私の酒が飲めぬか？」

その言葉にキラは苦笑しながらお猪口を受け取る。

「まさか。君とこうして酒を飲むのも悪くは無い」

そういうキラはお猪口を差し出し、真耶はキラのお猪口に酒を注ぐ。

そして、キラも真耶のお猪口に酒を注いだ。

「乾杯しよう。そうだね。この世界と我が帝国と僕達と僕達の部隊に」

「乾杯」

そう言いながらキラと真耶はお猪口の飲み口を軽く当てて陶器を鳴らすと酒を煽った。

喉を通り胃に流れる酒を楽しみながらキラは溜息を吐く。

「全く贅沢だね我ながら、温泉は貸切、空には満天の星空と美しい月、そして、それに勝る美女に酒。男が望む全てが詰ってるよ」

その言葉に真耶も笑いながらこう言った。

「ああ、贅沢この上ない。温泉は貸切、空には満天の星空と美しい月、そして、それに勝る色男に酒。女子^{おなご}が望む全てが詰っておる。そなたでは無いが今が戦争の最中である事を忘れそうだ」

そう言いなが真耶は夜空を見上げた。

キラも真耶に釣られて夜空を見上げる。

暫くの無言。

だが、その無言が2人からすれば心地よかった。

無言のまま酒を酌み交わしそれを呷り、また酌み交わす。

一合徳利の酒が無くなった時、真耶が不意に静寂を破った。

「綺羅……そなたはこれから如何するのだ？」

「如何とは？」

その問い掛けに俯いて言葉を紡ぐ。

「我等は勝つと信じて戦ってきた。そなたのお陰で帝国はより優位になった。僅かな光明でも天運でもない。確実な勝利が目の前を照らした。その光を齎したそなたはこの地球からベータを駆逐した後、如何する気だ？」

その言葉にキラは考える。

「そうだね……宇宙軍を編成して月と火星の奪還かな……」

「その後は？」

その言葉にキラは苦笑した。

「実はまだ考えていないんだ……でも、戦うよ。僕は……一人でも一つでも助けを求める声があるなら僕はその手が届く範囲で助け続ける。そう誓ったから」

「誰にだ？」

その問いにキラはハッキリと答える。

「誰にでもない。自分自身に。これは僕だけの誓い。僕が僕として戦う為の誓いだよ」

その言葉に真耶はキラが孤独に思えた。

誰よりも人に囲まれながらもその心は孤独。

そして、寂しい心。

（では、そなたは何時になったら戦う事を止められるのだ？ 何時になれば銃を置けるのだ？ 何時になればその心は孤独から解放されるのだ？）

そう思った瞬間、真耶はキラを抱き寄せた。

優しく、自分の持てる優しさを総動員して目の前の男を抱き寄せた。

「真、耶……」

「休みたい時は……休んでもいいのだぞ？　それを誰も咎めはしない……もし、世界中の誰もがそれを咎めたとしても、私は、私だけはそなたを……“キラ・ヤマト”を咎めはしない。もし疲れたらその時は私がそなたを守るから……私の想いが“キラ”を守るから……」

その言葉に2人の女性の影がキラの脳裏をフラッシュバックした。

（フレイ……ラクス……）

しかし、今度は真耶だけがキラの思考を埋め尽くす。

（ああ、ゴメン、フレイ、ラクス……認めるよ。僕はどうしようもなく浮気性だ……でも、彼女なら、君達と同じ事を言った真耶なら僕は……彼女を愛せる。そう思う……）

その瞬間、キラは見た。

フレイは優しく微笑みながら、ラクスは悲しそうにそして優しく微笑んだのを。

それはキラの都合の良い幻影だったのかもしれない。
また、酒のせいかも知れない。

でも、キラは確実に見た気がした。

二人の愛した女性が真耶を認めてくれた。

そんな気がした。

そして、キラは決意する。

真耶から離れ、キラは真耶に向き直る。

「僕からも誓いを。キラ・ヤマトは月詠 真耶を守ります。自分の出来る全力をかけて。だから言うね」

そう言葉を区切るとキラは真耶の両肩に手を添えて見据える。

「真耶……僕は、君が好きだ。愛してる。君と共に生きたい」

「え……」

「こんな単純な言葉しか言えないけど……言葉を飾るよりもこの一言が僕の今の心境だよ」

真耶の震えがキラの手に伝わってくる。

そして、真耶の瞳から涙が零れ落ちる。

「……真耶？」

「その、その言葉をどれ程聞きたかった事か……ようやく、ようやくそなたから言ってくれた……嬉しい……」

キラは真耶を優しく包み込むようにその背に手を回す。
真耶もキラの背に手を回した。

お互いの鼓動が肌を通して伝わってくる。

「キラ、私を放さないでくれ……ずっとそばにいてくれ……私の私だけの“キラ・ヤマト”でいてくれ。“大和 綺羅”は帝国や世界にくれてやる。だけど、“キラ・ヤマト”だけは私の物だ。誰にも渡さない。渡すものか。例えば本家が反対しても月詠の名など捨ててやる。その代わり、大和 真耶になってやる」

「真耶……」

「私はそなたに私の全てを、全てを差し出す。その代わり、“キラ・ヤマト”の全てを私に出来ないか」

その言葉にキラは無言で頷いた。

「あげるよ。僕の全てを……“キラ・ヤマト”を全部。真耶にあげる」

そう言うとお互いどちらとも無くその顔を近づける。

そして、キラと真耶や幾星霜の星空と美しく輝く月の袂で優しく口付けを交わした。

真耶ルート突入。

大方の予想道理の展開です。

まあ、好きですけどね真耶。

あのメガネクール毒舌キャラが。

キラは障子から差し込む柔らかな朝日で目を覚ます。

「朝か……」

キラは半身を起こすとその傍らで眠る真耶を見る。

真耶は可愛らしい寝息を規則正しく立てる。

それを見たキラ真耶を愛おしく感じ、その頭を優しく撫でる。

その行動がキラにちょっとした征服感を味あわせる。

そう、彼女の“女”の部分の自分のだけの物に出来ると言う健全な男なら誰でも抱く欲求が出てしまう。

（こういうのは恋人の特権だな……）

そう思いながらつつい真耶の頭を撫でてしまうキラ。

「ん……」

そのキラの行動に真耶は小さく声を漏らした。

「起こしたかな？」

キラは小さな、本当に小さな声でそう呟いた。

「……起きておる……」

「ゴメン……」

キラの謝罪に真耶は名残惜しそうに答えた。

「いい、私もそなたに頭を撫でられるのは嫌いでない」

そう言いながらも自身の半身を起こしながら近くに脱ぎ捨てた着物を掴みそれを羽織る。

「……そなたに押し倒され、今でも胸が高鳴っている……」

そう言いながら真耶は胸元に自分の手を添えながら言葉を紡いだ。

「初めての経験だ……自らに“女”を感じたのは……」

そう言いながらもキラをゆっくりと見つめる。

「認める他無いな……そなたに抱かれていた私は“女”だった……武家の武士でも月詠の者でもなく唯の“月詠 真耶”だった……」

そう言いながら真耶は立ち上がり部屋を出て行こうとする。

キラは無言でその後ろ姿を見つめる。

「今は……そなたの女にされて、そなた色に染められる感覚に戸惑

っておる。頭の整理がしたいゆえ、風呂に入ってくる」

そう言いながら真耶はキラを残して出て行った。

その様子を見ながらキラは少しだけ溜息を吐きながら布団に寝転がりこう呟いた。

「我ながら、ちょっと強引過ぎたかな……」

キラの呟きは天井に吸い込まれるだけだった。

一方、真耶は石造りの湯船に浸かりながら昨晚の事をついつい考えてしまう。

「……キラ……」

膝を抱き抱えながらキラの名を呟く真耶。

（……初めてだった……あんなに痛いものなのか……？ キラが言うにはその内痛みは引くらしいが流石に痛い……訓練や実戦とは違った痛みだ……でも、痛み以外に何か得も知れぬ感覚に襲われたのは確かだが……）

その感覚と自身の乱れ様に戸惑う真耶。

「いかん、いかん。忘れろ！ 私！！」

そう言いながら両頬を叩きながら忘れようと振り払う真耶だが戸惑いは一層強くなった。

キラと真耶が休暇中の頃、武はヴァルキリーズと訓練に勤しんでいた。

武はヴァルキリーズの面々を前に祥鳳式型の説明をしていた。

「と言う様に、祥鳳を発展させたのが祥鳳式型です。先ず最大の特徴はストライカーパックとタクティカルシステム同時搭載による不具合の改善と最新OSによる衛士の無線ネットワークの効率化により、より扱い易くなっているのが最大の特徴といえるでしょう。また、最新型ビームシールド搭載による防御力向上とパワーエクステンダー標準搭載により稼働時間の延長も特徴です。以上の説明で質問は？」

その質問に誰も答えなかったので武は座学を終わらせる事にした。

武は資料を纏めながら次の講義を考える。

（うーん……皆、理解が早くて助かるけど、無茶苦茶突っ込んだコアでディープな質問が無いよな。例えば祥鳳式型のパワーエクステンダーのシステムがどういうものとか、神経伝達ネットワークにおける運動ルーチンの設定やら、マッスルパッケージのマージンがどれ位とか聞いてくれば答えるのに……）

ハッキリ言って武のそれは明らかに整備兵が質問する分野であり衛

士が質問する内容ではない。

明らかに武はスレイヤーズ基準で物事を考えていた。

ハッキリ言ってスレイヤーズは兵士とウエポンミスが一緒になった様な開発戦闘集団と言っても良い。

そんな集団を基準に考えられては兵士である彼女達に求め過ぎと言っても過言でない。

しかし、それを理解する事で機体の効率的な戦闘を行えるのも確かだけに武の思いも強ち間違いではない。

武はそう思いながら今度は整備班に講義を行う為に教室を後にした。

整備班の講義が終わり、もう昼と言う事もあり武は食事を取るべくPXに移動した。

しかし、其処でも目線が気になる。

理由は解っている。

武の服装だ。

斯衛軍の黒服姿では目立つ事この上ない。

更に言うならここは国連基地であり余計に目立つ。

（夕呼先生め……せめて国連軍の軍服くらい用意してくれても罰は当たるまいに……絶対、わざとだ……）

そう思いながら空いている席を探す武。

しかし、PXの席は殆ど満席だった。

其処に偶々、席が空いていたがヴァルキリーズの面々が横にいた。

如何しようか迷っていたまりもが声を掛けてきた。

「白銀、席が空いていないならここに座れ」

その言葉に戸惑いながらも武はそれを了承する。

「では遠慮無く」

そう言いながら武は静かに着席する。

武は手を合わせていただきますと言うと静かに食事を取り始める。

暫く食事を取っていた時、水月が武に質問する。

「アンタ、どうやってガンダムの衛士、ガンダムドライバーになったの？」

その直球の質問に遥はオドオドしながら止めに入る。

「ちょ、水月、それは……」

しかし、水月は悪びれる事無くこう言った。

「だって、聞きたいじゃない。世界で3人しかいないガンダムドラ

イバーが目の前にいる。しかもソイツはウチの新人と変わらない年齢でしかも少佐が教官をしていた頃の生徒でしょ？ 気にならない方がうそでしょ？」

その言葉に苦笑しながら武は答えた。

「極秘ですよ。もし、知りたかったら師匠の上司の紅蓮大将と斑鳩元帥、殿下の調印所による許可が無いと話せません」

武の口から上がる錚々たる名前に流石の水月も沈黙した。

事実、武がガンダムに乗る事になった計画、帝国軍戦術機再編計画、通称、R G計画は極秘とされた。

当事者である武ですらその計画の全貌を知らない位である。

次に、茜が質問する。

「白銀少尉は……」

その呼び方に武は修正させる。

「涼宮少尉の方が先任です。白銀でいいですよ？」

その言葉に、改めて茜は質問する。

「じゃあ、白銀は訓練校時代の成績はどうだったの？」

その言葉に、今度はまりもに話を振る。

「それだと神宮司少佐が詳しいと思いますよ？ 何せ、成績は見せてもらいませんでしたし」

その言葉にまりもは溜息を吐きながら言う。

「射撃A、剣術、ナイフ戦闘A、格闘戦A、サバイバルスキルA、狙撃A、戦術評価A、座学A……」

それを聞いた瞬間、ヴァルキリーズだけでなく食堂にいた全兵士が驚く。

「ちょ、全部Aですか!？」

茜の質問にまりもは首を横に振った。

「ですよねー流石にオールAの人間なんているわけ……」

晴子がそう言うがまりもはこう言った。

「さらにコイツのふざけた所は戦術機がらみで発揮される」

その言葉にみちるが食い付く。

「……如何言う事です?」

その言葉に躊躇いながらまりもは答える。

「戦術機特性測定不能……」

その言葉に美冴が茶化す。

「まさか、失神していたとか？」

その言葉にまりもは掌を額にやりながら苦悶の声で言う。

「それならどれだけ幸せだったか……コイツ、事もあるうに『眠くて欠伸が出るのをかみ殺すのに必死だった』といった……」

その言葉にPXにいる207分隊以外の全兵士が化け物を見る目で武を見つめた。

「記録を調べたらそんな例外が1人だけいた」

そのまりもの言葉に袴子が質問した。

「誰なんです……」

「コイツの師匠、大和 綺羅少佐だ……」

それを聞いた瞬間、全員が納得した。

「更に大和少佐がテスト終了時に言った言葉は『コレだけですか？ 乱回転とか急速降下の対Gテストは無ですか？ こんな簡単でいいんでしょうか？』だそうだ……」

その言葉に衛士全員が沈黙した。

正直、衛士になる為の登竜門でこのセリフを吐ける二人にある意味羨望と恐怖に似た感情が芽生える。

「更にコイツの戦術機関連の成績は、射撃A一、接近戦S一、戦術機機動S、戦術機狙撃一A」

その言葉に水月が噛み付く。

「ちょー！？　チョット待って下さい！！　Sって何ですか！？　Sって！！」

その言葉にまりもは答える。

「大和少佐が軍に入隊した後で軍事教練が改正されてな……S一からSSSまでが評価に追加された。因み、大和大佐の評価は、戦術機射撃SSS、戦術機接近戦SS十、戦術機機動SSS、狙撃SSSだ」

「って、SS十から下が無いじゃないですか！？」

その言葉にまりもは頷く。

「ああ、その評価で私は再テストした時は、戦術機射撃A十、戦術機接近戦A十、戦術機機動A、狙撃B十だ」

その言葉にヴァルキリーズ全員が哑然とした。

何せ、神宮司　まりもは彼女達にとって大きな壁であり何時か超えたいと思う目標なのだ。

その壁が小さく見える山と表現出来る成績の軍人がいることに哑然とした。

「怪物だな……大和少佐は……」

その言葉に武は激しく同意したのだった。

武の場合は元の世界でバージャノンで腕をならし、前の世界で訓練したと言う如何様を使つての成績であるから別段誇る事も無いが、キラの過去を知らない武を含むヴァルキリーズの面々にとってはキラは化け物そのものにした。

キラと真耶が休暇から帰ってきてから途方も無く忙しかった。

何せ、日本帝国はその生存権を懸けて佐渡島奪還作戦、オペレーションサドガシマに向けて上から下まで死に物狂いで働いた。

キラと真耶もその例に埋もれず忙しかった。

「真耶、第38機甲師団から例の資料を頼むって!!」

「その資料ならキラのパソコンのファイルに入っておる!!」

その傍らで唯衣も電話で対応していた。

「はい、その件にかんしましては補給コンテナは国連軍と共同に使う事で大筋合意しております」

他の隊員達もパソコンやら資料請求の電話やらに追い立てられる。

「隊長!! 国連軌道降下兵団の最新型再突入殻の降下マニュアルの確認を取りたいと電話が!!」

「隊長、海軍から電話が!」

「隊長、陸軍から電話が!」

「隊長、海兵隊から電話が！」

「国連には再突入殻のマニュアルに変更は無いと伝えて！ 陸軍には祥鳳のOS改良ソフトはウチじゃなく遠田技研に！ 海軍には戦艦搭載型レール砲の不具合はウチじゃなくて三菱重工に！ 海兵隊には水中ではビームの威力は著しく低下するからレールガンかバズカとミサイルで対応してと伝えて！」

キラは高速でパソコンを叩きながら部下達の呼び掛けに目も向けずそう叫んだ。

その頃、武も大忙しだった。

「伊隅大尉、動きはコンパクトに！！ 速瀬中尉は兵装の切替を早く！！ 宗像中尉は動きが緩慢です。もっと思い切って！！ 風間少尉は砲撃位置の確認を素早く！！ 涼宮少尉、考え無しに飛び込まない！！ 後衛と連携して！！ 柏木少尉、狙撃と射撃の切替をもっとスムーズに！！ 委員長、いい加減慎重すぎ！ 冥夜、接近戦兵装に頼るな！！ お前の銃兵装は飾りか！？ タマ！ もっと狙撃を早く！！ それじゃ、前衛が持たないぞ！！ 綾峰！！ アーマーシュナイダーとビームサーベルの切り替えでの接近戦の違いを考えろ！！ そんな一本調子では！！ 美琴、弾幕薄いよ！！ 何やってんの！？」

武はそう叫びながら管制ユニットの操縦桿を動かす。

祥鳳式型を操縦しながらも武は正直、ガンダムの方がいいなと内心思った。

それが終わると武は休む時間を惜しんで夕呼の所に報告に上がる。

「と言う訳で、ヴァルキリーズの訓練は順調です。12月の佐渡島攻略戦には間に合います」

「そう、で、デストロイは？」

その言葉に夕呼はそっけなく答える。

武は苦笑しながらも経過を述べる。

「極秘裏にパーツを分割して作っていますから此方は後、1ヶ月です」

その言葉に満足そうに頷くと夕呼は知りたかった本題を問うた。

「00ユニットの調律は？」

その言葉に武は一瞬、無表情になるが直ぐに作り笑いを浮かべて報告する。

「順調ですよ。“純夏”も自我が形成されています。後は、この世界との記憶のすり合わせの段階です。後は、デストロイの訓練を行うべきかと……」

この言葉に夕呼はより満足そうに頷く。

「成る程、順調な様ね。まあ、結果さえ出してくれれば私は文句無いわ」

「ハッ！ 全力を尽くします」

そう言いながら武は敬礼した。

勿論、夕呼への嫌がらせだ。

まあ、悪あがきみたいな物だ。

それが解ってる夕呼は鬱陶しそうに手をヒラヒラ振るう。

「あゝハイハイ。いいから行きなさい」

「失礼します」

そう言いながら武は夕呼の執務室を後にした。

そして、向かう先は決まっている。

武はある部屋の前で立ち止まる。

「純夏、入るぞ」

そう言いながらノックして入る武。

「タケルちゃ~~~~~~~~ん!!」

甲高い女性の声で武を呼ぶ。

「純夏、お待たせ、霞も有難うな、純夏の相手してくれて」

そう言うのと純夏と霞の頭を撫でながら笑顔を見せる武。

「もうタケルちゃん！ 幼女趣味は関心しないよ？」

その言葉に武は純夏の頭にチョップを入れる。

「アイタ!？」

「ばーか、そんなんじゃねーよ」

その様子を見ながら霞は微笑んだ。

(そうさ……俺は戦うだけじゃない……俺にもこんな時間が持てる……)

武はそう思いながら純夏とじやれる。

武は無意識の本能で感じ取っていた。

自身が戦うだけの存在になる事を恐れていたのを。

だからこそ、心の中でそう虚勢をはる自分がいる事を。

それこそ、今の武を表現するなら抜き身の真剣だろう。

キラの場合は自身の超然とした感性と達観しきった感性でそれを鞘にするが、武にはそう言った物が存在しない。経験が無いし、自身が幼い事もある。

だからこそ、武は何処か多くの人と一緒にいる事が多い。

しかし、武にとって今の横浜基地は他国に等しいし、嘗ての仲間も

今は講義相手である。

仲良くお話と言う訳にもいかない。

だからこそ、本能的に純夏に鞘代わりとしてそれを求めたのだろう。
しかも無意識で。

武は今の自分をそう結論付けた。

自身の幼さを理解している。

キラは何とか今日の業務と訓練を終えて自分の部屋に戻る。

「ふ……」

キラは椅子に座るとそう溜息を吐いた。

その時だった。

突如、部屋の扉をノックする音が室内に響き渡る。

「ハイ」

「真耶だ。入るぞ？」

そう言いながら真耶はキラの部屋に入る。

「真耶？ 如何したの？」

そう言うときらは立ち上がり、椅子を勧める。

「ウム……ここ1ヶ月話せなかったであろう？ 正直、そなたと話がしたい」

その言葉にキラは微笑みながら真耶の頬に手を添えてキスをした。

「コーヒー、入れてくる」

「ウム……頼む……」

キラは微笑みながらも恋人の甘えを受け止める。

真耶も頬を赤く染めながらもキラの想いを有難く受け取った。

キラがコーヒーを淹れて持ってくると思っていると真耶にそれを差し出すし、自分も椅子に座りながらコーヒーを飲んだ。

「話って何？」

キラは自身の意地悪な所が出ていると自覚しながらもそう素っ気無く質問する。

キラも中々意地が悪い。

真耶が甘えたいと思っているのを理解しているのにそう聞くのだ。

キラは真耶本人の口から言わせたい衝動に駆られる。

真耶はそんなキラの態度の変化に戸惑う。

正直、男と付き合った事はキラしかない真耶にとって全てが新鮮で驚きで戸惑いの連続だった。

良くも悪くも真耶は武家の規範の中で生きてきた人間だ。

周りはそう在れと望まれたし、自分もそれを疑いもしなかった。

しかし、キラと言う人間と知り合い、その行動を共にしていると自身の世界の狭さや限界を知る。

そして、キラと男女の関係になると世界がそれこそ一変した。

そう、キラは真耶にとって良くも悪くも初めての人間だった。

優しいかと思えば厳しいし、強いかと思えば弱さも曝け出す。頭がいいかと思えば、何処か抜けている。

そして、何より真耶を戸惑わせたのは今のような寛容さと意地悪さだろう。

そのキラの態度に戸惑っているとキラは突如として微笑み、真耶に歩みよりこう言う。

「安心して、解ってるから」

その言葉に真耶はからかわれていた事を理解した。

勿論、真っ赤になって怒った。

「そなたは!？」

次の言葉を紡ごうとした真耶の唇をキラは奪い反論を防ぐ。

そして、ユックリと顔を離すと真耶は顔を真っ赤にして拗ねた。

「もういい!! 帰る」

その言葉に流石のキラもからかいが過ぎた事を知り、申し訳無さそうに真耶の手を握った。

「ゴメン……話そう？」

「……解った……」

真耶はキラの謝罪を受け入れ、椅子に座り直る。

本来の真耶なら憤慨しながら出て行くが、やはり惚れた弱みと言う物だろう。

その自覚があるだけにキラのからかいも受け入れられる自分に戸惑う。

そして、キラもこんな事言う自分に少し、いや、かなり意外に思えた。

何せ、自分は愛した女性に其処まで意地悪をする人間では無いと思っていたし、フレイやラクスにもそんな事した事もない。

自分の意外性や黒い部分を自覚しながらも真耶と話すキラは年相応の青年だった。

C・E・世界の様に何処か達観した感性を持ち合わせながらもそれを制御できる様になった事を理解しキラは自身の感情に戸惑った。

佐渡島攻略戦を明日に控えた12月23日、紅蓮は全部隊の隊長を招集し訓示を行った。

「さて、明朝0500時より我が帝国軍及び極東国連軍共同による甲21号作戦、オペレーションサドガシマを実行する」

その言葉にキラ達部隊長は来るべき時が来た事を実感した。

「大まかな流れとしては、第一段階は国連宇宙総軍による対レーザー弾による軌道降下爆撃を行う。敵勢力進撃と同時に帝国連合艦隊第二戦隊が対レーザー弾による長距離飽和攻撃を開始と同時に陸軍砲兵部隊による旧新潟県、柏崎市海岸公園跡地に設置された収束荷電粒子榴弾砲及び、電磁投射砲にて長距離砲撃を行い二次迎撃による重金属の発生を合図に全艦隊による面制圧を行う」

ここまでの話の中でキラはまあ、予定通りの流れだろう事は想像できたしそれしか無い事も理解できる。

「第二段階は帝国連合艦隊第二戦隊が真野湾へ突入、艦砲射撃にて旧八幡から旧高野、旧坊ヶ浦一体を面制圧。同時に帝国海軍第17戦術機甲戦隊が上陸し、雪の高浜から橋頭堡を確保を行う」

キラはこの作戦を考える。

（成る程……旧八幡から旧高野の旧国道350号線を中間地点としてその南側を面制圧する事で佐渡島半分を確保する戦略か……と言う事は両津湾にも艦艇は出るだろう。3方向からの飽和攻撃によるベータ進撃ルート寸断か……然るべき後にハイヴの進入路を確保し突入か……）

キラの予測通り紅蓮はそう説明する。

そしてキラ達の国連、帝国両海兵隊と両津湾に進行し旧高野から進行する事が目的となった。

キラは自分の部隊に戻り隊員達を全員招集した。

集まる面々の顔は固い。

そう、キラがこれから何を話すか理解しての表情だ。

キラが入室した時、真耶が号令を下す。

「敬礼！」

全員が一斉に敬礼し、キラも敬礼で返礼した。

キラが敬礼を降ろすと真耶が再度、命令を下す。

「直れ！」

「休め」

キラの言葉に全員が休めの姿勢になる。

キラは今作戦の目的と詳細を話す。

「と、言う様に僕達の任務は帝国、国連の海兵隊と共同しての上陸作戦です。その目的は艦隊及び陸からの砲撃による取りこぼしたベータ群の駆除にある。そして、我々に求められる最大の任務は旧高野のレーザー級の排除に他ならない。旧国道350号より南を我等の支配地域にする為には今作戦はレーザー級の速やかなる排除と上陸部隊の上陸地点確保が最優先事項だと言う事を心得てください」

そして、キラは全員の顔を見回し、こう言った。

「大丈夫、君達なら成功すると信じてるよ。僕は安心して戦えると
言う物だ」

その言葉に真耶はこう付け加えた。

「貴様等！ 隊長の期待を裏切る真似はするな！！ 貴官等の奮起に期待しておられる。隊長だけでない。我等の活躍は全帝国将兵に影響すると心得よ！！」

『了解！！』

そして、キラはお決まりの、そう、この世界に来てからのお決まりの台詞を言う。

「さて、諸君、戦争をしにいくぞ！」

『了解!!』

全員が敬礼しながらそう答える。

これもお決まりだ。

キラ達はその剣と銃火を佐渡島に刻むべく着々と準備を進めた。

武達もまた佐渡島に向けてパウル・ラダビノツド司令から作戦説明と訓辞を述べる。

訓辞が終わると夕呼からヴァルキリーズの作戦内容が伝えられる。

「と言う訳でA－02が到着まで旧上新穂を確保することがあんた達の役目になるわ」

その言葉にまりもが質問する。

「そのA－02とは一体どのようなものですか？」

その問い掛けに夕呼はこう答えた。

「それは現時点では答えられないわね。その時が来たら解るわ」

そう、need to knowの原則により知らされなかった。

勿論、武はその中身を理解しているだけに沈黙を持って答える。

そして、夕呼は白銀を見据えこう言った。

「白銀、アンタは単独遊隊として動いてもらうわ。いいわね？」

その問い掛けに武は短く了解と答える。

その示す所の意味はもし、純夏に不具合が出た時、速やかに対応出来る様にしろと言う意味がある。

武も正確にそれを読み取り了解と短く答える。

武は知らず押し掛かる重圧に耐えながらもそう答えて見せた。

それに満足したのか夕呼は頷くだけだった。

12月24日、帝国軍全軍の内、3分の1が集結した。

そう、現行で帝国軍が投入できる兵力の限界をこの佐渡島攻略に振り分けた。

帝国としては全兵力を傾けたい所だが本土防衛を無視する訳にもいかず、成功と失敗双方を考えた場合、帝国が出せる兵力がこの3分の1なのだ。

キラはストライクフリーダムモニター越しに佐渡島を見やりながら考える。

（この戦い……どちらに転ぶにしても帝国の未来を決める乾坤一擲の大勝負だ……）

キラは今更ながらの事を考えながらもその時を待つ。

そう、今までのキラの努力が、今までのキラの成果が、そして、日本帝国全ての努力と成果がこの戦いで示される。

正に、帝国にとってこの佐渡島攻略戦はベータ大戦の関ヶ原といっても過言でない。

この勝敗で帝国の立ち居地は大きく変わる。

攻略成功なら日本帝国は後方支援国と言う名の安全地帯が確保できる。

そして、各国に技術を売り込みその差額で儲けた金を使って帝国の財源健全化を行う事が出来る。

失敗すればベータにより帝国将兵3分の1が瓦解しオルタネイティヴが第五計画意向になる。即ち、日本帝国が再びアメリカ合衆国の防波堤となる事になる。つまり、G弾大量運用による日本沈没もあり得る状況に追い遣られる。

正に賭けだった。

そう、この戦いに日本帝国の未来が掛かっている。

帝国の表裏を知るキラだからこそこの戦場にいる誰よりもこの戦いの勝敗の意味をより理解していた。

（単純明快、ようは勝てばいい。それも劇的な大勝利が必要。なら、勝つ）

キラは最早形振り構わない覚悟でこの戦いに挑もうとしていた。

それこそ、フリーダムの全リミッターを解除して全力全開で戦う事を厭わない覚悟だ。

（機密も減った暮れも無い。この勝負に勝たなければ帝国の主権国家としての生存は絶望的。なら、倍プッシュ。ここは形振り構わず倍プッシュしかない！ 賭け金がフリーダムで得る物は帝国の生存権と真耶との未来！ 賭けるに値する！ 勝てばフリーダムは軍事機密で押し通せる）

キラは目を閉じて大きく息を吸い込みそれを吐き出す。

「なら、勝つさ……僕が本気を出すと決めたのなら佐渡島ハイヴの余命は今日だ。それ以外あり得ない」

キラは佐渡島ハイヴのモニュメントに向けて人差し指と親指を突き出し指鉄砲を作るとそれを向けてそう言った。

「バァーン！」

キラは自身が持てる有りっ丈の闘気と殺気を込めてそう呟いた。

武もシルバーストライクのコックピットの中で操縦桿を握り締めながら考える。

（俺の持てる全てを出し尽くした積もりだ。純夏も、デストロイも、そして、ヴァルキリーズの祥鳳式型も……）

武はディスプレイに映し出される鋼鉄の壁面を眺めながら考える。

（この戦いでオルタネイティヴの行き先が、俺や夕呼先生の未来が決まる。そして、純夏の未来も……なら、勝つさ。勝つしかないんだから）

武は目を瞑りながらキラの台詞を失敬した。

「さて、戦争をしにいくぜ！」

武も本気を出す事を決めた。

愈々持つて時は迫る。

そう、これからベータ大戦史上歴史に残る佐渡島攻略戦が開始されようとしていた。

佐渡島の空は黄色と緑色で彩られ、地上は砲弾の粉栓を舞い上がらせる。

そして、その中間には数える事を放棄させる程の光の柱が敷き詰められる。

雷に似た轟く轟音は世界を揺らす。

後のベータ大戦戦記に描かれる佐渡島攻略戦の出だしだ。

戦記の内容に恥じる事ない光景がこの戦場に集結した全ての戦士達の目に映る。

ここが戦場でなく自分達が傍観者なら感動的な光景だろう。

しかし、彼等達は戦場を駆ける戦士故それを許されない。

陸軍砲兵部隊による旧新潟県、柏崎市海岸公園跡地に設置された収束荷電粒子榴弾砲及び、電磁投射砲が長距離砲撃を開始した。

砲兵隊は最初、キラが作った収束荷電粒子榴弾砲に半身半疑であった。

何せ、ビームが弧を描く様に曲がるなど考えられなかったからだ。

しかし、実際は緑のビームが曲がり上空に亜光速の粒子の雨を降らせる。

そう、キラが開発した収束荷電粒子榴弾砲はその砲身にエネルギー偏向装甲、ゲシュマイディツヒパンツァーを搭載しビームを曲げられるようにした。

これにより砲撃の様な山なりの様な砲弾を上空から落とし込む様にビームも上空から落とす事を可能にした。

しかし、この収束荷電粒子榴弾砲、欠点がある。

それは大出力ビームをゲシュマイディツヒパンツァーで湾曲させる為に必要な電力確保を行わなければならない。

弾はハイペリオンのビームサブマシンガン、ザスタバステイグマトの様に一発一発をカートリッジにしてしまえばバッテリーを気にする必要性は無い。

しかし、ゲシュマイディツヒパンツァーの場合はそうはいかず、内部にバッテリーを埋め込む形で解決したが精々湾曲できて50発が限界。

威力を落とせば100発は撃てるが破壊力がガタ落ちになり砲撃とは言えない。

その都度、バッテリーを充電、或いは交換しなければならず、更に量子通信システムによる戦術ネットワークを構築した帝国にとって量子通信の為に電力確保も課題となっている。

まだまだ課題の多い兵器と言えた。

しかし、その威力はお墨付きで演習ではかなりの成果を発揮し、今作戦が初実戦にも関わらず多大なる成果を持ってその威力が証明さ

れる。

レール砲も電力は消費するが収束荷電粒子榴弾砲ほど電力消費は無い為、高性能バッテリーで1000発は発射可能だった。

艦隊からもレール砲と艦砲、ミサイルによる攻撃が佐渡島南部に降り注ぐ。

キラはその様子を見ながら出撃の時を待つ。

そして、その時は訪れる。

『HQより全艦載機へ全機、発進せよ！ 繰り返す、全機、発進せよ！』

その言葉を聞き、キラは部下への命令をもってその指示に答える。

「スレイヤーズ！ 行くぞ！！」

『了解！！』

そして、スレイヤーズ隊員もキラの命令に答える。

そして、キラはトップスピードで飛び立つ。

『な！？ キラ！？ 速過ぎる！！ 速度を落とせ！！』

真耶の指示に耳を貸さずキラは全力飛行を開始した。

ストライクフリーダムのスーパードラグーン機動兵装ウイングが稼

動し黒いフレームと蒼のドラグリーンがくの字に開き金色の内部フレームが現れる。

そして、青白い光、ヴォワチュールリュミエールの光が放出される。

そう、コレが、ストライクフリーダム機の機動リミッターであり、C・E・世界で一度として使わなかった機能である。

なぜ、使われなかったかと言えばその様な機能が元から無かったからである。

そう、キラがこの世界で改良した機能なのだ。

何度も極秘裏にテストを重ね、フリーダムの重力下での高速起動戦闘とドラグリーン搭載時の機動力の確保を目的としてキラが練り上げた機能ともいえる。

「クッ!? 殺人的な加速だ!! でも!!」

そう思いながらキラは操縦桿を強く握る。

しかし、ベータはキラの進入を許す訳も無くレーザー級がレーザーをストライクフリーダムに浴びせ掛ける。

「甘い!!」

そう叫びながらキラは縦横無尽に回避して見せた。

そして、キラは回避中にビームライフルをレーザー級がいる地点に正射する。

そう、キラは超高速回避中に射撃すると言う高難易度の高い、いや、今のキラしか出来ない事をやってのける。

緑色のビームがレーザー級のいる地点に突き刺さり、地面を吹き飛ばす。

そして、超高速機動を行ったまま、ドラグーンをパージしマルチロツクオンを展開する。

球体方ロックオンディスプレイの光点に次々とロックされる。

「当てる!!」

その言葉通り、ドラグーンフルバーストで次々とレーザー級だけを狙い撃つ。

それに巻き込まれる形で近くにいたベータ群は吹き飛ばされる。

キラは一旦、ドラグーンをウイングに戻すと超高速起動で佐渡島に上陸する。

そして、ビームライフルを連結させロングレンジビームライフルにすると5キロ先にいたレーザー級の群れに撃ち込む。

野太い緑色のビームが標的に突き刺さりその周辺も焼き払う。

「まだ!!」

そう言いながらキラは連結を解き、それを両マニピレータに持たせると空中でローリングしながらビームを撃ち込んで行く。

そして、近くで蠢く突撃級の集団にレール砲を叩き込む。

先頭の突撃級はそのモース硬度15以上の外皮を粉々に吹き飛ばされその爆風で周りの突撃級も引っくり返る。

そして、その状態から腹部カリドウス複相ビーム砲を撃ち込んだ。

金色の砲身から赤いビームが吐き出され周りで引っくり返っている突撃級ごと蒸発させ、爆散させた。

そして、ビームライフルを左右両腰に仕舞うとビームサーベルを引き抜き接近戦を仕掛ける。

二刀流の状態で振るわれるビームの刃はベータの群れを焼き斬り裂きながらキラの超高速機動と相まって、その様は刃の暴風と化した。

要撃級、突撃級を地上に降り立ち、爪先を浮かせた状態で、まるで舞い踊る様に切り裂いていく。

そして、迫り来る戦車級には頭部バルカン砲を叩き込んで行く。

そして、迫り来る要塞級にキラはビームライフルを連結し、ロングレンジビームライフルにするとそれを要塞級の頭上に撃ち込むとそれを下に振り下ろした。

緑の野太いビームの柱が要塞級を真っ二つにした。

要塞級は重たい音をたて地面に倒れ付す。

この間、僅か1分。

それでもキラ止まる事を知らず戦い続けた。

この様子は作戦に参加していた全軍に知れ渡る。

そう、全軍がこの様子を見ていた。

余りの圧倒的強さ、レーザーを回避するふざけた回避力、そして、ずば抜けた判断力。

どれを取っても出鱈目。

そして、極めつけが要塞級を真つ二つにする映像だ。

それを見た武はこう呟いた。

「ギロチン……バーストか……」

その呟きにまりもが反応した。

『ギロチンバースト？ 何だそれは？ 白銀』

その質問に武は要撃級を切り裂きながら説明する。

「ギロチンバースト、大出力ビームを敵の頭上で放出した状態でそ

れを上から下に振り下ろす単純な技です。でも、ご覧の通りインパクトは大きい。味方はその様子に確実な敵の破壊と言う心理的優位性を確保出来る。そう、こんな様にね!!」

そう言いながら武はビームブレードの先端部分にビームを収束させてそれを大出力で延長させる。

その長大な刃を要塞級の頭部下に振り下ろした。

そして、要塞級は真っ二つに切り裂かれる。

その様子にまりもは唖りながら言う。

『ガンダムとはこんな事も可能なのか?』

その言葉に武は苦笑しながら言う。

「ガンダムじゃなくても大出力ビーム兵装を持っていれば誰でも可能ですよ」

そう、基本的にこの技は倫理効果狙いの派手な技でそれを横薙ぎに振るえば効果は絶大だが縦に振るう意味は殆ど無い。

ハッキリ言えばエネルギーの無駄使いだ。

しかし、それに見合うだけの心理効果はある様で全兵士から勝てるという核心を植えた。

そう、スレイヤーズの隊員もその例外ではない。

『すげー……こんな隊長、見たこと無い……』

総司はそう呟きながらも啞然とした。

それでも操縦桿を動かす手を休めないのは日頃の訓練の賜物なのだろう。

『コレが……隊長の本気……速過ぎて目で終えない』

正樹の言葉に全員が同意した。

そう、キラが育て上げた帝国最精鋭であるスレイヤーズの隊員をして目で追うことの出来ない速度だった。

唯衣ですらその目で追う事が出来なかった。

白く輝くラインは解るが、それすら所々見失う。

『信じられん速さだ……』

しかし、一人だけ、そう、一人だけその姿を追う事が出来た人物がいた。

真耶だ。

真耶はスラストターを全開にするとキラの近くまで行き、回線を開く。

『キラ、余り一人で突っ走るな。部隊を預かる私の身になってくれ……』

そう言いながらもキラの出鱈目な機動に遅れて追従しつつビームライフルを撃ち込む。

「……解った……」

キラは一人で飛ばし過ぎていた事を自覚し、その速度を緩め一旦、下がる。

そして、命令を下す。

「すまない、皆。はしゃぎ過ぎた。今から部隊戦の時間だ。第二小隊がトップを、第一、第三小隊がその側面を固める。フォーメーション、アローヘッド。其処から一気に旧高野を目指す」

『了解』

そして、第二次上陸部隊は損害少なく上陸する事が出来た。

そして、戦いは第二段階へと進む。

フリーダムの改造案はP Gのストライクフリーダムを参考に取り入れられています。

アレはドラグーンをパージさせる位置へ移動させる為のギャミックですけど、それをドラグーン搭載時高速機動形態として設定したら面白そうだなと言う理由から書いてみました。

地球の地表から500キロ離れた外気圏、地球周回低軌道地点に国連軍の降下兵団が集結していた。

「ヤレヤレ……本当に大丈夫なんだろうな……?」

一人の衛士が105ダガーの中で愚痴った。

「帝国のキラ・ヤマトが作った戦術機、105ダガーにストライカーパック、そして、新しい棺桶か……」

そう、彼等は帝国が国連に提供した戦術機に乗り込み新しい再突入殻の中にいた。

「棺桶が新しくなったからってやる事は変わらないだろ」

そう、彼等流の言い方をするならお上品な艦載機発進と違い特攻野郎気取りだそうだ。

「しかし、信頼性91パーセントから100パーセントまで上げてくれた事は有難いね」

そうボヤキながらも男は強く操縦桿を握り締める。

その時だった、管制ユニット内部に通信の電子音が耳に入る。

「ッ!？」

男は来るべき時が来たと覚悟を決める。

その頃、武はヴァルキリーズと共に旧八幡から攻めてはいたが如何してもキラが攻めた旧高野の残存ベータ個体数と比べると旧八幡の方が多く感じてしまう。

「クソ?! コッチの方が多い気がするぞ!！」

武はシルバーストライクの中で愚痴りながらも操縦桿を動かし続けた。

それに答える様にシルバーストライクは次々とベータを蹴散らす。

高速機動でベータの攻撃を回避しながら両マニピレーターのビームライフルシューターを乱射しながら鮮やかに着地すると右のビームライフルシューターを仕舞い、背のフラガラッハを一気に引き抜くとそれを下から上に斬り上げ、要撃級を前腕ごと真っ二つすると左足を軸にして機体を右に回転させ横薙ぎに突撃級を斬り裂く。

しかし、ベータもシルバーストライク攻撃を仕掛けようと迫り来る。

それでも武は群がる戦車級に頭部ドーデスシュレッケンを乱射し、

ミンチにすると右足に軸にしてシルバーバーストライクを左に回転させる。

そして、群がり来る要撃級にビームライフルショットを乱射する。

今度はフラガラッハを背に仕舞うと右にビームライフルショットを持たせた。

武はキラから教わった事を思い出しながらシルバーバーストライクを動かす。

『いいかい、武。接近戦での銃撃戦での銃の役割は飛び道具ではなく打撃武器と同じと考えていい。何故なら、銃の発射モーションは目視、構える、狙う、撃つ、の4段階に大きく分けられるからだ。しかも、接近戦では原始的な刀やナイフといった物の方が遥かに有効な状況がある。特に乱戦では先ずは冷静に状況を見極める事、そして銃を撃つ時は常に射撃の対角線上に味方を置かない事。そして、至近距離で銃を使うときは4段階の内、構えるの動作を省略する。狙いは腕の対角線上に弾丸が飛ぶ事を覚えていれば出来るよ』

武は迫る要撃級にビームライフルショットを1発撃ち込む。

そして、左足を軸にシルバーバーストライクを回転させ違う要撃級に撃ち込む。

そして、左右の両マニピレーターを水平にクロスさせ群がる戦車級に3バースト射撃で撃ち込み、近くの群がる戦車級を吹き飛ばす。

そして、素早く左右の両マニピレーターを水平に広げ5連射し、

遠くの邀撃級の集団を殺すと右足を踏み出すと同時に正面にビームライフルショット二挺を突き出し、背中の収束ビーム砲を同時に突き出すと突進してきた突撃級の集団に目掛けて正射する。

緑と赤のビームを無数に浴びせられた突撃級の一団は物の見事に吹き飛ばされる。

そして、武は鮮やかな跳躍でベータの群れに躍り出る。しかし、レーザー級がシルバーストライク目掛けて無数のレーザーを照射するが、武は倒立反転しながら回避し、両腕を広げビームライフルショット二挺をレーザー級に打ち込んで行く。

そのビームの弾道は狙い変わらずレーザー級に突き刺さりレーザー級を吹き飛ばした。

脚部スラスターを使って地面の回転し、逆さの状態からビームライフルショット二挺を打ち込んで行く。

その戦いの様子を戦いながら見ていたヴァルキリーズは唖然とした。

『何だ……？ あ動きは……！？』

みちるの呟きは皆の想いだった。

冥夜はその動きを見ながら思った。

（これが……戦術機の動きなのか？ これが人間に可能な動きなのか？ 武……そなたは……人の身で人を超えたのだな……）

その様子は最上のC I Cで見ていた夕呼達も沈黙させる程の動きだった。

「こ、これは……これが……戦術機の動きだとも言うのか……それとのこれがガンダムの動きなのか……」

最上艦長、小沢は啞然としながらガンダム3機の動きをモニター越しに見やった。

ストライクフリーダムはその洗練された高速機動と正確無比な射撃で敵を蹴散らし他の追隨を寄せ付けない正に一騎当千、古今無双の働きを魅せる。

そして、シルバーストライクの動きは鮮やかさの中に荒々しさと獐猛さを兼ね備えた抜き身の真剣を連想させる動きを見せる。

そして、イザナミは鮮やかな斬撃と動きを華麗に魅せる。まるで舞い踊るかの様な鮮やかな美しさと妖艶さを醸し出す動きだった。

そう、美しいのだ。ベータの屍骸に囲まれていながらその赤い装甲を翻しビームサーベルを振るう様は正に美しかった。

そう、この動きこそキラの発想から真耶が生み出した動き、『剣乱武踊』である。

そもそも、この動きは真耶の日本舞踊を見たキラが戦術機の動きと組合わせたら面白そうと言う冗談を真に受けた真耶が試みて作り出した技だった。

それに、キラが名前をつけて今の『剣乱舞踊』である。

その名前に真耶は某二臭いと揶揄したが本人は内心満更でも無かつ

たみたいでその名前を使い続けている。

そう、キラの代名詞であり真骨頂が『ドラグーンフルバースト』とするなら真耶の代名詞が『剣乱舞踊』である。

たった3機がいるだけで戦場が一変する。

（コレがガンダムの戦い……）

その様子を夕呼はモニターを見ながらそう思った。

「何なのよ……あんた達は……私の今までをアンタは否定するとも言うの……!? 大和……」

夕呼の呟きは誰にも聞こえなかった。

そして、その隣にいたピアティフは聞こえていたが夕呼の言葉の意味まで理解出来なかった。

夕呼は一旦、頭を左右に振り払うとピアティフに質問した。

「ピアティフ、A-02の現在位置は？」

その質問にピアティフは事務的に答える。

「現在、02は現在、小田原を通過しました」

その言葉に夕呼は顎に手をやりながら言う。

「後、10分位かしら？」

「はい、それ位かと」

（それじゃあ、00ユニットとデストロイが意味無くなるじゃない……）

夕呼は考えながら思うのだった。

キラはビームサーベルでレーザー級を切り裂くと大半のベータを狩り終えた後だった。

しかし、キラはふと思う。

（おかしい……ハイヴってこんなにベータが少ない訳無いのに……横浜の戦闘で嫌と言う程ベータの物量を体感した筈だ。幾らフリーダム火力や機動力を持ってもハイヴ全体のベータを駆逐する事は不可能だ。ミーティアでも不可能に近い。これは逆に楽勝過ぎる……）

そう思ったキラは全員に命令を発する。

「スレイヤーズ1からスレイヤーズ。全機集結。全体防衛だ。これは可笑的い」

キラの言葉に先ず反応したのが総司だった。

『確かに……これは可笑しいですね……主縦坑の直径と最大深度はフェイズ4とは言えフェイズ2の横浜ハイヴでもこの20倍はいましたからね……佐渡島にも横浜と同じかそれ以上いるはずだと思いますよ……』

その言葉にかぶせる様に佑も頷く。

『だよな〜コイツはちと雲行きが怪しいぜ……』

正樹も頷きながら答えた。

『ああ……何かいやな予感がする……今までが楽勝だっただけに……』

その言葉に真耶と唯衣以外の他の隊員達が疑問に思う。

『如何言う事ですか?』

香奈の疑問に総司が答える。

『考えてもみろよ。相手はベータだぜ? ベータの最大の特徴は吐き気がする程の物量だろ?』

その言葉に佑も加える。

『なのに、この少なさ……ちと可笑しいぜ?』

『ああ、幾ら最新鋭ビーム兵装や戦術機、艦からのレール砲や丘からのビーム砲掃射でも減らない筈のベータが減っている』

正樹も冷や汗を額に流しながらそう呟いた。

キラは顎に手をやりながら考えながら言う。

「これは警戒すべき、か……光。C C I ストライカーとライトニング ストライカーが搭載された“ ストライカーコンテナ ”を僕達がいる地点に射出して。それと各艦に量子レーダーをフルに稼働させて。慎二、武装コンテナからC C I ストライカーを装備して、調べるのは地中、音紋と量子レーダーをフルに、玲人はライトニング ストライカーを装備して」

それぞれキラの通信に明確に答える3人。

『『『了解』』』』

「何も……無ければいいんだけど……」

その言葉に真耶も頷く。

『ああ、正直、そなたの開発した新兵器に目が眩み忘れそうだが、ベータの特徴はその物量であったな……』

唯衣も頷き、答えた。

『ええ……思い過ごし、と言う訳にはいかないでしょうね』

そして、数十秒後、戦艦大和からストライパーパックを搭載したコンテナが地表に降下する。

優先的にレーザー級を叩いた甲斐があり対レーザーコーティングもそんなに剥がれていない。

慎二と玲人はそれぞれ指定されたストライカーを装備すると慎二は地表に音紋感知器を撃ち込む。そして、玲人は慎二のストライカーにプラグを差込み、電力を供給する。

慎二は目を音を聞きながらリーダーを注視する。

『何だこれ！？ ノイズが酷い！？ それに何だこの数！？ シャフトに存在しない、地中にベータタがウヨウヨいやがるだ！？ しかも進行してるぞ！？ チッ！？ マジかよホントにこいつ等地中を掘って進む速度かよ！？ 約4分後に出てくるぞ！ 個体数旅団規模が！！』

その言葉にキラは即座に通信を大和に繋げた。

「スレイヤーズ1からスレイヤーズママ！ 地中を旅団規模のベータ群が移動中！！ 当方には約4分に接敵。まだいると思われる。全部隊に警告されたし！！」

その通信に光も慌てて答える。

『こ、此方でも確認しました！ 直ぐに全部隊に警告を！！』

しかし、時既に遅かった。

『そ、そんな！？ ハイヴ内に突入していた国連軍第6軌道降下兵団が全滅！？ 我が軍の突入部隊も！？ 早過ぎる！！ 不意を突かれたの！？』

光の言葉にキラは大慌てで指示を飛ばす。

「全機！！ 有りっ丈の武装コンテナとストライカーコンテナを掻き集めろ！！ 団体が来る！ 歓迎の準備だ！！ 慎二と玲人はストライカーコンテナに充電している自分のストライカーと交換して！ 直ぐに戦闘突入するよ！！」

『了解！！』

キラもそう命令を発すると高速機動で飛び回り武装コンテナとストライカーコンテナを回収した。

そして、佐渡島攻防戦は愈々、酣となる。

MU-V-LUV SEED Destiny 46話 『佐渡島攻略戦中編』

武の戦闘スタイルはガン||カタとマジカのマミさんの戦闘シーンを足して2で割った様なものです。

まあ、リベリオン見ていて不意に武ちゃんの戦闘スタイルに取り入れたら面白そうと言う単純な理由です。

「もう何も怖くない」

というマミさんの台詞は言いません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253o/>

MUV－LUV SEED Destiny

2012年1月10日22時40分発行